

釋紀にクルマモチと訓してある。或はさうも稱へられたのであるかも知れぬが、履中紀の訓によつてクラモチと稱へる方がよい。

凡海——オフアマ(又はオホアマ)

舊訓オホサマとあるはオホシアマの約であるが、大海宿禰とかいた例があるから、天武天皇の御名と同じく、オフアマ(又はオホアマ)と訓むを可とする。

大奈末金物儒——コムモツジュ

支那から歸朝の學生土師宿禰等を送つて來た新羅官人。

觀常、雲觀——クワンジャウ、ウンクワン

新羅から來朝した學問僧。

常輝、法藏——ジャウクキ、ハウサウ

歸化百濟僧。

令並白朮

刊本並に煮と旁書し、釋紀にも煎としてネラシムと訓してある。此は次に獻「白朮煎」とあるによるものであらうが、白朮を煮る爲に態々人を美濃の國に遣はされたとも思はれず、又白朮は採集地で煮れば用をなさぬものでもないから、並は求の誤ではあるまいか。

招魂——ミタマフリ〔舊訓〕

波彌浪金智祥——コムチシヤウ

次に金智淨とある。

大海宿禰菟蒲——オフアマの宿禰アラカマ

大海は舊訓オホミとあり、上記の如くオホサマとも、オフシアマとも訓み得るが、此人が壬生の事を誅した所を見ると、天皇の御名の大海と由縁のあることは疑がないから、オフアマ又はオホアマというたものと思はれる。菟蒲をアラカマと訓むのはワラ(薔)カマ(蒲)の意によるもので、續紀には凡海宿禰菟鎌と記されて居る。

奉膳乳朝臣真人

奉膳は舊訓ウチノカシハデのツカサとある。乳の真人は紀朝臣真人のことであるが、乳の字は必しも誤寫ではない。此時代にはキとチとが混用せられたので、上記道師の項下(第五頁)参照——發音のまゝ、を寫したのであるかも知れぬ。

青飯

刊本にヒシキオホノ飯、アチキイホノ飯の二訓をあげて居る。喪の飯の稱呼であらう。——参照 アチキイホの飯、ヒシキオホの飯

【卷第三十】

(持統)

王子金霜林——コムサウリム

級食金薩摹——コムサツモ

級食金仁述——コムニジユツ

新羅朝貢使(十四年)。

無端事——アトナシコト〔舊訓〕

秦拵御衣——ハリスリのミノ〔舊訓〕

拵は摩拭の義。俗に摺とかくが、拵はタタムといふ意で此場合にはあたらぬ。

億仁——オクジン

歸化百濟人、侍醫。

垂髮于背——スヘシモトリ〔舊訓〕

國懸神——クニカケの神

刊本にカラクニカラノカミ私記と旁書してあるのは何の意か判明せぬ。釋紀にはクニカカル神とあり、今はクニカカスと稱へて居るが、懸はカケ(鏡の意)の假字であるからクニカケと訓まればならぬ。——参照 クニカケの神

朱鳥元年

朱鳥此云三阿訶美苦利と訓註してあるが、當時の人も字音でとなへたのであらう。

飛鳥淨御原宮

天武天皇十五年朱鳥元年と改元し、仍て宮を飛鳥淨御原と曰ふとあるので、此場合に限り飛鳥はトブトリと訓まればならぬといふ説がある〔宣長〕。宮號は即位の當初から存した筈であるのに、ここに特に掲記した所を見ると、飛は朱の誤字で、從來アスカと稱へたのを朱鳥の瑞によつてアカミトリの宮と改められたのかも知れぬ。

大舍蘇陽信——ソヤウシン

學問僧智隆——チリウ

新羅の朝貢使(元年)。

敬須德那利——ケイストクナリ

甲斐國に移された百濟人であるが、一人の名か二人か判明せぬ。

佐平加羅——カラ

耽羅の朝貢使(二年)。

級食金道那——コムドウナ

新羅の弔使。

明聰、觀智——ミヤウソウ、クワムチ

右の使節が帶同した學問僧。

蘇判

釋紀に蘇音匣、判音干とあるから、ソウカンと發音せよといふ意らしいが、其理由を詳にせぬ。三國史記には匣喰又云蘇判とあり、匣喰は三等官であるから、奉勅者としては身分が低過ぎるとして田中朝臣が拒絶したのであらう。

今將ニ復爾

舊訓イマシカヘサムとオモフとあるが、前後の文脈によると、今マタシカセムトスであらねばならぬ〔通釋〕。

翳食

新羅官等伊食(第一等官)と同語〔通釋〕。

一告[△]食

刊本一をヒトリと訓してあるが、告[△]は吉の誤であらう。一吉喰は前にも屢々掲げた新羅の官名である。

續守言、薩弘恪——ゾクシユゲム、サツコウカク

歸化唐人であらう。

偽兵衛

刊本カスキノトネリと訓してある。ツハモノのトネリ(兵衛)を約してトネリというたものと思はれるが、偽をカスキと訓した理由を明にせぬ。カスヒの音便とすれば抄録の意であるから、兵衛と偽稱して扱掠したものとふ意味であるかも知れぬ。

沙門詮吉——センキチ

級[△]食北助知——ホクジヨチ

韓奈末許滿——コマ

歸化新羅人。

知宗、義徳、淨願——チソウ、ギトク、ジヤウグワム

大唐留學僧。

大奈末金高訓——コムカウクム

右護送の新羅官人。

淳武微子——ジュムブシ

歸化百濟人。壬申の亂に功があつたとして賞賜せられたとあるが、天武紀には其名が見えぬ。

銚[△]

銚の誤字であるといふ説(通證)もあるが、字鏡集、難字記等にも銚にアラカネと訓してある(通釋)。釋紀に未鍊白銀也とあるは根據を詳にせぬ。

末士善信——バツシ・ゼムシム

末士は稱號であらうが、其義を詳にせぬ。

賻物——ハフリモノ〔舊訓〕

長生地——イキハナナツトコロ〔舊訓〕

釋紀に兼方案之令禁斷殺生之所也とあるから放生地の意であらう。

新益京

釋紀に私記に曰新益は音讀とあるが、右の如き語は支那本國にも存在せぬ。——現代のやうに文字を連ねると其が言語になるといふやうな誤つた考は昔の人はもつて居なかつた——恐らくはニヒヤケとよみ、新しい家處の意であらう。

神祇官長上

長上はナガツカへと訓してある〔釋紀同斷〕。長時間の上番の意である。

德自珍——トクジチム

歸化人であらう。

木素丁武、沙宅萬首——モクソウチヤウム、サタクマムシユ

呪禁博士。歸化人又は外人であらう。

法藏、道基——ホウザウ、ダウキ

新羅計報使(七年)。

牟自毛禮憶徳——ムジモレ、オクトク

歸化新羅人。

葛原朝臣大島

葛原はフチハラである。後年藤原氏を憚つてクズハラと改稱したけれども、此時には尙フチハラと稱へて居たのである。釋紀にも私記曰藤原とある。

監物——オロシモフノツカサ〔舊訓〕

福嘉——フクカ

高麗の沙門で還俗せしめられた人。

法員、善往、眞義——ホウキン、ゼンワウ、シムギ

律師道光——ドウクワウ

光の字釋紀には光とある。天武紀にも見える。

王子金良琳——コムリヤウリン

神命薩食朴強國——モクキヤウコク

韓奈麻金周漢、金忠仙——コムシユカン、コムチウセン

新羅の朝貢使(九年)

肅慎志良守叡草

守は刊本に宇と旁書し、釋紀にはスと訓してある。又草は等の誤であらうといふ説もあるが、蠻語であるから、今之を明にし得ぬ。

陰陽博士、沙門。

繫囚見徒——皆原散

刊本には徒の字がなく、見一字にイマミツカフツミと訓してあるが、見は現に通じ、イマに當るのみであるから、ミツカフツミに對して徒の字が必要である。

文ノ忌寸智徳——フミのイムキチトク

釋紀には忌の字を省きアヤキのチトクとあるが、天武紀に書直智徳とあると同人で、後年忌寸のカバネに昇進したものと思はれるから、忌寸とあるを正しとする。

沙門觀成

釋紀に成を戒としてあるが、元明紀にも大僧正に任ぜられた觀成法師の名が見える。

白蛾[△]

釋紀にシロキヒルと訓してあるが、蛾は多くは白いもので小昆虫であるから瑞として貢獻せられたと思はれぬ。鵝又は賊の誤であらう。

級[△]食朴憶徳、金深薩——ボクヨクトク、コムシムサツ

新羅朝貢使(六年)。

踏歌——アラレハシリ

釋紀に踏歌として今俗曰阿良禮走とある。踏、踏同一義である。

沙[△]食金江南——コムカウナム

韓奈麻金陽元——コムヤウグエム

後皇子尊

釋紀に私記曰高市皇子也とある。皇子尊は日嗣の皇子を意味し、草壁皇太子歿後に立太子せられたから、後の皇子尊と記したので、勿論御在世中の呼稱ではない。

常饗盜賊

常饗の二字は釋紀にも饗字可求として説き得なかつた。水戸本には當絞とあらためてあるといふことであるが、根據を明にせぬ。集解は嬰金の合字として文選嬰金鐵受辱といふ句を引いて鑲付の盜賊の義なりと説き、ヒタニカセツケルヌスヒト訓したが、聊か牽強の嫌がある。尙可考。

補 遺

(神功紀)

阿布瀨能瀨 齊多能和多利珥 介豆區吉利 多那伽瀨須疑氏
于泥珥等邏倍菟
あふみの海せたの渡にかづく鳥たなかみ過ぎて宇治に捉へつ

參照 タナカミ

(顯宗紀)

野麻登陸爾 瀨我保指母能婆 於尸農瀨能 莒能拖寄紀儺屢
都奴婆之能瀨野
大和へに見がほしものはおしの海の此たかきなる角刺の宮

萬 葉 集

【卷 第一】

雜 歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代

大泊瀨稚武(雄畧)天皇

(一)

天皇御製歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岡爾 菜採須
兒 家吉閑 名告沙根 虛見津 山跡乃國者 押奈戶手 吾許
會居 師吉名倍手 吾已會座 我許背者齒告目 家乎毛名雄母
籠もよ 御籠もち 生申もよ 御ふくしもち 此岡に 菜採ま
す子 家きかむ 名のらさね 空みつ 大和の國は おしなべ
て 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそませ 我こそはのらめ
家をも名をも

萬葉集(卷第一)

參照 オシノミ、タカキのツメサシの宮

(一) 吉閑を誤字として色々に訓みかへたものもあるが、字の通り訓してもよく意は通ずる。
(二) 者の字元曆校本及類聚古集に之なきを可とする。目を自の誤としてノラジと訓した本もあるが、打消を用ひるとせばノラネ又はノラズアラメといはれば意が通ぜぬ。
參照 コ、フクシ、ソラミツ(枕)

高市岡本宮御宇天皇代

息長足日廣額(舒明)天皇

(二)

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎爲者
國原波 煙立龍 海原波 加萬目立多都 恰何國會 蜻島 八
間跡能國者
大和には 群山あれど 取よろふ 天の香山 登りたち 國見
をすれば 國原は 煙立ちたつ 海原は 鷗立ちたつ うまし
國ぞ 秋津島 大和の國は

一七七

(一) 刊本には籠とあるが、元暦校本等に籠としたのを正しとする。

(三)

天皇遊^ニ獵内野之時中皇命使^ニ間人連老^ニ獻歌

八隅知之 我大王乃 朝廷 取撫賜 夕庭 伊縁立之 御執乃

梓弓之 奈加弭乃 音爲奈利 朝獵爾 今立須良思 暮獵爾

他田渚良之 御執能 梓能弓之 奈加弭乃音爲奈里

やすみしし 我大君の 朝には 取撫でたまひ 夕には いよ

り立たす。御とらしの 梓の弓の なり弭の 音すなり 朝獵

に今立すらし 夕獵に 今立すらし 御執らしの 梓の弓の

なり弭の音すなり

(一) イヨリタタシ、イヨリタタシシ、イヨリタテリシ等の訓があるが、

之は前續字が動格に用ひられたことを示す助字であるから(記、紀に

も其例が多い(第二四頁参照)。之を省きイヨリタタスと訓むべきであ

らう。

(二) ナカハズ又はナカハズは意をなまぬから、宣長説に従うて加は利

の誤としナリハズと訓んで置く。

參照 ヤスミシシ「枕」、ミトラシ、アヅサ弓、ナリハズ

(四)

反歌

玉刻春 内乃大野爾 馬數而 朝布麻須等六 其草深野

たまきはる字智の大野に馬なめて朝踏ますらむ其くさふけ野

(一) 草深は借字で草生毛野の意である。

(五)

幸^ニ讚岐國安益郡之時軍王^ニ見^レ山作歌

霞立 長春日乃 晚家流 和豆肝之良受 村肝乃 心乎痛見

奴要子鳥 卜歎居者 珠手次 懸乃宜久 遠神 吾大王乃 行

幸能 山越風乃 獨座 吾衣手爾 朝夕爾 還比奴禮婆 丈夫

登 念有我母 草枕 客爾之有者 思遣 鶴寸乎白土 綱能浦

之 海處女等之 燒鹽乃 念會所燒 吾下情

霞立つ 長き春日の くれにける 分解も知らず むら肝の

心を痛み ぬえ子鳥 うらなき居れば 玉綱 かけの宜しく

遠つ神 吾が大君の いでましの 山越の風の 獨居る 吾が

衣手に 朝夕に かへらひぬれば 益ら雄と 思へる我も 草

枕 旅にしあれば 思ひやる たづきを不知 綱の浦の 海少

女等が 焼く鹽の 思ひぞやくる 吾が下心

(一) 和を手の誤としてタツキと訓み、若くは豆を衍字とするのは未だ

考の精しからざるものである。

(二) 舊訓ウラナゲナレバとあるが、ナゲといふ動詞はあり得ぬ、眞淵

説の如く、ウラナキと訓むべきである。歎は泣に通はして用ひたの

で、十七卷に奴要鳥能宇良奈氣之都追とある奈氣も亦ナキの假字で

ある。——氣をキの假字に用ひた例は他にもある。

金野乃 美草刈葺 屋杼禮里之 兔道乃宮子能 借五百磯所念

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の宮處の假處しおもほゆ

右檢^ニ山上憶良大夫類聚歌林^ニ曰、一書戊申年幸^ニ比良宮^ニ

大御歌、但紀曰五年春正月己卯朔辛巳天皇至^レ自^ニ紀溫湯^ニ

三月戊寅朔天皇幸^ニ吉野宮^ニ而肆宴焉、庚辰日天皇幸^ニ近江

之平浦

(一) 字についてよめばカリイホであるが、尙カリホと發音せられたも

のとおもはれる。

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姬(齊明)天皇后即位後岡

本宮

(八)

額田王歌

斐田津爾 船乘世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞茶

にぎた津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎてな

右檢^ニ山上憶良大夫類聚歌林^ニ曰、飛鳥岡本宮御宇天皇元

年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午天皇太后幸^ニ于伊豫湯

宮、後岡本宮御宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西

征、始就^ニ于海路^ニ庚戌御船泊^ニ于伊豫斐田津石湯行宮^ニ、天

皇御^ニ覽昔日猶存之物、當時忽起^ニ感愛之情^ニ、所以因製^ニ

(六)

反歌

山越乃 風乎時自見 寐夜不落 家在妹乎 懸而小竹櫃

山こしの風を時じみぬる夜おちず家なる妹をかけて懸びつ

右檢^ニ日本書紀^ニ無^レ幸^ニ於讚岐國^ニ、亦軍王未^レ詳也、但山上

憶良大夫類聚歌林曰、紀曰天皇十一年己亥冬十二月己巳

朔壬午幸^ニ于伊豫湯宮^ニ云、一書云是時宮前在^ニ二樹木^ニ此

之二樹斑鳩、此米^ニ二鳥大集、時勅多掛^ニ稻穗^ニ而養^レ之、乃作

歌云、若疑從^ニ此便^ニ幸^ニ之歟。

參照 トキジミ

(七)

明日香川原宮御宇天皇代

天豐財重日足姬(皇極)天皇

(七)

額田王歌 未詳

萬葉集(卷第一)

歌詠爲之哀傷也、即此歌者天皇御製焉、但額田王歌者別有四首、

(一) 田中道麻呂説に従うてコギテナと訓む(玉小琴)。但し乞菜は必しも豆菜の誤ではなく、コキテナといふ語にも乞求の意があるのである。——語法要録參照。

(九)

幸于紀溫泉之時額田王作歌

莫囂圓隣之 大相七兄爪謁氣 吾瀨子之 射立爲兼 五可新何本しづまきの弓に弦はけ吾がせこがい立たしけむ嚴極がもと

(一) 初二句は從來訓み得たものがない。雅澄は莫囂を莫囂の誤記として初句をミモロと訓したが、莫囂があるのは必しも三諸ばかりではなく、假にミモロと訓み得るとしても、高市郡の飛鳥の京から紀伊溫泉(今の田邊)に行く道中に三輪山が見える筈がない。——飛鳥にも三諸山があるが、莫囂といふ字を以て其と了解せられるほど有名な社があつたとも思はれぬ。——案するに莫囂は喧の反對即ちシヅ(靜)の義譯、圓隣はマク(卷)の戲書で、此四字を合はせてシヅマキ(倭文卷)と訓むのであらう。

(二) 第二句には誤字があるものと思はれる。——古寫本にも區々に書かれて居る——上の句のつゞき合ひを以て推察するに、七は士の誤、大相士は占相者の大なるもので古は祠官が之を兼ねたから、ユミ(齋身)と訓み、——イミ又はオミ(忌)と同語——ユミ(弓)の假字に充てられたものであらう。兄はアヒと訓むから、異例ではあるがニの假字、爪謁氣(一本には湯氣とある)は恐らくは支波氣の誤寫で

ツラハケと訓むのであらう。——弦を暑して玄とした例は古事記にもある。

兩句を合はせると「倭文卷の弓に弦はけ」となり、第四句のイタダシケムの序であると同時に、額田王から吾夫子と呼ばれた貴人の面影が髣髴せられるのである。シヅキマの弓が用ひられたといふ證據はないが、雄略天皇がシヅマキの吳床に召されたともあるから「記」、貴人用の弓の束を綵絲で巻いたことも極めてあり得べきである。

參照 シヅマキ、オミ(イミ)、イツカシ

(一〇)

中皇命往于紀伊溫泉之時御歌

君之齒母 吾代毛所知哉 磐代乃 岡之草根乎 去來結手名君が代も吾が代も知れや磐代の岡の草根をいざ結びてな

(一) 宣長が哉を武の誤字として、シラムと訓した「畧解」のは従はれぬ。シレヤ(ヤは感動詞)は「知れば」の意である。

(一一)

吾勢子波 借盧作良須 草無者 小松下乃 草乎荊核 吾が背子は假盧作らすかやなくば小松が下の草を刈さぬ

(一二)

吾欲之 野島波見世追 底深伎 阿胡根能浦乃 珠曾不拾 吾が欲りし野島は見えつ底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾りはぬ

或頭云、吾欲子鳥羽見追

右檢三山上憶良大夫類聚歌林一曰、天皇御製歌云々

(一) 字について訓めばミセツであらねばならぬが、恐らくは延の字の誤寫でミエツと讀むのであらう。

(一三)

中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首

高山波 雲根火雄男志等 耳梨與 相諍競伎 神代從 如此爾有良之 古昔母 然爾有處會 虛蟬毛 孀乎相格良思吉

香山は 畝火を愛しと 耳梨と 相争ひき 神代より かくしあるらし 古も 然にあれこそ うつせみも つまを争ふらしき

(一) 高、香字音相通。
(二) 男を曳の誤とする古義の説は非。ナシは愛惜の意である。

(三) 字について訓めばカクニアルラシ(約してカクナルラシ)とすべきであるが、カクといふ語が既に副詞形であるから、更にニを添へる必要がない。こは中世の歌ならばカクコソアルラシといふべき所であるから、カクシアルラシと訓まればならぬ。爾は必しも誤字ではなく、字音によりシの假字に用ひられたのであらう。(一五)にも同例がある。

(四) ニアレコソを約してナレコソといふこともあるが、其はアリが助動詞に用ひられた場合に限るもので、此場合の如きはアリは動詞であるから、音を約せざる事を通則とする。——語法要録參照——さればこそシカニアレコソというて七音になるやうに詠まれたのである。動詞のアリと助動詞のアリとは古語では嚴重に區別せられたの

であるが、後世の學者多くは之に氣がつかなかつたやうで、集中にも誤訓せられた例が少くはない。以下一々は指摘せぬが、常に此差別を念頭に置くことを要する。

參照 ナシ、サツセミ

(一四)

反歌

高山與 耳梨山與 相之時 立見爾來之 伊奈美國波良 香山と耳梨山と逢ひしとき立ちて見に來し印南國原

(一五)

渡津海乃 豐旗雲爾 伊理比沙之 今夜乃月夜 清明已會 わたづみの豊はた雲に入日さし今夜の月夜清明くこそ

右一首歌今案不似反歌也、但舊本以此歌載於反歌、故今猶載此賦、亦紀曰、天豐財重日足姫天皇先四年乙巳立爲天皇爲皇太子

(一) 清くテリコソ又は清くアカリコソと訓するものもあるが、其場合には月に對つて希望する意になるから、入日の光景を叙する上三句との間に接續語(句)が入用である。換言すれば第三句に「入日サシ」といふ連用形は用ひられぬ筈である。この道理を飲みこめば、コソが乞欲を意味する動詞ではなく、普通の助語で、下にアラメを含ませたものであることが會得せられる。さればこそ舊訓はアカラケクコソとあるのであるが、清明は寧ろキヨラケク(キヨラ、アカク)の假字と見るべきである。

参照 ワタツミ、トヨハタクモ、ツクロ

近江大津宮御宇天皇代 天命開別(天智)天皇

(一六) 天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩時、額田王以レ歌判之歌

冬木成 春去來者 不喧有之 鳥毛來鳴奴 不開有之 花毛佐家禮杼 山乎茂 入而毛不取 草深 執手母不見 秋山乃 木葉乎見而者 黃葉乎婆 取而曾思奴布 青乎者 置而曾歎久 曾許之恨之 秋山吾者

冬ごもり 春さりくれば 鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山をしみ 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては もみぢをば 取てぞ悵ぶ 青きをば 置きてぞ歎く そこしらみし 秋山吾は

(一) 成は盛の省畫とする高橋正元説「古義」を可とする。
(二) 恨を怜の誤とする宣長説「玉小琴」はとらぬ。恨は借字で、ウラミは愁見の意である。此歌は題詞にもある通り、春花と秋葉とどちらが憐と見るかといふことの裁斷で、どちらが怜るいかといふのではない。終の二句は「秋山ソコシ(其をぞ)吾は愁見シ」と轉置して會得すべきである。

(一七)

額田王下近江國時作歌、井戸王即和歌

味酒 三輪乃山 青丹吉 奈良能山乃 山際 伊隱萬代 道隈 伊積流萬代爾 委曲毛 見管行武雄 數數毛 見放武八萬雄 情無 雲乃隱障倍之也

うまさげ 三輪の山 青丹よし 奈良の山の 山のま い隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを 數々も 見さけむ山を 心なく 雲のかくさふべしや

(一) 此句をヤマノハニ、ヤマキハニ、ヤマノマニ、ヤマノマユの如く訓したのは之を補足格と見、隠れるものは三輪の山及奈良の山のこゝと、解した爲であらうが、遠山が端山にかくれることはあるとしても、道の隈に積るといふ事はあり得ぬから、積るものは「道の隈」であらねばならぬ。之と同様に隠れるものも亦三輪山、奈良山の山際即ち山の端で、「山際」は主格と見るべきである。飛鳥の京から奈良坂を越え、山城を行くに従うて、道は幾度か迂廻し、大和の山岳の麓はかくれるが、尙山頂をつくづく眺め、屢々ふりかへつて見やうと思つたのに、無情の雲が隠したことを悲しんだのである。されば「山際」に(ニ)又は(ユ)を添へるのは蛇足で、ヤマノマと四音に訓まればならぬ。次句がイカクルマテといふ六音であるのは之が爲である。古歌には五、七調の代りに往々四、六調が用ひられたことを忘れてはならぬ。

(二) マテニはマテの原語で、約濁によつてマテともいふが、マテに助

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

茜草指 武良前野遊 標野行 野守者不見哉 君之袖布流 あかねさす紫野行きしめ野行き野守は見ずや君が袖ふる

(一八)

皇太子答御歌 明日香宮御宇天皇

紫草能 爾保敝類妹乎 爾苦久有者 人孀故爾 吾戀目八方 むらさきのにほへる妹を憎くあらば人妻故に吾戀ひめやも

紀曰、天皇七年丁卯夏五月五日縱獵於蒲生野、于時大皇弟、諸王、内臣及羣臣皆悉從焉

明日香清御原宮天皇代 天淳中原瀛真人(天武)天皇

(一九)

十市皇女參赴於伊勢神宮時見波多横山巖吹黃刀 自作歌

河上乃 湯都盤村二 草武左受 常丹母翼名 常處女煮手 河上のゆつ磐村に草むさず常にもがもな常少女にて

吹黃刀自未詳也、但紀曰、天皇四年乙亥春二月乙亥朔丁亥十市皇女、阿閉皇女參赴於伊勢神宮

(一) 河上は舊訓の如くカハカミと訓むべきである。略解にカハノへと改訓したが、カハノへ即ち川邊の岩ならば草が生ひることもあり得

語のニをそへてマテニとしたのではない。其故に本集には後世ならばマテといふべき場合にマテニと用ひた例が多い。されば殊更に濁音としてマテニと訓するのは誤りである。舊訓には此誤が多いが、以下一々は指摘せぬ。

(三) 舊訓マクハシモとあるが、マクハシは委曲の意ではない。古義に毛を爾の誤としたのは無用の辯である。

参照 ウマサケ、アチニヨシ、クマ、マテニ、ツバラ、ミサケ

反歌

三輪山乎 然毛隱賀 雲谷裳 情有南畝 可苦佐布倍思哉 三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや

右二首歌、山上憶良大夫類聚歌林曰、遷都近江國時、御覽三輪山御歌焉、日本書紀曰六年丙寅春三月辛酉朔己卯遷都于近江

(二〇)

綜麻形之 林始乃 狭野榛能 衣爾著成 目爾都久和我勢 へそ形の林のさきのさ野榛の衣につくなす目につく我背

右一首歌今案不似和歌、但舊本載于此次、故猶載焉 (一) 綜麻を舊訓ソマとしたが、契沖の説に従うてヘソと訓むべきである。ヘソ(卷子)の形をした林といふことである。

(二一)

るから譬喩にならぬ。此は河中にあつて絶えず水に洗はれる爲めい
つも清浄なる譬を見て、齋宮に奉仕せらるべき皇女に譬へまゐらせ
たのである。——ユツを五百の義とするものがあるが、其では歌の
情趣が没却せられる。

参照 ユツイハムラ

(二四)

麻績王流_三於伊勢國伊良虞島_二之時人哀傷作歌

打麻乎_(一) 麻績王 白水郎有哉 射等籠荷四間乃 珠藻刈麻須_(三)
うつそを麻績のおほきみあまなれやいらこが島の玉藻かります

(一) 舊訓ウツアサチとあるが、ウツソヤシ麻績とある例(二六卷)により
ウツソチと四音に讀むを可とする(古義)。——ソチはサチ(麻績)の
音便である。

(二) 麻績は異本に「食」とあり(拾穂)、字のまゝでもナスと訓み得られ
ぬことはないが、カリマスと、うてよく意が通ずるのみならず、縦
ひ食用せられたのが事實であるとしても、打つけにナス(食)といふ
よりもカリマスの方が哀が深やうに思はれる。

(二四)

麻績王聞之感傷和歌

空蟬之 命乎惜美 浪爾所濕 伊良虞能島之 玉藻刈食

うつせみの命を惜しみ浪にぬれいらこの島の玉藻刈り食す

右案_三日本紀曰、天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯三日麻
績王有_レ罪流_三于因幡_一一子流_三伊豆島_一一子流_三血鹿島_一也、

是云配_三于伊勢國伊良虞島_二者若疑後人緣_三歌辭_二而誤記乎
紀に因幡とあるは昔の印幡國(後の下總の一部分)で、イラゴは其對岸
の常陸國板來のことである。

参照 イラゴの島、ウツセミ

(二五)

天皇御製歌

三吉野之 耳我嶺_(一) 時無會 雪者落家留 間無會 雨者零計
類 其雪乃 時無如 其雨乃 間無如 隈毛不落 思乍叙來

三吉野の みがねの嶺_(一)に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ
雨は降りける 其雪の 時なきがごと 其雨の 間なきがごと
隈も落ちず 思ひつつぞ來る 其山道を

(一) 舊訓ミカノミネとあるが、十三卷にも三吉野之御金嵩とあるから
守部説に従うて姑くミカネノタケと訓んで置く。或はミミガタケニ
と六音に訓むのかもしれない。

参照 ミカネのタケ

(二六)

或本歌

三芳野之 耳我山爾 時自久會 雪者落等言 無間會 雨者落
等言 其雪 不時如 其雨 無間如 隈毛不墮 思乍叙來 其
山道乎

神之盡 樛木乃 彌繼嗣爾 天下 所知食之乎_(一) 或云 天爾滿
倭乎置而 青丹吉 平山乎越_(二) 或云、倭乎置、何方 御念食_(三)
或云、所 天離 夷者雖有_(四) 石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮爾
念計米可 天下 所知食兼 天皇之 神之御言能 大宮者 此間等雖聞
大殿者 此間等雖云 春草之_(五) 茂生有 霞立 春日之霧流_(六) 或云
春日香霧流、夏 百磯之 大宮處 見者悲毛_(七) 或云、見者
草香、繁成奴留 玉だすき 畝火の山の 樞原の 聖の御代ゆ_(八) 宮よ_(九) 生れまし
し 神のことごと 樛_(一〇)木の 彌次々に 天の下 知ろしめし
しを(知ろしめしける) 空にみつ 大和をおきて (空みつ、大
和をおき) 青丹よし 奈良山を越え(奈良山越えて) いかさ
まに 思ほしめせか(思ほしけめか) 天さかる 夷にはあれど
石走る 淡海の國の 樂波の 大津の宮に 天の下 知ろしめ
しけむ すめらぎの 神の命の 大宮は こゝと聞けども 大
殿は ここといへども 春草の 茂り生ひたる(霞立つ、春日か
きれる) 霞立つ 春日の霧る (夏草か、茂く成りぬる) 百し
きの 大宮處 見れば悲しも(見ればさぶしも)
括弧内に記したのは本文に或云として分註した語句である。いづれを
執るも妨はないが、(一)はオモホシケメカとする方が次のシロシメシケ
△と時格が一致してよいやうである。

過_三近江荒都_二時柿本朝臣人麿作歌
玉手次 畝火之山乃 樞原乃 日知之御世從_(一) 或云 阿禮座師

萬葉集(卷第一)

三芳野の みかねの山に 時じくぞ 雪は降るとふ 間なくぞ
雨は降るとふ 其雪の 時じきかごと 其雨の 間なきがごと
隈も落ちず 思ひつつぞ來る 其山道を
右句々相換因_レ此重載焉

(二七)

天皇幸_三于吉野宮_二時御製歌

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見與 良人四來_(一)
よき人の良しとよく見て好しといひし芳野よく見よ良人よく見

紀曰八年己卯五月庚辰朔甲申幸_三于吉野宮_一
(一) 舊訓ヨキミとあり、ヨクミツと訓したものであるが、之は第四句
の意を反復したのであるから、春滿の説の如くヨクミを可とする。

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姬(持統)天皇

(二八)

天皇御製歌

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香來山_(一)
春過ぎて夏來たるらし白たへの衣乾したり天の香山

(二九)

過_三近江荒都_二時柿本朝臣人麿作歌

玉手次 畝火之山乃 樞原乃 日知之御世從_(一) 或云 阿禮座師

ふ大神景井の説〔古義〕は非。ヒナに此場合單に田舎といふ程の意に用ひられたのである。

(三) ハルクサとも訓み得ることは勿論であるが、次句に「春日のきれ」とあるから、ハルといふ語をいひかへてワカクサと訓む方がよいやうである。

【參照】ヒジリ、ソラニミツ〔枕〕、アマサカルヒナ、イハハシル、モモシキ、キレル

(三〇)

反歌

樂浪之 思賀之辛崎 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津

さざ波の滋賀のから崎さきくあれど大宮人の船まぢかねつ

(三一)

左散難彌乃 志我能^{一云} 大和太 與杼六友 昔人二 亦母相

目八母^{一云、將會跡母戸八}

さざ波の滋賀の(比良の)大わた淀むとも昔の人にまたも逢はめやも(逢はむと思へや)

(三二)

高市古人感^二傷近江舊塔^一作歌 或書云高市連黒人

古 人爾和禮有哉 樂浪乃 故京乎 見者悲寸

古^{イニシハ}の^一人にわれあれやさざ波のふるき都を見れば悲しき

(一) 舊訓フルヒトニ我アルラマヤとあるが、契沖に從うて「古」で句を

切るべきである。―初句をフリニシと四音に訓むのは理由のないことである。

(三三)

樂浪乃 國都美神乃 浦佐備而 荒有京 見者悲毛

さざ波の國つ御神のうらさびて荒れたる宮處見れば悲しも

(三四)

幸^二于紀伊國^一時川島皇子御作歌 或云山上臣憶良作

白浪乃 濱松之枝乃 手向草 幾代左右二賀 年乃經去良武

^{一云年者經爾計武}

白波の濱松が枝の手向草いく代までにか年の經ぬらむ(年は經にけむ)

日本紀曰、朱鳥四年庚寅秋九月天皇幸^二紀伊國^一也

(三五)

越^二勢能山^一時阿閉皇女御作歌

此也是能 倭爾四手者 我戀流 木路爾有云 名二負勢能山

これや此の大和にしては我が戀ふる紀路にありとふ名におふ背の山

【參照】セの山

(三六)

幸^二于吉野宮^一之時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之 吾大王之 所聞食 天下爾 國者思毛 澤^一雖有

反歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑^一乃 絕事無久 復還見牟

見れど飽かぬ吉野の河の床なめの絶ゆる事なくまたかへり見む

(一) 舊訓トニナメとあるは誤寫であらう。其他ササナメ、トコナツ、

イハナミ、シキナミ等の訓があるが論ずるに足らぬ。

【參照】トコナメ

(三八)

安見知之 吾大王 神長柄 神佐備世須登 芳野川 多藝津河

内爾 高殿乎 高知座而 上立 國見乎爲勢波^一 疊有^一 青垣山

山神乃^一 奉御調等 春部者 花挿頭持 秋立者 黄葉頭刺理云

黄葉加^一 遊副 川之神母 大御食爾 仕奉等 上瀬爾 鵜川乎立

射之^一 下瀬爾 小網刺渡 山川母 依底奉流 神乃御代鴨

やすみしし 吾大君 神ながら 神さびせすと 芳野川 たぎ

つかふちに 高殿を 高しりまして 上り立ち 國見をしせば

たためる 青垣山 山神の まつる調と 春べは 花かさしも

ち 秋立てば もみぢかさせり(もみぢ葉かさし) めぐり副ふ

川の神も 大御饌に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川をたて 下

つ瀬に さでさし渡す 山川も よりて仕ふる 神の御代かも

(二) 刊本爲波とあるが、爲勢波とある本を正しとする。シセバはシマセバと同じく敬語である。國見は臣民のすることではないから、天

山川之 清河内跡 御心乎 吉野乃國之 花散相 秋津乃野邊
爾 宮柱 太敷座波 百磯城乃 大宮人者 船並氏 且川渡
舟競 夕河渡 此川乃 絶事奈久 此山乃 彌高良之 珠水
激瀧之宮子波 見禮跡不飽可聞

やすみ知し 吾大君の 聞こしをす 天の下に 國はしも 多^{サハ}
にあれども 山川の 清きかふちと 御心を 吉野の郷の 花
散らふ 秋津の野邊に 宮柱 太しきませば 百しきの 大宮
人は 船なめて 朝川渡り 船きほひ 夕川渡る 此川の 絶
ゆることなく 此山の いや高からし 珠水の たぎつ宮處は
見れど飽かぬかも

(一) 珠水激瀧之宮子の七字は舊訓タマミツのタキノミヤコとあり、眞淵は珠水激の三字をイハハシルと訓し、雅澄は珠を瀧の誤としてオチタギツと訓んだ。瀧のある宮といふ意を以てタキの宮といふ稱呼はあり得ることであるが、宮處(都)の修飾語としてはタキは不適當であるから、元曆校本、神田本の訓の如く、激瀧之の三字を合はせてタギツとよむべきで、―「之」は屢々述べたやうに前續字が動詞に用ひられたことを表示する助字である―タギツものは玉水であらねばならぬ。されば之をイハハシル又はオチタギツと訓めといふのは甚無理である。

【參照】ヤスミシシ〔枕〕、カフチ、フトシキマス

(三七)

皇の御事をいふものとせねばならぬ。上句高知座^{マシテ}而とあるつゞきから見ても然^{シカ}あるべきである。

(二) 舊訓タタナハルとあるが、次句がアチカキヤマの六音であるから、タタメルと四音に讀むがよい。五七、四六は和歌の基調である。強て景行紀(記)の歌と一致させる爲に有^レを付又は著の誤として、タタナツクと訓した春滿、眞淵、雅澄等の説は従はれぬ。

(三) 舊訓ヤマツミとあり、或はさう誦したのかも知れぬが、山神の古語はヤマツチであらねばならぬ。

(四) 遊副川之神母の六字を従来一句に讀み、ユフカハノカミモとし、其上又は「川之」の下に一句を脱したものとしたが、遊をメグリと訓むのは例のあることであるから、メグリソフ・川ノカミモと二句に讀むがよい。

參照 カムナガラ、カムサビ、タカシリ、ヤマツチ、ウカハ、サテ

(三九)

反 歌

山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内爾 船出爲加母
山川もよりて仕ふる神ながらたぎつかふちに船出するかも

右日本紀曰三年己丑正月天皇幸吉野宮、八月幸吉野宮、四年庚寅二月幸吉野宮、五月幸吉野宮、五年辛卯正月幸吉野宮、四月幸吉野宮者、未詳知何月從駕作歌

(四〇)

幸于伊勢國一時留京柿本朝臣人麿作歌

參照 シマミ

當麻真人麿妻作歌

(四三) 吾勢枯波 何所行良武 己津物 隱乃山乎 今日香越等六

吾背子はいづく行くらむ沖つ藻のなばりの山を今日か越ゆらむ

參照 オキツモ、ナバリ

(四四)

石上大臣從駕作歌

吾妹子乎 去來見乃山乎 高三香裳 日本能不所見 國遠見可聞

吾妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも

右日本紀曰、朱鳥六年壬辰春三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆

廣瀨王等爲留守官、於是中納言三輪朝臣高市麿脫其

冠位、擊上於朝重諫曰、農作之前車駕未可^レ以動、辛未

天皇不^レ從諫、遂幸伊勢、五月乙丑朔庚午御阿胡行宮

(四五)

輕皇子宿于安騎野一時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 神長柄 神佐備世須登

太敷爲 京乎置而 隱口乃 泊瀨山者 眞木立 荒山道乎 石

根 楚樹押靡 坂鳥乃 朝越座而 玉限 夕去來者 三雪落

阿騎乃大野爾 旗須爲寸 四能乎押靡 草枕 多日夜取世須

萬葉集(卷第一)

嗚呼見乃浦爾 船乘爲良武 媿嬌等之 珠裳乃須十二 四寶三都良武香

あごの浦に舟乗すらむ少女らが玉裳の裾に潮みつらむか

(一) 舊訓アミのウラとあるが、十五卷には安胡乃宇其爾布奈能里須良牟と假字書してあるから、見は兒の誤寫なることは疑かない。「辭案抄、古義」。アゴは和名抄に志麻國英虞(阿吳)郡とある地である。

(四一)

鈿著 手節乃崎二 今毛可母 大宮人之 玉藻尙良武

くしろつくたふしの崎に今もかも大宮人の玉藻かるらむ

(二) 刊本には鈿といふ字になつて居るが鈿(鈿の變體)とあるを正しとする。古義にクシロマクと訓したのは誤である。クシロはサスもので、マクものではない。

參照 クシロ、クシロツク

(四二)

潮左爲二 五十等兒乃島邊 撈船荷 妹乘良六鹿 荒島回乎

潮さわに伊良胡の島邊こぐ舟に妹のらむか荒き島みを

(一) 舊訓シマツとあるが、回は巡回といふ意味を以て借りた字で、島末、磯麻、浦箕などある例に倣うてマ又はミと訓すべきである。但し雅澄がミはモトホリの重約——モトの約モ、モホの約もモ、モリの約ミ——としたのは大なる邪説で、マ(間)は地域を意味し、ミは其轉音である。以下語調によつてミともマとも訓することがあるが、一々は説明せぬ。

古昔念而

やすみ知し 吾大王 高照る 日の御子 神ながら 神さびせ

すと 太しかす 都をおきて こもりくの 泊瀨の山は 眞木

立つ 荒山路を 岩が根の 楯おし靡べ さか鳥の 朝越え坐

して たまかぎる 夕さり來れば み雪降る 阿騎の大野に

はたすすぎ 篠をおしなべ 草枕 旅宿りせず 古おぼして

(一) 舊訓タカテラスとあり、眞淵は記の古歌によつてタカヒカルと改訓した。ヒカルに照をあてた例はないから、次の四音の句との均衡上、ヒカルと同義のテルといふ語を用ひ、タカテルと四音に稱へたので、誤讀を恐れて特に「照」の字を用ひたものと思はれる。敬語としてテラス(テリマスの意)と訓めぬこともないが、高ヒカルもヤスミシシも敬語でない所を見ると、此枕詞に限つて敬語ならざるべからずとする理由がない。

(二) マキタツといふ四音の枕詞との均衡上六音を可とするのみならずヤマミチは古言ではないから、アラヤマチと訓むべきである。

(三) 舊訓オモヒテとあるが、此は皇子の御事であるから眞淵説の如くオホシテ(オモホシテの約)と訓むを可とする。前句との均衡からいうても然あるべきである。

參照 コモリク、マキタツ、サカトリ、タマカギル、ハタススキ(枕)

(四六)

短 歌

阿騎乃野爾 宿旅人 打靡 寐毛宿良目八方 古部念爾

あきの野に宿る旅人うちなびきいもぬらめやも古念ふに

(四七)

眞草薺 荒野者雖有 葉 過去君之 形見跡曾來師
まくさ薺る荒野にはあれどもみぢ葉の過ぎにし君がかた見とぞ
來し

(一) 第三句契沖に從うて葉の上に黄の字を脱したものととしてモミヂバ
ノと訓すべきである。

(四八)

東 野炎 立所見而 反見爲者 月西渡

ひむかしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶ
きぬ

(四九)

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御獵立師斯 時者來向

日なみし皇子の命の馬なめて御獵たたしし時は來むかふ

(一) 舊訓ヒナシとあるが、之は日並の皇子即ち草壁皇子の御事を意味
するのであるから、ヒナミといはねばならぬ。古義に斯を能の誤と
してヒナミノと訓したのは從はれぬ。シは「其」の意から出た接尾語
で、アラチシ、タラチシ、ヤスミシシの如くも用ひられる枕詞の一
形式である。

(五〇)

藤原宮之役民作歌

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地、八年甲午
春正月幸藤原宮、冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮

(一) 舊訓ミヤコニハとあり、其他ミヤコチバ、ミアラカハ等の訓があ
るが、春滿に從うてオホミヤハと訓すべきである。

(二) 舊訓イツのクニとあるが意が通ぜぬ。契沖に從うてシラヌクニと
訓むべきである。

(三) 神カラナラシと訓んでもよい。カミナガラ(カミノカラ)もカミカ
ラも同義である。

參照 アラタヘ、ナベ、コロモデ、マキサク(枕)、ツマテ、モノノフ、
タナシラズ、鴨シモノ、百タラズ(枕)、イツハク

(五一)

從明日香宮遷居藤原宮之後、志貴皇子御作歌

姝女乃 袖吹反 明日香風 京都乎遠見 無用爾布久

うねめの袖ふきかへすあすか風みやこを遠みいたづらに吹く
(一) 舊訓タチヤメとあり、タラヤメ又はナトメと改訓したのもある
が、尋常の美人又は少女としては歌の情趣を没却する。之は宮人の
ことであらねばならぬ。其故に春滿はミヤビメと改訓したのであら
うが、姝女といふ字が用ひてある所を見ると、ウネメノと四音に讀
むのであらう。門人熊谷直好の説をいれてウネメと訓した香川景樹
はさすがに歌よみである。

參照 ウネメ、アスカ

(五二)

萬葉集(卷第一)

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 荒妙乃 藤原我宇倍爾
食國乎 賣之賜牟登 都宮者 高所知武等 神長柄 所念奈戶
二 天地毛 緣而有許會 磐走 淡海之國之 衣手能 田上山
之 眞木佐苦 檜乃孺手乎 物乃布能 八十氏河爾 玉藻成
浮倍流禮 其乎取登 散和久御民毛 家忘 身毛多奈不知 鴨
自物 水爾浮居而 吾作 日之御門爾 不知國 依巨勢道從
我國者 常世爾成牟 圖負留 神龜毛 新代登 泉乃河爾 持
越流 眞木乃都麻手乎 百不足 五十日太爾作 浜須良牟 伊
蘇波久見者 神隨爾有之
やすみしし 吾大君 高てる 日の御子 鹿たへの 藤原がう
へに 食國を めし賜はむと 大宮は 高知らさむと 神なが
ら 思ほすなべに 天地も よりてあれこそ 岩走る 淡海の
國の 衣手の たなかみ山の 眞木さく 檜のつまでを もの
のふの 八十宇治川に 玉藻なす 浮べながせれ 其をとると
さわぐ御民も 家忘れ 身もたなしらず 鴨じもの 水に浮き
居て 吾が作る 日の御門に 知らぬ國 より巨勢道より 我
國は、常世にならむ 圖負へる あやしき龜も 新代と 泉の
川に もちこせる 眞木のつまでを 百足らず 筏に作り の
ぼすらむ いそはく見れば 神ながらならし

藤原宮御井歌

八隅知之 和期大王 高照 日之皇子 鹿妙乃 藤原我原爾
大御門 始賜而 埴安乃 堤上爾 在立之 見之賜者 日本乃
青香具山者 日經乃 大御門爾 春山跡 之美佐備立有 畝火
乃 此美豆山者 日緯能 大御門爾 彌豆山跡 山佐備伊座
耳高之 青菅山者 背友乃 大御門爾 宜名倍 神佐備立有
名細 吉野乃山者 影友乃 大御門從 雲居爾會 遠久有家留
高知也 天之御蔭 天知也 日御影乃 水許曾波 常爾有米
御井之清水

やすみ知し わご大君 高てる 日の御子 鹿たへの 藤井が
原に 大御門 創め給ひて 埴安の 堤の上に ありたたし
見し給へば 大和の 青香山は 日のたての 大御門に 春山
と しみさび立てり 畝火の 此瑞山は 日のよこの 大御門
に みづ山と 山さびいます 耳なしの 青菅山は 背面の
大御門に よろしなべ 神さび立てり なぐはし 吉野の山は
陽面の 大御門ゆ 雲ゐにぞ 遠く有りける 高知るや 天の
みかげ 天知るや 日のみかげの 水こそは 常に有らめ 御
井の清水

(一) 舊訓ミシタマヘレバとあるが、繼續格を用ひる必要がないから、

御杖説の如くミシタマヘバと讀むべきである。眞淵、雅澄がメシタマヘバとしたのは穿鑿に過ぎる嫌がある。

(三) 春は青の誤字とする説もあるが「玉小琴」、瑞山に對立する語としては青山はもの足らぬのみならず、次に耳梨山も青管山とせられて居るから重複の嫌がある。或は他に訓があるか、又は誤記であるかも知れぬが、尙之を考へ得ぬ。

(四) 高の字眞淵は「爲」の誤とし、雅澄は「無」と改記した。耳成山をいふものなることは地理上疑がないが、此山は上古ミミ嵩とも稱へられた形跡があるから、——語誌參照——こゝもミミタケノと訓ませるつもりであつたかも知れぬ。

(五) 舊訓トキハニアラメとあるが、トキハの原義は床簀であるから、水の形容には適はしくない。之に反して水の絶えざることを祝した綱長井(ツネ、ナガキの意)などいふ呼稱のある所を見ると「神名帳」、ツネと訓む方がよいやうである。

參照 ハニヤス、日のタテ、日のヨコ、カゲトモ、ソトモ、ミミナシ山、ナクハシ「枕」、ヨロシナベ、ミカゲ

(五三)

短歌

藤原之 大宮都加倍 安禮衝哉 處女之友者 之吉呂賀聞
ふぢ原の大宮つかへあれつくや少女が伴は美しきろかも

右歌作者未詳

(一) 舊訓アレセムヤとあるが、古義にアレツクヤとあるを可とする。但し同書の語釋は従ひかれる。

或本歌

河上乃 列列椿 都良都良爾 雖見安可受 巨勢能春野者
河上の列列椿つらつらに見れどもあかず巨勢の春野は

右一首春日藏首老

(五七)

二年壬寅太上天皇幸于參河國一時歌
引馬野爾 仁保布榛原 入亂 衣爾保波勢 多鼻能知師爾
ひくま野に匂ふは原いり亂れ衣にほはせ旅のしるしに

右一首長忌寸奥麿

參照 ヒクマ野、ニホフ

(五八)

何所爾可 船泊爲良武 安禮乃崎 撈多味行之 棚無小舟
いづくにか船泊すらむ安禮の崎こぎたみ行きし棚なし小舟

右一首高市連黑人

參照 アレの崎、タナナシ小舟

(五九)

譽謝女王作歌
流經 妻吹風之 寒夜爾 吾勢能君者 獨香宿良武
ながらふるつま吹く風の寒き夜に吾が背の君は獨かぬらむ
(一) 流經妻は誤記であらうと思はれるが、強て解釋すればツマはツマ

(二) 呂を刊本は召として、シキリメスカモと訓して居るが、田中道麻呂説の如く之を乏の誤字として、トモシキロカモと訓むべきであらう「玉小琴」。

參照 アレ、トモシ、ロカモ

(五四)

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊國一時歌
巨勢山乃 列列椿 都良都良爾 見乍思奈 許湍乃春野乎
こせ山の列々つまきつらつらに見つゝ思ばな巨勢の春野を
右一首坂門人足

(一) 椿はツバキであるが、音便によつてツマキとも稱へられた。こゝは妻にきかせたのであるから、ツマキと訓まればならぬ。——「七三」參照。

(二) 舊訓オモフナとあるが、雅澄説の如くシヌバナと訓む方がよい。但し同人が春の歌としたのは誤りで、題詞の如く秋月こゝをすぎ、椿の列を見て婦女子の行樂する春野を偲ぼうというたのである。

參照 ツバキ、コセ

(五五)

朝毛吉 木人乏母 亦打山 行來跡見良武 樹人友師母
あさもよし紀人ともしもまつち山行來と見らむ紀人美しも
有一首調首淡海

參照 アサモヨシ

(五六)

屋に通はせたもので、「久しい留守の嬌屋を吹く風が寒いのに」云々といふ意であらう。妻を雪の誤として「流るる雪」の意とする説は尙心ゆかぬやうである。

(六〇)

長皇子御歌

暮相而 朝面無美 隱爾加 氣長妹之 廬利爲里計武
よひに逢ひて朝面なみなばりにか毛長き妹が廬りせりけむ
從駕の皇子が名張といふ地名にことよせて坐興に詠まれた歌と解すべきである。

參照 ケナガイイモ、ナマリ、ナバリ

(六一)

舍人娘子從駕歌

大夫之 得物矢手挿 立向 射流圓方波 見爾清潔之
ますら男がさつ矢たばさみ立向ひ射るの方は見るにさやけし
(一) 舊訓トモヤとあるが春満に従うてサツヤと訓むべきであらう。

(六二)

三野連名闕入唐時、春日藏首老作歌

在根良 對馬乃渡 渡中爾 幣取向而 早還許年
ありねよし對馬の渡りわた中に幣取り向けて早かへり來ね
(二) 此語義を明にし得ぬので百船能「眞淵」、布根竟「大平」、大夫根之「雅澄」等の誤寫であるとすると説も出たのであるが、其證據はなく

又いづれの本によるも誤寫と見るべき痕跡がない。尙原字について訓方及意義を考究するのが學者の義務であらう。私見は語誌に述べた。——其項下參照。

(六三)

山上臣憶良在^(一)大唐^(二)時憶^(三)本郷^(四)歌

去來子等 早日本邊^(一) 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武

いさ子ども早日の本^(二)へ大伴の御津の濱松まぢこひぬらむ

(一) ハヤクヤマトへ、ハヤモヤマトへ、ハヤヤマトへニなど讀みあらためたものが多いが、こゝは憶良が在唐中に詠んだのであるから、特にヒのモトといふ語を用ひたものと思はれる。修辭學の見地からいうても、舊訓の方が遙に勝つて居る。ヒノモトといふ語は赤人の不盡山の歌(三元)にも見える。

參照 オホトモ(枕)

(六四)

慶雲三年丙午幸^(一)于難波宮^(二)時

志貴皇子御作歌

葦邊行 鴨之羽我比爾 霜零而 寒暮夕 和之所念

あしべ行く鴨の羽がひに霜ふりて寒き夕は大和しおもほゆ

(六五)

長皇子御歌

霰打^(一) 安良禮松原 住吉之 弟日娘與 見禮常 不飽香聞

旅爾之而 物戀之伎乃^(一) 鳴事毛 不所聞有世者^(二) 孤悲而死萬思 旅にしてものこほしぎの鳴くことも聞えずありせば戀ひて死なまし

右一首高安大島

(一) 伎乃の二字には疑があるが、法性寺殿御自筆本といふ古寫本にあるといふことであるから、魯魚の行でないことは明である。コホシキにコバシギ(鳴の一種)をいひかけたものと思はれる。

(二) 舊訓キコエザリセバとあるが、こゝは繼續格ではなく、アリを動詞として用ひたものであるから、キコエズアリセバと讀まればならぬ(語法要録參照)。

(六八)

大伴乃 美津能濱爾有 忘貝 家爾有妹乎 忘而念哉

大伴のみつの濱なる忘れ貝家なる妹を忘れて念へや

右一首身人部王

(六九)

草枕 客去君跡 知麻世婆 岸之埴布爾 仁寶播散麻思乎

草まくら旅行く君と知らませば岸の埴生に匂はざらましを

右一首清江娘子進^(一)長皇子^(二) 姓氏未詳

(一) 字の通り讀めば舊訓の如くニホハサマシテであるが、脱字があるものとして元曆校本及古葉略類聚鈔の訓によつてニホハザラマシテと訓むべきである。埴生にニホス、黄土粉にニホフ(九三)などいふのは此當時の慣用語で色香に染まるといふほどの意である。——皇子

霰^{アラレ} うつあられ松原住の江のおとひ少女と見れど飽かぬかも

(一) 舊訓ミツレフリとあるが、理由のないことで、契沖に従うてアラレウツと訓すべきである。

參照 オトヒ

(六六)

太上天皇幸^(一)于難波宮^(二)時歌

大伴之 高師能濱乃 松之根乎 枕宿杼^(三) 家之所思由

大伴のたかしの濱の松が根を枕きていぬれど家し思はゆ

右一首置始東人

(一) 雅澄は此行幸を文武天皇三年の事として以下五首を(五三)の次に移した。

(二) 宣長は杼を夜の誤としてマキテマルヨハと訓した。其は此句が家を思ふ原因ならざるべからずと解した爲であらうが、若し高師濱が都人のあこがれた名所であつたとすれば、マキテイマレドといつても差支はない筈である。——眞淵がマキテシマレドと訓したのは次句の「家シ」と同一助語が重複するのみならず、語義上マキテシといふことは出来ぬ。シの語義を究めずして音の足らぬ所に任意に挿入し得るものとするのは大なる誤りで、國語には無意義の措辭といふものは一つもない。——語法要録參照——以下にも此種の誤訓は多いけれども一々は指摘せぬ。

參照 タカシの濱

(六七)

の御衣を埴生の色土^(一)で染める意とするのは誤解である。

(七〇)

太上天皇幸^(一)于吉野宮^(二)時、高市連黑人作歌

倭爾者 鳴而歎來良武 呼兒鳥 象乃中山 呼曾越奈流

大和には鳴きてか來らむ呼子鳥象の中山よひぞ越ゆなる

參照 ヨブコ鳥、キサ

(七一)

大行天皇幸^(一)于難波宮^(二)時歌

倭戀 寐之不所宿爾 情無 此渚崎爾 多津鳴倍思哉

大和こひの寝らえぬに心なく此渚の崎に鶴鳴くべしや

右一首忍坂部乙麿

(七二)

玉藻刈 奥徹波不撈 敷妙之 枕之邊 忘可禰津藻

玉藻刈る沖邊は漕がじしきたへの枕のあたり忘れかねつも

右一首式部卿藤原宇合

參照 シキタへ

(七三)

長皇子御歌

吾妹子乎 早見濱風 倭有 吾松椿^(一) 不吹有勿勤^(二)

吾妹子をはや見はま風大和なる吾をまつ椿吹かざらなゆめ

(一) 舊訓ワガマツツバキとあるが、ツバキと讀んでは情趣がなくなる

から、春満に従うてワナマツツマキ(春満はワレとしたがワナの方がよい)と訓み、松は全く借字、「待」を意味し、ツマキは妻を椿にいひかけたものと解すべきである。古義が大井景元の説によつて椿を樹の誤とし、アナマツノキニと訓したのは論ずるに足らぬ。

〔五四〕参照
(二)舊訓フカナルナユメとあり、古寫本の多くはフカザルナユメとしてあるが、勿は借字とみて契沖説の如く「代匠記初稿書入」フカザラナユメと訓すべきである。

(七四) 大行天皇幸于吉野宮時歌

見吉野乃 山下風之 寒久爾 爲當也今夜毛 我獨宿牟
みよし野の山の下風の寒くにはたや今夜も我がひとり寝む
右一首或云天皇御製歌

〔七五〕

宇治間山 朝風寒之 旅爾師手 衣應借 妹毛有勿久爾
うぢま山朝かぜ寒し旅にして衣かすべき妹もあらなくに
右一首長屋王

(七六)

和銅元年戊申天皇御製歌
大夫之 輶乃音爲奈利 物部乃 大臣 楯立良思母

和銅三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時、
御輿停長屋原、適望古郷、御作歌 一書云太上
皇御製

飛鳥 明日香能里乎 置而伊奈婆 君之當者 不所見香聞安良武
トトリ 一云、君之當乎、不見而香毛安良牟
飛鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えずかもあら
む(君があたりを見ずてもあらむ)

元明朝には太上天皇はおはしまさぬ筈であるから、此太上天皇は持統天皇の御事で、御製も亦別の機會に詠まれたものであらばならぬ。雅澄は「從飛鳥宮遷于藤原宮時」の十字を脱したものであらうというたが「古義」、之なくとも其意味に了解せられる。

(七九)

或本從藤原京遷于寧樂宮時歌

天皇乃 御命畏美 柔備爾之 家乎擇 隱國乃 泊瀬乃川爾
天皇乃 吾行河乃 川隈之 八十阿不落 萬段 願爲乍 玉梓
乃 道行晚 青丹吉 楯乃京師乃 佐保川爾 伊去至而 我宿
有 衣乃上從 朝月夜 清爾見者 拷乃穗爾 夜之霜落 磐床
等 川之水凝 冷夜乎 息言無久 通乍 作家爾 千代二手來
座多公與 吾毛通武

おほきみの 御命かしこみ にぎびにし 家をすて こもりく
の 初瀬の川に 船うけて 吾が行く川の 川隈の 八十隈お

ますらをの輶の音すなりものゝべの大まへつぎみ楯たつらしも
(一) 舊訓モノノフとあるが、朝廷の大典に物部族の首長が楯を建てるのは神武朝以來の古例で「舊」、文武天皇の踐祚大嘗祭にも榎井朝臣倭麻呂(物部族員)が大楯を建て、奉仕したとあるから、「續紀」契沖説の如く此年施行せられた大嘗祭の時の大御歌で、物部の大臣は左大臣石上朝臣麻呂(物部宗家)であらう。物部大臣を一般に大將軍を意味するものとし、此翌年蝦夷征討に向つた軍隊の演武の光景と説くが如きは言葉といふものを超越した空想といはればならぬ。
トモの音を引ひく音とするのは同じく大誤解である。

〔七六〕

御名部皇女奉和御歌

吾大王 物莫御念 須賣神乃 嗣而賜流 吾莫勿久爾
わが大君ものなほほし皇神のつぎて賜へるみこなけなくに

(一) 舊訓ワガミカトとあるが、契沖に従うてワガオホキミと訓むべきである。

(二) 吾の誤字なることはいふまでもないが、君(宣長)、告(守部)とする説には同意しかれる。此は文武天皇に先立たれ賜うた元明天皇を慰めまゐらせて御孫皇子(聖武天皇)もおはしますから、御安心遊ばせといはれたので、ミコナケナクニであらねばならぬ。恐らくは吾は王子(ミコの假字)の二字の誤寫であらう。

(七八)

スメカミ

ちす 萬たび 顧みしつづ 玉梓の 道行きくらし 青丹よし
奈良の都の 佐保川に 行き至りて 我が寝たる 衣の上ゆ
朝月夜 さやかに見れば たへの穂に 夜の霜ふり 磐床と
川の水こほり さむき夜を いこふ事なく 通ひつづ 作れる
家に 千代までい いまさむ君と 吾も通はむ

(一) 或本の二字は拾穂抄に之を削つたのがよいやうである。
(二) 舊訓スメロギとあるが、宣長説の如く、オホキミと訓むを可とする。

(三) 擇は釋の誤としてステと訓むのであらう。
(四) 舊訓サヤカニミレバとあるを可とする。衣の上を照す有明の月のサヤカなる光の下に見ればといふ意味で、決して無理な省語ではない。眞淵説の如くサヤニユレバとすると、月光の清らかに見えることが霜降り水凝る前提又は原因と聞えて理に合はぬ。

(五) 凝は刊本には疑とあるが、凝とした本が多く、又水は冷泉本の外皆水とあるが、其は古語では水の意なることに氣付かず、この訓によつて氷とかき改めたものと思はれるから訂正した。氷凝は意をなさぬ。
(六) 舊訓サユルヨとあるが、眞淵説の如くサムキヨを可とする。
(七) 舊訓ヤムコトモナクとあり、ヤスムコトナクといふ訓もあるが、春満訓のイコフコトナクが最よいやうである。

(八) 眞淵に従ひ來は爾の誤で上の句につくものとする。
(九) 多は牟の誤とする眞淵説を可とする。
此は奈良の都に奉仕する人が佐保の郷に妻の住む家を作つて此から其

處へ通はうといふ意味を詠じたので、此當時の結婚生活に通曉せぬものは少しわかり悪い所があるが、後世の住宅とは性質を異にすることを知らねばならぬ。

【參照】ニギビ、タマホコ〔枕〕、朝ツクヨ、タへのホ、ヒ〔水〕

(八〇)

反歌

青丹吉 寧樂乃家爾者 萬代爾 吾母將通 忘跡念勿

青丹よし奈良の家にはよろづ代に吾も通はむ忘ると思ふな

右歌作主未詳

(八一)

和銅五年壬子夏四月、遣長田王子于伊勢齋宮時山

邊御井作歌

山邊乃^(一) 御井乎見我氏利 神風乃 伊勢處女等 相見鶴鳴

やまべの御井をみがてり神風の伊勢をとめども逢ひ見つるかも

【(一) 舊訓ヤマノへとあるが、宣長の攷證に従うて〔玉勝間〕ヤマヘノと

四音に訓んで置く。

【參照】ヤマベの御井、ガテリ

(八二)

浦佐夫流 情佐麻彌之^(一) 久堅乃 天之四具禮能 流相見者^(二)

うらさぶる心さまねし久かたのそらのしくれの流らふ見れば

【(一) 彌の字契沖は彌の誤としてサマネシ〔ササネシ〕と訓した。

(二) 從來アマ又はアメと訓して居るが、こゝではソラと讀むがよいやうである。

(三) 舊訓ナガレアフミバとあるが、ナガラフミレバとする眞淵訓を可とする。

【參照】ウラサビ、サマネシ、シグレ

(八三)

海底^(一) 奥津白浪 立田山 何時鹿越奈武 妹之當見武

わだの底沖つ白波立田山いつか越えなむ妹があたり見む

右二首今案不似御井所作、若疑當時誦之古歌歟

【(一) 古點ミナソコとあり、仙覺はワタツミと改めたが、五卷にも和多能會許意根都布加延乃云々とつゞけた例とあるから、ワタソソコと訓むべきである〔古義〕。

(八四)

寧樂宮長皇子與志貴皇子^(一) 於佐紀宮俱宴歌

秋去者 今毛見如 妻戀爾 鹿將鳴山會 高野原之宇倍

秋されば今も見ること妻ごひに鹿なく山ぞ高野原のうへ

右一首長皇子

【(一) 假に第四句を鹿ナカム山ゾと訓むとしても、此句は秋サレバというて然るべきである。——秋サリハの音便。

(二) 字について訓めば鹿ナカム山ゾであらねばならぬが、類聚抄、神田本、細井本等にシカナクヤマゾと訓してあるのは何か據があつたのであらう。或は將を衍字とする傳承が存したのであるまいか。

かくばかり戀ひつつあらずは高山のいは根しまきて死なましものを

(八七)

在管裳 君乎者將待 打靡 吾黑髮爾 霜乃置萬代日^(一)

ありつつも君をば待たむ打なびく吾が黒髮に霜のおくまで

【(一) 萬代の二字はマテの音を表はし、萬代日の三字はマテニ〔マテ〕の意を示したものであるが、特に霜乃と書いた所を見ると、萬代日の三字をマテと訓ませるつもりと思はれる。マテニと訓するのは妨はないが、マテニとよむのは誤である。——〔二七〕參照。

(八八)

秋之田 穗上爾霧相 朝霞 何時邊乃方二 我戀將息

秋の田の穂の上^(一)にきらら朝霞いつ方のかたに我が戀やまむ

【參照】キラフ

(八九)

或本歌曰 居明而 君乎者將待 奴婆珠之 吾黑髮爾 霜者零騰文

居あかして君をば待たむぬばたまの吾が黒髮に霜は降るとも

右一首古歌集中出

古事記曰、輕太子舒輕大郎女、故其太子流於伊豫湯也、此時衣通王不堪戀慕而追往時歌曰

萬葉集(卷第一)(卷第二)

如此計 戀乍不有者 高山之 磐根四卷手 死奈麻死物乎

【(一) 彌の字契沖は彌の誤としてサマネシ〔ササネシ〕と訓した。

【(二) 字について訓めば鹿ナカム山ゾであらねばならぬが、類聚抄、神田本、細井本等にシカナクヤマゾと訓してあるのは何か據があつたのであらう。或は將を衍字とする傳承が存したのであるまいか。

【(一) 舊訓ヤマノへとあるが、宣長の攷證に従うて〔玉勝間〕ヤマヘノと四音に訓んで置く。

【參照】ヤマベの御井、ガテリ

【(一) 彌の字契沖は彌の誤としてサマネシ〔ササネシ〕と訓した。

【(二) 字について訓めば鹿ナカム山ゾであらねばならぬが、類聚抄、神田本、細井本等にシカナクヤマゾと訓してあるのは何か據があつたのであらう。或は將を衍字とする傳承が存したのであるまいか。

【(一) 舊訓ヤマノへとあるが、宣長の攷證に従うて〔玉勝間〕ヤマヘノと四音に訓んで置く。

【參照】ヤマベの御井、ガテリ

【(一) 彌の字契沖は彌の誤としてサマネシ〔ササネシ〕と訓した。

【(二) 字について訓めば鹿ナカム山ゾであらねばならぬが、類聚抄、神田本、細井本等にシカナクヤマゾと訓してあるのは何か據があつたのであらう。或は將を衍字とする傳承が存したのであるまいか。

【(一) 舊訓ヤマノへとあるが、宣長の攷證に従うて〔玉勝間〕ヤマヘノと四音に訓んで置く。

【參照】ヤマベの御井、ガテリ

【(一) 彌の字契沖は彌の誤としてサマネシ〔ササネシ〕と訓した。

【(二) 字について訓めば鹿ナカム山ゾであらねばならぬが、類聚抄、神田本、細井本等にシカナクヤマゾと訓してあるのは何か據があつたのであらう。或は將を衍字とする傳承が存したのであるまいか。

第二句に今モ見ルゴトとある所を見ると、現實のことをいひ「秋サレバ鹿ナク山ゾ高野原の上は」と詠まれたものと解せられるのみならず、カナカム山ゾといふ語も、あり得ぬことはないとしても、甚拙い言ひ廻しであるから、支持することが出来ぬ。遷都勿々のことで夫人を飛鳥の舊都に残して供奉せられた兩皇子が佐紀郷に會合せられ、折から其地の高野原(稱徳天皇の御陵となつた地)の上に鹿のなくのを聞いて此やうな迷懷せられたことは極めて有り得べきことのやうに思はれる。來む秋を豫想しての詠としては甚だ感興が乏しい。

【卷 第一】

相 聞

難波高津宮御宇天皇代 大鷦鷯天皇

(八五)

磐姫皇后思^(一) 天皇 御作歌四首

君之行 氣長成奴 山多都禰 迎加將行 待爾可將待

君が行けなぐなりぬ山たづね迎ひか行かむ待ちにか待たむ

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

(八六)

戀乍不有者 高山之 磐根四卷手 死奈麻死物乎

萬葉集(卷第一)(卷第二)

君之行 氣長久成奴 山多豆乃 迎乎將往 待爾者不待
此云山多豆者是今造木者也

右一首歌古事記與類聚歌林所說不同、歌主亦異焉、因檢日本紀曰、難波高津宮御宇、大鷦鷯天皇廿二年春正月、天皇語皇后納八田皇女將爲妃、時皇后不聽、爰天皇歌以乞於皇后云々、三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀伊國到熊野岬取其處之御綱葉而還、於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中、時皇后到難波濟、聞天皇合八田皇女大恨之云々、亦曰遠飛鳥宮御宇雄朝孀稚子宿禰天皇二十三年春正月甲午朔庚子、木梨輕皇子爲太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕太皇皇女亦艷妙也云々、遂竊通、乃悒懷少息、廿四年夏六月御羹計擬以作氷、天皇異之、卜其所由卜者曰、有内亂、蓋親親相姦乎云々、仍移太皇皇女於伊與者、今案二代二時、不見此歌也

近江大津宮御宇天皇代 天命開別(天智)天皇

(九一)

天皇賜鏡王女御歌一首

妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大島嶺爾 家母有猿尾

一云、妹之常、繼而毛見武爾 一云、家居麻之乎

しも

(一) 覆は從來オホフ(チチフ)と訓して居るが、之は逢日(チチ)にかけたのであるから、オホヒであらねばならぬ。滋賀の大坂を夙に逢坂と通はせたやうに、アフ、オホは共に此頃既にオウと發音せられたのであらう。古義に「安」の上に「不」を脱したものとてカヘルナイナミと訓したのは問題にならぬ。

(九四)

内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

玉匣 將見圓山乃 挾名葛 佐不寐者遂爾 有勝麻之自

或本歌曰、玉匣、三室戸山乃

玉くしげみむろの山の(三室戸山)さなかづらさ寝ずは遂に在りかつましじ

(一) 舊訓ミムトヤマとあるが、荷田信名の説の如く、將見圓がミムロ(ミム、マロ)の借字なることは一傳に三室戸山とあるによつても明白である。
(二) 刊本及諸本に自を目に誤つて居る。元歴校本及類聚集を正しとすべきである。
勝麻之自をカテマシジと訓したものがあつたが、マシジ(後世のマシ)は常に動格に接続するものであることを知らねばならぬ。——語法要録参照。

(九五)

内大臣藤原卿娶采女安見兒時作歌一首

萬葉集(卷第二)

妹が家もつぎて見ましを(妹があたりつぎても見むに)大和なる大島の嶺に家もあらしを(家ぬせましを)

(一) 温故堂本に鏡王女と點してある。次に鏡王女又曰額田姫王也とあるを見ると、事實はともかくも編纂者は其意を以て玉女の字を用ひたのであらう。眞淵の説の如く「玉女」は「女王」の誤と速断するこゝとは出来ぬ。但し次の鎌足との贈答の歌に鏡王女とあるは天武紀に鏡姫王とあると同人である。

(二) イヘチラマシナと訓したのもあるが(眞淵、雅澄)、姑く神田本、細井本の訓に従ふ。

參照 カガミの王、ヌカタの王

(九二)

鏡王女奉和御歌一首 鏡王女又曰額田姫王也

秋山之 樹下隱 逝水乃 吾許會益目 御念從者

秋山の木の下がくり行く水の吾こそ益さめ御おもひよりは

(一) 雅澄は下二句をアコソマサラメ・オモホサムユハと改訓したが、マサル(マシ、アル)の約をも古語ではマスといつたやうであり、末句はモヒ(眞水)にいひかけたものであるから、舊訓を可とする。

參照 モヒ

(九三)

内大臣藤原卿娶鏡王女時、鏡王女贈内大臣歌一首

玉匣 覆乎安美 開而行者 君名者雖有 吾名之惜毛

玉くしげおほひを安み明けて行かば君が名はあれど吾が名し惜

吾者毛也 安見兒得有 皆人乃 得難爾爲云 安見兒衣多利

吾はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり

(一) 舊訓の如くワレハモヤというてもよいが、古義に従つてアハモヤと訓する方がよいやうである。

參照 ヤスミコ

(九六)

久米禪師娉石川郎女時歌五首

水薦苜 信濃乃眞弓 吾引者 宇真人佐備而 不欲常將言可聞

みこもかる信濃の眞弓引かずしてをはくるわざを知るといはな

(一) ミクサカル(仙覺)、ミスズカル(眞淵)などいふ訓もあるが、古點によりミコモカルと訓むを可とする。

參照 ミコモカル(枕)、ウマヒト

(九七)

三薦苜 信濃乃眞弓 不引爲而 強作留行事乎 知跡言莫君二

みこもかる信濃の眞弓引かずしてをはくるわざを知るといはな

くに

(一) 強は代匠記に従つて弦の誤とし、眞淵説の如くチハクルワザをと訓すべきである。——次の歌にも都良弦取波氣とある——チは絃と男の意とにかけたのであらう。

(九八) 梓弓 引者随意 依目友 後心乎 知勝奴鴨 耶女
あづさ弓引かばまにまに寄らめども後の心を知りかてぬかも

(九九) 都良絃取波氣 引人者 後心乎 知人會引 禪師
あづさ弓つら緒とりはけ引く人は後の心を知る人ぞ引く

(一〇〇) 東人之 荷向筵乃 荷之緒爾毛 妹情爾 乘爾家留香聞 禪師
あづま人ののさきの篋の荷の緒にも妹が心に乗りにけるかも

參照 ノサキ

(一〇一) 大伴宿禰娉巨勢郎女二時歌一首

玉葛 實不成樹爾波 千磬破 神會著常云 不成樹別爾
玉かつら實ならぬ木にはちはやふる神ぞつくとふならぬ木毎に

參照 チハヤフル枕

(一〇二)

巨勢郎女報贈歌一首

玉葛 花耳開而 不成有者 誰戀爾有目 吾孤悲念乎
たま葛花のみ咲きてならずあるは誰が戀ならめ吾はこひ思ふを

ら、過去助動詞とすることの非なるは勿論、シといふ指定的助語を用ひる場合ではない。「之」の字がノの假字に用ひられたのは、上にも雲之とあるを始め例の多いことである。

參照 オカミ

藤原宮御宇天皇代 天皇諡曰持統天皇

(一〇五)

大津皇子竊下ニ於伊勢神宮ニ上來時、大伯皇女御作歌

吾勢枯乎 倭邊遣登 佐夜深而 雞鳴露爾 吾立所露之

吾背子を大和へやるとさ夜更けてあかとき露に吾が立ちぬれし

(一〇六)

二人行杼 去過難寸 秋山乎 如何君之 獨越武

ふたり行けど行き過がたき秋山を如何にか君が獨り越ゆらむ

(一〇七)

大津皇子贈石川郎女二御歌一首

足日木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二

あしびきの山の雫に妹まつと吾が立ち濡れし山のしづくに

(一〇八)

石川郎女奉和歌一首

吾乎待跡 君之沾計武 足日木能 山之四附二 成益物乎

吾を待つと君が濡れけむあしびきの山の雫にならましものを

詞であるから約することは出来ぬ。
(三) 舊訓を可とする。「誰が戀にかあらむ」といふ意の古語法で、タガコヒナラモと訓むのは誤である。

明日香清御原宮御宇天皇代 天淳名原瀛真人(天武)天皇

(一〇三)

天皇賜藤原夫人二御歌一首

吾里爾 大雪落有 大原乃 古爾之鄉爾 落卷者後

わが里に大雪降り大原の古にし里に降らまくはのち

(一〇四)

藤原夫人奉和歌一首

吾岡之 於可美爾言而 令落 雪之摧之 彼所爾塵家武

吾が岡の大神にいひて降らしめし雪の摧の其處に散りけむ

(一) 雅澄は言を乞の誤とした。或は然らん。さりながら「言而」とありては聞えぬことなり」としたのは過言である。令落とあるを見ても乞祈つたのではない。オカミに言ひつけたと解しても差支はないのである。オカミ(大神)は狼及蛇纏を呼稱するにも用られる語であるから、必しも最高敬意を表明する必要はないのである。

(二) 從來タダケシと訓し、畧解の如きはシは過去の表現であるとすら説いて居るが、此歌は天皇から「其方はまだ大雪は降るまい」と仰せられたのに對し、「此處の大神にいひつけて降らせた大雪で、其方のは恐らくは其の催(群)でございませう」と御答申上げたのであるか

(一〇九)

大津皇子竊婚石川郎女二時、津守連通占露其事二、

皇子御作歌一首

大船之 津守之占爾 將告登波 益爲爾知而 我二人宿之

大船の津守が占に告らむとはまさかに知りて我が二人寝し

(一) 舊訓マサシニとあるが、右の如き語法はない。古義には兼而乎の誤寫としてカネテチと訓してあるけれども、間違としては餘りに念が入り過ぎて居る。恐らくは爲は香の誤記でマサカニと讀むのであらう。マサカニは口語のマサニと同義である。

(一一〇)

日並皇子尊賜石川女郎二御歌一首 女郎字曰大名兒

大名兒 彼方野邊爾 荊草乃 束間毛 吾忘目八

大名兒を遠方野邊に荊る草の束の間も吾忘れめや

(一一一)

幸ニ于吉野宮二時、弓削皇子贈與額田王二歌一首

古爾 戀流鳥鳴 弓絃葉乃 三井能上從 鳴渡遊久

古に戀ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴きわたり行く

參照 ユツルハの御井

(一一二)

額田王奉和歌一首

古爾 戀良武鳥者 霍公鳥 蓋哉鳴之 吾戀流其騰

古に戀ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし吾が戀ふること

(一一三)

從吉野折取蘿生松柯遺時、額田王奉入歌一首

三吉野乃 玉松之枝者 波思吉香聞 君之御言乎 持而加欲波

久

みよし野の玉松が枝は好しきかも君が御言をもちて通はく

(一) コケムセルと訓してもよいが、ヒカゲ(羅)と普通の苔との間に語義に相違のあることを知らねばならぬ。——語誌参照。

(一一四)

但馬皇女在高市皇子宮時、思穂積皇子御歌一首

秋田之 穂向乃所緣 異所緣 君爾因奈名 事痛有登母

秋の田の穂向のよれるよりよりに君に寄りな言痛かりとも

(一) 舊訓カタヨリニとあるが、異所緣といふ文字から見ても、歌意からいうてもヨリヨリニであらねばならぬ。穂の穂は決して一方のみ片よりするものではない。既に高市皇子に身を寄せながら、穂積皇子にも寄りと思ふが故に、秋の田の穂穂のやうに風次第で思ひ思ひの方に寄りたいといふ意であらう。

(一一五)

勅穂積皇子遺近江志賀山寺時、但馬皇女御作歌

一首

遺居而 戀管不有者 追及武 道之阿回爾 標結吾勢

おくれ居て戀ひつつあらずば追ひ及かむ道のくまみにしめ結へ吾がせ

(一) 舊訓クマツとあるが五卷に道乃久麻尾と假字書した例にならひクマミを訓むを可とする(古義)。

(一二六)

但馬皇女在高市皇子宮時、竊接穂積皇子、事既

形而御作歌一首

人事乎 繁美許知痛美 己母世爾 未渡 朝川渡

人言をしげみこちたみ己が世に未だ渡らぬ朝川わたる

(一) 元曆校本其他には母の字がない。舊訓もオノガヨニとあるから衍字とすべきである。高市皇子の宮から他へ移られる時の詠とすれば意はよく通ずる。イモセニ(契沖)、イモセガハ(宣長)、イケルヨニ(雅澄)等の訓は解讀ではなく、寧ろ改作である。

(一二七)

舍人皇子御歌一首

大夫哉 片戀將爲跡 嘆友 鬼乃益卜雄 尙戀二家里

益ら男や片戀せむと嘆けどもしこの益ら男尙こひにけり

(一二八)

舍人皇子奉和歌一首

(一二九)

大船之 泊流登麻里能 絶多日二 物念瘦奴 人能兒故爾

大船のはつる泊のたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の子故に

參照 タユタヒ

(一三〇)

三方沙彌娶三國臣生羽之女未幾時臥病作歌

三首

多氣婆奴禮 多香根者長寸 妹之髮 比來不見爾 搔入津良武

香 三方沙彌

たけば濡れたかねば長き妹が髮此ごろ見ぬにかかげつらむか

(一) 舊訓ミタリとあり、契沖はカキレとしたが、宣長説の如く入は上の誤としてカカゲと訓むのがよいやうである。

(一三四)

人皆者 今波長跡 多計登雖言 君之見師髮 亂有等母 娘子

人皆は今長しとたけといへど君が見し髮亂れたりとも

(一三五)

橘之 蔭履路乃 八衢爾 物乎會念 妹爾不相而 三方沙彌

たちばなの蔭踏む路の八ちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて

(一二六)

石川女郎贈三伴宿禰田主歌一首

歎管 大夫之 戀禮許會 吾髮結乃 漬而奴禮計禮

歎きつゝ益ら男の子の戀ふれこそ吾がたく髪のひぢて濡れけれ

(一) 髮結は結髮の倒置であらう。舊訓ユフカミとあるが、髮結ふことを古はタクと稱へたもの、やうである。——次の三方沙彌の歌參照

契沖はモトエヒと改訓したが、モトエヒといふ語も物も此時代

參照 タキ

(一二九)

弓削皇子思紀皇女御歌四首

芳野河 逝瀨之早見 須臾毛 不通事無 有巨勢濃香毛

芳野川ゆく瀨の早水しばしくも絶ゆることなくありこせぬかも

(一) シマシクモ又はシバラクモと訓んでもよい。

(二) 契沖はヨドムコトナクかというたが、尙舊訓を可とする。

(一三〇)

吾妹兒爾 戀乍不有者 秋芽之 咲而散去流 花爾有猿尾

我妹子に戀ひ乍あらずば秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを

(一) ナラマシチと訓むのは後代の詞つかひである。

(一三一)

暮去者 鹽滿來奈武 住吉乃 淺香乃浦爾 玉藻刈手名

夕さらば潮みち來なむ墨の江のあさかの浦に玉藻かりてな

參照 ユフサリ

遊士跡 吾者開流乎 屋戸不借 吾乎還利 於曾能風流士
みやび男と吾は開けるを宿かさず吾をかへせりおその風流士

大伴田主字曰仲郎容姿佳艶、風流秀絶、見人聞者靡不
歎息也、時有石川郎女、自成雙栖之感、恒悲獨守之難、
意欲寄書未逢良信、爰作方便而似賤嫗、已提鍋
子、而到寢側、啜音跼足、叩戸諂曰、東隣貧女將取火來
矣、於是仲郎暗裏非識、冒隱之形、慮外不堪、拘接之計、
任念取火就跡歸去也、明後女郎既恥自媒之可愧、復
恨心契之弗果、因作斯歌、以贈諷戲焉

(一) 舊訓タハレナとあるが、宣長説の如くミヤビナと訓する方がよい
「玉小琴」。

(二) 拘は狎の誤字であらう。

參照 ミヤビナ、オン

(二一七)

大伴宿禰田主報贈歌一首

遊士爾 吾者有家里 屋戸不借 令還吾曾 風流士者有

みやび男に吾はありけり宿かさず歸せし吾ぞみやび男にはある
(一) 略解の訓に従ふ。古義は者を煮の誤としてミヤビナアルと訓し
たが、假に煮(又は爾)の字が書いてあつても、語法上、はハとい
ふ助語が必要である。

大津皇子宮侍石川郎女贈大伴宿禰歌一首

古之 姫爾爲而也 如此許 戀爾將沈 如手童兒

一云、戀乎太爾、忍金手武、多和郎波乃如

いにしへの姫にしてやかくばかり戀に沈まむたわらはの如(戀
をだに忍びかねてむたわらはのごと)

(一) 此句をトシヘニシ(信名)又はフリニシ(雅澄)と訓したのもある
が、此歌の意は「昔の女ならば決して小兒のやうに手を束れて戀に
沈んでは居まい」といふことであるから、イニシヘノと讀まればな
らぬ。

參照 タララハ

(二一八)

長皇子與皇弟御歌一首

丹生乃河 河瀬者不渡而 由久遊久登 戀痛吾弟 乞通來禰

丹生の河せは渡らずてゆくゆくと戀ひたむ吾が弟いで通ひ來ね
(一) 吾弟は舊訓ワガセとあるが、第二句にセといふ語を用ひて瀬と兄
とをいひかけて居るから、弟はオトであらねばならぬ。オトのオが
上の母韻に接せられてトとなるのは上代の發音法の通則であるのみ
ならず、オト(弟)の原語はト(オは接頭語)であるから、結合語とし
てはオが約せられるのが當然である。——アオトと訓した古義の説
は非

(二) 乞の字舊訓コチとあるが、契沖訓の如くイテを可とする。——
コチ(此方)へといふ意を畧してコチとすることは出來ぬ。

(二一八)

同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之 耳爾好似 葦若末乃 足痛吾勢 勤多扶倍思
吾が聞きし耳によく似つあしかびの足なへぐ吾が背ゆまひたぶ
べし

右依中郎足疾贈此歌問訊也

(一) 舊訓ヨクニバとあるが、雅澄説のやうにヨクニツと訓まればなら
ぬ。「我耳に聞きしに違はなかつた」といふことである。

(二) 十卷に小松之若末爾とあるを證としてアシのウレと改訓したもの
があるが、枝のない葦にありつてはウレ(梢)は即ちカビ(心芽)のこ
とである。

(三) 舊訓による。和名抄に蹇行不正也アシナへ、此云ニナヘク一とあつ
て、ナヘクは跛行の意である。恐らくは田主は片足が少し短かつた
のであらう。葦カビといふ語を以て修飾したのも葦の葉の互生に譬
へたものと思はれる。足痛といふ文字についてアナヤムと改訓した
のは誤でないとしても尙、舊訓を不可とすべき理由はない。否アナ
ヘクの方が此場合アナヤムよりも一層適切なやうである。

(四) 舊訓ツトメタアベシとあるが、この動は謹の意で(温故堂本には
勤の左旁にツ、シムと點してある)、ユメ(思)といふ語を以て表現せ
られねばならぬ。ユメはユミの命令法で、ユミはユマヒとも活用せ
られること勿論である。

參照 カビ、ユメ

(二一九)

ニフの川、ユクコク

(二二〇)

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌一首并短歌

石見乃海 角乃浦回乎 浦無等 人社見良目 滴無等 一云磯
無等

人社見良目 能咲八師 浦者無友 縱畫屋師 滴者一云無
無等

鯨魚取 海邊乎指而 和多豆乃 荒磯乃上爾 香青生 玉藻息

津藻 朝羽振 風社依米 夕羽振 浪社來縁 浪之共 彼縁此

縁 玉藻成 依宿之妹乎 一云、波之伎余 露霜乃 置而之來者
思、妹之手本乎

此道乃 八十隈每 萬段 願爲騰 彌遠爾 里者放奴 益高爾

山毛越來奴 夏草之 念之奈要而 志怒布良武 妹之門將見

靡此山

石見の海 つぬの浦回を 浦なしと 人こそ見らめ 瀉無しと
(磯なしと) 人こそ見らめ よしをやし 浦はなくとも よし

をやし 瀉は(磯は)なくとも いさなとり 海邊をさして わ

たつの 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝はふる 風こ

そ依らめ 夕はふる 浪こそ來寄れ 浪のむた 彼より此より

玉藻なす 寄寝し妹を (はしきよし妹が袂を) 露しもの お

きてし來れば 此道の 八十隈毎に 萬たび 顧みすれど 彌

遠に 里は距りぬ 益高に 山も越え來ぬ 夏草の 思ひ萎え

彌

て 偲ぶらむ 妹が門見む なびけ此山

(一) 舊訓ニギタツとあるが、前續句とのつづき合ひからいうてもワタツ(渡津)であらねばならぬ。

(二) 生は在の誤字とする眞淵説を可とする。

(三) をヨセメ又はキヨセ、(四) をキヨセと改訓したものがあるが、風波共にヨルといへぬことはなく、次句カヨリカクヨリの序であるから、ヨスよりもヨルを可とする。

【參照】 カタ、ヨシエヤシ、イサナトリ「枕」、朝ハフル、夕ハフル、ツエジモノ

(一三三)

反歌

石見乃也 高角山之 木際從 我振袖乎 妹見都良武香

石見のや高つぬ山の木の間に我がふる袖を妹見つらむか

(一三三)

小竹之葉者 三山毛清爾 亂友 吾者妹思 別來禮婆

笹の葉はみ山もさやに亂れども吾は妹思ふ別來ぬれば

(一三四)

或本反歌

石見爾有 高角山乃 木間從文 吾袂振乎 妹見監鴨

石見なる高角山の木の間に吾が袖ふるを妹見けむかも

(一三五)

角部經 石見之海乃 言佐飲久 幸乃埒有 伊久里爾會 深海

訓むのであらう。

(四) 眞淵はナシケドモと改訓したが、こゝは雲間を渡る月を惜しむが如く惜しむけれどもといふ意で、惜シイケレドモではないから、舊訓の如くナシメドモであらねばならぬ。

【參照】 ツヌサハフ「枕」、コトサヘケ「枕」、イクリ、ミル、キモムカフ、マガロ、シキタヘ

(一三六)

反歌二首

青駒之 足搔乎速 雲居會 妹之當乎 過而來計類

青駒の足がきを早み雲にぞ妹があたりを過ぎて來にける(あたりは隠れ來にける)

(一三七)

秋山爾 落黄葉 須臾者 勿散亂會 妹之當將見

秋山に落つるもみぢ葉しましくはなちり亂れそ(散りな亂れそ) 妹があたり見む

(一三八)

【一三六】 或本歌一首并短歌

石見之海 津乃浦乎無美 浦無跡 人社見良目 滴無跡 人社

見良目 吉咲八師 浦者雖無 縱惠夜思 滴者雖無 勇魚取

海邊乎指而 柔田津乃 荒磯之上爾 蚊青生 玉藻息都藻 明

萬葉集(卷第二)

萬葉集(卷第二)

萬葉集(卷第二)

松生流 荒磯爾會 玉藻者生流 玉藻成 靡寐之兒乎 深海松

乃 深目手思騰 佐宿夜者 幾毛不有 延都多乃 別之來者

肝向 心乎痛 念乍 願爲騰 大舟之 渡乃山之 黄葉乃 散

之亂爾 妹袖 清爾毛不見 孀隱有 屋上之一云室 山乃 自雲

間 渡相月乃 雖惜 隱比來者 天傳 入日刺奴禮 大夫跡念

有吾毛 敷妙乃 衣袖者 通而沾奴

角障はふ 石見の海の 言さへぐ 韓の埒なる いくりにぞ

深海松生ふる 荒磯にぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす なびき寢

し子を 深みるの 深めて思へど さ寢し夜は いくだもあら

ず 延ふ蕙の 別れし來れば 肝向ふ 心を痛み 念ひつつ

願みすれど 大舟の 渡の山の もみぢ葉の 散のまがひに

妹が袖 さやにも見えす 妻こもる 屋上の山(むろ上山)の

雲間より 渡らふ月の 惜めども 隠ろひ來れば 天傳ふ 入

日さしぬれ 益ら男と 思へる吾も 敷たへの 衣の袖は 透

りて濡れぬ

(一) 舊訓フカメテオフトとあるが、フカメテモヘドを可とする。

(二) 舊訓サマルヨとあるが、上に靡キ寢シ子とあると時格が一致せぬから、雅澄の訓を可とする。

(三) 雅澄はチリのミダリニと訓めというたが、チリのマガヒは第五卷、一五卷にも用ひられた慣用句であるから、尙之に従ふべきである。

但し反歌の勿散亂(又は知里勿亂)は字についてチリナミカリと

來者 浪已會來依 夕去者 風已會來依 浪之共 彼依依

玉藻成 靡吾宿之 敷妙之 妹之手本乎 露霜乃 置而之來者

此道之 八十隈毎 萬段 願雖爲 彌遠爾 里放來奴 益高爾

山毛越來奴 早敷屋師 吾孀乃兒我 夏草乃 思志萎而 將嘆

角里將見 靡此山

石見の海 津の浦をなみ 浦なしと 人こそ見らめ 鴻なしと

人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 鴻は

なくとも いさなとり 海邊をさして 柔田津の 荒磯の上に

か青なる 玉藻沖つ藻 あけ來れば 浪こそ來よれ 夕ざれば

風こそ來よれ 浪のむた 彼寄り此寄り 玉藻なす 靡き吾が

寢し 敷たへの 妹が袂を 露しもの おきてし來れば この

道の 八十隈毎に 萬たび 願みすれど 彌遠に 里離り來ぬ

益高に 山も越え來ぬ はしきやし 吾が妻の子が 夏くさの

思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡け此山

(一) 和多豆をニギタツと讀んで柔とかきあらためたもので、ニギタツ

といふ地名はないのみならず、「海邊をさして」といふ句につまかぬ

こと上述の通りである。

(一三九)

反歌

石見之海 打歌山乃 木際從 吾振袖乎 妹將見香

石見の海うつたの山の木の間より吾が振る袖を妹見るらむか

右歌體雖同、句々相替因此重載

(一) ウツタといふ地名は今の石見國には見あたらず。タカツマと讀まうとして色々穿鑿するものもあるが、異傳なるが故に重載したのであるから、無用の業とせればならぬ。

(一四〇)

柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌一首

勿念跡 君者雖言 相時 何時跡知而加 吾不戀有乎

な思ひと君はいへども逢はむ時いつと知りてか吾が戀ひざらむ

(一) 乎の字金澤本に牟とあるを可とする。

挽 歌

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇

(一四一)

有間皇子自傷結松枝歌二首

磬白乃 濱松之枝乎 引結 眞幸有者 亦還見武

磬城の濱松が枝を引き結びま幸くあらば又かへり見む

(一四二)

家有者 筍爾盛飯乎 草枕 旅爾之有者 椎之葉爾盛

家に在れば筍に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

うに有通ふとはいへぬ。此は「皇子の御靈が鳥の如く天翔り來往して曾て結んだ松を見られようとは人は知らぬが、松は知つて居るだらう」といふ意であるから、義によつて天ガケリと訓むがよい。

參照 ナス

(一四六)

大寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌一首

後將見跡 君之結有 磬代乃 子松之字禮乎 又將見香聞

後見むと君が結べる磬しろの小松のうれを又も見むかも

(一) 金澤本には柿本朝臣人麿呂歌集中出といふ註記がある。

(二) 刊本に若とあるのは誤寫であらう。元曆校本に據る。

(三) 舊訓ミケムカモとあるが、將見をミケムとは訓めぬから、字の通りミムカモと訓み、供奉の官人が此悲しい物語のある松を又見るだらうと詠じたものと解釋すべきであらう。

近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇

(一四七)

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首

天原 振放見者 大王乃 御壽者 長久天足有

天の原ふりさけ見れば大君の大御壽は長く天足れり

(一) 下二句ミヨハトコシクアマタラシムル(眞淵)、ミイノチハナガクアマタラシマリ(宣長)などといふ訓もあるが、代匠記の訓を可とする。天皇に對する敬語は大御を用ひるを例とする。

(一四三)

長忌寸意吉麿見結松哀咽歌二首

磬代乃 岸之松枝 將結 人者反而 復將見鴨

磬しろの岸の松が枝結びけむ人はかへりてまたも見めかも

(一) 將結はムスビケムとはよめぬから、訓に誤なすとすれば誤字とせればならぬ。

(二) 舊訓の如くミケムカモとしては意が通ぜぬ。「まさきくあらば又かへり見む」と詠まれた皇子の再び還り給はぬ事を悲しんだのであるから、見メヤモといふ意の反語であらねばならぬ。字の通りミメカモと訓むのであらう。

(一四四)

磬代乃 野中爾立有 結松 情毛不解 古所念 未詳

磬しろの野中に立てる結び松心もとけず古おもほゆ

(一四五)

山上臣憶良追和歌一首

鳥翔成 有我欲比管 見良目杼母 人社不知 松者知良武

天がけり有がよひつつ見らめども人こそ知らぬ松は知るらむ

右件歌等雖不挽柩之時所作、唯擬歌意、故以載于挽

歌類焉

(一) 舊訓トリハナス、古義ツバサナスとあるが、ナスの原義は「の如く」、鳥のやうに」とはいひ得るが、トリハのやうに又はツバサのや

(一四八)

一書曰、近江天皇聖體不豫御病急時、太后奉獻御歌

一首

青旗乃 木旗能上乎 加欲布跡羽 目爾者雖視 直爾不相香裳

あを旗の木旗の上を通ふとは目には見ゆれど直に逢はぬかも

(一) 眞淵が之を天皇殯宮の歌と憶斷し、木旗を小旗と改記してナハタと訓したのみならず、青旗は白旗をいふと註したのは甚しい誤解である。これは庭前の樹梢が徐に動くのを見えなはして、大御靈が今

高天原に神上りますと感ぜられたことを詠まれたので、ハタはハタススキともいふやうに青葉の茂りあうて居ることをいひ、同時に大御葬 具の青旗を聯想せしめるものである。されば上の字もウレと訓むことを可とする。

(一四九)

天皇崩御之時倭太后御作歌一首

人者縱 念息登母 玉籙 影爾所見乍 不所忘鴨

人はよし思ひやむとも玉かつら影に見えつつ忘らえぬかも

(一) 倭太后は皇后倭姫王のことであるが、倭と書するのは例のないことであるから、契沖は衍字か、然らずば下に姫を脱したのであらうというた(代匠記)。

參照 タマカツラ

(一五〇)

天皇崩時婦人作歌一首 姓氏未詳

空蟬師 神爾不勝者 離居而 朝嘆君 故居而 吾戀君 玉有者 手爾卷持而 衣有者 脫時毛無 吾戀 君曾伎賊乃夜 夢所見鶴

うつせ身し 神にたへねば さかり居て 朝なげく君 離れ居て 吾が戀ふる君 玉ならば 手にまきもちて 衣ならば 脱く時もなく 吾が戀ふる 君ぞ昨の夜 夢に見えつる

(一) 此女性は入内しなかつたが、天皇が通はせ給うた相當身分のある人と思はれる。されば之をタチャメ又はチミナメと讀むは不當である。案ずるに婦人は夫人に通じ、オトシと訓するのであらう。

(二) 舊訓はいづれもハナレキテとあるが、契沖、雅澄説の如く、一方をサカリキテと訓むことを可とする。ハナレも古語はハナリであるから、ハナリキテと訓むのかも知れぬ。

參照 ウツセミ、キノ

(一五二)

天皇大殯之時歌二首

如是有乃 豫知勢婆 大御船 泊之登萬里人 標結麻思乎 かからむと豫て知りせば大御船はてし泊にしめ結はましを

(一) 乃は刀の誤寫(代匠記)。

參照 オホミフネ

(一五三)

八隅知之 吾朝大王乃 大御船 待可將戀 四賀乃幸崎

神樂浪乃 大山守者 爲誰可 山爾標結 君毛不有國 さま波の大山守は誰が爲か山にしめ結ふ君もあらなくに

(一五五)

從山科御陵退散之時、額田王作歌一首

八隅知之 和期大王之 恐也 御陵奉仕流 山科乃 鏡山爾 夜者毛 夜之盡 晝者母 日之盡 哭耳呼 泣乍在而哉 百礮 城乃 大宮人者 去別南

やすみしし わご大君の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜の盡 晝はも 日のことごと 音のみを 泣きつつありてや 百しきの 大宮人は ゆき別れなむ

明日香清御原御宇天皇代 天淳中原瀛真人天皇

(一五六)

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首

三諸之 神之神須疑 已具耳矣自 得見監乍共 不寐夜叙多 三諸の神の神杉いめにだに見えけむものを寝ぬ夜しぞ多き

(一) 已具耳矣自得見監乍共の十字については色々の説があるが、首肯すべきものがない。假にイメニダニミエケムモノナと訓した理由は次の通りである。

(イ) 第三句には神杉の縁語があるべき筈であるから、已具を已目の誤としてイメ(忌)と讀み、夢にいひかけたものとする。

やすみししわご大君のおほみ柁まちてかこひむ滋賀のからさき (一) マチカコヒナム(舊訓)、又はマチカコフナム(古義)として幸崎が天皇の玉舟を戀ひ侘びるであらうといふ意と説くものもあるが、其意味ならば御代に榮えます天皇の御事とも解せられるから、挽歌にはならぬ。此は幸崎が靈柩を待ち奉つて後は其地を戀ひむといふ意で、主格は作者自身、コヒムは意纏法である。

(一五三)

大后御歌一首

鯨魚取 淡海乃海乎 奥放而 撈來船 邊附而 撈來船 奥津 加伊 痛勿波彌會 邊津加伊 痛莫波彌會 若草乃 婦之 念 鳥立

いさな取 あふみの海を 沖さけて 漕ぎ來る船 邊つきて 漕ぎ來る船 おきつ權 いたくなはねそ へつ權 いたくなはねそ 若草の 妻の おもひ鳥たつ

(一) 舊訓オモフトリとあるは誤で、オモヒ鳥であればならぬ。其は「思」に「居喪」をいひかけたものであるからである。宣長が婦之の次に命之の二字脱としたのは八千矛の神の歌に「若草の妻の命」とあるによるものであらうが、近江朝の頃には自分をミコトと名乗ることはなかつたやうである。

參照 イサナトリ「枕」、オキツカヒ、ヘツカヒ、オモヒ鳥

(一五四)

石川夫人歌一首

(ロ) 耳は耳に通ずるからニの假字に用ひられたのであらう。

(ハ) 矣自の二字が「谷」一字の寫し誤りであるとする推定は無理であるが、恐らくは矣は六字目の共が錯置せられたので、共自は谷の字を寫し誤り、之を二つに分けたものと思はれる。

(ニ) 得見監は當然ミエケムと訓むべきである。

(ホ) 乍共をモノナと訓するは無理であるが、共は六字前の矣と錯置せられたことも有り得るし、乍は物の扁牛に似て居る。前の語のつゞき合から推して、はモノナであらねばならぬ。

(一五七)

神山之 山邊眞蘇木綿 短木綿 如此耳故爾 長等思伎

かみ山の山邊まそゆふ短木綿かくのみからに長くとおもひき

(一) 舊訓ミヤマとあるが、三輪に限つたことでないから、カミヤマとした契沖訓に従ふ。

(二) カクノミユエニ(舊訓)と讀んでもよいが、カクノミカラ(千蔭)の方がよい。

參照 マソユフ

(一五八)

山振之 立儀足 山清水 酌爾雖行 道之白鳴

山振の立ちよそひたる山清水酌みにゆかめど道の知らなく

(一) 儀の字を靡又は茂の誤字とする説もあるが、マチシナヒ、マチシゲミ共に面白からぬ語づかひであるから、姑く契沖訓による。

(一五九)

天皇崩之時太后御作歌一首

八隅知之 我大王之 暮去者 召賜良之 明來者 問賜良志
神岳乃 山之黃葉乎 今日毛鴨 問給麻思 明日毛鴨 召賜萬
旨 其山乎 振放見乍 暮去者 綾哀 明來者 裏佐備晚 荒
妙乃 衣之袖者 乾時文無
やすみしし 我大君の 夕ざれば めし賜ふらし 明けくれば
問ひたまふらし 神岳の 山の黄葉を 今日もかも 問ひ給は
まし 明日もかも めし賜はまし 其山を ふりさけ見つ
夕ざれば あやに悲しみ 明け来れば うらさび暮し 鹿たへ
の 衣の袖は ひるときもなし

(一六〇)

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首

燃火物 取而褻而 福路庭 入澄不言八面 智男雲
ともし物とりて褻みて袋には入ると言ずやもしるしなくも

(一) 太上天皇は持統天皇の御事で、後日の御稱號を遡つて用ひたのである。

(二) 燃火はトモシの借字、トモシモノは貴重品の意である。「トモシ火の」と訓したのは大なる誤解といはればならぬ。火を袋につ、むことは手品の外は不可能である。

(三) 智は知(契沖)又は知日(真淵)又は知日(守部)の誤とするものがあるが、恐らくは知四の二字を寫し誤つたので、シルシと訓むのであらう。

う。男雲がナクモの假字であることは勿論である。

此御歌の意は大切のものは袋に入れてしまつて置くものであるが、大御靈にはシルシがないと嘆かれたので、首句の誤讀の結果、從來何人もよみ得なかつたのである。

參照 トモシ、トモシ火、フクロ

(一六一)

向南山 陣雲之 青雲之 星離去 月牟離而
北山にたなびく雲の青雲の星さかり行く月もさかりて

(一) 金澤本には陳とあり、類聚古集にはツラナルと訓してある。雲のツラナルとは古語ではたなびくというたから、陳が正字であるとしても尙、タナビクと訓むのであらう。

(二) 星は日毛の二字の誤寫でヒモサカリユクであらうといふ説がある(「新考」)。上三句は星の落ちる形容(又は譬喩)としては不適當であるから、月日の經過と解する方が適切であるが、挽歌としては物足らぬ氣がする。或は上二句は序で、青雲の星は暗夜の辰宿を意味し、實景を詠まれたものではあるまいか。尙一考を要する。

(一六二)

天皇崩之後、八年九月九日奉_レ爲_二御齊會_一之夜、夢裏
習賜御歌一首

明日香能 清御原乃宮爾 天下 所知食之 八隅知之 吾大王
高照 日之皇子 何方爾 所念食可 神風乃 伊勢能國者 與
津藻毛 靡足波爾 鹽氣能味 香乎禮流國爾 味疑 文爾之寸

(一六四)

欲見 吾爲君毛 不有爾 奈何可來計武 馬疲爾

見まく欲り吾がする君も在らなくに何しか來けむ馬つからしに

(一) 馬ツカルルニと訓したものがあがる(宣長)、尙舊訓を可とする。古語ではツカルルモノ(チ)といふ意をツカルルニとはいはなかつたもの、やうである。

(一六五)

移_二葬大津皇子屍於_二葛城_一二上山_一之時、大來皇女哀
傷御作歌二首

宇都會見乃 人爾有吾哉 從明日者 二上山乎 弟世登吾將見
うつそみの人なる吾や明日よりは二上山をおとせと吾が見む

(一) 舊訓イモセとあるが、假に弟の字が誤であるとしてもイモセといふべき理由がない。弟を奈又は吾の誤りとする説もあるが、セは一般的に男子の敬稱であるから(アセ、アソともいふ)、オトセといふ語もあり得た筈である。

(一六六)

磯之於爾 生流馬醉木乎 手折目杼 令視倍吉君之 在常不言爾
磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君が在りといはな
くに

右一首今案不_レ似_二移葬之歌_一、蓋疑從_二伊勢神宮_一還_レ京之時、路上見_レ花盛傷哀咽作_二此歌_一乎

高照 日之御子

明日香の 淨御原の宮に 天の下 知ろしめしし やすみしし

吾大君 高照る 日の御子 いかさまに 念ほしめせか 神風

の 伊勢の國は 沖つ藻も 靡き足らはし 潮氣の水 香れる

國に うましこり あやにともしき 高照る 日の御子

(一) ナビキシナミニ(舊訓)、ナビカフナミニ(古義)、ナミタルナミニ

「新訓」としたのは爾をニの假字とした爲であらうが、意をなさぬ。

爾をシの假字に用ひた例は(三)にもあるのである。

(二) アチコリ(舊訓)、ウマコリ(考)などいふ訓があるが、此はアヤ(綾)

の枕詞ウマシコリ(味絹織)にウマ(味)シキ(敷)チリ(居)をいひかけ

られたのである。

參照 ウマシコリ(枕)

(一六三)

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姬天皇
大津皇子薨之後、大來皇女從_二伊勢齊宮_一上_レ京之時
御作歌二首

神風之 伊勢能國爾母 有益乎 奈何可來計武 君毛不有爾
神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君も在らなくに

(一) イカニカと訓しても妨はない。ナニとイカニとは別語であるが、殆ど同義である。語法要録參照。

(一) 盛は金澤本に感とある方がよいやうである。
参照 アシビ

(二六七) 日並皇子尊殯宮之時、柿本人麿作歌一首并短歌

天地之 初時之^(一) 久堅之 天河原爾 八百萬 千萬神之 神集
集座而 神分 分之時爾 天照 日女之命^{一云指上} 天乎波
所知食登 葦原乃 水穗之國乎 天地之 依相之極 所知行
神之命等 天雲之 八重搔別而^{一云天雲之} 神下 座奉之 高
照 日之皇子波 飛鳥之 淨之宮爾 神隨 太布座而 天皇之
敷座國等 天原 石戸乎開 神上 上座奴^{一云神登座} 吾王
皇子之命乃 天下 所知食世者 春花之 貴在等 望月乃 滿
波之計武跡 天下^{一云} 四方之人乃 大船之 思憑而 天水
仰而待爾 何方爾 御念食可 由緣母無^{一云} 眞弓乃崗爾 宮柱太
布座 御在香乎 高知座而 明言爾 御言不御問 日月之 數
多成塗 其故 皇子之宮人 行方不知毛^{一云、刺竹之、皇子宮}
天地の 初の時の 久かたの 天の河原に 八百萬 千萬神の
神つどひ 集ひ坐して 神分ち 分ちし時に 天照 日女の命
(さ)あがる日女の命) 天をば 知らしめせと 葦原の 瑞穂
の國を 天地の 依あひの極み 知らしめす 神の命と 天雲
の八重かき別けて (天雲の八重雲わけて) 神下し いませ

奉りし 高照る 日の御子は 飛鳥の 淨の宮に 神ながら
太しきまして 天皇の しき坐す國と 天の原 石戸を開き
神上り 上り坐しぬ (神登り坐しにしかば) 吾が大君 皇子
の命の 天の下 知らしめせば 春花の 貴からむと 望月の
滿らはしけむと 天の下(をす國) 四方の人の 大船の 思ひ
たのみて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 念ほしめせか
よしもなき 眞弓の岡に 宮柱 太しき坐し 御在所を 高知
りまして 朝ごとに 御言問はさす 日月の まねくなりぬれ
そこ故に 皇子の宮人 行方知らずも (刺竹の皇子の宮人行
方しらにして)

(一) 舊訓ハシメのトキシとあるが、ハは「初の時の……分ちし時に」
といふ二句を結びつけたので、「風まじり雨ふる夜の雨まじり雪ふる
夜は」萬世、「天地にくやしき」ことの世の中にくやしきことは「萬
三」の如く、必ずのとあるべきである。
(二) 宣長説に従うてツレモナキと讀んでもよいが、尙由縁といふ字を
尊重してヨシモナキ(契沖)の訓をとる。次の「二六七」にも所由無佐太
乃岡邊とある。
(三) 不知爾爲の爾は蛇足であるが、シラズシテと訓まぬやうに附加へ
た一種の送假字で、本集には他にも例のあることである。
参照 タカシリ、フトシク、シキマス、サスタケ
(二六八)

反歌二首

久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門之 荒卷惜毛
久かたの天見る如く仰見し皇子の御門の荒まく惜しも

(二六九)

茜刺 日者雖照有 烏玉之 夜渡月之 隱良久惜毛
皇子尊殯宮之 或本云、以
時反歌也 件歌爲後

(二七〇)

或本歌一首

島宮 勾乃池之 放鳥 人目爾戀而 池爾不潜^(一)

島の宮まがりの池のはなち鳥人目にこひて池にかつがぬ

(一) 舊訓カツガスとあるが、新考の説の如くカツガヌとあらばなら
ぬ。語法要録参照。

(二七一)

皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首

高光 我日皇子乃 萬代爾 國所知麻之 島宮婆母

高ひかる我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

(二七二)

島宮 上池有 放鳥 荒備勿行 君不座十方

島の宮上の池なるはなち鳥あらびな行きを君坐さずとも

(一) 神田本には池上とあるが、諸本皆上池としてあるから、ウへのイ
ケと訓すべきである。上の歌の勾の池と同所であるかも知れぬが、
上を勾の誤、有を之の誤と断定するのは早計である。

(二七三)

高光 吾日皇子乃 伊座世者 島御門者 不荒者蓋乎^(一)

高光る吾が日の御子のいましせば島の御門は荒れざらましを

(一) 金澤本に益とあるを可とする。

(二七四)

外爾見之 檀乃岡毛 君座者 常都御門跡 侍宿爲鴨

よそに見し檀の岡も君ませばとこつ御門ととのぬするかも

(二七五)

夢爾谷 不見在之物乎 鬱悒 宮出毛爲鹿 作日之隈回乎

夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするかさひの隈みを

参照 オホホシク、ミヤデ、サヒのクマ

(二七六)

天地與 共將終登 念乍 奉仕之 情違奴

あめつちと共に終へむと思ひつつ仕へ奉りし心たがひぬ

(二七七)

朝日且流 佐太乃岡邊爾 羣居乍 吾等哭淚 息時毛無

朝日照る佐太の岡邊に群れ居つつ吾が泣く涙やむ時もなし

(一七八) 御立爲之 鳥乎見時 庭多泉 流涙 止曾金鶴
御立たしし鳥を見る時にはたつみ流るる涙とめぞかねつる
(一) ミタチセシと訓するのは古言でない。

參照 ニハタツミ

(一七九) 橋之 鳥宮爾者 不飽鴨 佐田乃岡邊爾 侍宿爲爾往
橋の島の宮には飽かねかも佐田の岡邊にとのゐしに行く
(一) 舊訓アカヅカモとあるが、守部に從うてアカネカモと讀むべきである。飽カネバカといふ意である。

(一八〇) 御立爲之 鳥乎母家跡 住鳥毛 荒備勿行 年替左右
御立たしし鳥をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで
(一八一) 御立爲之 鳥之荒儀乎 今見者 不生有之草 生爾來鴨
御立たしし鳥の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

(一八二) 鳥挿立 飼之雁乃兒 栖立去者 檀崗爾 飛反來年
鳥挿ら立て飼ひし雁の兒巢立ちなば眞弓の岡に飛びかへり來ね
(一) 代匠記に挿は栖の誤、一本に挿に作るある。

參照 ツレモナク

(一八八) 且覆 日之入去者 御立之 鳥爾下座而 嘆鶴鴨
且覆ふ日の入りぬれば御立たしし鳥におりて嘆きつるかも
意をなさぬ。雅澄が茜刺の誤寫としたのは根據のないことである。
アシタ覆ふと訓めば意がよく通ずる。即ち皇子を世を覆ふ日に譬へたのである。

(一八九) 且日照 鳥乃御門爾 鬱悒 人音毛不爲者 眞浦悲毛
朝日照る鳥の御門におほほしく人音もせねばまうら悲しも
(一九〇) 眞木柱 太心者 有之香杼 此吾心 鎮目金津毛
眞木はしら太き心はありしかど此の吾が心しづめかねつも

(一九一) 毛許呂裳遠 春冬片設而 幸之 宇陀乃大野者 所念武鴨
毛衣をはる冬まけていでましし宇陀の大野はおもほえむかも
(一) 春は借字「毛衣を張る」は冬の序である。片設は舊訓マケテとあるに従ふべきである。片設といふ字を用ひたのは此マケか片設の意のマケなるが故で(マケには他にも色々意味がある)、カタマケと讀ん

(一八三) 吾御門 千代常登婆爾 將榮等 念而有之 吾志悲毛
吾が御門千代とことには榮えむと思ひてありし吾し悲しも
參照 トコトハ

參照 トコトハ

(一八四) 東乃 多藝能御門爾 雖伺侍 昨日毛今日毛 召言毛無
ひむかしの瀧の御門に侍らへど昨日も今日も召すこともなし
(一八五) 水傳 磯乃浦回乃 石乍自 木丘開道乎 又將見鴨
水つたふ磯の浦みの岩つつじもくさく道を又も見むかも

參照 モク
(一八六) 一日者 千遍參入之 東乃 大寸御門乎 入不勝鴨
一日には千度まゐりし東の瀧の御門を入りかてぬかも
(一) 眞淵はオホキミカトと改訓したけれども、前出(一八四)の例もあるから、舊訓の如くタキのミカドと訓むべきである。

(一八七) 所由無 佐太乃岡邊爾 反居者 鳥御橋爾 誰加住舞無
よしも無き佐太の岡邊にかへり居ば鳥の御陸に誰か住はむ
(一) 舊訓ツレモナキとあるが、由一字をツレと訓む答もなく、語義か

では聞きにくい字餘りになる。

(一九二) 朝日照 佐太乃岡邊爾 鳴鳥之 夜鳴變布 此年己呂乎
あさ日照る佐太の岡邊に鳴く鳥の夜鳴かはらふ此年ごろを
(一) 舊訓はカハラフとあるが、眞淵説の如くカハラフと訓むべきである。即ち皇子を葬つた此年ごろ(チは感動詞)は佐太の岡に夜鳴く鳥の聲が悲しげに變つたといふことであらう。

(一九三) 八多籠良家 夜晝登不云 行路乎 吾者皆悉 宮道敘爲
八田子らが夜晝といはず行く道を吾はさながら宮道とぞする
右日本紀曰、三年己丑夏四月癸未朔乙未薨

(一九四) 柿本朝臣人麿獻 泊瀬部皇女、忍坂部皇子 歌一首并 短歌
飛鳥 明日香乃河之 上瀬爾 生玉藻者 下瀬爾 流觸經 玉

藻成 彼依此依 靡相之 婦乃命乃 多田名附 柔膚尙乎 劍
刀 於身副不寐者 烏玉乃 夜床母荒良無 一云何 禮奈牟 所虛故 名
具鮫魚天 氣留敷藻 (三) 相屋常念而 一云公毛 相哉登 玉垂乃 越乃大野
之 且露爾 玉藻者涅打 夕霧爾 衣者沾而 草枕 旅宿鳴爲
留 不相君故

飛鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に
流れ觸らはふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡かひし つまの
命の たたなづく 柔肌すらを 劍大刀 身に副へ寐ねばぬ
ばたまの 夜床も荒るらむ(かれなむ) そこ故に 慰めかねて
けだしくも 逢ふやと念ひて(君も逢ふやと) 玉垂の 越の大
野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅
寐かもする 逢はぬ君故

(一) 此題詞は意義明白なかくので、反歌の左註に或る本を引いて説明
を加へてあるが、誤傳であつても誤記ではないのであるから、猥に
筆を加へる事は慎まねばならぬ。歌意も亦夫を失うた女の嘆と解す
る事は困難である。上九句は男性に對する序としては甚適しからぬ
もので、終の九句も女性、ことに貴女の行動とは思はれぬから、
玉裳とあるが故に婦人の事と思ふものがあるかも知れぬが、モは下
衣の總稱で、男子の用ひるマヘモ(襪)、ハカマ(袴)もモの一種である
—妃を失はれた忍坂部(忍壁)皇子に獻つた歌とすべきである。忍
壁皇子の妃は明日香皇女であるから、此歌も次の挽歌と同じく明日

香川を起句としたので、殯宮は城戸に設けられたにしても陵墓は越
智に定められたのであらう。泊瀬部皇女は忍壁皇子と御同腹である
から、併せ獻じたと見ても差支はない。歌意を究はめずして猥に題
詞を改めんとするは指彈すべきことである。

(三) 雄略記の三重の采女の歌に准じてフラハフと訓むべきである。

(三) 舊訓ナケサメテケルシキモとあるが、久老説の如く魚は兼、留は
田の誤としてナケサメカネテケダシクモと訓むを可とする。

參照 フラハハ、タタナヅク、ケダシ、モ

(一九五)

反歌一首

敷妙乃 袖易之君 玉垂之 越野過去 亦毛將相八母 一云乎知 野爾過奴
しきたへの袖かへし君玉だれの越野過ぎ行く(越野に過ぎぬ)又
も逢はぬやも

右或本曰、葬河島皇子越智野之時、獻泊瀬部皇女二歌
也、日本紀曰、朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑、淨大參皇
子川島藻

(一) 此左註に疑があることは上に述べた通りである。

(一九六)

明日香皇女木庭殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首并
短歌

飛鳥 明日香乃河之 上瀬 石橋渡 一云 石浪 下瀬 打橋渡 一云 石橋

携さはり 鏡なす 見れども飽かに 望月の いやめづらしみ
念へりし 君と時々 幸まして 遊び給ひし 御饌むかふ 城
の戸の宮を 常宮と 定め賜ひて あぢさはふ めことも絶え
ぬ しかれかも(そこをしも) あやにかなしみ ぬえ鳥の 片
戀つま(しつ) 朝鳥(朝露)の 通はす君が 夏草の思 ひ萎
えて タづつの 彼往きかく行き 大船の たゆたふ見れば
慰もる 心もあらず そこ故に せむすべ不知 音のみも 名
のみも絶えず 天地の いや遠長く 偲び行かむ 御名にかか
せる 明日香川 萬代までに はしきやし 吾が大君の 形見
にこゝを

(一) 從來ウチハシと訓して居るが、ウツハシであればならぬことは
語誌に詳論した通りである。

(二) 爲を鳥の誤としてチチレルと訓した眞淵説をとる。

(三) 金澤本には玉藻之母許呂臥者とある。タマモのモコロコヤセバと
訓むのであらうが、尙刊本に従ひ四、六、五、七の四句とする方が調が
よいやうである。

(四) 次のカヨハス君の對句としてカタコフツマ(夫)と訓むのかも知れ
ぬが、舊訓はカタコヒツマとある。

(五) 舊訓スベモシラシヤとあり、眞淵はスベシラマシヤと改めたが、
いづれも心行かぬ語づかひである。誤字があるものとして、雅澄に
従ひ、姑くセムスベシラニと訓して置く。

(六) 何は荷の誤としてカタミニココチと訓した宣長説(暑解)が當を得

石浪 一云 生靡留 玉藻毛叙 絶者生流 打橋 生乎爲禮流 (二) 川藻
毛叙 干者波由流 何然毛 吾王乃 立者 玉藻之如 許呂臥
者 (三) 川藻之如久 靡相之 宣君之 朝宮乎 忘賜哉 夕宮乎
背賜哉 宇都會臣跡 念之時 春部者 花折挿頭 秋立者 黃
葉挿頭 敷妙之 袖携 鏡成 雖見不厭 三五月之 益目頗染
所念之 君與時時 幸而 遊賜之 御食向 木庭之宮乎 常宮
跡 定賜 味澤相 目辭毛絶奴 然有鴨 一云所已 綾爾憐 宿
兄鳥之 片戀孀 一云 朝鳥 一云 朝露 往來爲君之 夏草乃 念之萎
而 夕星之 彼往此去 大船 猶預不定見者 遣悶流 情毛不
在 其故 爲便知之也 音耳毛 名耳毛不絶 天地之 彌遠長
久 思將往 御名爾懸世流 明日香河 及萬代 早布屋師 吾
王乃 形見何此焉

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋(石なみ)渡し 下つ瀬
に 打橋渡す 石橋(石なみ)に 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆ
れば生ふる うつ橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るればは
ゆる 何しかも 吾が大君の 立たせば 玉藻のごと ころ伏
せば 川藻の如く 靡かひし よろしき君が 朝宮を 忘れ給
ふや 夕宮を 背きたまふや うつそみと 思ひし時に 春べ
は 花折り挿し 秋立てば もみぢ葉かざし してきたへの 袖

て居るやうである。

參照 ッツハシ、ミケムカフ、ヌエ鳥、ユフツツ、ハシキヤシ

(一九七)

短歌二首

明日香川 四我良美渡之 塞益者 進留水母 能杼爾賀有萬思
一云水乃與 杼爾加有益
あすか川柵わたしせかませば流るる水ものどにかあらまし(水の淀にかあらまし)

參照 シガラミ

(一九八)

明日香川 明日谷一云 將見等 念八方 一云念 吾王 御名忘世
左倍 香毛
奴 一云御名 不所忘

あすか川明日だに(さへ)見むと念へやも(おもへかも)吾が大君の御名忘れせぬ(御名忘れえぬ)

(一九九)

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并

短歌

挂文 忌之伎鴨 一云由遊志 言久母 綾爾畏伎 明日香乃 眞神之原爾 久堅能 天津御門乎 懼久母 定賜而 神佐扶跡 磐隱座 八隅知之 吾大王乃 所聞見爲 背友乃國之 眞木立

欲比奴禮者 嘆毛 未過爾 憶毛 未盡者 言左徹久 百濟之原從 神葬 葬伊座而 朝毛吉 木上宮乎 常宮等 高之奉而 神隨 安定座奴 雖然 吾大王之 萬代跡 所念食而 作良志之 香來山之宮 萬代爾 過牟登念哉 天之如 振放見乍 玉手次 懸而將偲 恐有騰文

かけまくも ゆゆしきかも(ゆゝしけれど) 言はまくも あやにかしこき 明日香の 眞神が原に 久かたの 天つ御門を かしこくも 定め給ひて 神さぶと 岩がくります やすみしし 吾が大君の 聞こしめす 背友の國の 眞木たつ 不破山越えて 猶劍 和射見が原の かり宮に 天降りまして 天の下治め賜ひ(拂ひ賜ひて) をす國を 定め賜ふと 鳥が鳴く あつまの國の 御軍を 召し賜ひて 千早ぶる 人を和はせとまつろはぬ 國を治めと(拂へと) 皇子ながら 任けたまへば 大御身に 大刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍をあどもひ賜ひ 齊ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹きなせる 小角の音も(笛の音は) 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の 脅ゆるまでに(聞きまどふまで) ささげたる 幡の靡は冬ごもり 春さり來れば 野毎に つきてある火の (冬ごもり 春野焼く火の) 風のむた 靡くが如く 取もてる 弓弾の

不破山越而 猶劍 和射見我原乃 行宮爾 安母理座而 天下治賜 一云拂 食國乎 定賜等 鳥之鳴 吾妻乃國之 御軍士乎 喚賜而 千磐破 人乎和爲跡 不奉仕 國乎治跡 一云拂 皇子隨 任賜者 大御身爾 大刀取帶之 大御手爾 弓取持之 御軍士乎 安騰毛比賜 齊流 鼓之音者 雷之 聲登開麻低 吹響流 小角乃音母 一云笛 乃音波 敵見有 虎可叫吼登 諸人之 協流 麻低爾 一云聞 指學有 幡之靡者 冬木成 春去來者 野每著而有火之 春野燒火乃 風之共 靡如久 取持流 弓波受乃 驟 三雪落 冬乃林爾 一云由 布乃林 飄可毛 伊卷渡等 念麻低 聞之恐久 惑麻低爾 引放 箭繁計久 大雪乃 亂而來禮 一云、曾知余里 不奉仕 立向之毛 露霜之 消者消倍久 去鳥乃 相競端爾 一云、朝霜之、消者消言爾、渡會乃 齊宮從 神風爾 伊吹惑之 大雲乎 日之目毛不令見 常闇爾 覆賜而 定之 水穗之國乎 神隨 太敷座而 八隅知之 吾大王之 天下 申賜者 萬代 然之毛將有登 一云如是毛 安良無等 木綿花乃 榮時爾 吾大王 皇子之御門乎 一云、刺竹、皇子御門乎 神宮爾 裝束奉而 遣便 御門之人毛 白妙乃 麻衣著 埴安乃 御門之原爾 赤根刺 日之盡 鹿自物 伊婆比伏管 烏玉能 暮爾至者 大殿乎 振放見乍 鶉成 伊波比廻 雖侍候 佐母良比不得者 春鳥之 佐麻

さわぎ み雪降る 冬の林(ゆふの林)に 飄かも い巻き渡る と 思ふまで 聞の恐く(諸人の見まどふまでに) 引放つ 箭の繁げく 大雪の 亂れて來たれ (霰なすそちより來れば) 奉ろはず 立向ひしも 露じもの 消なば消ぬべく ゆく鳥の あらそふ端に(朝霜の消なば消ぬべく、うつせみと争ふはしに) 渡會の 齊の宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も 見せず 常暗に 覆ひ賜ひて 定めてし 瑞穂の國を 神ながら 太しきまして やすみしし 吾が大君の 天の下 申し賜へば 萬代に しかもあらむと(かくもあらむと) 木綿花の 榮ゆる時に 吾が大君 皇子の御門を(刺竹の皇子の御門を) 神宮に よそひ奉りて 使はしし 御門の人も 白たへの 麻衣着て 埴安の 御門の原に 茜さす 日のことごと 鹿じ物 いはひ伏しつ つ ぬばたまの 夕になれば 大殿を 振りさけ 見つつ 鶉なす いはひ廻り さもらへど 侍ひかねて 春鳥の さまよひぬれば 嘆も いまだ過ぎぬに 思も 未だ盡きねば 言さへぐ 百濟の原ゆ 神葬り 葬りいまして 朝もよし 城の戸の宮を 常宮と 定め奉りて 神ながら 鎮まりましぬ 然れども 吾が大君の 萬代と 念ほしめして 作らしし 香山の宮 よろづ代に 過ぎむと思へや 天の如 ぶりさ

け見つつ 玉だすき かけて俣ばむ かしこかれども

(一) こゝで文が切れることは勿論であるが、咏嘆の意を含めて、わざとカシコキというたので、カシコシの誤寫ではない。——語法要録参照。

(二) 舊訓チツノとあるが、和名抄に小角はクダのフエとあるによつてクダと訓むべきである。

(三) 舊訓ウゴキとあるが、契沖訓に従ふ。

(四) 金澤本には天雲とあり、舊訓もアマグモである。天雲チ日ノ目モ見セズとあるつゞき合を不可解とするものもあるが、此チは「國を離れ」家を出づ」などいふチで、ヨに通ずるのである。——語法要録参照。

(五) 遣使は遣使の誤記とする契沖説に従ひ、畧解の訓の如くツカハシシとよむべきである。

(六) 舊訓サモラヒエネバとあるが、宣長説の如く者は天の誤で、カネテと訓むのであらう。

(七) 高之の二字は定一字の誤とする宣長説「玉小琴」可。

【參照】ユエシ、コマツルギ「枕」、チハヤフル「枕」、イクサ、クダ、ユフ花、シシジモノ「枕」、ウヅラナス「枕」、タマダスキ「枕」、ツユシモノ「枕」

(1100)

短歌二首

久堅之 天所知流 君故爾 日月毛不知 戀渡鴨
久堅の天を知らせる君故に日月も知らに戀ひ渡るかも

零雪者 安幡爾勿落 吉隱之 猪養乃岡之 塞爲卷爾
ふる雪は淡にな降りそよなはりの猪養の岡のせきとせまくに

(一) セキニセマクニと訓してもよいが、セキトの方が一層適切である——金澤本には塞を寒としてあるが、サムカラマクニと讀んでは意が通ぜぬ。

【參照】セキ、ヨナバリ

(1104)

弓削皇子薨時、置始東人歌一首并短歌

安見知之 吾王 高光 日之皇子 久堅乃 天宮爾 神隨 神
等座者 其乎霜 文爾恐美 晝波毛 日之盡 夜羽毛 夜之盡
臥居雖嘆 飽不足香裳

やすみしし 吾が大君 高光る 日の御子 久かたの 天つ宮
に 神ながら 神といませば そこをしも あやかにかしこみ
晝はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと 臥居なげけど
飽足らぬかも

(1105)

反歌一首

王者 神西座者 天雲乃 五百重之下爾 隱賜奴
大君は神にしませは天雲の五百重のもとに隠りたまひぬ

(一) アメニシラルルといふ舊訓の非なることは勿論であるが、アメシラシメル「眞淵」も亦穩當でない。完了時格を用ひる場合ではないのである。

(1101)

埴安乃 池之堤之 隱沼乃 去方乎不知 舍人者迷惑

埴安の池の堤のこもり沼の行方を不知舍人はまどふ

(1102)

或書反歌一首

哭澤之 神社爾三輪須惠 雖禱祈 我王者 高日如知奴
なきさはの森にみわ据ゑこひのめど我が大君は高日知らしぬ

右一首類聚歌林曰、檜隈女王怨泣澤社之歌也、案日本紀曰、持統天皇十年丙申秋七月辛酉庚戌後皇子尊薨

(一) 舊訓イノレドモとあるが、雅澄説の如くミツ(神酒)の縁語としてノムといふ語を用ひた筈である。——【九六】參照——但しノマドモとしては未句と時格があはれわから、宣長訓に従ひコヒノメドといふべきであらう。

(二) 舊訓シラレヌとあるが、童蒙抄に従うてシラシヌと訓むべきである。高日知は天所知と同じく薨去を意味するのである。

【參照】ミツ、ノミ

(1103)

但馬皇女薨後、德積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流

(1106)

又短歌一首

神樂波之 志賀左射禮波 敷布爾 常丹跡君之 所念有計類
さざ波の志賀さざれ波しくしくに常にと君が念ほせりける

(1107)

柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌

天飛也 輕路者 吾妹兒之 里爾思有者 勲 欲見騰 不止行
者 人目乎多見 眞根久往者 人應知見 狹根葛 後毛將相等
大船之 思憑而 玉蜻 磐垣淵之 隱耳 戀管在爾 度日乃
晚去之如 照月乃 雲隱如 奥津藻之 名延之妹者 黃葉乃
過伊去等 玉梓之 使乃言者 梓弓 聲爾聞而 一云聲 將言爲
便 世武爲便不知爾 聲耳乎 聞而有不得者 吾戀 千重之一
隔毛 遺悶流 情毛有八等 吾妹子之 不止出見之 輕市爾
吾立聞者 玉手次 畝火乃山爾 喧鳥之 音母不所聞 玉梓
道行人毛 獨谷 似之不去者 爲便乎無見 妹之名喚而 袖曾
振鶴。或本有謂之名耳聞而有不得者一句

天飛ぶや 輕の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに見まく欲しけど やまず行かば 人目を多み まねく行かば

人知りぬべみ さねかづら 後も逢はむと 大船の 思ひたのみて 玉かざる 磐垣淵の 籠りのみ 戀ひつつあるに 渡る日の 晚れ行くが如 照る月の 雲がくる如 沖つ藻の なびきし妹は もみぢ葉の 過ぎていにきと 玉づさの 使のいへば 梓弓 聲に聞きて(おとのみ聞きて) 言はむすべ 爲むすべ不知 おとのみを 聞きてあり得ねば 吾が戀ふる 千重の一重も 慰むる 心もありやと 吾妹子が やます出で見し 輕の市に 吾が立ち聞けば 玉だすき 畝火の山に 鳴く鳥の音も聞えず 玉梓の 道行く人の 一人だに 似てし行かねばすべをなみ 妹が名呼びて 袖ぞふりつる

(一) タマカギルと訓むべしとする雅澄説(古義玉蜻考)を可とする。

(二) 舊訓オモヒヤルとあるが、宣長に従うてナクサマル(又はナクサムル)と訓むべきである「玉小琴」。

參照 ネモコロ、サネカツラ「枕」、タマカギル「枕」、イハガキフチ

(1108)

短歌二首

秋山之 黄葉乎茂 迷流 妹乎將求 山道不知母 一云路不知而

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも(路知らずして)

(1109)

兒らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎろ火の 燃ゆる荒野に 白たへの 天ひれがくり 鳥じ物 朝たちいまして 入日なす 隠りにしかば 吾妹子が 形見における 若兒の 乞ひ泣く毎に 取り與ふ 物しなれば 男じ物 腋ばさみもち 吾妹子と 二人吾が寝し 枕つく 孀屋のうちに 晝はも うらさび晩らし 夜はも 息つき明かし 嘆けども せむすべ 不知 戀ふれども 逢ふよしを無み 大鳥の 羽かひの山に 吾が戀ふる 妹はいますと 人のいへば 石根さくみて なづみ來し 吉けくもぞなき うつせみと 思ひし妹が 玉かざる 髣髴にだにも 見えぬ思へば

(一) 舊訓トリモチテとあるが、攷證の説の如くタツサヒテを可とする。

(二) 代匠記にミドリコとある舊訓を非として字によつてマカコと訓したのには理に合せて居るが、ツクコと訓む方がよい。

(三) 穂は徳の誤であらう「考」。

(四) 上記の玉蜻と同じくタマカギルであらねばならぬ。

參照 ハシリデ、アマヒレ、ナトコジモノ、サクミ、ナヅミ、ヨケケ

モソナキ

(1111)

短歌二首

去年見而之 秋乃月夜者 雖照 相見之妹者 彌年放 こそ見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

黄葉之 落去奈倍爾 玉梓之 使乎見者 相日所念 もみぢ葉の散り行くなべに玉づさの使を見れば逢ひし日念ほゆ (一) 眞淵がチリナルと改訓したのは非。其はナベニの意を解し得なかつた爲である。上三句の意味は「黄葉のやうに散り行くのは必然であるのに」といふことで、チリはタマツサの縁語である。

參照 ナベ、タマツサ

(1110)

打蟬等 念之時爾 一云宇都會 臣等念之 取持而 吾二人見之 趨出之 堤爾立有 槻木之 已知碁智乃枝之 春葉之 茂之如久 念有之 妹者雖有 憑有之 兒等爾者雖有 世間乎 背之不得者 蜻火之 燎流荒野爾 白妙之 天領巾隱 鳥自物 朝立伊麻之 互 入日成 隱去之鹿齒 吾妹子之 形見爾置 若兒乃 乞泣 每 取與 物之無者 鳥穗自物 腋狹持 吾妹子與 二人吾宿之 枕付 孀屋之内爾 晝羽裳 浦不樂晚之 夜者裳 氣衝明之 嘆友 世武爲便不知爾 戀友 相因乎無見 大鳥 羽易乃 山爾 吾戀流 妹者伊座等 人之云者 石根左久見手 名積來之 吉雲會無寸 打蟬跡 念之妹之 珠蜻 髣髴谷裳 不見思者 うつせみと(うつそみと) 思ひし時に 手づさひて 吾が二人見し はしり出の 堤に立てる 槻木の ちちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど 頼めりし

(1112)

衾道乎 引手乃山爾 妹乎置而 山徑往者 生跡毛無 ふうすまぢを引手の山に妹をきて山道を行けば生けりともなし

參照 フスマヂ

(1113)

或本歌曰

宇都會臣等 念之時 携手 吾二見之 出立 百兄槻木 虛知 期知爾 枝刺有如 春葉 茂如 念有之 妹庭雖在 恃有之 妹庭雖有 世中 背不得者 香切火之 燎流荒野爾 白拷 天 領布隱 鳥自物 朝立伊行而 入日成 隱西加婆 吾妹子之 形見爾置有 綠兒之 乞哭別 取委 物之無者 男自物 脊挿 持 吾妹子與 二吾宿之 枕附 孀屋内爾 且者 浦不怗晚之夜者 息衝明之 雖嘆 爲便不知 雖戀 相縁無 大鳥 羽易 山爾 汝戀 妹座等 人云者 石根割見而 奈積來之 好雲叙 無 宇都會臣 念之妹我 灰而座者 うつそみと 思ひし時に 手づさはり 吾が二人見し 出立の 百枝槻の木 ちちごちに 枝させるごと 春の葉の 茂きが如く おもへりし 妹にはあれど 頼めりし 妹にはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎる火の もゆる荒野に 白たへの 天ひれがくり 鳥じもの 朝立ちい行き 入日なす 隠りに

しかば 吾妹子の 形見における 緑兒の 乞ひ泣く毎に 取りまたす 物しなれば 男じもの 腋はさみもち 吾妹子と 二人吾が寝し 枕つく 孀屋のうちに あしたは うらさび暮し 夕は 息つきあかし 嘆けども 爲むすべ知らに 戀ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 汝が戀ふる 妹はいますと 人のいへば 石根さくみて なづみ來し 吉けくもぞなき うつそみと 思ひし妹が 灰にしませば

(一) 舊訓マカスとあるが、緑兒をあやすにマカスといふ語を用ひたとは思はれず、原義上轉用不可能であるから、マカスを寫し誤まつたものと思はれる。マカスは令持の義であるから、姿の字をあてるとは不當ではない。

(二) 從來ルルハ、ヨルハと三音に訓んで居るが、且はルルといふ訓に不當であるのみならず、三、七音の排列は甚調のよろしからぬものであるから、アシタハ、ユフベハと訓むべきであらう。

(三) 舊訓ハヒレテマセバとあるが、ハヒレといふ語があり得たとも思はれぬ。眞淵以來灰を爪の誤とし、更に數字を改めて前掲の本歌と一致せしめんと試みたものがあるが、此の如きは解讀ではなく、改作と稱すべきで慎まねばならぬ。火葬は此當時既に行はれて居たから、——(四) 參照——此女性も茶毘に附せられたものと見るべきで、香切火之、燎流荒野爾、白拷、天領中隱の四句が之を暗示して居る。されば而をシの假字と見て灰ニシマセバと訓めば容易く會得せられるのである。——ハヒレテマセバと訓するは非。此やうな場合にこそシといふ指定助語が必要であるのである。

夕霧乃如也

秋山の したべる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 思ひをれか たく繩の ながき命を 露こそは 朝に置きて 夕は 消ゆといへ 霧こそは 夕に立ちて あしたは 失すと いへ 梓弓 音聞く吾も 髣髴に見し こと悔しきを 敷たへの 手枕まきて 劍大刀 身に副へ寐けむ 若草の 其つまの子は さぶしみか 念ひてぬらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと

(一) 反歌に志我津子又は大津子とある所を見ると、吉備は志賀の誤であらうといふ雅澄説を可とする。吉備津といふ地名稱呼もないやうである。

(二) 宣長がシタブルと訓めというたのは「記傳」、シタビの語義を誤解した爲であるから問題にならぬ。此語の原形はシタビで、之にアリを添へて繼續格とする場合には國語の通則に従ひ、舊訓の如くシタベルであらねばならぬ。——語法要録參照。

(三) 眞淵訓の如くオホニ見シを可とする。

(四) 也の字訓むべからずとする宣長説可。

(二一八)

短歌二首

樂浪之 志我津子等何 一云志我 津之子我 罷道之 川瀬道 見者不怜毛

萬葉集(卷第二)

參照 ミドリコ、マタシ

(二二四)

短歌三首

去年見而之 秋月夜 雖度 相見之妹者 益年離 こそ見てし秋の月夜はわたれども相見し妹はいや年さかる

(二二五)

倉路 引出山 妹置 山路念邇 生刀毛無

ふすまぢを引手の山に妹をおきて山路念ふに生けりともなし

(二二六)

家來而 吾家乎見者 玉床之 外向來 妹木枕

家に來てつまやを見れば玉床の外にむかひけり妹が木枕

(一) 吾は妻の誤とする眞淵説が當を得て居ると思ふ。

參照 ツマヤ

(二二七)

吉備津采女死時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

秋山 下部留妹 奈用竹乃 騰遠依子等者 何方爾 念居可

拷繼之 長命乎 露已會婆 朝爾置而 夕者 消等言 霧已會

婆 夕立而 明者 失等言 梓弓 音聞吾母 髣髴見之 事悔

敷乎 布拷乃 手枕纏而 劍刀 身二副兼價牟 若草 其孀子

者 不怜彌可 念而寐良武 時不在 過去子等我 朝露乃如也

さざ波の志賀津の子等が(志賀津の子が)まかりにし川瀬の道を見ればさぶしも

(一) 舊訓ユクミチノとあるが、道を邇の誤としてマカリニシと訓した宣長説がよいやうである。

(二二九)

天數 凡津子之 相日 於保爾見敷者 今叙悔

あまかすふ大津の女の子逢ひし日におほに見しくは今ぞ悔しき

(一) 天數の字について解釋しようとした爲、説きわづらうて之を誤字とする説(古義)も出たのであるが、アマガスム(海人が住む)大津といひかけたのを、夙にアマガスマと訛り、之に天數の字をあてたものと見るべきである。

(二) 「子カ」又は「子ノ」としては「凡津子」が主格になるから下の句とあはぬ。恐らくは女之子とあつたのが女を脱して之と子とを顛倒したのであらう。

(三) 敷はシクの假字に用ひられたのであらう。「そがひに寝シク今ぞくやしき」(萬七)とある語法を考へ合はすべきである。

(三三〇)

讚岐狹岑島視石中死人 柿本朝臣人麿作歌一首并

短歌

玉藻吉 讚岐國者 國柄加 雖見不飽 神柄加 幾許貴寸 天

地 日月與共 滿將行 神乃御面跡 次來 中乃水門從 船浮

而 吾擄來者 時風 雲居爾吹爾 奥見者 跡位浪立 邊見者

白浪散動 鯨魚取 海乎恐 行船乃 梶引折而 彼此之 鳥者
雖多 名細之 狹岑之島乃 荒儀回爾 廬作而見者 浪音乃
茂濱邊乎 敷妙乃 枕爾爲而 荒床 自伏君之 家知者 往而
毛將告 妻知者 來毛問益乎 玉梓之 道太爾不知 鬱悒久
待加戀良武 愛伎妻等者

玉藻よし 讚岐の國は 國からか 見れどもあかぬ 神からか
こゝた貴き 天地 日月と共に 滿行かむ 神の御面と つぎ
て來る 中の水門ゆ 船浮けて 吾が漕ぎ來れば 時つ風 雲
ゐに吹くに 沖見れば しき波立ち 邊見れば 白波さわぐ
いさな取り 海をかしこみ 行く船の 梶引き折りて 遠近の
島は多けど なくはし 狹岑の島の 荒磯回に いほりて見れ
ば 波の音の 茂き濱邊を したたへの 枕になして 荒床に
ころふす君が 家知らば 行ても告げむ 妻知らば 來も問は
ましを 玉梓の 道だに知らず おほほしく 待ちか戀ふらむ
愛しき妻らは

(一) ツギテクルは「言次而來」の意であるが、——ツゲ(告)といふ語も
之から出た——「言」の字を脱したのでもなく、又イヒツグル(古義)
と訓むでもない。
(二) シキナミとする眞淵訓を可とする。十三卷にも跡座浪之立塞道麻
とある。

(三) 舊訓イホリツクリテミレバとあるが、古義の訓を可とする。イホ
リはイホ(慮)の活用語である。
參照 クニカラ、カミカラ、ナクハシ(枕)

(1131) 反歌二首

妻毛有者 探而多宜麻之 佐美乃山 野上乃宇波疑 過去計良
受也
妻もあらば摘みてたげましさみの山野のへのうはぎ過ぎにけら
ずや

參照 タゲ、ウハギ

(1132)

奥波 來依荒儀乎 色妙乃 枕等卷而 奈世流君香聞
沖つ波來寄るありそをしきたへの枕とまきて寐せる君かも

(1133)

柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首
鴨山之 磐根之卷有 吾乎鴨 不知等妹之 待乍將有
かも山の岩根しまける吾をかも不知と妹がまちつつ有らむ

(一) 此トはテと同語で、シラズテを古はシラニトといふたのである。
語法要録參照。

(1134)

(1137) 或本歌曰

天離 夷之荒野爾 君乎置而 念乍有者 生刀毛無
あま放る夷の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けりともなし

右歌一首作者未詳、但古本以此歌載於此次也

參照 アマサカル(枕)

寧樂宮

(1138)

和銅四年歲次辛亥、河邊宮人姫島松原見孃子屍悲
歎作歌二首

妹之名者 千代爾將流 姫島之 子松之末爾 蘿生萬代爾
妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末にこけむすまてに

(1139)

難波方 鹽干勿有會禰 沈之 妹之光儀乎 見卷苦流思母
なには濁潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも

(1140)

靈龜元年歲次乙卯秋九月、志貴親王薨時作歌一首并
短歌
梓弓 手取持而 大夫之 得物矢手挿 立向 高圓山爾 春野

柿本朝臣人麿死時妻依羅娘孀子作歌二首

且今日且今日 吾待君者 石水 貝爾一云交而 有登不言八方
けふけふと吾が待つ君は石川の貝に(谷に)まじりてありといは
ずやも

(1135)

直 相者相不勝 石川爾 雲立渡禮 見乍將悵

たどかには逢ひは逢ひかてし石川に雲立ちわたれ見つゝ悵ばむ

(一) 上二句は從來「直相者」を第一句、「相不勝」を第二句として、第一
句はタダノアヒハ、第二句はアヒモカネテム(舊訓)、アヒカテマシ
ナ(考)、アヒカツマシシ(新訓)などと訓したが、不勝をカタマシテ
又はカツマシジと訓み得ぬことは勿論で、カネテムは未來完了格で
あるから、第四句と呼應せぬ。此歌は直而不可能であらうがせめて
は石川の雲と立わたれといふ意であるから、第二句は單純時格であ
らねばならぬ。案するに「直」一字が一句で、タガカニハと訓み、第
二句はアヒハアヒカテシ(逢ひは逢ひ得じ)といふ意と訓むのであ
らう。此の如き語法は他にも例のあることである。

(1136)

丹比真人名闕擬柿本朝臣人麿之意報歌一首

荒浪爾 緣來玉乎 枕爾置 吾此間有跡 誰將告
荒波により來る玉を枕に置き吾こゝに在りと誰か告げなむ

(一) ツゲマシ、ツゲケムと訓むは非。舊訓を可とする。ナムは希望の
意の助動詞と解すべきである。

燒 野火登見左右 燎火乎 何如問者 玉梓之 道來人乃 泣
淚 霈霖爾落者 白妙之 衣渥漬而 立留 吾爾語久 何鳴
本名言^(一) 聞者 泣耳師所哭 語者 心會痛 天皇之 神之御子
之 御駕之^(二) 手火之光會 幾許照而有

梓弓 手に取りもちて ますら男の さつ矢手ばさみ 立ち向
ふ 高まと山に 春野焼く 野火と見るまで 燃ゆる火を 如
何にと問へば 玉梓の 道來る人の 泣く涙 ひさめに降れば
白妙の 衣ひづちて 立留り 吾に語らく 何しかも もとな
いふ 聞けば 音のみし泣かゆ 語れば 心ぞいたき 天皇の^{スノロキ}
神の御子の いでましの 手火の光ぞ こゝだ照たる

(一) イヒツル又はイヘルと訓するは非。こゝは完了又は繼續格を用ひ
る場合ではないから、新考の説の如くモトナイフと五音によむべき
である。

(二) 仙覺はオホムタノと訓したが、ムタといふ語は不可解である。眞
淵に從うてイデマシノと訓して置く。

參照 ヒサメ、モトナ

(二二二)

短歌二首

高圓之 野邊 秋芽子 徒 開香將散 見人無爾

高まとの野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人なしに

參照 イタヅラ

(二二三)

御笠山 野邊往道者 已伎太雲 繁荒有可 久爾有勿國
御笠山野邊行く道はこきだくもしみあれたるか久にあらなくに

右歌笠朝臣金村歌集出

(二二四)

或本歌曰

高圓之 野邊乃秋芽子 勿散禰 君之形見爾 見管思奴幡武

高まとの野邊の秋萩な散りそね君が形見に見つつしぬばむ

(二二五)

三笠山 野邊從遊久道 已伎太久母 荒爾計類鳴 久爾有名國

三笠山野邊ゆ行く道こきたくも荒れにけるかも久にあらなくに

【卷第三】

雜 歌

(二二六)

天皇御遊^{カミツカ}雷岳之時、柿本朝臣人麿作歌一首

皇者 神二四座者 天雲之 雷之上爾 廬爲流鳴^(一)
大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせずかも

(一) ヨビコエと訓むと網子トトノフル呼聲即ち號令の聲をいふもの、
やうに聞えるが、こゝは海人の聲高に叫ぶ聲が大宮に達するといふ
ことであるから、「網子トトノフル」は「海人」のみにかゝる修飾語と
して、ヨブ聲と訓むべきである。一音の相違によつても意味の大
なる差異を生ずることに注意せねばならぬ。

參照 トトノフル

(二二七)

長皇子遊^{カミツカ}獵路池之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短

歌

八隅知之 吾大王 高光 吾日乃皇子乃 馬並而 三獵立流

弱薦乎 獵路乃小野爾 十六社者 伊波比拜目 鶉已會 伊波

比回禮 四時自物 伊波比拜 鶉成 伊波比毛等保理 恐等

仕奉而 久堅乃 天見如久 眞十鏡 仰而雖見 春草之 益目

頼四寸 吾於富吉美可聞

やすみしし 吾が大王 高光る 吾が日の御子の 馬並めて

御獵立たせる 若薦を かるちの小野に 猪こそは い匂ひを

ろがめ 鶉こそ い匂ひもとほれ 獸じ物 いはひ拜み うづ

らなす い匂ひ廻り 恐みと 仕へ奉りて 久かたの 天見る

如く まそ鏡 仰ぎて見れど 春草の いやめづらしき 吾が

大君かも (一) 從來カリヤと訓して居るが、獵路は借字で、カルチとよみ、輕市

右或本云、獻忍壁皇子也、其歌曰、王、神座、雲隱、伊加土
山爾、宮敷座(大君は神にしませば雲がくりいかつち山に
宮しきいます)

(一) 流は須の誤とする或る人の説(略解)を可しとする。

參照 カミツカ

(二二八)

天皇賜志斐姬御歌一首

不聽跡雖云 強流志斐能我 強語 此者不聞而 朕戀爾家里

いなといへど強ふる志斐のがしひ語りこのころ聞かずて我戀ひ
にけり

(二二九)

志斐姬奉和歌一首 姬名未詳

不聽雖謂 話禮話禮常 詔許會 志斐伊波奏 強話登言

いなといへど語れ語れとのらせこそ志斐いはまをせ強ひ語りと
のる

(二三〇)

長忌寸意吉麿應詔歌一首

大宮之 内二手所聞 網引爲跡 網子調流 海人之呼聲

大宮の内まで聞こゆ網引すと網子とよふる海人のよぶこゑ

右一首

の意であらう。題詞に獵路池(久老、雅澄等が野と改記したのはさか
しらである)とあり、反歌にも「荒山中に海をなすかも」とあるから、
輕池の附近と思はれる。「若薦を」といふ枕を用ひたのを見て、カ
ルと讀む方が適はしいやうである。

參照 カルの池、マツカガミ

(二四〇)

反歌一首

久堅乃 天歸月乎 網爾刺 我大王者 蓋爾爲有
久かたの天ゆく月を網にさし我が大君のきぬがさにせり

(二四一)

或本反歌一首

皇者 神爾之坐者 眞木之立 荒山中爾 海成可聞
大君は神にしませば眞木のたつ荒山中に海をなすかも

(二四二)

弓削皇子遊吉野時御歌一首

瀧上之 三船乃山爾 居雲乃 常將有等 和我不念久爾
瀧の上のみ船の山にゐる雲の常にあらむとわが念はなくに

(二四三)

春日王奉和歌一首

王者 千歲爾麻佐武 白雲毛 三船乃山爾 絶日安良米也
大君は千歳にまさむ白雲もみ船の山に絶ゆる日あらめや

又長田王作歌一首

隼人乃 薩摩乃迫門乎 雲居奈須 遠毛吾者 今日見鶴鴨
隼人のさつまのせとを雲ひなす遠くも吾は今日見つるかも

(二四九)

參照 ハヤヒト

柿本朝臣麻呂歸旅歌八首

三津崎 浪矣恐 隠江乃 舟公 宣奴島爾
みつの崎波をかしこみこもり江の舟こぐ人の宣ふ野島に

(一) 下二句舊訓フネコケキミガユクカマシマニとあるが、契沖は脱字
があるかと疑ひ、眞淵以來の學匠思ひ／＼に數字を補うて訓して居
る。舟公は舟人即ち「舟こぐ人」の意、末句は字の通りノロフマシマ
ニと訓み、「近づきぬ」といふ意味を含ませたものとすれば原文の儘
でもよく意が通ずるから、強て改作するにも及ぶまい。

(二五〇)

珠藻薈 敏馬乎過 夏草之 野島之崎爾 舟近著奴

一本云、處女乎過而夏草乃野島我崎爾伊保里爲吾等者

玉藻かるみぬめを過ぎて夏草の野島が崎に舟近づきぬ
(をとめを過ぎて夏草の野島が崎に廬りす吾は)

(二五一)

栗道之 野島之前乃 濱風爾 妹之結 緞吹返
淡路の野島が崎の濱風に妹が結びし紐吹きかへす

(二四四)

或本歌一首

三吉野之 御船乃山爾 立雲之 常將在跡 我思莫苦二
みよし野のみ船の上に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

(二四五)

長田王被遣筑紫渡水島之時歌二首

如聞 眞貴久 奇母 神佐備居賀 許禮能水島
聞しごとまこと貴く奇しくも神さび居るかこれの水島

(二四六)

葦北乃 野坂乃浦從 船出爲而 水島爾將去 波立莫勤

あし北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ

(二四七)

石川大夫和歌一首 名闕

奥浪 邊波雖立 和我世故我 三船乃登麻里 瀾立目八方
沖つ波邊波立つともわが夫子が御船の泊波立ためやも

右今案、從四位下石川宮鷹朝臣慶雲年中任二大貳、又正五
位下石川朝臣吉美侯神龜年中任二少貳、不知二人誰作
此歌焉

(二四八)

參照

(二五二)

荒栲 藤江之浦爾 鈴寸釣 白水郎跡香將見 旅去吾乎

一本云白栲乃、藤江能浦爾、伊射利爲流

鹿たへの藤江の浦にすき釣る(白たへの藤江の浦にいざりす
る)海人とか見らむ旅ゆく吾を

(二五三)

稻日野毛 去過勝爾 思有者 心戀敷 可古能島所見

いなび野もゆき過ぎ不勝おもへればこゝろ戀しき賀古の島見ゆ

(水門見ゆ)

(一) 爾は打消のニ(不)にあてた假字であるから、カテニと訓むべきで、
ガテニと濁り「難きに」の意とするは誤である。

(二) 潮の字は諸本に湖とある。いづれにしてもミナト又はミトの假字
である。

(二五四)

留火之 明大門爾 入日哉 撈將別 家當不見

參照 イナビ野

(二五五)

ともし火の明大門に入る日にやこぎわかれなむ家のあたり見ゆ

(一) 不見とあるにも拘はらず、諸本ミユ又はミテと訓してある。姑く
舊訓に従うてミユとして置く。コギワカレナムを日没の大陽に別れ
ることとし、西から歸着の際の作と見れば意が通ずる。次の歌と照

し合はせて心得べきである。

(二五五)

天離 夷之長道從 戀來者 自明門 倭島所見 一本云、家門當見由
天さかる夷の長道ゆこひ來れば明石の門より大和島見ゆ (ヤどのあたり見ゆ)

(二五六)

飼飯海乃 庭好有之 荊薦乃 亂出所見 (一) 海人釣船
一本云、武庫乃海、船爾波有之、伊射里爲流、海部乃釣船、浪上從所見

けひの海の庭よくあらし荊菰のみだれて見ゆる海人の釣船

(一本)むこの海の船にはあらしいざりする海人のつり舟波のへゆ見ゆ

(一)ミダレイデミユ(舊訓)、ミダレイツミユ(古義)其他類似の訓があるが、類聚抄其他の古寫本の訓の如く出は假字としてミダレイテミユとすべきであらう。但し十五卷には古歌として一本の歌をあげ、左註に柿本朝臣人麿歌として第四句を美太禮氏出見由としてある。此によればミダレイツミユと訓まればならぬが、ミダレイツといふ語は耳ざりであるのみならず、亂れて出る光景ならば出發地が示され(又は暗示せられ)て居らねばならぬ。恐らくは傳誦の誤であらう。

(二)右の十五卷に掲げた歌には第二句爾波余久安良之とあるが、本集編纂の際彼此の異同を校訂したものは思はれぬから、この船爾

波有之を誤寫なりと斷定することは出來ぬ。フネニハアラシと訓しても歌の意はよく通ずる。

參照 ケヒの海、ニハ

(二五七)

鴨君足人香具山歌一首并短歌

天降付 天之芳來山 霞立 春爾至婆 松風爾 池浪立而 櫻花 木晚茂爾 奥邊波 鴨妻喚 邊津方爾 味村左和伎 百磯城之 大宮人乃 退出而 遊船爾波 梶棹毛 無而不樂毛 己具人奈四二

天降りつく 天のかぐ山 霞立つ 春にいたれば 松風に 池波立ちて 櫻花 木のくれしじに 沖邊は 鴨妻よび 邊つへに あぢ群さわぎ 百しきの 大宮人の まかり出て 遊ぶ船には 梶棹も なくてさぶしも 漕ぐ人なしに

(一)舊訓シゲニとあるは從はれぬ。爾は彌の誤字とする説もあるが、寧ろシジニと訓むべきであらう。

(二)古義にオキヘニハと改訓したのは從はれぬ。オキヘハといふのが古語である。

(三)舊訓カモメヨバヒテとあり、カモメツマヨビ(久老)、カモツマヨバヒ(雅澄)と訓したものがあつたが、鴨妻をカモメ(鴨)と訓むことの非なるは勿論、ヨビとヨバヒを同一視することは出來ぬ。

(四)ヘツヘニと四音に訓むを可とする。
參照 コノケレ、アヤムラ、ヨバヒ、モモシキ(枕)

(二五八)

反歌二首

人不榜 有雲知之 潛爲 齋與高部共 船上住

人漕がすあらくもしるしかつぎする齋とたかべと船の上にする

參照 ヲシ、タカベ

(二五九)

何時間毛 神佐備祢留鹿 香山之 銚楹之本爾 薛生左右二

いつのまも神さびけるか香山の矛杉の本に苔むすまでに

(一)イツノマモは「何時の間にかも」の意と思はれる。

(二六〇)

或本歌云

天降就 神乃香山 打靡 春去來者 櫻花 木晚茂 松風丹
池浪颺 邊都返者 阿遲村動 奥邊者 鴨妻喚 百式乃 大宮人乃 去出 榜來舟者 竿梶母 無而佐夫之毛 榜與雖思
天降りつく 神の香山 打靡く 春去りくれば 櫻花 木のくれ茂み 松風に 池波さはぎ 邊つへは あぢ群とよみ 沖つ邊は 鴨妻よぶ 百しきの 大宮人の まかり出て 漕ぎ來る船は 竿梶も なくてさぶしも 漕がむとおもへど

右今案遷都寧樂之後作此歌一賦

(二六一)

萬葉集(卷第三)

波有之を誤寫なりと斷定することは出來ぬ。フネニハアラシと訓しても歌の意はよく通ずる。

參照 ケヒの海、ニハ

(二五七)

鴨君足人香具山歌一首并短歌

天降付 天之芳來山 霞立 春爾至婆 松風爾 池浪立而 櫻花 木晚茂爾 奥邊波 鴨妻喚 邊津方爾 味村左和伎 百磯城之 大宮人乃 退出而 遊船爾波 梶棹毛 無而不樂毛 己具人奈四二

天降りつく 天のかぐ山 霞立つ 春にいたれば 松風に 池波立ちて 櫻花 木のくれしじに 沖邊は 鴨妻よび 邊つへに あぢ群さわぎ 百しきの 大宮人の まかり出て 遊ぶ船には 梶棹も なくてさぶしも 漕ぐ人なしに

(一)舊訓シゲニとあるは從はれぬ。爾は彌の誤字とする説もあるが、寧ろシジニと訓むべきであらう。

(二)古義にオキヘニハと改訓したのは從はれぬ。オキヘハといふのが古語である。

(三)舊訓カモメヨバヒテとあり、カモメツマヨビ(久老)、カモツマヨバヒ(雅澄)と訓したものがあつたが、鴨妻をカモメ(鴨)と訓むことの非なるは勿論、ヨビとヨバヒを同一視することは出來ぬ。

(四)ヘツヘニと四音に訓むを可とする。
參照 コノケレ、アヤムラ、ヨバヒ、モモシキ(枕)

柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子一歌一首并短歌

八隅知之 吾大王 高輝 日之皇子 茂座 大殿於 久方 天傳來 白雪仕物 往來乍 益及常世

やすみしし 吾が大君 高てる 日の御子 しきます 大殿のへに 久方の 天傳ひ來る 雪じもの 行きかよひつつ いや敷きいませ

(一)タカテルと四音に訓むを可とする。——[五〇]參照

(二)常は座の誤とする久老説可。シキイマセと讀むべきである。

(二六二)

反歌一首

矢釣山 木立不見 落亂 雪驪 朝樂毛
八釣山木立も見えず散りまがふ雪のはだれの朝たぬしも

(一)仙覺訓にハダラとあるが、驪(クロウマ)をハダラと訓むべき理由を詳にせぬ。さりながら何か根據があつた事と思はれるから、姑く之に従うてハダレと訓して置く。——キホヒテ、サワギテ、コマウツなど訓したものがあつたが、意をなさせぬ。

參照 ハダレ

(二六三)

從近江國上來時、刑部垂磨作歌一首

馬莫疾 打莫行 氣並而 見氏毛和我歸 志賀爾安良七國

馬なとく打ちてな行きそけ並べて見てもわが行く志賀にあらなくに

(一) 古義に馬莫を吾馬の誤としたのは不當である。此ナは後世ならば「馬ナモトク」といふナモに該當するものである。此歌の意は志我から京へかへる人が見送りに来た情人に「相並べて志賀(汝)にいひかけたのである)を見て行くことが出来ぬのであるから駒を早めるな」というたのである。——疾はイタクと訓してもよいが、イタクの原語はトクであることを知らねばならぬ。

(二六四)

柿本朝臣人麻呂從近江國上來時至宇治河邊作歌一首

物乃部能 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經浪乃 去邊白不母ものふの八十うぢ川の網代木にいざよふ波の行方知らずも

參照 モノノフ、イザヨフ

(二六五)

長忌寸奥麻呂歌一首

苦毛 零來雨可 神之崎 狹野乃渡爾 家裳不有國 苦しくも降り来る雨か神の崎さ野の渡に家もあらなくに

(一) 舊訓ミノノサキとあるは、ミヲといふ語を神の意に用ひることがあるが、其は或る場合に限られ、カミと全然同義語とすることは出来ぬ。——其は恰も大神君をナホミツの君と稱へることの

故を以て、天照大神をアマテラスオホミツといひ得ざると同じ理である。——此神ノ崎は近江の神崎郡のことであらう。

參照 カミのサキ

(二六六)

柿本朝臣人麻呂歌一首

淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努爾 古所念 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬに古おもほゆ

(二六七)

志貴皇子御歌一首

牟佐佐婢波 木末求跡 足日木乃 山能佐都雄爾 相爾來鴨 むささびは木ぬれ求むと足びきの山のさつをに逢ひにけるかも

參照 ムササビ

(二六八)

長屋王故郷歌一首

吾背子我 古家乃里之 明日香庭 乳鳥鳴成 島待不得而 吾が背子が古家の里の明日香には千鳥なくなり君まちかねて

右今案從明日香遷藤原宮之後作此歌歟

(一) フルへ、イニシへといふ訓もあるが、久老説の如くフルヤと訓むべきであらう。

(二) 鳥は君の誤とする説(眞淵)を可とする。

(二六九)

磯前 携手回行者 近江海 八十之湊爾 鶴佐波二鳴 未詳

磯の崎漕ぎたみ行けば近江の海八十の水門にたづさはになく

(二七四)

吾船者 枚乃湖爾 撈將泊 奥部莫避 左夜深去來

吾が船は比良の水門にこぎ泊てむ沖へな距りさ夜ふけにけり

(二七五)

何處 吾將宿 高島乃 勝野原爾 此日暮去者

いづくにか吾は宿らむ高島の勝野が原に此日暮れなば

(二七六)

妹母我母 一有加母 三河有 二見自道 別不勝鶴

一本云、水河乃、二見之自道、別者、吾勢毛吾毛、獨可毛將

去

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる

(一本)三河の二見の道よ別れなば吾が夫も吾も獨かも行かむ

參照 フタミの道

(二七七)

速來而母 見手益物乎 山背 高槻村 散去奚留鴨

とく來ても見てましものを山しろの高槻の村散りにけるかも

(一) 久老はハヤと改訓した。或は然らむ。

(二) 高き槻群の意とする説(久老)は非。其意ならば山背といふ大名を

阿倍女郎屋部坂歌一首

人不见者 我袖用手 將隱乎 所燒乍可將有 不服而來來

人見ずば我袖もちて隠さむを焼けつつかあらむ着ずて來にけり

(一) 乍はテにあたる字の誤としてヤカエテカアラムと訓むべしとする

説がある(新考)。或は然らむ。

參照 ヤへ坂

(二七〇)

高市連黑人髷旅歌八首

客爲而 物戀敷爾 山下 赤乃曾保船 奥撈所見

旅にして物こほしきに山下の赤のそぼ船沖漕げり見ゆ

(一) オキニヨケ見ユ又はオキヲヨケミユと訓して居るが、タナビケリ

見ユ(三三三)、船出セリ見ユ(四〇五)などいふ例によれば沖ヨケリミユと

訓むのであらう。

(二七一)

櫻田部 鶴鳴渡 年魚市方 鹽干二家良進 鶴鳴渡

さくら田へたづ鳴きわたるあゆち潟潮干にけらし鶴なき渡る

(二七二)

四極山 打越見者 笠縫之 島撈隱 棚無小舟

しはつ山打越え見れば笠縫の島こぎかくる棚なし小舟

參照 シハツ山、タナナシヲフネ

(二七三)

用ひずして郷名又は其界限の稱呼を冠した筈である。

(二七八)

石川少郎歌一首

然之海人者 軍布^(一)苜鹽燒 無暇 髮梳乃少櫛 取毛不見久爾
しかの海人はめかり鹽燒き暇なみくしげの小櫛取りも見なくに

右今案石川朝臣君子號曰少郎子也

(一)メに軍布といふ字をあてた理由は判明せぬ。或は昆布の誤記か。
(二)此二字をクシゲと訓むことについて疑を挾むものもあるが、弓削をユゲと稱へるところを見ると、クシケヅルをクシゲというたこともあり得たとせねばならぬ。但し髮梳は借字で、櫛匣の意なることは勿論である〔古義〕。ケヅリ〔新考〕、カミスキ〔新訓〕の如き訓は餘りに今やうめきて居る。

(二七九)

高市連黑人歌二首

吾妹兒二 猪名野者令見都 名次山 角松原 何時可將示
吾妹子に猪名野は見せつ名すき山つぬの松原いつか示さむ

(二八〇)

去來兒等 倭部早 白菅乃 眞野乃榛原 手折而將歸

いざ子ども大和へ早く白菅の眞野の榛原手折りて行かむ

(二八一)

たく領布のかけまく欲しき妹が名を此の勢の山にかけばいかにあらむ(かへばいかにあらむ)

參照 タクヒレ、セノヤマ

(二八六)

春日藏首老即和歌一首

宜奈倍 吾背乃君之 負來爾之 此勢能山乎 妹者不喚^(一)

よろしなべ吾がせの君のおひ來にし此のせの山をいもとは呼ばなく

(一)從來ヨバス、ヨバツ等と訓したが、第一句にナベとあるから、「妹と喚ばぬことは」といふ意としてヨバナクと訓まればならぬ。セの山は本來山春の意を以て號けたのであるが〔語誌參照〕、兄、妹にも通するので、「兄の君の(名に)負はれた此の山を妹と呼ばぬのは當然である」というたのである。——山が兄(妹)の名を負うたと解するは非。従つて第二句も君かと訓むよりも、同義ではあるが君ノと訓した方が誤解が少いやうである。

參照 ナベ、ヨロシナベ、ク

(二八七)

幸志賀時、石上卿作歌一首 名闕

此間爲而 家八方向處 白雲乃 棚引山乎 超而來二家里
こゝにして家やもいづく白雲のたな引く山を超えて來にけり

(二八八)

萬葉集(卷第三)

黑人妻答歌一首

白菅乃 眞野之榛原 往左來左 君社見良目 眞野乃榛原
しらすげの眞野のはり原行くさ來さ君こそ見らめ眞野の榛原

(二八二)

春日藏首老歌一首

角障經 石村毛不過 泊瀬山 何時毛將超 夜者深去通都
角さはふ磐余も過ぎず初瀬山いつかも超えむ夜は更けにつつ

(二八三)

高市連黑人歌一首

墨吉乃 得名津爾立而 見渡者 六兒乃泊從 出流船人
住の江の稷津に立ちて見わたせば武庫の泊ゆ出づる船人

(二八四)

春日藏首老歌一首

燒津邊 吾去鹿齒 駿河奈流 阿倍乃市道爾 相之兒等羽裳
やい津邊に吾行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし子等はも

(二八五)

丹比真人笠麻呂往紀伊國超勢能山時作歌一首

拷領布乃 懸卷欲寸 妹名乎 此勢能山爾 懸者奈何將有^(一)可倍
安良幸介

穗積朝臣老歌一首

吾命之 眞幸有者 亦毛將見 志賀乃大津爾 緣流白浪
わが命のまさきくあらば又も見む志賀の大津によする白波

(二八九)

右今案不審行幸年月

間人宿禰大浦初月歌二首 大浦紀氏見六帖

天原 振離見者 白眞弓 張而懸有 夜路者將吉
天の原振りさけ見れば白眞弓はりてかけたり夜路はよけむ

(二九〇)

椋橋乃 山乎高可 夜隱爾 出來月乃 光乏寸

くら橋の山を高みか夜こもりに出で來る月の光ともしき

(二九一)

小田事勢能山歌一首

眞木葉乃 之奈布勢能山 之奴波受而 吾超去者 木葉知家武
眞木の葉のしなふ勢の山しぬばずて吾が超えゆけば木の葉知り

けむ

(一)刊本には訓をかき、他の本にはナタのツカフと訓してあるが、雅澄が六帖を引いて事の下に「主」を脱したものとし、コトヲシとしたのが當を得て居るやうである。

參照 シナフ

(二九二)

角麻呂歌四首

久方乃 天乃探女之 石船乃 泊師高津者 淺爾家留香裳
久かたの天のさぐ女が石船のはてし高津はあせにけるかも

(一) 角は巾の誤で、文武朝の選俗僧録ノ兄麻呂(續紀)のことであらう
といはれる(契沖、雅澄)。

參照 アマのサケメ

(二九三)

鹽干乃 三津之海女乃 久具都持 玉藻將莉 率行見

潮干のみつの海女のくぐつもち玉藻莉るらむいざ行きて見む

(一) 舊訓アマメとあるが、神田本に女の字がないのを正しとしてアマ
と訓むべきである。雅澄説の如くアマメといふ語の用例がないのみ
ならず、こゝは女人に限つたことではない。

參照 シホヒ(枕)、クケツ

(二九四)

風乎疾 奥津白浪 高有之 海人釣船 濱眷奴

風をいたみ沖つ白波高からし海人の釣船濱にかへりぬ

(一) 眷は他の本には眷としてある。いづれにしてもカヘリと訓む筈が
ないから、「飯」の誤字ではあるまいか。

(二九五)

清江乃 木笑松原 遠神 我王之 幸行處

住の江の岸の松原遠つ神我が大王のいでましとところ

(一) 笑を失とした本もあるが、其上に「志」の字を脱したもので、笑は
ノの假字なりとする畧解の説を可とする。

(二九六)

田口益人大夫任上野國司時、至駿河淨見埜作歌

二首

廬原乃 清見之埜乃 見穗乃浦乃 寬見乍 物念毛奈信

いほ原の清見が埜の三保の浦のゆたけき見えつつ物思もなし

(二九七)

晝見騰 不飽田兒浦 大王之 命恐 夜見鶴鴨

晝見れど飽かぬ田子うら大王の命かしくみ夜見つるかも

(二九八)

辨基歌一首

亦打山 暮越行而 廬前乃 角太河原爾 獨可毛將宿

まつち山夕越え行きていほさきのすみだ河原に獨かもねむ

右或云、辨基者春日藏首老之法師名也

參照 マツチ山、イホサキ、スミダ河原

(二九九)

大納言大伴卿歌一首 未詳

奥山之 菅葉凌 零雪乃 消者將惜 雨莫零行年

奥山の菅の葉しぬぎ降る雪のけなば惜しけむ雨な降りそね

參照 キホヒ、キノヒ

(三〇三)

柿本朝臣麻呂下筑紫國時、海路作歌二首

名細寸 稻見乃海之 奥津浪 千重爾隱奴 山跡島根者

なくはしき稻見の海の沖つ波千重にかくりぬ大和しま根は

參照 ナクハシキ

(三〇四)

大王之 遠乃朝廷跡 蟻通 島門乎見者 神代之所念

大王の遠の御門とありかよふ島とを見れば神代しおもほゆ

(一) 舊訓カミヨシゾオモフとあるが、契沖訓のカミヨシオモホユの方
がよい。

參照 アリカヨフ、シマト

(三〇五)

高市連黑人近江舊都歌一首

如是故爾 不見跡云物乎 樂浪乃 舊都乎 令見乍本名

かく故に見じといふものをささ波の舊き京を見せつつもとな

右歌或本曰、小辨作也未審此小辨者也

參照 モトナ

(三〇六)

幸伊勢國之時、安貴王作歌一首

伊勢海之 奥津白浪 花爾欲得 婁而妹之 家裏爲

(一) 舊訓にはフリソネとあるが、宣長説の如くフリソネであらねばな
らぬ。但し行を所の誤とすることについて尙一考を要する。集中ソ
ネに行年の字をあてた例は他にもあるから、行年をソネと訓む理由
があるのかも知れぬ。

(三〇〇)

長屋王駐馬寧樂山作歌二首

佐保過而 寧樂乃手祭爾 置幣者 妹乎目不離 相見染跡衣

佐保すぎて奈良のたむけに置くぬさは妹を目かれず逢ひ見しめ
とぞ

參照

タムケ、メサ

(三〇一)

磐金之 凝敷山乎 超不勝而 哭者泣友 色爾將出八方

岩が根のごごしき山を超えかねて音には泣くともいろに出でめ
やも

參照

ナキイサチ、ナシ

(三〇二)

中納言安倍廣庭卿歌一首

兒等之家道 差間遠鳥 野于玉乃 夜渡月爾 競敢六鴨

子等が家道や、間遠きをぬばたまの夜渡る月に競ひあへむかも

(一) 舊訓キホヒとあるが、千陸の訓の如くキノヒを可とする。

伊勢の海の沖つ白波花にもがつつみて妹が家づとにせむ
(三〇七)

博通法師往紀伊國見三穗石室作歌三首

皮爲酢寸 久米能若子我 伊座家流 一云 三穗乃石室者 雖見

不飽鴨 一云安禮尔 家留可毛

はたすき久米の稚子がいましける(けむ)三穗の石屋は見れど
飽かぬかも(荒れにけるかも)。

(一) 舊訓にはシノスキとあるが、皮は「肌」の假字でハタと訓むので
あらう。

参照 ハタスキ、クメのワクゴ

(三〇八)

常磐成 石室者今毛 安里家禮騰 住家類人會 常無里家留
ときはなす石屋は今もありけれど住みける人ぞ常なかりける

(三〇九)

石室戸爾 立在松樹 汝乎見者 昔人乎 相見如之
石屋戸に立てる松の木汝を見れば昔の人を相見る如し

(三一〇)

門部王詠東市之樹作歌一首

東市之殖木乃 木足左右 不相久美 宇倍吾戀爾家利
ひむがしの市の殖木の木足まで逢はず久しみるべ戀ひにけり

(一) 舊訓サザレナミとあるが、ササナミノと訓んで差支がないのみならず、此ノトセ川は或は近江の地名かとも思はれるから、姑くササナミノと訓して置く。

参照 ノトセ川

(三一五)

暮春之月幸芳野離宮時、中納言大伴卿奉勅作歌
一首并短歌 未達奏上歌

見吉野之 芳野乃宮者 山可良志 貴有師 水可良思 清有師

天地與 長久 萬代爾 不改將有 行幸之宮

みよし野の 芳野の宮は 山からし 貴くあらし 水からし

さやくくあらし 天地と 長く久しく 萬代に かはらずあら

む いでましの宮

(三一六)

反歌

昔見之 象乃小河乎 今見者 彌清 成爾來鴨

昔見しきさの小川を今見ればいよよさやく成にけるかも

(三一七)

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌

天地之 分時從 神佐備手 高貴寸 駿河有 布士能高嶺乎

天原 振放見者 度日之 陰毛隱比 照月乃 光毛不見 白雲

(二) 類聚集、神田本に吾の字なきを可とする。

(三一一)

按作村主益人從豐前國上京時作歌一首

梓弓 引豐國之 鏡山 不見久有者 戀敷牟鴨

あづさ弓引きとよ國の鏡山見ず久ならば戀ほしけむかも

(三一二)

式部卿藤原宇合卿被使改造難波塔之時作歌一首

昔者社 難波居中跡 所言奚米 今者京引 都備仁鷄里

昔こそ難波のなかと言はれはれめ今は京と都びにけり

(一) 塔は都に通ずる。

(二) 舊訓下二句をイマハミヤビトソナハリニケリとあるが、都は下の句につけ、京引は春海説の如く京刀又は京斗の誤としてミヤコトと訓むべきである。

参照 キナカ

(三二三)

土理宣令歌一首

見吉野之 瀧乃白浪 雖不知 語之告者 古所念

三吉野の瀧の白波知らねども語りしつげば古おもほゆ

(三二四)

波多朝臣少足歌一首

小浪 儀越道有 能登瀧河 音之清左 多藝通瀬毎爾
ささ波の磯こし道なるのとせ川音のさやけさたぎつ瀬毎に

母 伊去波伐加利 時自久會 雪者落家留 語告 言繼將往
不盡能高嶺者

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の

高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日の 影もかくろひ

照る月の 光も見えず しら雲も い行きはばかり 時じくぞ

雪は降りける 語りつき 言ひつき行かむ 富士の高嶺は

(三二八)

反歌

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺爾 雪波零家留

田子の浦よ打出で見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

(一) 從來タゴのウラユと訓して居るが、こゝは特にウラヨと訓まればならぬ。此ヨはチに通ずるのである。——語法要録参照。

(三二九)

詠不盡山歌一首并短歌

奈麻余美乃 甲斐乃國 打緣流 駿河能國與 已知其智乃 國

之三中從 出之有 不盡能高嶺者 天雲毛 伊去波伐加利 飛

鳥母 翔毛不上 燎火乎 雪以滅 落雪乎 火用消通都 言不

得 名不知 靈母 座神香聞 石花海跡 名付而有毛 彼山之

堤有海會 不盡河跡 人乃渡毛 其山之 水乃當焉 日本乃

山跡國乃 鎮十方 座神可聞 寶十方 成有山可聞 駿河有

不盡能高峯者 雖見不飽香聞

なまよみの 甲斐の國 打よする 駿河の國と 此方此方の
國のみ中ゆ 出立てる 富士の高嶺は 天雲も い行きはばか
り 飛鳥も とびも上らず 燃ゆる火を 雪もてけち 降る雪
を 火もて消ちつつ 言ひもかね 名づけも知らに 靈しくも
います神かも 瀬の海と 名づけてあるも 其山の つつめる
海ぞ 富士川と 人の渡るも 其山の 水のたぎちぞ 日の本
の 大和の國の 鎮めとも います神かも 寶とも 成れる山
かも 駿河なる 富士の高嶺は 見れど飽かぬかも

(一) 舊訓サカヒニとあるが、眞淵に従うてミナカニと讀むべきである。

(二) 古葉略類聚鈔に立とあるを可とする。

(三) 當の字舊訓アタリとあるが、雅澄説の如くタギチと訓すべきであ
る。但し必しも知の字を補ふことを要せぬ。

參照 ナマヨミ「枕」、ウチヨスル「枕」、セの海

(三三〇)

反歌

不盡嶺爾 零置雪者 六月 十五日消者 其夜布里家利

富士の根に降り置く雪はみな月の望に消えては其夜降りけり

(一) 從來ケヌレバと訓して居るが、之を口語に直すと、「六月十五日に
消えると其晩降る」といふ意になる。さりながらこゝは前提を用ひ
ては都合の悪い所で、「消えては其晩に(又も)降る」とあるべきであ

(三) 舊訓クニシレとあるのは不可解である。契沖に従うてクニノコト
ゴトと讀むを可とする。

(四) 舊訓ゴゴシキ、其他キハメシカ(契沖)、キハメケン(信名)、ゴゴシ
カモ(眞淵)などの訓があるが、前句とつづかぬ。極三此疑といふ意
とおもはれるから、此三字をサダメ(定)の意譯と見、次の句との續
合を考へて、假にサタマレル(定マリ、アルの約)と譯した。或はサタ
メタル(定メテ、アル)と訓む方がよいかも知れぬ。

此歌はイヨ(伊豫)といふ國名の語原と、伊豫の湯に關する古事を知
れば會得することが容易である。

參照 スメロギ、カムロギ、イヨの湯泉、イサニハ、オミの木

(三三三)

反歌

百式紀乃 大宮人之 飽田津爾 船乗將爲 年之不知久

百しきの大宮人のにぎた津に船のりしけむ年のしらなく

(一) 舊訓による。眞淵は飽は饒の誤寫であらうといふた。いづれにし
ても(八)の歌にもとづくものと思はれるから、ニギタツであらねば
ならぬ。末句の年は何が誤記があつたのではないかと思はれるが、
之を詳にし得ぬ。

(三三四)

登神岳 山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三諸乃 神名備山爾 五百枝刺 繁生有 都賀乃樹乃 彌繼嗣

爾 玉葛 絶事無 在管裳 不止將通 明日香能 舊京師者

萬葉集(卷第三)

るから、キエテハと改訓した。此場合のハは語勢を強める助語であ
る。——語法要録參照。

(三三一)

布士能嶺乎 高見恐見 天雲毛 伊去羽計 田菜引物緒

富士の嶺を高み恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを

右一首高橋連蟲麻呂之歌中出焉、以類載此

(三三二)

山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首并短歌

皇神祖之 神乃御言乃 敷座 國之盡 湯者霜 左波爾雖在

島山之 宜國跡 極此疑 伊豫能高嶺乃 射狹庭乃 崗爾立之

而 歌思 辭思爲師 三湯之上乃 樹村乎見者 臣木毛 生繼

爾家里 鳴鳥之 音毛不更 痕代爾 神佐備將往 行幸處

すめみおやの 神の御言と 敷きます 國のことごと 湯はし

も さはにあれども 島山の よろしき國と 定まれる 伊豫

の高嶺の いさ庭の 岡に立たして 歌おもひ 言おもはしし

み湯への 木むらを見れば 臣の木も おひつぎにけり 鳴

く鳥の 聲もかはらず 遠き世に 神さび行かむ いでまし處

(一) 舊訓スメロギ(眞淵訓カムロギ)とあるが、スメロギ(カムロギ)に

は祖の意は少しも含まれて居らぬ。こゝは祖の字が大切であるから

スメミカヤノと訓まればならぬ。

(二) 乃は刀の誤であらう。ミコトでなくては意が通ぜぬ。

山高三 河登保志呂之 春日者 山四見容之 秋夜者 河四清

之 且雲二 多頭羽亂 夕霧丹 河津者驟 每見 哭耳所泣

古思者

三諸の 神なび山に 五百枝さし 繁に生ひたる つがの木

彌次々に 玉かづら 絶ゆる事なく ありつつも やまず通は

む あすかの 古き都は 山たかみ 川遠白し 春の日は 山

し見がほし 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に たづはみだれ

夕霧に 蛙はさわぐ 見る毎に 音のみし泣かゆ 古おもへは

參照 カムナビ、カハツ

(三三五)

反歌

明日香河 川余藤不去 立霧乃 念應過 孤悲爾不有國

明日香川かは淀去らず立つ霧の思ひすぐべき戀ならなくに

(三三六)

門部王在難波見漁父燭光作歌一首

見渡者 明石之浦爾 燒火乃 保爾曾出流 妹爾戀久

見渡せば明石の浦にともす火の穂にぞ出でぬる妹に戀ふらく

(一) 舊訓タケルヒとあるが、繼續格を用ひる場合でないので、長流は
トモスヒとあらためた(古義同断)。

(三三七)

或娘子等賜_ニ裏乾_ニ戲請_ニ通觀僧之咒願_ニ時、通觀作歌一首

海若之 奧爾持行而 雖放 宇禮牟會 此之將死還生_(一)
わたつみの沖にもち行きて放つともうれむぞこれがよみかへるらむ

(一) 舊訓シニカヘリイキムとあるが、死還生はヨミカヘリの意譯と見るべきである〔信名〕。さりながらヨミカヘリナムとしたのは〔考〕正しい時格ではない。——其場合には第三句も放チヌトモであらねばならぬ。

參照 ウレムゾ

(三三八)

太宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薰如 今盛有
あを丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛なり

(三三九)

防人司祐大伴四繩歌二首

安見知之 吾王乃 敷座在 國中者 京師所念
やすみしし吾が大君のしきませる國の中には都しおもほゆ

(三三〇)

藤浪之 花者盛爾 成來 平城京乎 御念八君

藤なみの花は盛になりにけり奈良の都をおもほすや君

參照 フヂナミ

(三三一)

帥大伴卿歌五首

吾盛 復將變_(一)八方 殆 寧樂京師乎 不見歟將成
吾が盛またをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ

(一) 舊訓カヘレとあるが宣長に従うてナチと訓むべきである。

參照 ナチ、ホトホトニ

(三三二)

吾命毛 常有奴可 昔見之 象小河乎 行見爲

吾がいのちも常にあらぬか昔見しきさの小河を行きて見むため

(三三三)

淺茅原 曲曲二 物念者 故郷之 所念可聞

あさ茅原つばらつばらに物思へば古りにし里しおもほゆるかも

參照 アサチ原、ツバラ

(三三四)

萱草 吾紐二付 香具山乃 故去之里乎 不忘之爲

わすれ草吾が紐につく香山の古りにし里を忘れぬがため

(三三五)

吾行者 久者不有 夢乃和太 端者不成而 淵有毛_(一)

吾が行きは久にはあらじ夢の渡せとは成らずて淵にてあれも

(一) 舊訓フチトアリトモとあるが、久老に従うてフチニテアレモと讀むを可とする。モは感動詞である。

參照 イメのヲタ

(三三六)

沙彌滿誓詠_レ蘇歌一首

白縫 筑紫乃綿者 身著而 未者伎禰杼 暖所見
しらぬひ筑紫のわたしは身につけて未だは着ねどあたたけく見ゆ

參照 シラヌヒ〔枕〕、ヲタ

(三三七)

山上憶良罷宴歌一首

憶良等者 今者將罷 子將哭 其彼母毛 吾乎將待會
憶良らは今はまからむ子泣くらむ其子の母も吾を待つらむぞ

(一) 彼の字類聚鈔に子とあるに従うてソノコノハハモと訓むべきである。久老は原字の儘ソモソノ母モと訓したが、古典にソモといふ語を此やうに用ひた例がない。

(三三八)

太宰帥大伴卿讚_レ酒歌十三首

驗無 物乎不念者 一杯乃 濁酒乎 可飲有良師
しるし無き物を念はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあらし

(三三九)

酒名乎 聖師負師 古昔 大聖之 言乃宜佐

酒の名を聖とおほせし古の大き聖の言のよろしさ

(三四〇)

古之 七賢 人等毛 欲爲物者 酒西有良師

古の七の賢き人たちも欲りせしものは酒にしあるらし

(三四一)

賢跡 物言従者 酒飲而 醉哭爲師 益有良之

さかしらとも言はむゆは酒飲みて酔ひ泣きするしまさりたるらし

(一) サカシミトと訓するものがあるが、サカシミトといへばサカシミテといふ意となり、此場合にはあたらぬ。こゝは賢だてといふことであるから、サカシラであらねばならぬ。トはニと同様に用ひられるものである。——語法要録參照。

參照 サカシラ

(三四二)

將言爲便 將爲便不知 極 貴物者 酒西有良之

言はむすべ爲むすべ不知極まりて貴きものは酒にしあるらし

(三四三)

中々二 人跡不有者 酒壺二 成而師鳴 酒二染嘗

なかなか人にあらずは酒壺になりてしがも酒にしみなむ

(一) 舊訓ナリテシカモとあるが、畧解に従ひナリニテシガモと七音に

訓む方が口調がよい。完了助動詞ニとテとを重ねた例は第一四巻に「物いはず来ニテ」(三六)とあり、古い語法である。ニテシとテシとの時格上の相違は極めて僅微で、この場合の如きはいづれでもよいのであるが、強て六音に讀まればならぬ理由がない。

參照 ナカナカニ

(三四四)

痛醜 賢良乎爲跡 酒不飲 人乎就見者 猿二鴨似

あなみにく賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る

參照 發は熱の變體であらう。

(三四五)

價無 寶跡言十方 一杯乃 濁酒爾 豈益目八

價なき寶といふとも一つの濁れる酒にあにまさめやも

(一) 類聚古集に豈益目八方とあるによる。

(三四六)

夜光 玉跡言十方 酒飲而 情乎遣爾 豈若目八目 一方云

よる光る玉といふとも酒のみて心をやるに豈しかめやも

(三四七)

世間之 遊道爾 冷者 醉哭爲爾 可有良師

世の中の遊の道におかしきは醉泣するにあるべかるらし

(一) 宣長は冷を冷の誤とした「玉小琴」。但し訓は契沖に従うてオカシとする方がよいやうである。

沙彌蒲誓歌一首

世間乎 何物爾將譬 且開 撈去師船之 跡無如

世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎにし船の跡なき如し

(三五二)

若湯座王歌一首

葦邊波 鶴之哭鳴而 湖風 寒吹良武 津乎能崎羽毛

葦邊にはたづが音鳴きてみなと風寒く吹くらむつをの崎はも

(一) 一本には湖とある。いづれもミナト(水門)の假字に用られたのである。

(三五三)

釋通觀歌一首

見吉野之 高城乃山爾 白雲者 行憚而 棚引所見

三吉野の高城の山に白雲は行きはばかりて棚引けり見ゆ

(三五四)

日置少老歌一首

繩乃浦爾 鹽燒火氣 夕去者 行過不得而 山爾棚引

なはの浦に鹽やく煙夕ざれば行き過ぎかねて山にたなびく

(三五五)

生石村主真人歌一首

大汝 少彦名乃 將座 志都乃石室者 幾代將經

萬葉集(卷第三)

(三) 舊訓アリヌベカラシとあるが、此場合にはアリヌといふ完了格を用ひる必要がない。アルベカアラシとも、アルベカルラシとも訓むべきである。

(三四八)

今代爾之 樂有者 來生者 蟲爾鳥爾毛 吾羽成奈武

今の世にし楽しく在らば來む世には蟲に鳥にも吾はなりなむ

(三四九)

生者 遂毛 死物爾有者 今生在間者 樂乎有名

生ける人遂にも死ぬるものならば此世なる間は楽しくをあらな

(一) 字についてよめばイケルモノであらねばならぬが、第二句のモノと重複する嫌があるのみならず、生人といふ意で生者の二字を用ひることも決して不當ではないから、舊訓の如くイケルヒトと訓むべきである。

(二) 生者必滅は自然の理であるが、こゝは態と假定前提を用ひたのでシヌルモノナレバと訓しては理由を示す意になつて、甚堅くるしいのみならず、末句とも釣合がとれぬ。

(三) 舊訓コノヨナルマハとあり、類聚古集には今在間者(イマアルホドハ)とあるが、或はイマイケルマハと訓むのかも知れぬ。

(三五〇)

默然居而 賢良爲者 飲酒而 醉泣爲爾 尙不如來

もだ居りて賢しらすは酒飲みて醉ひ泣きするに尙しかずけり

(三五二)

上古麻呂歌一首

今日可聞 明日香河乃 夕不離 川津鳴瀬之 清有良武

今日可も明日香の川の(明日香川今もかもとな)夕さらず蛙鳴

(三五六)

參照 シツの石室

大なむちすくな彦なのいましけむしづの石屋はいく世経ぬらむ

(三五七)

山部宿禰赤人歌六首

繩浦從 背向爾所見 奥島 撈回舟者 釣爲良下

なはの浦ゆそがひに見ゆる沖つ島こぎたむ舟は魚釣すらしも

(一) 舊訓ツリナスラシモとあるが、テの字蛇足である。宣長はツリセスラシモ、雅澄はツリシスラシモと改めた。シといふ助語は此場合には不適當である。又セスラシモといふべき理由がない。釣はナツリ(魚釣)と訓むのであらう。

(三五八)

武庫浦乎 撈轉小舟 粟島矣 背爾見乍 乏小舟

むこの浦を漕ぎたむ小舟あは島をそがひに見つともしき小舟

(三五九)

阿倍乃島 宇乃住石爾 依浪 間無比來 日本師所念

(三六一)

あべの鳥鶉のすむ石イッによる波の間なく此ごろ大和しおもほゆ

(三六〇)

鹽干去者 玉藻刈藏(二) 家妹之 濱褻乞者 何矣示

潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が濱づと乞はば何を示さむ

(一) カリツメを誤訓又は藏を誤字とする説があるが、カリツメは茹集めといふ意、藏は借字であらう。

(三六一)

秋風乃 寒朝開乎 佐農能崗 將超公爾 衣借益矣

秋風(一)のさむき朝(二)けをさぬの岡超(三)ゆらむ君に衣かさましを

(一) 舊訓サノノチカとあるが、之は「寒き朝明をさ寝」に「狭野」をいひかけたのであるから、サヌと訓まればならぬ。

(三六二)

美沙居 石轉爾生 名乘藻乃 名者告志五余 親者知友

みさご居るいそまに生ふるなのりその名はのらしてよ親は知るとも

(一) 五は五の誤とする契沖説可。

(三六三)

或本歌曰

美沙居 荒磯爾生 名乘藻乃 告名者告世 父母者知友

みさご居るありそに生ふるなのりそのよし名はのらせ親は知る

とも

(一) 告は吉の誤とする千蔭説可。

(三六四)

笠朝臣金村鹽津山作歌二首

大夫之 弓上振起 射都流矢乎 後將見人者 語繼金

ますら男の弓はず振り起し射つる矢を後見む人は語りつくがね

(三六五)

鹽津山 打越去者 我乘有 馬會爪突 家戀良霜

しほつ山打越え行けば我が乗れる馬ぞ爪づく家戀ふらしも

(三六六)

角鹿津乘船時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

越海之 角鹿乃濱從 大舟爾 眞梶貫下 勇魚取 海路爾出而

阿倍寸管 我傍行者 大夫乃 手結我浦爾 海未通女 鹽燒炎

草枕 客之有者 獨爲而 見知師無美 綿津海乃 手二卷四而

有 珠手次 懸而之努櫃 日本島根乎

越の海の 角賀の濱(一)ゆ 大船に まかち貫きおろし いさなと

り 海路(二)に出でて あへきつつ 我が漕ぎ行けば ますら男の

手結(三)が浦に 海人少女 鹽やく煙 草枕 旅にしあれば 獨し

て 見るしるしなみ 海神(四)の 手にまかしたる 珠だすき か

(三七七)

出雲守門部王思京歌一首

飯海乃 河原之乳鳥 汝鳴者 吾佐保河乃 所念國

おうの海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保川のおもほゆらくに

(三七八)

(一) 意字郡のことであるが必しも脱字ではない。

山部宿禰赤人登春日野作歌一首并短歌

春日乎 春日山乃 高座之 御笠乃山爾 朝不離 雲居多奈引

容鳥能 間無數鳴 雲居奈湏 心射左欲比 其鳥乃 片戀耳爾

晝者毛 日之盡 夜者毛 夜之盡 立而居而 念會吾爲流 不

相兒故荷

春の日を かすがの山の 高座(一)の 三笠の山に 朝さらす 雲

ゐたなびき かほとりの 間なく數鳴く 雲ゐなす 心いざよ

ひ 其鳥の 片戀のみに 晝はも 日のことごと 夜はも 夜

のことごと 立ちてゐて 思ひぞ吾がする 逢はぬ子故に

(一) 眞淵はハルヒと四音に訓した。語義からいへばどちらでも差支はない。チはヨに通ずる感動助語である。

(三七九)

カホトリ、タカクラ

反歌 高松之 三笠乃山爾 鳴鳥之 止者繼流 戀哭爲鳴

參照 アヘキ、タユヒの浦

(三六七)

反歌

越海乃 手結之浦矣 客爲而 見者乏見 日本思櫃

越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ大和しぬびつ

(三六八)

石上大夫歌一首

大船二 眞梶繁貫 大王之 御命恐 磯廻爲鴨

おほ船にま楫しじ貫き大君の命かしこみ磯みするかも

右今案、石上朝臣乙麻呂任越前國守蓋、此大夫歟

(三六九)

和歌一首

物部乃 臣之壯士者 大王 任乃隨意 開跡云物會

もののふの臣のをとこは大王のまけのまにまに聞くとふものぞ

右作者未審、但笠朝臣金村之歌中出也

(三七〇)

安倍廣庭卿歌一首

雨不零 殿雲流夜之 潤濕跡 戀乍居寸 君待香光

雨降らずとの曇る夜をぬれひづと戀ひつつをりき君待ちがてら

(一) 之を乎の誤とする古義の説可。

高座の御笠の山に鳴く鳥の止みてはつげる戀もするかも

(一) ヤメバツガルルと訓するは非。ツガルルは口語に直せばツギ得ルであるが、こゝは鳥の音のやうに斷續するといふ意であるから、ヤミテハツゲルといはねばならぬ。ツゲルはツツクと畧々全義である。

(二) 哭は喪の誤とする眞淵説可。

(三七四)

石上乙麻呂朝臣歌一首

雨零者 將蓋跡念有 笠乃山 人爾莫令蓋 霽者漬跡裳
雨降らば着むと念へる笠の山人になきせそ濡れはひづとも

(三七五)

湯原王芳野作歌一首

吉野爾有 夏實之河乃 川余杼爾 鴨會鳴成 山影爾之氏
吉野なる茶摘の川の川淀に鴨ぞなくなる山蔭にして

(三七六)

湯原王宴席歌二首

秋津羽之 袖振妹乎 珠速 奧爾念乎 見賜吾君
蜻蛉羽の袖ふる妹を玉匣おくに思ふを見たまへ吾君

(三七七)

青山之 嶺乃白雲 朝爾食爾 恒見杼毛 目類四吾君
あを山の嶺の白雲朝にけに恒に見れどもめづらし吾君

(三八〇)

反歌

木綿疊 手取持而 如此谷母 吾波乞骨 君爾不相鴨
ゆふたたみ手に取りもちてかくだにも吾はこひなむ君に逢はぬかも

右歌者以天平五年冬十一月供祭大伴氏神之時、聊作此歌、故曰祭神歌。

(三八一)

筑紫娘子贈行旅歌一首

思家登 情進莫 風俟 好爲而伊麻世 荒其路
家思ふと心進むな風まちて好くしていませ荒き其みち

(三八二)

登筑波岳丹比真人國人作歌一首并短歌

雞之鳴 東國爾 高山者 左波爾雖有 明神之 貴山乃 儕立
乃 見杲石山跡 神代從 人之言嗣 國見爲 筑羽乃山矣 冬
木成 時敷時跡 不見而往者 益而戀石見 雪消爲 山道尙矣
名積敍吾來前

鷄が鳴く あづまの國に 高山は さはにあれども ふた神の
たふとき山の なみ立ちの 見が欲し山と 神代より 人のい

(三七八)

山部宿禰赤人詠故大政大臣藤原家之山池歌一首

昔者之 舊堤者 年深 池之激爾 水草生家里
いにしへの舊き堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり

(三七九)

大伴坂上郎女祭神歌一首并短歌

久堅之 天原從 生來 神之命 奥山乃 賢木之枝爾 白香付
木縣取付而 齊戸乎 忌穿居 竹玉乎 繁爾貫垂 十六自物
膝折伏手 弱女之 押日取懸 如此谷裳 吾者祈奈牟 君爾不
相可聞

久方の 天の原より 生れ來し 神の命 奥山の 賢木の枝に
しらかつく 木縣取つけて いはひ笠を いはひ掘りする 竹
珠を しじに貫きたり 鹿じ物 膝折りふせて たわや女の
おすひ取かけ かくだにも 我はこひなむ 君にあはぬかも
(一) 舊訓アハツカモとあるが、アハザラムことを祈る筈がないから、
久老説の如く、不相は借字として、アハヌカモと訓み、アハネと希
する意と解すべきである。

シラカツク、イハヒヤ、シシジモノ

ひつぎ 國見する 筑波の山を 冬ごもり 時じく時と 見ず
て行かば 益して戀しみ 雪消する 山路すらを なづみぞ吾
が來し

(一) 明を朋の誤としてフタカミと訓した童蒙抄の説を可とする。

(二) 契沖は此句と次の句との間にハルハクレドモ・シラユキノといふ
二句を脱したものとし、久老はハルニハアレド・フルユキノであら
うというた。いづれにしても誤脱のあることは疑がないが、次句に
トキシク時とある所を見ると、フルユキノに左祖せざるを得ぬ。其は
降雪が時ツクので、雪其ものがトキシクといふのではないからで
ある。赤人の不盡山の歌にも時ツクゾ雪ハフリケルとあるのであ
る。(三二七)。

(三) トキシキと訓したものが(新考、新訓)、此語は形容詞ではな
い。

(四) 前は並の誤で、並二は四を意味し、シの假字なりとする契沖説に
従ふべきである。

参照 トキシク

(三八三)

反歌

筑羽根矣 四十耳見乍 有金手 雪消乃道矣 名積來有鴨
筑波嶺をよそのみ見つつありかねて雪消の道をなづみけるかも

(三八四)

山部宿禰赤人歌一首

吾屋戸爾 幹藍種生之 雖干 不懲而亦毛 將蒔登會念
吾が宿にからみ種おふ枯れめども懲りずてまたも蒔かむとぞおもふ

(一) 舊訓ツミハヤシとあり、種の字を蘇又は蕪とした本も多いが、之を助字としてタネオフと訓むのであらう。

參照 カラキ

(三九五)

仙柘枝歌三首

霰零 吉志美我高嶺乎 險跡 草取可奈和 妹手乎取
霰ふるきしみが嵩をさかしみと草取りかねて妹が手を取る

右一首或云、吉野人味稻與^ニ柘枝仙媛^ニ歌也、但見^ニ柘枝傳^ニ無^レ有^ニ此歌^一

(一) 舊訓カナヤとあるが意が通ぜぬ。久老説に従うて假にカネテと訓して置く。肥前風土記の杵鳥曲にも類歌があるが、其歌にはクサトリカネテとある。

(二) 仙媛はヤマヒメと訓むのであらう。代匠記には仙をヒジリと訓したが、由豆流の訓の如くヤマヒトを可とする。

參照 キシマブリ

(三八六)

此暮 柘之左枝乃 流來者 梁者不打而 不取香聞將有
この夕つみのさ枝の流れ來れば梁はうたずて取らずかもあらむ

らし いさ子ども あべて漕ぎ出む 庭も静けし

(一) 舊訓マツヨトニとあるが、契沖に従うてマツカラニと訓むを可とする。従を候の誤としてサモラフニと訓した宣長説も悪くはない

參照 アベテ、ニハ

(三八九)

反歌

鳥傳 敏馬乃琦乎 許藝廻者 日本戀久 鶴左波爾鳴

鳥つたひみぬめの埼を漕ぎためは大和戀しくたづさはに鳴く

右歌若宮年魚鷹誦^レ之、但未^レ審^ニ作者^一

譬喩歌

(三九〇)

紀皇女御歌一首

輕池之 洎回往轉留 鴨尙爾 玉藻乃於丹 獨宿名久二

輕の池のうらま行きめぐる鴨すらに玉藻の上に獨り寝なくに

(一) 刊本納回とあるが、西本願寺本に洎回とあるを可とする。訓は攷證に従うてウラマユキメガルと八音に讀むべきである。——古義のモトホルは非。

(三九一)

造^ニ筑紫觀世音寺^一別當沙彌滿誓歌一首

鳥總立 足柄山爾 船木伐 樹爾伐歸都 安多良船材乎
とぶさたて足柄山に船木切り薪に伐り行きつあたら船木を

萬葉集(卷第三)

右一首 此下無詞諸本同

(三八七)

古爾 梁打人乃 無有世伐 此間毛有益 柘之枝羽裳
古に梁うつ人のなかりせば今もあらまし柘の枝はも

右一首若宮年魚鷹呂作

(一) 舊訓ココモとあり、古義はココニモと改訓したが、新考に景樹説によつてイマモと訓したのを可とする。古語のイには「此」といふ意もあつたのである。——語法要録參照。

(三八八)

羈旅歌一首并短歌

海若者 靈寸物香 淡路島 中爾立置而 白浪乎 伊與爾回之

座待月 開乃門從者 暮去者 鹽乎令滿 明去者 鹽乎令干

鹽左爲能 浪乎恐美 淡路島 磯隱居而 何時鳴 此夜乃將明

跡 待從爾 寢乃不勝宿者 瀧上乃 淺野之雉 開去歲 立動

良之 率兒等 安倍而擲出牟 爾波母之頭氣師

海神は あやしきものか 淡路島 中にたておきて 白波を

伊豫にもとほし 居待月 明石の門ゆは 夕されは 潮を滿た

しめ 明けされば 潮を干しむ 潮さみの 波を恐み 淡路島

磯がくり居て 何時しかも 此夜のあけむと 待つからに い

の寝らえねば 瀧の上の 淺野の雉 明けぬとし 立ちどよむ

參照 トアサタテ

(三九二)

太宰大監大伴宿禰百代梅歌一首

鳥珠之 其夜乃梅乎 手忘而 不折來家里 思之物乎

ねば玉の其夜の梅をた忘れて折らず來にけり思ひしものを

(三九三)

滿誓沙彌月歌一首

不見十方 孰不戀有米 山之末爾 射狹夜歷月乎外爾見而

思香

見えずとも誰戀ひざらめ山の端にいさよふ月をよそに見てしか

(三九四)

金明軍歌一首

印結而 我定義之 住吉乃 濱乃小松者 後毛吾松

しめ結ひて我が定めてし住の江の濱の小松は後も吾が松

(一) 神田本には余とあるが、金といふ姓は新羅歸化人で、元明朝にも伯耆守從五位下金上元といふ名が見える。明軍は恐らくは其一族で、旅人卿の資人に任ぜられたものであらう。

(三九五)

笠女郎贈^ニ大伴宿禰家持^一歌三首

託馬野爾 生流紫 衣染 未服而 色爾出來

二五七

つくま野に生ふる紫衣にそめいまだは着ずて色にいでにけり
(一) 從來イマダキズシテと訓して居るが、ケズテの代りにキズシテを
用ひるのは後世の語づかひである。——語法要録參照。——イマダ
ハと用ひた例は(三三六)にもある。

參照 ムラサキ

(三九六)

陸奥之 眞野乃草原 雖遠 面影爲而 所見云物乎

みちのくの眞野の草原遠けども面影にして見るとふものを

(三九七)

奥山之 磐本菅乎 根深目手 結之情 忘不得裳

おく山の岩もと菅を根深めて結びし心忘れかねつも

(三九八)

藤原朝臣八束梅歌二首

妹家爾 開有梅之 何時毛何時毛 將成時爾 事者將定

妹が家に咲きたる梅のいつもいつも成りなむ時に事は定めむ

(三九九)

妹家爾 開有花之 梅花 實之成名者 左右將爲

妹が家に咲きたる花の梅の花實にしなりなばかまくもせむ

(四〇〇)

大伴宿禰河麻呂梅歌一首

梅花 開而落去登 人者雖云 吾標結之 枝將有八方
梅の花咲きて散りぬと人はいへど吾しめ結ひし枝ならめやも

(四〇一)

大伴坂上郎女宴親族之日吟歌一首

山守之 有家留不知爾 其山爾 標結立而 結乃辱爲都

山守のありける不知其山にしめ結ひ立てて結の辱しつ

(四〇二)

大伴宿禰駿河麻呂即和歌一首

山守者 蓋雖有 吾妹子之 將結標乎 人將解八方

山守はけだし有りとも吾妹子が結ひけむ標を人解めやも

(四〇三)

大伴宿禰家持贈同坂上家之大嬢歌一首

朝爾食爾 欲見 其玉乎 如何爲鳴 從手不離有牟

あさにけに見まく欲りするその玉を如何にすれかも手ゆさけず

あらむ

(一) サケズ(舊訓)をカレズと改訓したのは非。但しサケズアラムと八

音に訓むべきである。——語法要録參照。

(四〇四)

娘子報佐伯宿禰赤鷹贈歌一首

千磐破 神之社四 無有世伐 春日之野邊 栗種益乎

ルベシと訓まればならぬ。

(四〇七)

大伴宿禰駿河麻呂娉同坂上家之二嬢歌一首

春霞 春日里爾 殖子水葱 苗有跡云師 柄者指爾家牟

春霞かすがの里に植こなき苗なりといひし枝はさしにけむ

(四〇八)

大伴宿禰家持贈同坂上家之大嬢歌一首

石竹之 其花爾毛我 朝旦 手取持而 不戀日將無

なでしこの其花にもが朝なさな手に取りもちて戀ひぬ日なけむ

(四〇九)

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

一日爾波 千重浪敷爾 雖念 奈何其玉之 手二卷難寸

一日には千重波しきに思へどもなぞ其玉の手にまきがたき

(四一〇)

大伴坂上郎女橋歌一首

橘乎 屋前爾殖生 立而居而 後雖悔 驗將有八

橘を宿に殖えおほし立ちて居て後にくゆともしるしあらめやも

(一) 拾穂本には屋戸とある。いづれにしても舊訓の如くヤドの假字と

すべきである。新訓には集中屋前とある字を盡くニハと改訓してあ

ちはやふる神の社しなかりせば春日の野邊にあはまかましを

(四〇五)

佐伯宿禰赤鷹贈歌一首

春日野爾 栗種有世伐 待鹿爾 繼而行益乎 社師留鳥

かすが野にあはまけりせば鹿まちにつぎて行かましをやしろし

ありとも

(一) 古點マツシカニとある。雅澄に従うてシシマチニと訓むべきであ

らう。

(二) 留鳥の二字はアミ(羅)の假字に用ひられた例があるから、トナミ

(鳥の網)とも訓み得るが、尙シトナミといふ語を釋き得ぬから、姑く

古義の訓に従ふ。さりながら次の歌によると此句に神を輕現する意

味が含まれて居たものと思はれる。

(四〇六)

娘子復報歌一首

吾祭 神者不有 大夫爾 認有神會 好應祀

吾が祭る神にはあらず益ら男につながる神ぞよく祀るべし

(一) 認は第十六卷にツナグの假字に用ひてあるから、こゝもツナガル

と訓すべきである。畧解にツナガルと訓したのを雅澄が片腹痛しと

罵倒し、「いがで神をツナグとはいはむ」と論じたのは固陋である。

ツナガル縁などともいうて必しも繩で縛ることのみをツナグといふ

のではない。

(二) 第四句で切り、結句は「よくまつれ」というたのであるから、マツ

るが、ヤドの語義は屋處で、宿ではないから、草木をヤドに植ゑた
というても少しも妨はないのである。——以下一々は註記せぬ。

(四二一)

和歌一首

吾妹兒之 屋前之橋 甚近 殖而師故二 不成者不止
吾妹子が宿の橋いと近く殖ゑてしからにならずは止まじ

(一) 舊訓ユエニとあり、故の字は通例ユエと訓み、且ユエといふ語も
既に雄略紀の歌に見え、古言と思はれるが、古典の用字例によれば
故は多くはカレ(カラ)の假字に充てられて居るから、こゝもカラと
訓むのであらう。語義上ユエといふべき場合ではない。

參照 ユエ

(四二二)

市原王歌一首

伊奈太吉爾 伎須賣流玉者 無二 此方彼方毛 君之隨意

いなだきに藏める玉は二つなしかにもかくにも君がまにまに
(一) 舊訓コナタカナタモとあるが、宣長の説の如くカニモカクニモ
と訓むのであらう。

參照 キスミ、イナダキ

(四二三)

大綱公人主宴吟歌一首

須麻乃海人之 鹽燒衣乃 藤服 間遠之有者 未著穢

參照 モモツタフ(枕)、イハミ

(四二七)

河内王葬豐前國鏡山之時、手持女王作歌三首

王之 親魄相哉 豐國乃 鏡山乎 宮登定流

大君のむつ魂あへや豐國の鏡の山を宮と定むる

參照 スメムツ

(四二八)

豐國乃 鏡山之 石戸立 隱爾計良思 雖待不來座

とよ國の鏡の山の石戸たて隠りにけらし待てど來まさぬ

(四一九)

石戸破 手力毛欲得 手弱寸 女有者 爲便乃不知苦

岩戸わる手力もがもたよわき女にしあればすべを知らなく

(一) 舊訓テヲヨツキ・ヲトメニシアレバとあるが、テヲヨツキといふ語
はない。女はヲトメともヲミナとも訓み得られぬことはいないが、こ
こは四六調としてタヨツキ・メニシアレバと訓むのであらう。

(四二〇)

石田王卒之時、丹生王作歌一首并短歌

名湯竹乃 十緣皇子 狹丹頼相 吾大王者 隱久乃 始瀨乃山

爾神佐備爾 伊都伎坐等 玉梓乃 人曾言鶴 於余頭禮可

吾聞都流 枉言加 我聞都流母 天地爾 悔事乃 世間乃 悔

須麻の海人の鹽燒衣の藤衣ま遠くしあればいまた著なれぬ

(四二四)

大伴宿禰家持歌一首

足日本能 石根許其思美 菅根乎 引者難三等 標耳曾結鳥

あしびきの石根ごしみ菅の根を引かばかたみと標のみぞゆふ

(一) 鳥は衍字であらう。焉とした本もある。

挽 歌

(四二五)

上宮聖德皇子出遊竹原井之時、見龍田山死人悲

傷御作歌一首

家有者 妹之手將纏 草枕 客爾臥有 此旅人何怜

家に在らば妹が手まかむ草枕旅にこやせる此旅人あはれ

(四二六)

大津皇子被死之時、磐余池陂流涕御作歌一首

百傳 磐余池爾 鳴鴨乎 今日耳見哉 雲隱去牟

百つたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

右藤原宮朱鳥元年冬十月

(一) 磐の枕詞はツヌサハフを例とし、「百傳ふ」を用いた例は他に見え
ぬから誤記であらうといふ説もあるが「宣長」、尙百集イハミ(屯聚)
とかゝるものと思はれる。

言者 天雲乃 曾久敏能極 天地乃 至流左右二 杖策毛 不

衝毛去而 夕衢占問 石卜以而 吾屋戸爾 御諸乎立而 枕邊

爾 齊戸乎居 竹玉乎 無間貫垂 木綿手次 可比奈爾懸而

天有 左佐羅能小野之 七相菅 手取持而 久堅乃 天川原爾

出立而 潔身而麻之乎 高山乃 石穗乃上爾 伊座都流香物

なゆ竹の とをよる御子 さにづらふ 吾が大君は こもりく

の 初瀬の山に 神さびて。いつき坐すと 玉づさの 人ぞい

ひつる およづれか 吾が聞きつる まがことか 我が聞つる

も 天地に 悔しきことの 世の中の 悔しきことは 天雲の

そぐへの極み 天地の 至れるまでに 杖つきも つかずも行

きて 夕占とひ 石うらもちて 吾が宿に 御諸をたてて 枕

邊に いはひ瓮を据ゑ 竹珠を 間なく貫きたり 木綿だすき

腕にかけて 天なる ささらの小野の いはひ菅 手に取りも

ちて 久かたの 天の川原に 出で立ちて みそぎてましを

高山の 岩穂の上に 座せつるかも

(一) 爾は誤字で、テに相當する假字であらう(宣長、雅澄)。

(二) 枉の字を狂とした本もある。狂言ならば宣長説の如くタワコトと
訓むのであらう。

(三) 宣長は無間をシジニと意訓した。いづれでもよい。

(四) 七相は石相の誤としてイハヒスゲと訓した雅澄説を可とする。ナ

ナニスゲ〔舊訓〕、ナナマスゲ〔眞淵〕、ナナフスゲ〔宣長〕などいふ訓があるが、こゝはイハヒスゲであらねばならぬ。

參照 サニヅラフ〔枕〕、オヨツレ、ソグへ、ユフケ、石ウラ、ミモロ、ユフダスキ、イハヒ菅

(四二二)

反歌

逆言之 枉言等可聞 高山之 石穗乃上爾 君之臥有

さかことのまが言とかも高山の岩ほの上に君がこやせる

(一) 枉を狂とする本のあることは上記の通りである。

(四二三)

石上 振之山有 杉村乃 思過倍吉 君爾有名國

石の上ふるの山なる杉むらの思ひ過ぐべき君にあらなくに

(四二四)

同石田王卒之時、山前王哀傷作歌一首

角障經 石村之道乎 朝不離 將歸人乃 念乍 通計萬口波

霍公 鳴五月者 菖蒲 花橋乎 玉爾貫 蕩爾將爲登 九

月能 四具禮能時者 黃葉乎 折挿頭跡 延葛乃 彌遠永 田

根乃、彌 萬世爾 不絶等念而一云大船 將通 君乎婆明日從 一

遠長介 君乎從 外爾可聞見牟 思ひつつ

明日者 角障はふ 石村の道を 朝かれず 行きけむ人の 思ひつつ

柿本朝臣人麻呂見ニ香具山屍ニ悲働作歌一首

草枕 霧宿爾 誰婦可 國忘有 家待莫國

草枕旅の宿りに誰がつまか國忘れたる家またまくに

(四二七)

田口廣麿死時、刑部垂麻呂作歌一首

百不足 八十隅坂爾 手向爲者 過去人爾 盖相牟鴨

百足らず八十隈坂にたむけせば過ぎにし人にけだし逢はむかも

(一) 隅は隈と通ずる。坂を路の誤としてクマチと訓したものがあるが

クマサカ(隈境)といふ語もあり得た筈である。——スミサカと訓す

(四二八)

土形娘子火ニ葬泊瀬山時、柿本朝臣人麻呂作歌一首

隱口能 泊瀬山之 山際爾 伊佐夜歷雲者 妹鴨有牟

こもりくの初瀬の山のまにいざよふ雲は妹にかもあらむ

(四二九)

溺死出雲娘子火ニ葬吉野時、柿本朝臣人麿作歌一首

山際從 出雲兒等者 霧有哉 吉野山 嶺霏霧

山のまゆいづもの子等は霧なれや吉野の山の嶺にたなびく

(四三〇)

萬葉集(卷第三)

通ひけまきは ほととぎす 鳴く五月には 菖蒲草 花橋を

玉にぬき(貫きはし) かづらにせむと 長月の しぐれの時

は もみぢ葉を 折かささむと 延ふ葛の いや遠永に (く

ずの根のいや遠永に) 萬代に 絶えじと思ひて (大船の思ひ

たのみて) 通ひけむ 君をも明日ゆ(君をあすゆか) 外にも

かも見む

右一首或云、柿本朝臣人麻呂作

(一) 口の字刊本には四とあるが、類聚古集による。

(二) 雅澄は句頭に「來」二字を脱したものとてキナクサツキハと訓し

た。或は然らむ。

參照 ツマサハフ〔枕〕、ナガツキ

(四二四)

或本反二歌首

隱口乃 泊瀬越女我 手二纏在 王者亂而 有不言八方

こもりくの初瀬少女が手にまける珠は亂れて在りといはずやも

(四二五)

河風 寒長谷乎 歎乍 公之阿流久爾 似人母逢耶

かは風の寒き初瀬を嘆きつつ君があるくに似る人も逢へや

右二首者或云、紀皇女葬後、山前王代、石田王作之也

八雲刺 出雲子等 黒髮者 吉野川 奥名豆蠅

やつもさす出雲の子等が黒髪は吉野の川のおきになづさふ

(一) 舊訓ヤクモタツとある所を見ると刺を誤字とせればならぬが、恐

らくはヤツモサスと訓むのであらう。出雲の枕詞はヤクモタツとヤ

ツモサスと二種あるが、此場合には後者の方が適はしいやうである。

ヤクモタツをヤクモサスと轉呼したとする説は牽強である。

(四三一)

過勝鹿眞間娘子墓時、山部宿禰赤人作歌一首并短

歌

古昔 有家武人之 倭文幡乃 帶解替而 廬屋立 妻問爲家武

勝牡鹿乃 眞間之手兒名之 奥柳乎 此間登波開杼 眞木葉哉

茂有良武 松之根也 遠久寸 言耳毛 名耳母吾者 不所忘

古に 有けむ人の 倭文はたの 帶ときかへて ふせ屋たて

妻問ひしけむ 勝鹿の 眞間の手兒名の おくつきを こゝと

は聞けど 眞木の葉や 茂くあるらむ 松が根や 遠く久しき

ことのみも 名のみも吾は 忘れえなくに

(一) 以下四句降味であるが、「訪ふ人のなきは」といふ意を補うて解す

べきで、従つて此句はシゲクアラムと訓み、假想と見るべきであ

らう。——シゲリタルラムといふべき理由がなく、次句の遠く久シ

キとも時格が一致せぬ。眞木の葉や、松が根やのやはいづれも感動

詞である。——語法要録參照。

(四三二)

反歌

吾毛見都 人爾毛將告 勝牡鹿之 間間能手兒名之 奥津城處
吾も見つ人にも告げむ勝鹿の眞間の手兒名のおくつき處

(四三三)

勝牡鹿乃 眞々乃入江爾 打靡 玉藻薊兼 手兒名志所念
勝鹿の眞間の入江に打なびき玉藻薊りけむ手兒名しおもほゆ

(四三四)

和銅四年辛亥、邊宮人見^ニ姫島松原美人屍^ニ哀慟作
歌四首

加麻蟠夜能 美保乃浦廻之 白管仕 見十方不怜 無人念者
或云、見者悲霜無人思丹

風早の三保の浦まの白つつじ見れどもさぶしなき人おもへば
(見れば悲しもなき人思ふに)

(一) 此題詞が以下四首の歌に副はぬものであることは左註にも記され
て居る通りで、此歌と次の一首とは紀伊國の三保の石屋の歌、
〔三七〕參照——後の二首は全く別題の歌である。雅澄は之を〔四三〕の
次に移した。

(四三五)

見津見津四 久米能若子我 伊爾家武 儀之草根乃 干卷惜裳

ニケリ又はナリケリとしては末句と時格が呼應せぬ。——語法要録
參照。

(一) 舊訓マクラカムとあり、五卷にも摩久良加武と假字書した例があ
るから、此時代マクラクといふ俚言の存したことは疑がないが、カ
ツラクと同じく正しい語法でないから、假字書せられて居らぬもの
までも之に準じて訓する必要があるまい。昔の語は皆雅、後世の語
は皆俚とするのは誤つた觀念で、此歌の如きはマキナムとあつて然
るべきである。

參照 マキ、マクラキ

(四四〇)

在京師 荒有家爾 一宿者 益旅而 可辛苦
都なる荒たる家に一人寝ば旅にまさりて苦しかるべし

右二首臨^ニ近向^レ京之時^ニ作歌

(四四一)

神龜六年己巳、左大臣長屋王賜^レ死之後、倉橋部女王
作歌一首

大皇之 命恐 大荒城乃 時爾波不有跡 雲隱座
大君の命かしこみ大荒城の時にはあらねど雲かくります

參照 オホアラキ

(四四二)

悲^ニ傷膳部王^ニ歌一首

萬葉集(卷第三)

みつみつし久米の稚子がいぶりけむ磯の草根グサネの枯れまく惜しも

參照 イブリ

(四三六)

人言之繁比日 玉有者 手爾卷以而 不戀有益雄
人言のしげき此ごろ玉ならば手にまきもちて戀ひずあらましを

(四三七)

妹毛吾毛 清之河乃 河岸之 妹我可悔 心者不持
妹も吾も清の川の河岸の妹が悔ゆべき心はもたじ

右案^ニ年紀并所處^ニ、乃娘子屍作歌、人名已見^レ上也、但歌辭
相違、是非難^レ別、因以累^ニ載於茲次^ニ焉

(四三八)

神龜五年戊辰、太宰帥大伴卿思^ニ戀故人^ニ歌三首
愛 人纏而師 敷細之 吾手枕乎 纏人將有哉
うつくしき人の巻きてし敷たへの吾が手枕を巻く人あらめや

右一首別去而經^ニ數句^ニ作歌

(四三九)

應還 時者成來 京師爾而 誰手本乎可 吾將枕
かへるべき時にはなりぬ都にて誰が袂をか吾はまきなむ

(一) 舊訓による。宣長の説の如く來は去の誤寫であるかも知れぬ。キ

世間者 空物跡 將有登會 此照月者 滿闕爲家流
世の中は空しきものとあらむとぞ此照る月は満ち闕けしける

右一首作者未詳

(四四三)

天平元年己巳、攝津國班田史生丈部龍鷹自經死之時、
判官大伴宿禰三中作歌一首并短歌

天雲之 向伏國 武士登 所云人者 皇祖 神之御門爾 外重
爾 立候 内重爾 仕奉 玉葛 彌遠長 祖名文 繼往物與
母父爾 妻爾子等爾 語而 立西日從 帶乳根乃 母命者 齋
忌戸乎 前坐置而 一手者 木綿取持 一手者 和細布奉 平
間幸座與 天地乃 神祇乞禱 何在 歲月日香 茵花 香君之
牛留鳥 名津匝來與 立居而 待監人者 王之 命恐 押光
難波國爾 荒玉之 年經左右二 白拷 衣不干 朝夕 在鶴公
者 何方爾 念座可 鬱蟬乃 惜此世乎 露霜 置而往監 時
爾不在之天
天雲の 向伏す國の 益ら男と いはえし人は すめろぎの
神の御門に 外のへに 立ちさもらひ 内のへに 仕へ奉り
玉葛 彌遠長く 祖の名も つぎ行くものと 母父に 妻に子
どもに 語らひて 立ちにし日より たらちねの 母の命は

いはひ瓮を 前に据ゑ置きて 一手には 木綿取り持ち 一手には 和たへ奉り 平らけく ま幸くませと 天地の 神をこひのみ 如何ならむ 年月日にか つつじ花 香へる君が には ぼ鳥の なづさひ來むと 立ちて居て 待ちけむ人は 大君の 命かしこみ おし光る 難波の國に あらたまの 年経るまでに 白たへの 衣手干さず 朝夕に ありつる君は いかさまに 念ひませか うつせみの 惜しき此世を 露じもの 置き ていにけむ 時にあらずして

(一) 刊本乎とあるが、神田本に平としたのを正しとすべきであらう。
(二) 牛留は爾富の誤としてニホ鳥と訓した久老説を可とする。
參照 ツツジバナ、タラチネ、オシテル〔枕〕

(四四四)

反 歌

昨日社 公者在然 不思爾 濱松之上於 雲棚引
昨日こそ君はありしか思はぬに濱松の上に雲とたなびく
(四四五)
何時然跡 待牟妹爾 玉梓乃 事太爾不告 徃公鴨
いつしかと待つらむ妹に玉づさの言だにつけずいにし君かも
(四四六)

天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿向京上道之

(四五一)

還入三故郷家 即作歌三首

人毛奈吉 空家者 草枕 旅爾益而 辛苦有家里
人も無き空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

(四五二)

與妹爲而 二作之 吾山齋者 木高繁 成家留鴨

(一) 舊訓ヤマとあり、類聚集、神田本、細井本等にもヤマと訓してあるが、宣長及雅澄は廿卷屬三目山齋二作歌に「をしの住む君が、このシマ」とあるを引いてシマと改めた。庭園をシマと稱へたことは有り得るが、山齋即鳥なりとする論理は成立せぬ。齋の字についていへばヤドと訓む方がよいかも知れぬが、尙ヤマのヤドを畧してヤマと稱へた——シマの宮を單にシマと呼んだやうに——ものとして舊訓に従ふべきであらう。

(四五三)

吾妹子之 殖之梅樹 每見 情咽都追 涕之流

吾妹子が殖ゑし梅の木見ると心に心むせつつ涙し流る

(四五四)

天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨之時歌六首

愛八師 榮之君乃 伊座勢波 昨日毛今日毛 吾乎召麻之乎
はしきやし榮えし君のい座しせば昨日も今日も吾を召さましを
(一) 舊訓ヨシエヤシとあるが、契沖に従うてハシキヤシと訓むべきで

時作歌五首

吾妹子之 見師鞆浦之 天木香樹者 常世有跡 見之人曾奈吉
吾妹子が見し鞆浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき
參照 ムロの木

(四四七)

鞆浦之 磯之室木 將見每 相見之妹者 將所忘八方
鞆の浦の磯のむろの木見む毎に相見し妹は忘れえぬやも

(四四八)

磯上丹 根蔓室木 見之人乎 何在登問者 語將告可
磯の上に根ばふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか
右三首過三鞆浦一日作歌

(四四九)

與妹來之 敏馬能琦乎 還左爾 獨而見者 涕具末之毛
妹と來しみぬめの崎をかへるさに獨して見れば涙ぐましも
(四五〇)

(四五〇)

去左爾波 二吾見之 此琦乎 獨過者 情悲哀 一云見毛左可受
去左爾波 二吾見之 此琦乎 獨過者 情悲哀 一云見毛左可受
伎濃
行くさには二人吾が見し此崎を獨すぐれば心かなしも(見もさ
かず來ぬ)
右二首過敏馬崎一日作歌

あらう。

參照 ハシキヤシ

(四五五)

如是耳 有家類物乎 芽子花 咲而有哉跡 問之君波母
かくのみに有りけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

(四五六)

君爾戀 痛毛爲便奈美 蘆鶴之 哭耳所泣 朝夕四天
君にこひいたもすべなみ葦たづの音のみ泣かゆ朝よひにして

(四五七)

遠長 將仕物常 念有之 君師不座者 心神奈思
とほ長く仕へむものと思へりし君しまさねば心どもなし
(一) 舊訓タマシヒとあるが、ココロドと訓した久老説可。

參照 ココロド

(四五八)

若子乃 匍匐多毛登保里 朝夕 哭耳曾吾泣 君無二四天
みどり子のはひたもとほり朝よひに音のみぞ吾が泣く君なしに
して

右五首仕人金明軍不勝犬馬之慕心中感緒作歌

(一) ワカキノとする訓もある。

(二) 仕人は資人に通ずる。

(三) 中は申の誤でノマテと訓むのであらう(久老)。

(四五九) 見禮杼不飽 伊座之君我 黃葉乃 移伊去者 悲喪有香 見れどあかずい坐し君がもみち葉のうつりい行けば悲しくもあるか

右一首勅内禮正縣大養宿禰人上、使檢護卿病、而醫藥無驗、逝水不留、因斯悲慟即作此歌

(四六〇)

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首 并短歌

拷角乃 新羅國從 人事乎 吉跡所聞而 問放流 親族兄弟 無國爾 渡來座而 大皇之 敷座國爾 内日指 京思美彌爾 里家者 左波爾雖在 何方爾 念鷄目鳴 都禮毛奈吉 佐保乃 山邊爾 哭兒成 慕來座而 布細乃 宅乎毛造 荒玉乃 年緒 長久 住乍 座之物乎 生者 死云事爾 不免 物爾之有者 憑有之 人乃盡 草枕 客有間爾 佐保河乎 朝川渡 春日野 乎 背向爾見乍 足氷木乃 山邊乎指而 晚闇跡 隱益去禮 將言爲便 將爲須敝不知爾 徘徊 直獨而 白細之 衣袖不干 嘆乍 吾泣淚 有馬山 雲居輕引 雨爾零寸八 たくぐぬの 新羅の國ゆ 人言を よしと聞かして 問ひさく

る うから腹から なき國に 渡り來まして すめろぎの 敷 きます國に うつ日さす 都しみみに 里家は さはにあれど も いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山邊に 泣く子なす したひ來まして 敷たへの 家をも作り あらた まの 年の緒長く 住まひつつ 座ししものを いけるもの 死ぬとふ事に まぬかれぬ ものにしあれば 頼めりし 人の ことごと 草枕 旅なるほどに 佐保川を 朝川渡り 春日野 を そがひに見つつ あしびきの 山邊をさして 暗闇と か くりましぬれ 言はむすべ 爲むすべ不知 たもとほり 唯獨 して 白たへの 衣手ほさず 嘆きつつ 吾が泣く涙 有馬山 雲ひたなびき 雨に降りきや

(一) 舊訓シラギノクニニ(ニはユの誤寫であらう)とある。正しくはシラのクニであるが、シラギとシラとは古くから混同せられて居たから、作者自身もシラギと詠んだのであらう。

(二) 雅澄はウマルレバと改訓したが、舊訓の方がよい。

參照 タクツマ(枕)、シラ、シラギ

(四六一)

反歌

留不得 壽爾之在者 敷細乃 家從者出而 雲隱去寸 とどめ得ぬ命にしあれば敷たへの家ゆは出でて雲がくりなき

右新羅國尼曰ニ理願也、遠感ニ王德、歸ニ化聖朝、於レ時寄ニ

住大納言大將軍大伴卿家、既達ニ數紀ニ焉、惟以ニ天平七年

乙亥ニ忽沈ニ運病、既趣ニ泉界、於是大家石川命婦依ニ餌藥

事ニ往ニ有間溫泉ニ而不レ會ニ此哀、但郎女獨留葬ニ送屍柩、

既訖仍作ニ此歌、贈ニ入溫泉

(一) 諸本尼の下に「名」の字がある。

(四六二)

十一年己卯夏六月、大伴宿禰家持悲傷亡妾作歌一首

首

從今者 秋風寒 將吹烏 如何獨 長夜乎將宿

今よりは秋風寒く吹くらむをいかにか獨長き夜を寝む

(四六三)

弟大伴宿禰書持即和歌一首

長夜乎 獨哉將宿跡 君之云者 過去人之 所念久爾

ながき夜を獨や寝むと君がいへば過ぎにし人の思ほゆらくに

(四六四)

又家持見三砌上瞿麥花ニ作歌一首

秋去者 見乍思跡 妹之殖之 屋前之石竹 開家流香聞

秋されば見つつ思べと妹が殖えし宿のなでしこ咲きにけるかも

(四六五)

移レ朔而後、悲ニ嘆秋風ニ家持作一首歌

虛蟬之 代者無常跡 知物乎 秋風寒 思努妣都流可聞

うつせみの世は常なしと知るものを秋風さむみしぬびつるかも

(一) サムミは契沖訓による。

(四六六)

又家持作歌一首并短歌

吾屋前爾 花曾咲有 其乎見杼 情毛不行 愛八師 妹之有世

婆 水鴨成 二人雙居 手折而毛 令見麻思物乎 打蟬乃 借

有身(在)者 露霜乃 消去之如久 足日木乃 山道乎指而 入日

成 隱去可婆 會許念爾 智己所痛 言毛不得 名付毛不知

跡無 世間爾有者 將爲須辨毛奈思

吾が宿に 花ぞ咲きたる 其を見れど 心もゆかず はしきや

し 妹がありせば 水鴨なす 二人なみ居て 手折りても 見

せましものを うつせみの 借れる身なれば 露じもの 消ぬ

るが如く あしびきの 山路をさして 入日なす かくりにし

かば そこ思ふに 胸こそ痛め 言ひもかね 名づけも知らに

跡もなき 世の中なれば せむすべもなし

(一) 刊本惜有としてカリノと訓してある。惜は諸本に借とあるを正しとする。こと勿論で、有も亦誤字であるかも知れぬが、證據がないか

ら姑く契沖に従うてカレルと訓して置く。

參照 ミカモナス

(四六七)

反歌

時者霜 何時毛將有乎 情哀 伊去吾妹可 若子乎置而
時はしもいつもあらむを情いたく行く吾妹かわく子をおきて
(一) 若子をワカキコ又はミドリコと訓まればならぬとするは固陋であ
る。古典の用例によればワカコ、ワクコ、ワキコいづれとも訓み得ら
れるが、假にワクコとして置く。

(四六八)

出行 道知未世波 豫 妹乎將留 寒毛置末思乎
出で、行くみち知らませばかねてより妹をとどめむ關もおかま
しを

(一) 眞淵はアラカジメと改訓したが、舊訓のまゝで妨はない。

(四六九)

妹之見師 屋前爾花 時者經去 吾泣淚 未干爾
妹が見しやどに花咲く時は經ぬ吾が泣く涙いまだひなくに

(四七〇)

悲緒未息、更作歌五首

如是耳 有家留物乎 妹毛吾毛 如千歲 憑有來

かくのみに有りけるものを妹も吾も千年の如くたのみたりける

(一) 舊訓を可とする。タリケリと改訓しては「童蒙抄、古義」情趣が乏
しくなる。

(四七一)

離家 伊麻須吾妹乎 停不得 山隱都禮 情神毛奈思
家さかりいます吾妹をとどみかね山がくりつれ心どもなし

(四七二)

世間之 常如此耳跡 可都知跡 痛情者 不忍都毛
世の中の常かくのみとかつ知れどいたき心は忍びかねつも

(一) ヨツナカシと訓するは非。「世の常」の意であるのみならず、シと
いふ助語はこゝには適當せぬ。

(四七三)

佐保山爾 多奈引霞 每見 妹乎思出 不泣日者無
佐保山にたなびく霞見る毎に妹を思ひで泣かぬ日はなし

(四七四)

昔許會 外爾毛見之加 吾妹子之 輿櫛常念者 波之吉佐寶山
昔こそよそにも見しか吾妹子がおくつきと思へば愛しき佐保山

(四七五)

十六年甲申春二月安積皇子薨之時、内舍人大伴宿彌
家持作歌六首

吾王 天所知牟登 不思者 於保爾會見谿流 和豆香蘇麻山
吾が大君天知らさむと思はねばおほにぞ見けるわづか袖山

參照 ワツカ山、ソマ

(四七七)

足檜木乃 山佐倍光 咲花乃 散去如寸 吾王香聞
あしびきの山さへ光り咲く花の散り行く如き吾が大君かも

右三首二月三日作歌

(一) チリマルゴトキといふ訓もあるが「玉小琴」、舊訓の方がよい。

(四七八)

掛卷毛 文爾恐之 吾王 皇子之命 物乃負能 八十伴男乎
召集聚 率比賜比 朝獵爾 鹿猪踐起 暮獵爾 鶉雉履立 大
御馬之 口抑駐 御心乎 見爲明米之 活道山 木立之繁爾
咲花毛 移爾家里 世間者 如此耳奈良之 大夫之 心振起
劔刀 腰爾取佩 梓弓 靱取負而 天地與 彌遠長爾 萬代爾
如此毛欲得跡 憑有之 皇子乃御門乃 五月蠅成 驟騷舍人者
白拷爾 服取著而 常有之 咲比振麻比 彌日異 更經見者
悲呂可聞

反歌

(四七六)

爲は鳥の誤としてヲナリと訓した眞淵説可。
(二) 枉の字を狂とした本もある。狂言を正しとすればタワコトと訓す
べきであるが、尙舊訓を可とする。〔四七〇〕參照——逆言をオヨツ
レ(妖)とする宣長説は、次の句が狂言である場合にのみ許さるべき
ことであるが、其にしてもオヨツレコトといはれば意が通ぜぬ。

參照 ユユシ、イヤヒケニ、オヨツレ

おこし 夕狩に 鳥ふみ立て 大御馬の 口おしとどめ 御心を 見し明らめし いくぢ山 木立のしみに 咲く花も 移ろひにけり 世の中は かくのみならず 益ら男の 心ふりおこし 劔大刀 腰にとりはき あづさ弓 ゆき取り負ひて 天地と いや遠長に 萬代に かくしもがもと 頼めりし 御子の 御門の さばへなす さわぐ舎人は 白たへに 衣取り着て 常なりし ゑまひ振まひ いや日けに 變らふ見れば 悲しき るかも

(一) 舊訓トリとある。シシ(獸)に鹿猪、トリ(鳥)に鶉雉をあてたのは いづれも借字である。

(二) 童蒙抄にオシトトメとしたのが正訓である。オサへ(抑)は古語オシであつた。

參照 オシ、サバへ

(四七九)

反歌

波之吉可開 皇子之命乃 安里我欲比 見之活道乃 路波荒爾 雞里 是しきかも御子のみことのありがよひ見ししいくぢの道は荒れにけり

(一) 舊訓ミシとあるが、久老に従うてミシシと訓すべきである。若し眞淵説のやうにメシシと稱へたとすれば其は音便である。

(四八〇) 大伴之 名負鞆帶而 萬代爾 憑之心 何所可將寄 大伴の名に負ふ鞆おひて萬代にたのみし心いづくにかよせむ 右三首三月二十四日作歌

(一) 類聚集に之をトモと訓したのは一理はあるが、尙字の如くユキと訓すべきである。鞆負伴男(大祝祝詞)といふ語の縁によるものであらう。或は帯はオヒ(負)の借字であるかも知れぬ。

(四八一)

悲傷死妻 高橋朝臣作歌一首并短歌

白細之 袖指可倍氏 塵寢 吾黒髪乃 眞白髪爾 成極 新世爾 共將有跡 玉緒乃 不絶射妹跡 結而石 事者不果 思有之 心者不遂 白妙之 手本矣別 丹杵火爾之 家從裳出而 綠兒乃 哭乎毛置而 朝霧 髣髴爲乍 山代乃 相樂山乃 山際 往過奴禮婆 將云爲便 將爲便不知 吾妹子跡 左宿之妻 屋爾 朝庭 出立儂 夕爾波 入居嘆舍 腋挾 兒乃泣母 雄自毛能 負見抱見 朝鳥之 啼耳哭管 雖戀 効矣無跡 辭不問 物爾波在跡 吾妹子之 入爾之山乎 因鹿跡叙念 白たへの 袖さしかへて 靡きねし 吾が黒髪の 眞白髪に 成らむ極み 新世に 共にあらむと 玉緒の 絶えずい妹と 結びてし 事は果さず 思へりし 心は遂けず 白たへの 袂

【卷第四】

相聞

(四八四)

難波天皇妹奉下上在三山跡 皇兄上御詞一首 一日社 人母待吉 長氣乎 如此所待者 有不得勝

一日こそ人をも待ちき長きけをかく待たゆれば有りかつましじ

(一) 刊本告に作り、マチツゲと訓してあるが、意をなさぬから、元歷本、神田本、細井本等に吉とあるに従うてマチキとした。或は目の誤でヒトチモマタメと讀むのかも知れぬ。

(二) 舊訓アリエタヘズモとあり、アリガテナクモ(眞淵)、アリカテヌカモ(宣長)等の訓もあるが、有不得勝が誤字でないといふればアリカツマシツの外に訓みやうがない。

(四八五)

岳本天皇御製一首并短歌

神代從 生繼來者 人多 國爾波滿而 味村乃 去來者行跡 吾戀流 君爾之不有者 雲波 日乃久流留麻豆 夜者 夜之明 流寸食 念乍 寐宿難爾登 阿可思通良久茂 長此夜乎 神代より 生れつぎ來れば 人さには 國には滿ちて あぢ群

を 別れ 柔びにし 家ゆも出て みどり子の泣くをもおきて

朝霧に おほになりつつ 山代の 相樂の山の 山のまを 行

過ぎぬれば 言はむすべ 爲むすべ知らに 吾妹子と さ寢し

妻屋に 朝には 出て立ち偲び 夕には 入り居なげかひ 腋

ばさむ 子の泣く毎に 男じもの 負ひ見抱きみ 朝鳥の 音

のみ泣きつつ 戀ふれども しるしを無みと 言問はぬ もの

にはあれど 吾妹子が 入りにし山を よすがとぞ思ふ

(一) 舎は合又會の誤としてナゲカヒと訓むべきである(眞淵、久老)。

(二) 母は毎の誤字なること勿論である。久老に従うてナクコトニ訓むを可とする。

(四八二)

反歌

打背見乃 世之事爾在者 外爾見之 山乎耶今者 因香爾思波 牟 うつせみの世のことなれば外に見し山をや今はよすがに思はむ

(四八三)

朝鳥之 啼耳鳴六 吾妹子爾 今亦更 逢因矣無

あさ鳥の音をのみ鳴かむ吾妹子に今また更に逢ふよしをなみ

右三首七月廿日高橋朝臣作歌也、名字未審、但云奉膳之

男子焉

の 行來は行けど 吾が戀ふる 君にしあらねば 晝は 日の
くるるまで 夜は 夜をあくるきはみ 思ひつつ いも寝かて
にと 明しつらくも 長き此夜を

(一) 古點サリキハユケドとあつたのを仙覺はイサトハユケドと改め、
拾穂抄にはサハキとあるが、此場合イサ又はサハキといふ語は適當
せぬ。古點の意を汲んでユキキと訓すべきである(新訓)。ユキキを
ユクといふのは古い語法である。

(二) 舊訓を可とする。ネカテニトは寢勝ズデの意、ト、テを通はして用
ひるのは古歌に例のあることである。——ガテニとするに非。難は
借字である。——此義を解し得ずして或は句を補ひ(宣長)、或は登
を乃三の誤として訓した(雅澄)のは論ずるに足らぬ。

(四八六)

反 歌

山羽爾 味村騷 去奈禮騰 吾者左夫思惠 君二四不在者

山の端にあぢ群さわぎ行くなれど吾はさぶしる君にしあらねば

參照 アヂムラ

(四八七)

淡海路乃 鳥籠之山有 不知哉川 氣乃己呂其侶波 戀乍裳將有

あふみ路の鳥籠の山なるいざや川けのころろは戀ひつともあ
らむ

右今案高市岳本宮、後岡本宮二代二帝各有異焉、但傳三岡

本天皇未審其指

(一) 宣長は呂を乃の誤としてコノコロと訓めというたが「畧解」、コロ
ゴロは頃々で毛の衣にいひかけたのである。

參照 トコの山

(四八八)

額田王思近江天皇作歌一首

君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹

君待つと吾が戀ひ居れば我が宿のすだれ動かし秋風ぞ吹く

(四八九)

鏡王女作歌一首

風乎太爾 戀流波乏之 風小谷 將來登時待者 何香將嘆

風をだに戀ふるはともし風をだに來むとし待たば何か嘆かむ

(四九〇)

吹黃刀自歌二首

眞野之浦乃 與騰乃繼橋 情由毛 思哉妹之 伊目爾之所見

ま野の浦の淀のつぎ橋心ゆも思へや妹が夢にし見ゆる

(四九一)

河上乃 伊都藻之花乃 何時何時 來益我背子 時自異目八方

川かみのいつ藻の花のいつもいつも來ませ我背子時じけめやも
(一) カハノへと訓むは非。藻は川の上に生ひるものではない。

參照 トキツク

(四九二)

田部忌寸櫛子任太宰時歌四首

衣手爾 取等騰已保里 哭兒爾毛 益有吾乎 置而如何將爲

衣手に取りとどこほり泣く子にも益れる吾を置きていかにせむ

(一) 類聚集、元曆本其他に舍人吉年の四字を註記してある。此は都に
留まる人の歌であらばならぬから、之あるを可とする。

(四九三)

置而行者 妹將戀可聞 敷細乃 黒髮布而 長此夜乎

おきて行かば妹こひむかも敷たへの黒髪しきて長き此夜を

(四九四)

吾妹兒矣 相令知 人乎許曾 戀之益者 恨三念

吾妹子を相しらしめし人をこそ戀のまされば恨めしみ思へ

(四九五)

朝日影 爾保徹流山爾 照月乃 不厭君乎 山越爾置而

朝日かげ匂へる山に照る月のあかざる君を山越に置きて

(四九六)

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野之 浦乃濱木綿 百重成 心者雖念 直不相鴨

みくま野の浦の濱木綿百重なす心は念へどただに逢はぬかも

(四九七)

古爾 有兼人毛 如吾歟 妹爾戀乍 宿不勝家牟

古にありけむ人も吾がごとか妹に戀ひつついね不勝けむ

(四九八)

今耳之 行事庭 不有 古 人曾益而 哭左倍鳴四

今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて音にさへ泣きし

(四九九)

百重二物 來及尋常 念鴨 公之使乃 雖見不飽有哉

もへにも來しかぬがもとおもふかも君が使の見れど飽かずあ
れや

(一) 古義の訓による。

(二) オモフカモと訓む理由は次に述べる。

(三) 元曆校本には哉の字を武と改めてある。之に従へばアカズアラム
(アカザラムは非)で、第三句もオモヘカモと訓み得るが、尙刊本に
よつてアカズアレヤと訓むを可とする。——ヤは感動詞で、アカズ
アルカナの意——従て第三句もオモフカモであらばならぬ。

(五〇〇)

碁檀越往伊勢國時、留妻作歌一首

神風之 伊勢乃濱荻 折伏 客宿也將爲 荒濱邊爾

神かぜの伊勢の濱荻折りふせて旅寐やすらむ荒き濱邊に

(五〇一)

柿本朝臣人麻呂歌三首

柿本朝臣人麻呂歌三首

未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時從 憶寸吾者
をとめ等が袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆおもひき吾は

(五〇二) 夏野去 小牡鹿之角乃 束間毛 妹之心乎 忘而念哉
夏野行く小鹿の角のつかの間も妹が心を忘れて思へや

(五〇三) 珠衣乃 狭藍佐謂沉 家妹爾 物不語來而 思金津裳
あり衣のさゝるさゝるしづみ家の妹にもいはず來て思ひかねつも

(一) 舊訓タマキヌとあるが、サキサキにかゝるべき理由がないから、
眞淵説の如くアリキヌと訓すべきである。第十四卷には同じ歌を安
利伎奴乃佐恵佐恵之豆美として掲げて居る。珠は借字であらう—
雅澄は「蟻」の誤とした。

參照 アリギヌ、サキサキ

(五〇四)

柿本朝臣麻呂妻歌一首
君家爾 吾住坂乃 家道乎毛 吾者不忘 命不死者
君が家に吾がすみ坂の家道をも吾は忘れじいのち死なすば

參照 スミ坂

(五〇五)

安倍女郎歌二首
今更 何乎可將念 打靡 情者君爾 緣爾之物乎

暮名寸二 梶之聲爲乍 浪上乎 五十行左具久美 磐間乎 射
往廻 稻日都麻 浦箕乎過而 鳥自物 魚津左比去者 家乃鳥
荒儀之字倍爾 打靡 四時二生有 莫告我 奈騰可聞妹爾 不
告來二計謀

臣オミの女メの 匣クシガに乗れる 鏡なす みつの濱邊に さにづらふ
紐ときさけず 吾妹子に 戀ひつつ居れば 明アツくれの 朝霧が
くり 鳴く鶴ツルの 音のみし泣かゆ 吾が戀ふる 千重の一重も
なぐさもる 心もあれやと 家の當り 吾が立ち見れば 青は
たの 葛木山に たなびける 白雲隠り 天さかる 夷の國邊
に 直向タダムカふ 淡路をすぎ あは島を そがひに見つつ 朝なぎ
に 水手カキの聲よび 夕なぎに 梶カキの音しつ 浪の上を い行
きさぐくみ 岩の間を い行きもとほり いなびつま 浦みを
過ぎて 鳥じもの なづさひ行けば 家の島 荒磯アサヒのうへに
打なびき 繁シジに生ひたる なのりその などかも妹に のらず
來にける

(一) 舊訓マツトメとあるが聞なれぬ語である。春満に従うてオミノメ
と訓むべきである。オミノナトメといふ語が仁徳紀及記の雄略卷に
見え、オミノコといふ用例もあるから、貴女をオミノメと稱へたこ
とも有り得べきである。
(二) 雅澄は乘有を齋の誤としてイツクと訓したが、匣に鏡を齋くこと

今さらに何をか念はむ打なびき心は君によりにしものを

(五〇六) 吾背子波 物莫念 事之有者 火爾毛水爾毛 吾莫七國
吾が背子は物な思ほし事しあらば火にも水にも吾がなければ

(五〇七)

駿河姪女歌一首
敷細乃 枕從久久流 涙二會 浮宿乎思家類 戀乃繁爾
しきたへの枕ゆくくる涙にぞうき寝をしける戀のしげきに

參照 クキ

(五〇八)

三方沙彌歌一首
衣手乃 別今夜從 妹毛吾母 甚戀名 相因乎奈美
衣手の別る今夜ゆ妹も吾もいたく戀ひむな逢ふよしをなみ

(五〇九)

丹比真人笠麻呂下三筑紫國二時、作歌一首并短歌
臣女乃 匣爾乘有 鏡成 見津乃濱邊爾 狹丹頰相 紐解不離
吾妹兒爾 戀乍居者 明晚乃 且霧隱 鳴多頭乃 哭耳之所哭
吾戀流 千重乃一隔母 名草漏 情毛有哉跡 家當 吾立見者
青旗乃 葛木山爾 多奈引流 白雲隱 天佐我留 夷乃國邊爾
直向 淡路乎過 粟島乎 背爾見管 朝名寸二 水手之音喚

があり得たとは思はれぬ。舊訓ノスルとあるけれども、乗有の字が
誤寫でないとするは宣長訓の如くノレルと訓む外はない。いづれに
しても尙心行かぬ點がある。或は玉篋有とあつたのを寫し誤つたの
ではあるまいか。次の(五三三)の歌にも「ナトメ等か玉クシゲナル」と
いふ句が用ひられて居る。

(三) 夷の國邊を任地(筑紫)又は四國のこととして此句を解かうとする
のは無理である。六卷に「淡路の島にタダ向フ敏馬の浦」(九四)とあ
り、倭建命の御歌にも「尾張にタダに向ヘル尾津崎」とあるから、タ
ダ向フが對向地を意味することは勿論である。此ヒナは攝津國爲奈
郷のこと、キナの原語はヒナである。

(四) 我は能の誤のとする雅澄説に従ふ。

參照 アケクレ、キナ

(五一〇)

反歌
白妙乃 袖解更而 還來武 月日乎數而 往而來猿尾
白たへの袖ときかへて歸り來む月日をよみて行きて來ましを

(一) 舊訓ホドチカゾヘテとあるが、契沖訓の如くツキヒチヨミテとす
べきである。

(五一二)

幸三伊勢國二時、當麻呂大夫妻作歌一首
吾背子者 何處將行 己津物 隱之山乎 今日歟超良武
吾がせこはいづく行らむ沖つ藻のなばりの山を今日か越ゆらむ
參照 オキツモ(枕)

(五二二)

草嬢歌一首

秋田之 穂田乃刈婆加 香縁相者 彼所毛加入之 吾乎事將成
秋の田の穂田の刈ばかかよりあはばかくもか人の吾を言なさむ

(一) 草嬢は牧童に對する字で、田舎娘といふことではあるまいか。カ
ヤノヒメ、クサノイラツメ等と訓して人名とし、眞淵の如きは「草」の
下に「香」を脱するものとしてクサカのイラツメとしたが、穿鑿に過
ざる嫌がある。古義に別府信榮の説として輟畊録に娼婦曰「花娘」達
且又謂「草嬢」とあるを引いてウカレメと訓したのはおもしろい説で
あるが、歌意から見ると娼婦の作とすべき形跡がない。

(二) 舊訓ソコモカとあるが、カヨリアハバといふ語の頭韻を踏んでカ
クモカと誦したものと思はれる。彼所がカクと訓み得ることは勿論
で、「かうもいふだらう」といふ意である。

參照 カリバカ、コトナサム

(五二三)

志貴皇子御歌一首

大原之 此市柴乃 何時鹿跡 吾念妹爾 今夜相有香裳
大原の此いつ柴のいつしかと吾が思ふ妹に今夜逢へるかも

參照 イツシバ

(五二四)

阿倍女郎歌一首

吾背子之 蓋世流衣之 針目不落 入爾家長之 吾情副

吾がせこが着せる衣の針目おちず入りにけらしな吾が心さへ

(一) 舊訓ケラシナとあるから、之の下に奈又は那といふ字があつたも
のと思はれる。

(五二五)

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首

獨宿而 絶西紐緒 忌見跡 世武爲便不知 哭耳之曾泣
獨ねて絶えにし紐をゆゝしみと爲むすべ不知音のみしぞなく

參照 ユエシ

(五二六)

阿倍女郎答歌一首

吾以在 三相二搓流 絲用而 附手益物 今曾悔寸
吾がもてる三相によれる絲もちて附けてましもの今ぞ悔しき

(五二七)

大納言兼大將軍大伴卿歌一首

神樹爾毛 手者觸云乎 打細丹 人妻跡云者 不觸物可聞
神木にも手は觸るとふをうつたへに人づまといへは觸れぬもの
かも

(一) 舊訓サカキとあるが、神木の意であるから、宣長説の如くカミキ
(又はカムキ)を可とする。

參照 サカキ、ウツタへ

(五二八)

(五二九)

藤原宇合大夫遷任上京時、常陸娘子贈歌一首

庭立 麻手刈干 布慕 東女乎 忘賜名
庭に立つ麻て刈り干し敷きしたふあつま少女を忘れたまふな

(一) 古義は眞淵、千蔭の説をとりあはせて、上二句をニハニタチアサチ
カリホシと訓したが、第十四卷に爾波爾多都安佐提古夫須麻と假名
書してある所を見ると、舊訓に従はざるを得ぬ。ニハニタツはアサ
にかかる枕詞で、アサテは麻茅の説である。

參照 アサテ

(五三〇)

京職大夫藤原大夫賜大伴良女歌一首

憾婦等之 珠篋有 玉櫛乃 神家武毛 妹爾阿波受有者
をとめ等が玉匣なる玉櫛の神宿らむも妹にあはず有らは

(一) 舊訓メヅラシケムモとあり、古義は今村樂の説に従うてタマシヒ
ケ(消)ムモと訓したが、「玉櫛の」はカミ(髪)の縁語であるから、メ
ヅラシ又はタマヒシヒと訓するは不可である。契沖は神サビケムモ
としたけれども、餘りに文字に離れすぎて居る。家は宿の誤寫又は
通用とすべきである。

(五三一)

好渡 人者年母 有云乎 何時間曾毛 吾戀爾來

よく渡る人は年にも有りちふをいつの間にぞも吾が戀ひにける

石川郎女歌一首

春日野之 山邊道乎 與會理無 通之君我 不所見許呂香裳
かすが野の山邊の道をよそりなく通ひし君が見えぬころかも

參照 ヨソリ

(五一九)

大伴女郎歌一首

雨障 常爲公者 久堅乃 昨夜雨爾 將懲鴨
雨つつみ常する君は久かたのゆふべの雨に懲りにけむかも

(一) 舊訓アマサハリとあるが、長流の説の如くアマツツミであられば
ならぬ。次の歌にも雨乍見と書いてある。

(二) 舊訓ヨフヘとあるのはユフヘの原形であるから、勿論誤訓ではな
いが、ユフ(夕)の形が普く用ひられて居たのであるから、尙ユフヘ
を可とする。キノフ(暑解)又はキノ(古義)としたのは改悪である。
昨日としては情緒が乏しい。昨夜をもユフヘ又はヨヒと稱へるのは
明日をアス(アサの轉)といふと同じく、極めて自然の轉義で、夙に
上代から行はれて居たことである。

參照 アマツツミ、ユフヘ

(五二〇)

後人追同歌一首

久堅乃 雨毛落穢 雨乍見 於君副而 此日令晚
久かたの雨もふらぬか雨つつみ君にたぐひて此日暮さむ

參照 タケヒ

(五二四) 悉被 奈胡也我下丹 雖臥 與妹不宿者 肌之寒霜 むし食なごやが下に臥せれども妹といねねば肌し寒しも

(一) 古事記須勢理比賣命の歌を根據として奈を爾の誤記とするは非。ナゴ、ニゴは通音で柔といふ意の名詞形である。ムシを蒸の義としてニコヤ(ナコヤ)に煖の意があるとするのは當推量に過ぎぬ。
參照 ムシフスマ

(五二五) 大伴郎女和歌四首

狹穂河乃 小石踐渡 夜于玉之 黑馬之來夜者 年爾母有糠 佐保川のさざれ踐み渡りぬば玉の黒馬の來夜は年にもあらぬか

(一) 舊訓サザレとあるを非としてコイシと訓まざるべからずとするのは、サザレを些小の意と誤解した爲で、これは擬聲語であるから、今もザリといふやうに、サザレイシ(サザレシ)をサザレとのとみもいひ得た筈である。參照 サザレ、サザレイシ

(五二六) 千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪 止時毛無 吾戀爾

千鳥なく佐保の川瀬のさざれ波止む時もなし吾が戀ふらくは
(一) 舊訓コフラクニとあるが、元曆本以下コフラクハと改め、爾は者としてある。
(五二七) 天皇賜海上女王御歌一首

將來云毛 不來時有乎 不來云乎 將來常者不待 不來云物乎 來むといふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを

(五二八)

千鳥鳴 佐保乃河門乃 瀬乎廣彌 打橋渡須 奈我來跡念者 千鳥なく佐保の河門の瀬を廣みうつ橋渡す汝が來と思へば

右郎女者佐保大納言卿之女也、初嫁一品穗積皇子被寵無儔、而皇子薨之後時、藤原麻呂大夫嫁之郎女焉、郎女家於坂上里、仍族氏號曰坂上郎女也

參照 ウツハシ

(五二九)

又大伴坂上郎女歌一首

佐保河乃 涯之官能 小歷木莫刈鳥 在乍毛 張之來者 立隱金 佐保川の岸のつかさの柴な刈りそね、ありつつも春し來らば立かくるがね

(一) 古點ワカクヌギナカリソネとあつたのを仙覺が意によつてシバと改訓したのである。鳥は古寫本には多く焉とあるを正しとする。
參照 ツカサ

(五三〇)

天皇賜海上女王御歌一首

赤駒之 越馬柵乃 絨結師 妹情者 疑毛奈思 赤駒の越ゆるうませのしめ結ひし妹が心は疑もなし

右今案此歌擬古之作也、但以往當便賜斯歌一歟

(一) 伴女は之を不の誤として下の句につけコサマ(コエヌか)と訓した「比古婆衣」。或は然らむ。
參照 ウマセ

(五三一)

海上女王奉和歌一首

梓弓 爪引夜音之 遠音爾毛 君之御幸乎 聞之好毛 梓弓 爪引夜音の遠音にも君が御幸を聞かくしよしも

(一) 舊訓にはキクハシとあるが、契沖説に従うてキカクシと訓むべきである。
(五三二)

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首

打日指 宮爾行兒乎 眞悲見 留者苦 聽去者爲便無 打日指 宮爾行兒乎 眞悲見 留者苦 聽去者爲便無

うつ日さす宮に行く子をま悲しみ留むれば苦しやればすべなし
(一) トドム(トムル)ハクルシ・ヤルハスベナシと訓したのもあるが、舊訓を不可とすべき理由がない。
參照 ウツヒサス(枕)

(五三三)

難波方 鹽干之名凝 飽左右二人之見兒乎 吾四乏毛 難波方 鹽干之名凝 飽左右二人之見兒乎 吾四乏毛

難波がた潮干の名残あくまで人に見る子を吾しともしも

(一) 舊訓ミルコとある。ミムコと改訓したのもあるが、其は上の歌をヤルハスベナシと訓んだと同様に、まだ宮仕に出ぬ前の歌と解した爲であらうが、しか斷定すべき根據はないやうである。
(五三四)

安貴王謔一首并短歌

遠嬌 此間不在者 玉梓之 道乎多遠見 思空 安莫國 嘆虛 不安物乎 水空往 雲爾毛欲成 高飛 鳥爾毛欲成 明日去而於妹言問 爲吾 妹毛事無 爲妹 吾毛事無久 今蒙見如 副而毛欲得 遠妻の こゝにあらねば 玉梓の 道をた遠み 思ふそら 安からなくに 嘆くそら 安からぬものを み空行く 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にもがも 明日行きて 妹に言ひ 吾が爲に 妹も事なく 妹がため 吾も事なく 今も見るごと たぐひてもがも

(一) 宣長はヤスケナクニと改訓したが、ヤスケヌ(ヤスケバ)といふ語づかひはあり得ぬ。ヤスシの打消はヤスクアラヌ即ちヤスカラヌである。舊訓に従ひヤスカラナクニと訓むべきである。
參照 オモフソラ、ナゲクソラ

(五三五)

反歌

敷細乃 手枕不纏 間置而 年曾經來 不相念者 敷細乃 手枕不纏 間置而 年曾經來 不相念者

敷たへの手枕まかずへだて置きて年ぞ經にける逢はぬ念へば

右安貴王娶因幡八上采女、係念極甚、愛情尤盛、於時勅斷不敬之罪、退却本郷焉、于是王意悼怛、聊作此歌也

(一) 宣長がアヒダと改訓したのは「間」の字によるものであらうが、こゝは事實年を経たのではなく、ヘダテ(隔障)を置いてせかれたので久しい年月を経たやうに思ふといふ意であるから、アヒダオキテといふては意をなさぬ。ヘダタリテと改めたのも「新考」同断である。ヘダタリは古語ではヘナリ(ヘダリ)といふた筈である。

(五三六)

門部王戀歌一首

飫宇能海之 鹽干乃瀨之 片念爾 思哉將去 道之永手呼
意字の海の潮干の瀨の片思におもひや行かむ道の長てを

右門部王任出雲守二時、娶部内娘子二也、未幾時、既絶往來累月之後、更起愛心、仍作此歌贈致娘子

(五三七)

高田女王贈今城王歌六首

事清 甚毛莫言 一日太爾 君伊之哭者 痛寸取物

事清くいともの言ひそ一日だに君いしなくばいたきとあるもの

(一) 哭者は「無くば」の借字であらう「古義」。

(二) 舊訓イタキキズンモとあるは意をなさぬ。シヌビアヘヌモノとし古義の説も餘りに字を離れ過ぎて居る。案するに取物はトアルモ

ノの借字で、或はトルモノと約めて發音したのかも知れぬ。痛寸はツラキと訓んでもよい。後世ならば此場合イタキとあるべきをイタキ(イタケ)といふたのは古の語法である。語法要録參照。

(五三八)

他辭乎 繁言痛 不相有寸 心在如 莫思吾背

人言をしげみこちたみ逢はざりき心あるごと莫思ひそ吾がせ

(五三九)

吾背子師 遂常云者 人事者 繁有登毛 出而相麻志呼

吾がせこし遂げむといはば人言は繁くありとも出て逢はましを

(五四〇)

吾背子爾 復者不相香常 思墓 今朝別之 爲便無有都流

吾が背子にまたは逢はじかと思へば今朝の別れのすべなくありつる

(五四一)

現世爾波 人事繁 來生爾毛 將相吾背子 今不有十方

此世には人言繁し來む世にも逢はむ吾が背子今ならずとも

(五四二)

常不止 通之君我 使不來 今者不相跡 絶多比奴良思

常やまず通ひし君が使來ず今は逢はじとたゆたひぬらし

(五四三)

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時、爲贈從駕人所レ誦娘于笠朝臣金村作歌一首并短歌

天皇之 行幸乃隨意 物部乃 八十伴雄與 出去之 愛夫者

天翔哉 輕路從 玉田次 畝火乎見管 麻裳吉 木道爾入立

眞土山 越良武公者 黃葉乃 散飛見乍 親 吾者不念 草枕

客乎便宜常 思乍 公將有跡 安蘇蘇二破 且者雖知 之加須

我仁 默然得不在者 吾背子之 往乃萬萬 將追跡者 千遍雖

念 手嬾女 吾身之有者 道守之 將問答乎 言將遺 爲便乎

不知跡 立而爪衝

大君の 御幸のままに もののふの 八十伴のをと 出行きし

うつくし夫は 天飛ぶや 輕の道ゆ 玉だすき 畝火を見つつ

麻裳よし 紀道に入り立ち 眞土山 超ゆるむ君は もみぢ葉

の 散り飛ぶ見つつ むつましみ 吾をは念はず 草枕 旅を

よろしと 思ひつつ 君はあらむと あそそには 且は知れど

も しかすがに 默も得あらねば 吾がせこが 行きのまにま

に 追はむとは 千度思へど たわや女の 吾が身にしあれば

みち守の 問はむ答を いひやらむ すべを不知と 立ちてつ

まづく

(一) 舊訓ムツマシキとあるが、言葉のつゞきから考へてもムツマシミ

であらねばならぬ。シタシクモ(宣長)、シタシケク(雅澄)と改訓したものがあつたけれど、假に字についてシタシと訓むべきものとするも、モといふ助語は不用であり、ケクといふては名詞形になり、助語なしには下の句につゞかぬ。語法要録助語クの項下參照。

(五四四)

反歌

後居而 戀乍不有者 木國乃 妹背乃山爾 有益物乎

おくれ居て戀ひつゝあらずは木の國のいもせの山にあらましも

のを

(五四五)

吾背子之 跡履求 追去者 木乃關守伊 將留鴨

吾がせこが跡ふみ求め追ひ行かば紀の關守い留めなむかも

(五四六)

二年乙丑春三月、幸三香原離宮之時、得娘于作歌

一首并短歌 笠朝臣金村

三香之原 客之屋取爾 珠梓乃 道能去相爾 天雲之 外耳見

管 言將問 緣乃無者 情耳 咽乍有爾 天地 神祇辭因而

敷細乃 衣手易而 自妻跡 憑有今夜 秋夜之 百夜乃長 有

與宿鴨

みかの原 旅の宿りに 玉梓の 道の行合に 天雲の よその
み見つつ 言問はむ 由のなれば 心のみ むせつつあるに
天地の 神ことよせて 敷たへの 衣手かへて おの妻と
のめる今夜 秋の夜の 百夜の長さ ありこせぬかも

(五四七)

反歌

天雲之 外従見 吾妹兒爾 心毛身副 縁西鬼尾
天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ寄りにしものを

(五四八)

今夜之 早開者 爲便乎無三 秋百夜乎 願鶴鴨
此夜らの早く明くればすべをなみ秋の百夜を願ひつるかも

(一) ハヤアケメレバ「略解」、ハヤクアケナバ「古義」といふ訓もあるが、
口語でいへば「明けるから」といふ意で「明けたから」でも「明けるな
ら」でもないから、アクレバであらねばならぬ。

(五四九)

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任、餞于筑前國蘆
城驛家歌二首

天地之 神毛助與 草枕 露行君之 至家左右

あめつちの神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで

丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首

天雲乃 遠隔乃極 遠鷄跡裳 情志行者 戀流物可聞

あま雲のそぐへの極み遠けども心し行けば戀ふるものかも

(五五四)

古 人乃令食有 吉備能酒 痛者爲便無 貫簀賜牟
いにしへの人のをさせる吉備のさけ病めばすべなしぬきすたば
らむ

(一) 古義はフリニシと訓した。フリニケルというてもよからう。イニ
シへのヒトといふ語は今では往古の人の意に了解せられるが、語義
はフリニシ(フリニケル)と變りはない。或は舊時は昔馴染の人とい
ふことをイニシへのヒトと稱へたのではなからうかと思はれるか
ら舊訓を存する。

(二) 舊訓ノマセルとあるが、飲酒をナスというた例は神功皇后の御製
〔記、紀〕にもあるから、令食はヲサセと訓すべきである(玉小琴)。古
義にタバセルとあるは語をなさぬ。

参照 ヌキス

(五五五)

太宰帥大伴卿、贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌

一首

爲君 釀之待酒 安野爾 獨哉將飲 友無二思手
君が爲かみしまち酒安の野に獨や飲まむ友なしにして

萬葉集(卷第四)

(五五〇)

大船之 念憑師 君之去者 吾者將戀名 直相左右二
大船の念ひたのみし君がいなば吾は戀ひむな直に逢ふまでに

(五五一)

山跡道之 島乃浦廻爾 縁浪 間無牟 吾戀卷者
大和路の島の浦まに寄る波のあひだもなけむ吾が戀ひまくは
右三首作者未詳

(五五二)

大伴宿禰三依歌一首

吾君者 和氣乎波死常 念可毛 相夜不相夜 二走良武

吾君はわけをば死ねと思へかも逢ふ夜逢はぬ夜ならび行くらむ

(一) 古點はヨマセナルラムとある。夜交即ち隔夜の意であらうと思ふ
が、尙字について訓する方がよい。仙覺はフタクナラム、眞淵は
フタクキラムと訓したけれども、ナラム、ヌラムといふ時格を用ひ
る場合でない。フタクユクラム(古義)、フタハシルラム(新訓)とい
ふ訓もあるが、ナラビユクラム(新考)が最もよいやうである。

(五五三)

参照 ヲケ

(五五六)

参照 マチサケ

賀茂女王贈大伴宿禰三依一詩一首

筑紫船 未毛不來者 豫 荒振公乎 見之悲左

つくし船いまだも來ねばあらかじめ荒ぶる君を見るが悲しさ

(五五七)

土師宿禰水通從筑紫上京海路作歌二首

大船乎 撈乃進爾 磐爾觸 覆者覆 妹爾因而者

大船をこぎのすすみに岩にふれかへらばかへれ妹によりてば

参照 ススミ

(五五八)

千磐破 神之社爾 我掛師 幣者將賜 妹爾不相國

ちはやふる神の社に我がかけし幣は賜らむ妹に逢はなくて

(五五九)

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首

事毛無 生來之物乎 老奈美爾 如此戀于毛 吾者遇流香聞

事もなくあり來しものを老なみにかかる戀にも吾はあへるかも

(一) 舊訓にアリコシとある所を見ると、生は在の誤字ではあるまいか
〔童蒙抄〕。契沖はアレコシと改訓したが、尙アリコシの方がよいや
うである。

(五六〇)

孤悲死牟 後者何爲牟 生日之 爲社妹乎 欲見爲禮 戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲こそ妹を見まく欲りすれ

(五六一)

不念乎 思常云者 大野有 三笠杜之 神思知三 思はぬを思ふといはば大野なる三笠の杜の神し知らさむ

(五六二)

無暇 人之眉根乎 徒 令搔乍 不相妹可聞 暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも

(五六三)

大伴坂上郎女歌二首

黑髮二 白髮交 至者 如是戀庭 未相爾

(五六四)

山菅乃 實不成事乎 吾爾所依 言禮師君者 與孰可宿良牟 やま菅の實ならぬことを吾によせ言はれし君は誰とかぬらむ

(五六五)

賀茂女王歌一首

大伴乃 見津跡者不云 赤根指 照有月夜爾 直相在登聞 大伴のみつとは言はじ昔さし照れる月夜に直に逢へりとも

參照 オホトモ(枕)

(五六六)

太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首 草枕 驛行君乎 愛見 副而曾來四 鹿乃濱邊乎

草枕旅行く君をいとほしみたぐひてぞ來ししがの濱邊を 右一首大監大伴宿禰百代

(一) 舊訓ウツクシミとあり、ナツカシミ、オモハシミ「代匠記」などいふ訓もあるが、恐らくはイトホシミと讀むのであらう。

參照 ウツクシ

(五六七)

周防在 磐國山乎 將超日者 手向好爲與 荒其道

すはにある岩國山を超えむ日はたむけよくせよ荒き其道 右一首少典山髪口忌寸若麻呂

以前天平二年庚午夏六月、帥大伴卿忽生瘡脚、疾苦枕席、因此馳驛上奏、望請庶弟稻公、姪胡麻呂欲語遺言者、勅右兵庫助大伴宿禰稻公、治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人、結驛發遣、令看卿病、而送數旬、幸得平復、于時稻公等以病既療、發府上京、於是大監大伴宿禰百代、少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相送驛使、共到夷守驛家、聊飲悲別乃作此歌。

(一) 和名抄には周防にスハツと訓してあるが、本來スハといふ地名であるのみならず、ス、ハ、ツと三語音にわけて讀むべきものでないから(ハツは二語音である)、此作者はスハニアルと詠じたことは勿論である。

參照 スハ

(五六八)

大宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時、府宮人等餞卿筑前國蘆城驛家歌四首

三崎廻之 荒磯爾緣 五百重浪 立毛居毛 我念流吉美

み崎まの荒磯によする五百重波たちても居ても我が思へる君

右一首筑前掾門部連石足

(五六九)

辛人之 衣染云 紫之 情爾染而 所念鴨

から人の衣染むとふ紫の心にしみておもほゆるかも

(一) 舊訓アラヒト(アはカの誤寫か)とあり、古寫本も多くはカラヒトと訓してある。眞淵以來辛を誤字として淑、宇万、宮などをあて居るが、何故にカラヒトと訓むことを不可とするのか了解に苦しむ。紅花は我日本に生ひたものでも尙カラキ、クレナキといふやうに、本初捺染はカラから學んだから、此當時は遍く知られた工業であつたけれども、尙「韓人の衣染と云」とおぼめかしていたのであらう。

(五七〇)

參照 シラク

(五七一)

山跡邊 君之立日乃 近者 野立鹿毛 動而會鳴 大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿もどよみてぞなく

月夜吉 河音清之 率此間 行毛不去毛 遊而將歸 月夜よし川音さやけしいざこゝに行くも行かぬも遊びて行かむ

右二首大典麻田連陽春

(一) 諸本近の下に付の字がある。チカツケハと訓ませる爲であらう。

(五七二)

眞十鏡 見不飽君爾 所贈哉 且夕爾 左備乍將居

まを鏡見あかぬ君におくれてや朝夕にさびつつぞ居る

右一首防人佑大伴四綱

(五七三)

野干玉之 黑髮變 白髮手裳 痛戀庭 相時有來 ぬばたまの黒髪かはりしらけてもいたき戀には逢ふ時ありけり

此間在而 筑紫也何處 白雲乃 棚引山之 方西有良思 此間にありて筑紫やいづく白雲のたなびく山の方にしあるらし

大納言大伴卿和歌二首

(五七五)

草香江之 入江二求食 蘆鶴乃 痛多豆多頭思 友無二指天
日下江の入江にあさるあしたづのあなたづたづし友なしにして

(五七六)

太宰帥大伴卿上京之後、筑後守葛井連大成悲嘆作歌
一首
從今者 城山道者 不樂牟 吾將通常 念之物乎

今よりは城の山道はさぶしけむ吾が通はむと思ひしものを

(一) 舊訓キヤマのミチとあるが、古義の説の如くキのヤマミチと訓む
方がよい。肥前國基肄郡をいふので、筑後から太宰府に出る山道で
ある。

(五七七)

大納言大伴卿新袍贈三攝津大夫高安王二歌一首
吾衣 人莫著會 網引爲 難波壯士乃 手爾者雖觸

(五七八)

大伴宿禰三依悲別歌一首
天地與 共久 住波牟等 念而有師 家之庭羽裳
天地と共に久しく住はむと念ひてありし家の庭はも
(五七九)

金明軍與大伴宿禰家持二歌二首

奉見而 未時太爾 不更者 如年月 所念君
見奉りていまだ時だにかはらねば年月のごと思ほゆる君

(五八〇)

足引乃 山爾生有 菅根乃 勸見卷 欲君可聞
あしびきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲しき君かも
(五八一)

大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持二歌四首
生而有者 見卷毛不知 何如毛 將死與妹常 夢所見鶴

いきて在らば見まくも不知何しかも死なむよ妹と夢に見えつる

(五八二)

丈夫毛 如此戀家流乎 幼婦之 戀情爾 比有目八方
益ら雄もかく戀ひけるをたわやめの戀ふるころにたぐひあら
めやも

(五八三)

月草之 徒安久 念可母 我念人之 事毛告不來

月草のうつろひ安く思へかも我が念ふ人の言も告げ來ぬ

(五八四)

春日山 朝立雲之 不居日無 見卷之欲寸 君毛有鴨
春日山朝立つ雲の居ぬ日なく見まくの欲しき君にもあるかも

(五八五)

大伴坂上郎女歌一首
出而將去 時之波將有乎 故 妻戀爲乍 立而可去哉
出ていなむ時しはあらむをことさらに妻戀しつち立ちていぬべ
しや

(五八六)

大伴宿禰稻公贈三田村大嬢二歌一首
不相見者 不戀有益乎 妹乎見而 本名如此耳 戀者奈何將爲
相見ずば戀ひざらましを妹を見てもとなかくのみ戀ひばいかに
せむ

右一首姉坂上郎女作

參照
モトナ

(五八七)

笠女郎贈大伴宿禰家持二歌廿四首
吾形見 見管之努波世 荒珠 年之緒長 吾毛將思
吾がかたみ見つしぬばせあらたまのとしの緒ながく吾もしぬ
ばむ

(五八八)

白鳥能 飛羽山松之 待乍會 吾戀度 此月比乎
しら鳥の鳥羽山松の待ちつづぞ吾がこひ渡る此月ころを

(五八九)

衣手乎 打廻乃里爾 有吾乎 不知會人者 待跡不來家留
衣手を折たむの里にある吾を知らずぞ人は待てど來ずける

(一) 宣長は打を折の誤とした。衣手といふ枕詞を用ひた所を見ても然
るべく思はれる。但し乃を衍字としてナリタムサトとしたのは十一
卷の折(同じく打と書いてある)廻前乃とあるに準據したものであら
うが、崎なればこそあれ、里にナリタムといふ形容は不適當である
から、ナリタムノサトニと八音に訓むのであらう。恐らくは十市郡
タム(田身)の郷にいひかけたのであらう。

(五九〇)

荒玉 年之經去者 今師波登 勤與吾背子 吾名告爲莫
あらたまのとしの經ぬれば今しはとゆめよ吾が背子吾が名のら
すな

(五九一)

吾念乎 人爾令知哉 玉匣 開阿氣津跡 夢西所見
吾が念ひを人に知らせや玉くしげ開きあけつと夢にし見ゆる

(五九二)

闇夜爾 鳴奈流鶴之 外耳 聞乍可將有 相跡羽奈之爾
暗の夜に鳴くなるたづの外のみ聞きつつかあらむ逢ふとはな
しに

(五九三)

君爾戀 痛毛爲便無見 楢山之 小松下爾 立嘆鴨
君に戀ひいとすべなみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも

(五九四)

吾屋戸之 暮陰草乃 白露之 消蟹本名 所念鴨

吾が宿の夕かけ草の白露の消ぬがにもとな念ほゆるかも

參照 ガニ、モトナ

(五九五)

吾命之 將全幸限 忘目八 彌日異者 念益十方

吾が命のまたけむ限り忘れめやいや日にけには思ますとも

(五九六)

八百日往 濱之沙毛 吾戀二 豈不益歎 奥島守

八百日行く濱のまさごも吾が戀にあにまさらじか沖つ島守

(一) 砂は和名抄に水中細礫也和名イサゴ又はスナゴとある。イサゴの

イは接頭語で、語義は石粉であるから、マサゴというてもよい。同書

に日本紀私紀を引いて織砂をマナゴとし訓であるが(眞土粉の意、

こゝは舊訓の如くマサゴ(又はイサゴ)であらねばならぬ。

參照 マサゴ、マナゴ、アニ

(五九七) 宇都蟬之 人目乎繁見 石走 間近君爾 戀度可聞

うつせみの人目をしげみ岩橋の間ぢかき君に戀ひわたるかも

(一) 舊訓イハハシとあるが、イハハシ(眞淵訓)を可とする。イハハシ

ルと改訓したのは(新訓)理由のないことである。

參照 イハハシ、イハハシル

(五九八)

戀爾毛會 人者死爲 水瀬河 下從吾瘦 月日異

戀にもぞ人は死にする水瀬河下ゆ吾がやす月に日にけに

(五九九)

朝霧之 鬱相見之 人故爾 命可死 戀渡鴨

あさ霧のおほに逢ひ見し人故に命死ぬべく戀ひわたるかも

(六〇〇)

伊勢海之 磯毛動爾 因流浪 恐人爾 戀渡鴨

伊勢の海の磯もどろに寄する波かしこき人に戀ひわたるかも

(六〇一)

從情毛 吾者不念寸 山河毛 隔莫國 如此戀常羽

心ゆも吾は思はざりき山川も隔たらなくかく戀ひむとは

(六〇二)

暮去者 物念益 見之人乃 言問爲形 面景爲而

夕ざれば物思まさる見し人の言とふすがた面影にして

(六〇三)

念西 死爲物爾 有麻世波 千遍會吾者 死變益

思ふに死にするものにあらませば千度ぞ吾は死にかへらまし

(六〇四)

劍太刀 身爾取副常 夢見津 何如之怪會毛 君爾相爲

劍太刀身にとりそふと夢に見つ何しのけぞも君にあはなくに

(一) 舊訓サトシとあり、サガ(眞淵)、シルシ(由豆流)と訓したのも

あるが、怪は借字でケとよみ、ユフケ(夕衝占)のケと同じく兆の意

であらう。

(二) 舊訓アハムタメとあるが、之に従へば自問自答と解釋するの外は

なく、戀歌としては餘り樂觀に過ぎる。恐らくは爲は莫の誤字で、

キミニアハナクニと訓むのであらう。字をかへて訓むことは最忌む

(六〇五)

天地之 神理 無者社 吾念君爾 不相死爲目

天地の神にことはり無くばこそ吾が思ふ君に逢はず死にせめ

(六〇六)

吾毛念 人毛莫忘 多奈和丹 浦吹風之 止時無有

吾も思ふ人もな忘れ多奈和丹の浦吹く風の止む時なかり

(一) 舊訓オホナラニとあるが意義を明にせぬ。宣長は且爾氣丹の誤と

推定したが、妥當ともおほはれぬ。次に「心ゆも我は思はざりき又

更に吾が故郷に歸り來むとは」とあるから、タナラニは笠女郎の郷

里の地名とも解せられる。此女性が近江國栗太郡笠の庄を名に負う

たのであるとすれば、其對岸滋賀郡和邇驛(兵部式)の一地區名であ

るかも知れぬ。タナは「中」の意とも解せられ(語誌參照)、今も同村

に和邇中といふ大字があるのである。いづれにしてもタナラニノと

詠まれたものと思はれる。

(一) 舊訓ナカレとあるが、ヤムの主格は戀であらうと思はれるから、

命令法を用ひることは不適當である。タナラニの浦吹く風のやうに

吾が戀はヤム時ナシの意として、ナカリ(ナク、アリ)と訓むべきで

あらう。——ナクアレバの意と牽強するものがあるかも知れぬが、

其場合にはナケバとあるべきで、ナカレバといふ語づかひは此頃に

は存在しなかつた。

(六〇七)

皆人乎 宿與殿金者 打禮杼 君乎之念者 寐不勝鴨

みな人を寢よとの鐘はうつなれど君をし思へばいねかてぬかも

(一) 古葉類聚抄には打の下に奈の字がある。

(六〇八)

不相念 人乎思者 大寺之 餓鬼之後爾 額衝如

相思はぬ人をおもふは大寺の餓鬼の後にぬかづく如し

(六〇九)

從情毛 我者不念寸 又更 吾故鄉爾 將還來者

心ゆも我は思はざりき又更に吾が故郷にかへり來むとは

(六一〇)

近有者 雖不見在乎 彌遠 君之伊座者 有不勝自

ちかからば見ずともあるをいやとほく君がいませば有りかつま

右二首相別後更來贈

(一)アリテモタエシ〔舊訓〕、アリカテマシモ〔契沖〕、アリモカタズモ〔同等の訓があるが、アリカツマシツと訓むべきである。不と自とは重複の嫌があるが、シラニを不知爾とかくと同様に、マシツと訓ませる爲に自の字を添へたのであらう。〕

(六二一) 大伴宿禰家持和歌二首
今更 妹爾將相八跡 念可聞 幾許吾智 鬱悒將有

(六二二) 中々爾 默毛有益呼 何爲跡香 相見始兼 不遂爾
中々にもだもあらましを何すとか逢見そめけむ遂げざらなくに

(六二三) 山口女王贈大伴宿禰家持二歌五首
物念跡 人爾不見常 奈麻強 常念弊利 在曾金津流

もの思ふと人に見えじと生じひに常におもへりありぞかねつる
〔六二四〕 不相念 人乎也本名 白細之 袖漬左右二 哭耳四泣裳

相思はぬ人をやもとな白たへの袖ひづまてに音のみしなくも
〔六二五〕 手小童之 哭耳泣管 俳側 君之使乎 待八兼手六

おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして 年深く
長くしいへば まそ鏡 とぎし心を ゆるしてし 其日の極み
波のむた 靡く玉藻の かにかくに 心はもたず 大船の た
のめる時に ちはやぶる 神やさくらむ うつせみの 人か禁
むらむ 通ひてし 君も來まさず 玉づさの 使も見えず な
りぬれば いとすべなみ ぬばたまの 夜はすがらに あか
ら引く 日も晩るるまで 嘆けども 験をなみ 思へども た
づきを不知 たわや女と いはくもしるく た童の 音のみな
きつつ たもとほり 君が使を 待ちや兼てむ

(一) 舊訓カレナムとあるが、サクラム〔契沖訓〕を可とする。
(二) 舊訓イムラムとあり、契沖は障フラムと訓したが、童蒙抄の如く
トムラムとする方が一層適切である。

〔六二〇〕 反歌
從元 長謂管 不念恃者 如是念二 相益物歟

始より長くといひつつたのめずばかかる思に逢はましものか
(一) 從來ナガクイヒツツと訓して居るが、トといふ助語が必要である。
本歌のナガクシイヘバは男が氣長に言ひ寄つたとも解せられるが、
これは女の述懐であるから、ナガクイヒヨル譯はない。

吾背子者 不相念跡裳 敷細乃 君之枕者 夢爾見乞
吾が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ
(六二六) 劍太刀 名惜雲 吾者無 君爾不相而 年之經去禮者

劍たち名の惜しけくも吾はなし君に逢はずして年の經ぬれば
(六二七) 從蘆邊 滿來鹽乃 彌益荷 念歟君之 忘金鶴
葦邊よりみち來る潮のいや益しに思へか君が忘れかねつる

(六二八) 大伴女郎贈大伴宿禰家持二歌一首
狹夜中爾 友喚千鳥 物念跡 和備居時二 鳴乍本名
さ夜中に友よぶ千鳥もの思ふとわび居る時に鳴きつつもとな
(六二九) 大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌
押照 難波乃菅之 根毛許呂爾 君之聞四手 年深 長四云者
眞十鏡 磨師情乎 縦手師 其日之極 浪之共 靡珠藻乃 云
云 意者不持 大船乃 憑有時丹 千磐破 神哉將離 空蟬乃
人歟禁良武 通爲 君毛不來座 玉梓之 使母所不見 成奴禮
婆 痛毛爲便無三 夜干玉乃 夜者須我良爾 赤羅引 日母至
闇 難嘆 知師乎無三 難念 田付乎白二 幼婦常 言雲知久

(六三〇) 西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈三夫君二歌一首
無間 戀爾可有牟 草枕 客有公之 夢爾之所見
あひだ無く戀ふにかあらむ草まくら旅なる君が夢にし見ゆる
(一) コフレニカと改訓したものがあがるが、こといふ助語は其本質上準
名詞にあらざる既定格に連接することは出來ぬ。コフレカといへる
からコフレニカともいひ得ると考へるのは未だ語法を解せざるもの
といはればならぬ。――語法要録參照。

(六三一) 佐伯宿禰東人和歌一首
草枕 客爾久 成宿者 汝乎社念 莫戀吾妹
草まくら旅に久しく成りぬれば汝をこそ思へ莫こひそ吾妹
(六三二) 池邊王宴誦歌一首
松之葉爾 月者由移去 黃葉乃 過哉君之 不相夜多焉
松の葉に月はゆつりぬもみち葉の過ぎぬや君が逢はぬ夜おほく
(一) 四句をスギシヤとし、五句をオホミと改訓したものがあがるが〔宣
長以下〕、却りて意味がわからなくなる。舊訓に従ひ〔逢はぬ夜多ク
過ギヌ〕〔ヤは感動詞〕と解すべきである。

〔六三四〕 ヌツリ
萬葉集(卷第四)

天皇思^ニ酒人女王^ニ御製歌一首

道相而 咲之柄爾 零雪乃 消者消香^ニ 戀云[△]吾妹[△]
みちに逢ひてゑまししからに降る雪の消なば消ぬがに戀ひ念ふ
吾妹

(一) 云は念の誤としてコレモフと訓した宣長説を可とする。

(六二五)

高安王^ニ雲^レ鮒^贈三娘子^ニ歌一首

奥幣往 邊去伊麻夜 爲妹 吾漁有 藻臥束鮒
沖へ行き邊に行き今や妹がため吾がすなれりもふし津が鮒

(一) 藻臥束は借字で、モフシツといふ地の鮒といふことであらう。此津の名は残つて居らぬが、河内國惠賀の藻伏であらうといふ説がある〔記傳〕。高安は其北隣であるから或は然らむ。

參照 エガのモフシ

(六二六)

八代女王^ニ獻^ニ天皇^ニ歌一首

君爾因 言之繁乎 古郷之 明日香乃河爾 潔身爲爾去
一尾云、龍田超三津之濱邊爾潔身四二由久

君により言のしげきを古さとの明日香の川にみそぎしにゆく
(龍田こえ三津の濱邊にみそぎしに行く)
(六二七)

娘子報^ニ贈^ニ佐伯宿禰赤麻呂^ニ歌一首

吾手本 將卷跡念牟 大夫者 戀水[△]定[△] 白髮生^ニ二有[△]
吾が袂まかむと思はむますらをはをと水求めよ白髮生ひにたり
(一) 舊訓ナミダニシヅミとあるが意をなさぬから、元曆校本に變水求とあるに従ふ。變はナチ(若戀)の假字に用ひられたのであらうが、ミツ(水)につゞける場合にはナトミと稱ふべきである。ナトミは出雲國造神賀詞にも見える語である。——此贈答歌ではナトメ(少女)にいひかけたことは勿論である。

參照 ナトミの水

(六二八)

佐伯宿禰赤麻呂和^ニ謠^ニ一首

白髮生流 事者不念 戀水[△]者 鹿煮藻闕^ニ二毛 求而將行
白髮生ふる事は念はずをとみをばかにもかくにも求めて行かむ
(六二九)

(六二九)

大伴四綱宴^ニ席^ニ歌一首

奈何鹿 使之來流 君乎社 左右裳 待難爲禮
何すとか使の來つる君をこそかにもかくにも待ちがてにすれ
(六三〇)

佐伯宿禰赤麻呂^ニ歌一首

初花之 可散物乎 人事乃 繁爾因[△] 止息比者[△]鴨
はつ花の散るべきものを人言の繁きによりてとまるころかも

(六三四)

家二四手 雖見不飽乎 草枕 客毛妻與 有之乏左

(六三五)

湯原王亦^ニ贈^ニ歌一首

草枕 客者孀者 雖率有 匣内之 珠社所念
草まくらに旅には妻は率たれども匣の内の珠をこそ思へ
(六三六)

(六三六)

余衣 形見爾奉[△] 布細之 枕不離 卷而左宿座

わが衣かたみにまたす敷たへの枕をさらすまきてさ寝ませ

(一) マツルと改訓したのはさかしらである。マタスは今の語でいへば「持たせてあげる」といふことである。

參照 マタシ、マツル

(六三七)

娘子復^ニ報^ニ贈^ニ歌一首

吾背子之 形見之衣 孀問爾 余身者不離 事不問友
吾がせこが形見の衣つまどひにわが身はさけし言問はずとも

參照 マコトトハズ

(六三八)

湯原王亦^ニ贈^ニ歌一首

(一) 宣長はヨドムと改訓したが、ヨドムは花の縁語としては甚不適當である。或はヤスムと訓むのかも知れぬ。此時代にはヤスムは躊躇の意にも用ひられた。

(六三一)

湯原王^ニ贈^ニ三娘子^ニ歌一首

宇波弊無 物可聞人者 然許 遠家路乎 令還念者[△]
うはへなきものかも人はしかばかり遠き家路をかへしし思へば

(一) 略解はカヘスオモヘバと改訓したが、こゝは不定法を用ひる場合でない。換言すればカヘスのが常習ではなく、或時會見を拒絶した事があったものとせねばならぬ。〔六三二〕の歌は動詞の性質が違つて居るから例にならぬ。

參照 ウハヘナキ

(六三二)

目二破見而 手二破不所取 月内之 楓如 妹乎奈何責[△]

目には見て手には取らえぬ月のうちのかつらの如き妹をいかにせめ

(一) 責は字の通りセメと讀むがよい。下に感動詞カモ又はヤモ等を含ませたのである。セムと改訓するは非。——語法要録參照。

(六三三)

娘子報^ニ贈^ニ歌二首

幾許 思異目鴨 敷細之 枕片去 夢所見來之
いかばかり思ひけめかもしきたへの枕かたさり夢に見えこし

直一夜 隔之可良爾 荒玉乃 月歟經去跡 心遮(一)
ただひと夜へだてしからにあらたまの月か經ぬるとおもほゆる
かも

(一) 舊訓オモホユルカモとあるを正しとすれば心遮は誤字とせればならぬ。遮を迷の誤としてココロマドヒヌ(新考)ココロハマドフ(新訓)と改訓したものである。姑く疑を存する。

(六三九)

娘子復報贈歌一首

吾背子我 如是戀禮許會 夜干玉能 夢所見管 寐不所宿家禮
吾がせこがかく戀ふれこそぬばたまの夢に見えつついねらえず
けれ

(六四〇)

湯原王亦贈歌一首

波之家也思 不遠里乎 雲居爾也 戀管將居 月毛不經國
はしけやし間ちかき里を雲ゐにや戀ひつつ居らむ月も經なくに

(六四一)

娘子復報贈和歌一首

絶常云者 和備染責跡 燒大刀乃 隔付經事者 幸也吾君
たつといへば忙しめせめどやき大刀のへつかふことはさきくや
吾君

ニシアラバと訓すべきである。男ならばチノコといふべき場合であるから、之に對するメノコを可とする。

(六四四)

今者吾羽 和備會四二結類 氣乃緒爾 念師君乎 縦左思者

今は吾はわひぞしにけるいきの緒に思ひし君を縦さく思へば
(一) 金澤本に縦左久思者とあるを可とする。

(六四五)

白妙乃 袖可別 日乎近見 心爾咽飲 哭耳四所流

白たへの袖別るべき日を近み心にむせび音のみし泣かゆ

(六四六)

大伴宿禰駿河麻呂一首

大夫之 思和備乍 遍多 嘆久嘆乎 不負物可聞
ますら雄のおもひ忙びつつたびまねく嘆くなげきを負はぬもの
かも

(六四七)

大伴坂上郎女歌一首

心者 忘日無久 雖念 人之事社 繁君爾阿禮
心には忘るる日なく思へども人のことこそしげき君にあれ
(六四八)

(一) 諸訓皆タユとあるが、燒大刀の縁語としてタツと訓まればならぬ。
(二) 責跡はセメトである。之をセムト讀むと意が反對になる。セメと訓ませる爲に特に責の字を用ひて誤解を避けたものと思はれる。
(三) 舊訓ヨシヤとあるが、サキクヤの方が一層適切である。幸を辛又は苛の誤としてカラシヤと訓するものもあるが「略解、古義」、其は第二句をセムトと讀んだ爲で、前提が反對であるから歸結も幸の反對の意に解釋せねばならなくなつたのであらう。

參照 ヤキタチ、ヘツカフ

(六四二)

湯原王歌一首

吾妹兒爾 戀而亂在 久流部寸二 懸而緣與 余戀始
わぎも子に戀ひて亂れてくるべきにかけてよせむとわが戀ひそ
めし

(一) 舊訓ミダレル、萬葉考ミダレバとあるが、次句クルベキはクルヒにひかけたものであるから、ミダレテとして次へ續ければならぬ。

參照 クルベキ

(六四三)

紀女郎怨恨歌三首

世間之 女爾思有者 吾渡 痛背乃河乎 渡金目八

世の中の女の子にあらば吾が渡るあなせの川を渡りかねぬや
(一) 女をチミナ又はサトメと訓するのは古義の説の如く穩當でない。
こゝは世間の女人といふ意であるから、メニシアラバ、又はメノコ

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

不相見而 氣長久成奴 比日者 奈何好去哉 言借吾妹
逢ひ見ずてけ長くなりぬ此ごろはいかにさきくやいぶかし吾妹
(六四九)

大伴坂上郎女歌一首

夏葛之 不絶使乃 不通有者 言下有如 念鶴鳴
はふくづの絶えぬ使のよどめれば事しもあること思ひつるかも

右坂上郎女者佐保大納言卿女也、駿河麻呂此高市大卿之

孫也、兩卿兄弟之家、女孫姑姪之族、是以題「歌送答相問

起居」

(一) 夏は蔓の誤としてハフクヅと訓した宣長説「略解」に従ふべきであらう。

(六五〇)

大伴宿禰三依離復相歡歌一首

吾妹兒者 常世國爾 住家良思 昔見從 變若益爾家利
吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しよりをちましにけり
(六五一)

大伴坂上郎女歌二首

久堅乃 天露霜 置二家里 宅有人毛 待戀奴濫
久かたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ
(六五二)

玉主爾 珠者授而 勝且毛 枕與吾者 率二將宿
玉もりに珠はさづけてかつかも枕と吾はいざ二人ねむ

參照 カツカツ

(六五三)

大伴宿禰駿河麻呂歌三首

情者 不忘物乎 儻 不見日數多 月會經去來

心には忘れぬものをたまたまも見ぬ日さまねく月ぞへにける

參照 タマタマモ

(六五四)

相見者 月毛不經爾 戀云者 乎會呂登吾乎 於毛保寒毳

相見ては月も經なくに戀ふといへばをそろと吾を思ほさむかも

參照 ヲソ、ナソロ

(六五五)

不念乎 思常云者 天地之 神祇毛知寒 邑禮左變

思はぬを思ふといはば天地の神も知らさむいふれさかはり

(一) 舊訓シルカニとあるが、次の句から推してもシラサムであらばならぬ〔代匠記〕。

(二) 舊訓サトレサカハリとあり、信友以下之を不可解として文字をかへて色々に讀みあらためたが、牽強附會の譏を免かれぬ。字についてイフレサカハリと訓すべきである。邑は他に通じ、イフは字音であるが、夙にイフシミ、イフセシの如く日本語化して用ひられたる

のである。

參照 イフレサカハリ

(六五六)

大伴坂上郎女歌六首

吾耳會 君爾者戀流 吾背子之 戀云事波 言乃名具左會

吾のみぞ君には戀ふる吾がせこが戀ふとふことは言の名草ぞ

參照 ナグサ

(六五七)

不念常 曰手師物乎 翼醉色之 變安寸 吾意可聞

思はじといひてしものをはねず色のうつろひやすき吾が心かも

參照 ハネズ

(六五八)

雖念 知僧裳無跡 知物乎 奈何幾許 吾戀渡

思へどもしるしもなしと知るものをなにぞこゝばく吾が戀ひわたる

(一) ナニカココバク〔代匠記〕、ナソココバクモ〔畧解〕、イカテココバク〔古義〕、イカニココダク〔新訓〕の如くいろいろの訓があるが、契沖訓を優れりとする。但しナニカはナニソとあるべきである。――語法要録參照。

(六五九)

豫 人事繁 如是宥者 四惠也吾背子 奧裳何如荒海藻

かねてより人言しげしかくしあらばしゑや吾がせこ奥もいかにあらぬ

(一) 舊訓アラモとあるが、雅澄がアラメと改訓したのは卓見である。校本萬葉集に古義の此説を逸したのは遺憾である。

參照 シエヤ

(六六〇)

汝乎與吾乎 人曾離奈流 乞吾君 人之中言 聞起名湯目

汝をと吾を人ぞさくなるいで吾君人の中言聞きこそすなゆめ

(一) 舊訓キキタツナとあるが、キキコスナとした雅澄訓を可とする。但し起を越の誤と斷したのは非。原の儘でキキコスナと訓み得る。ユメナキキコソの意である。

(六六一)

戀戀而 相有時谷 愛寸 事盡手四 長常念者

戀ひこひて逢へる時だにうつくしき言つくしてよ長くと思はば

(六六二)

市原王歌一首

網兒之山 五百重隱有 佐堤乃崎 左手蠅師子之 夢二四所見

あごの山五百重かくせるさでの崎さではへし子が夢にし見ゆる

參照 サデ

(六六三)

安部宿禰年足歌一首

佐穂度 吾家之上二 鳴鳥之 音夏可思吉 愛妻之兒
佐保わたり吾家の上になく鳥のこゑなつかしきうつくし女の子

(一) 第一句は從來佐保川を渡る意としてサホツタリと訓して居るが、家の所在地と解しサホノツタリと讀むのであるかも知れぬ。姑く疑を存する。

(二) 舊訓にはオモヒツマノコとあり、契沖はハシキツマノコとあらためた。ツマノコの用例を見るに寧ろ男性をいうたもの、方が多いやうであるから、こゝはメノコと訓む方がよい。

(六六四)

大伴宿禰像見歌一首

石上 零十方雨二 將關哉 妹似相武登 言義之鬼尾

石の上降るとも雨にせかれめや妹に逢はむといひてしものを

(一) 舊訓サハラメヤとあるが、セカレメヤと訓ませる爲に特に關の字を用いたのであらう。上句「雨に」とあるから受動詞と解すべきで、サへといふ語を用ひるとすればサハラレメヤといはねばならぬ。

(六六五)

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

向座而 雖見不飽 吾妹子二 立離往六 田付不知毛

むかひ居て見れども飽かぬ吾妹子に立ちさかり行かむたつき知らずも

(一) タチソカレユカムと讀んでもよい。

(二) タチソカレユカムと讀んでもよい。

(六六六)

大伴坂上郎女歌二首

不相見者 幾久毛 不有國 幾許吾者 戀乍裳荒鹿
相見ぬは幾ばく久もあらなくにこゝだく吾は戀ひつつもあるか

(六六七)

戀戀而 相有物乎 月四有者 夜波隱良武 須臾羽蟻待

戀こひて逢ひたるものを月しあれば夜はこもるらむしばしはありまて

右大伴坂上郎女之母石川内命婦與安倍朝臣蟲滿之母安

曇外命婦同居姉妹同氣之親焉、緣此郎女ト蟲滿相見不疎、相談既密、聊作戲歌、以爲問答也

(六六八)

厚見王謔一首

朝爾日爾 色付山乃 白雲之 可思過 君爾不有國
朝に日に色づく山の白雲の思ひ過ぐべき君にあらなくに

參照 アサニケニ

(六六九)

春日王歌一首

足引之 山橋乃 色丹出而 語言繼而 相事毛將有
あしびきの山橋の色に出でよ。語らひつぎて逢ふこともあらむ

(一)イノチを不可として壽は身(眞淵)又は吾身(千蔭)の誤とするものがあるが、理由のないことである。

參照 シヅタマキ

(六七三)

大伴坂上郎女歌二首

眞十鏡 磨師心乎 縦者 後爾雖云 驗將在八方
まそ鏡ときし心をゆるしてば後にいふとも驗あらめやも

(六七四)

眞玉付 彼此兼手 言齒五十戸常 相而後社 悔二破有跡五十戸

またま附くをちこちかねて言はいへど逢ひて後こそ悔はありと

ス

(六七五)

中臣女郎贈大伴宿禰家持歌五首

娘子部四 咲澤二生流 花勝見 都毛不知 戀裳摺可母
をみなへし咲澤に生ふる花かつみかつても知らぬ戀もするかも

參照 カツミ

(六七六)

海底 奥乎深目手 吾念有 君二波將相 年者經十方
わたの底おきを深めて吾が思へる君には逢はむ年はへぬとも

萬葉集(卷第四)

(一)元曆校本には色丹出與とあるに従ふ「新訓」。

(二)宣長は言を者の誤として、カタラバツギテと訓むかというたが「畧解」、尙舊訓の儘でも解し得られる。

(六七〇)

湯原王歌一首

月讀之 光二來益 足疾乃 山乎隔而 不遠國
月よみの光に來ませあしびきの山をへだてて遠からなくに

參照 ツクヨ、ツクヨミ

(六七二)

和歌一首

月讀之 光者清 雖照有 感情 不堪念
月よみの光は清くてらせれど惑へる心たへずおもほゆ

(一)下二句畧解はマドヘルココロタヘジトゾオモフと訓み、新考には六帖によりてココロゾマドフタヘオモヒニと改訓したが、此は湯原王から或る知人(男性)に月光が清であるから遊ひに來よといひやられた返事と解すれば舊訓の方がよいやうである。月は明いが心中になやみがあつて參上致しがたく思はれまするといふことである。

(六七二)

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

倭文手纏 數二毛不有 壽持 奈何幾許 吾戀渡
しづ手巻數にもあらぬいのちもち何ぞこばく吾が戀ひわたる

(六七七)

春日山 朝居雲乃 鬱 不知人爾毛 戀物香聞

かすが山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも戀ふるものかも

(六七八)

直相而 見而者耳社 靈刻 命向 吾戀止眼

直にあひて見てばのみこそ靈きはる命に向ふ吾が戀やまめ

(六七九)

不欲常云者 將強哉吾背 菅根之 念亂而 戀管母將有

いなといはば強ひめや吾が夫菅の根のおもひみだれて戀つつも有らむ

(六八〇)

大伴宿禰家持與交遊別歌三首

蓋毛 人之中言 聞可毛 幾許雖待 君之不來益
けだしくも人の中こと聞かせかもこぼく待てど君が來まさぬ

(六八一)

中々爾 絕年云者 如此計 氣緒爾四而 吾將戀八方

中々に絶つとしいはばかりいきの緒にして吾戀ひめやも

參照 ナカナカ

(六八二) 將念 人爾有莫國 勸 情盡而 戀流吾毳
念ふらむ人にあらなくにねもころに心つくして戀ふる吾かも
(六八三)

大伴坂上郎女歌七首

謂言之 恐國會 紅之 色莫出會 念死友

いふことのかしこき國ぞくれなゐの色にな出てそ思ひしぬとも
(六八四)

今者吾波 將死與吾背 生十方 吾二可緣跡 言跡云莫苦荷
今は吾は死なむよ吾がせ生けりとも吾によるべしといふと言は
なくに

(六八五)

人事 繁哉君乎 二鞘之 家乎隔而 戀乍將座
人言をしげみや君を二さやの家をへだてて戀ひつつ居らむ

參照 フタサヤ

(六八六)

比者 千歲八往裳 過與 吾哉然念 欲見鴨

此ころは千年や行きも過ぎぬると吾やしか思ふ見まく欲りかも
(一)種々の訓があるが、第二十卷にも「相見ては千年やイヌルいなむか
も吾やしか思ふ君まらちがてに」とあるから、コノコロ、千年ヤ行キモ

(六九〇)

大伴宿禰三依悲別歌一首

照日乎 闇爾見成而 哭淚 衣沾津 干人無二
てらす日を闇に見なして泣く涙衣ぬらしつ乾す人なしに

(六九一)

大伴宿禰家持贈三娘子二歌二首

百磯城之 大宮人者 雖多有 情爾乘而 所念妹
百しきの大宮人は多かれど心にのりて思ほゆる妹

(六九二)

得羽重無 妹二毛有鴨 如此許 人情乎 令盡念者

うはへなき妹にもあるかもかくばかり人の心を盡す思へは

(一) 畧解の訓可。ツクスは今の語でいへばツクサシメルである。心を
ツクスは連続的に行はれることであるから、不定法を用ひることな
然るべしとする。——ツクセルと訓するは非。

參照 ウハヘナキ

(六九三)

大伴宿禰千室歌一首 未詳

如此耳 戀哉將度 秋津野爾 多奈引雲能 過跡者無二
かくのみに戀やわたらむ秋津野にたなびく雲の過ぐとはなしに
(六九四)

過ヌルトと訓むを可とする。

(一) 末句は君を見むことを欲して吾やしか思ふといふ意であらねばな
らぬから、見マクホリカモ「古義」と訓すべきである。ホレカモと訓
み、欲スレバカの意(即ち第四句の動因)と解するのは聊か無理であ
る。——其場合にはホリスレカといふのが普通で、ホリ(欲)といふ
語はホラム、ホレバの如く用ひられた例がない。恐らくはホシ(欲)、
アリ(在)の意の不完全動詞であつたのであらう。

(六八七)

愛常 吾念情 速河之 雖塞々友 猶哉將崩

うつくしと吾が思ふ心はや川のせけどせけども尙やくえなむ

(一) 舊訓セクトセクトモとあり、諸説皆假設前提として此句を解して
居るが、こゝは既定前提として結句をクエナム「古義」と讀むべきで
あらう。——但し古義の如くセキハセクトモ、ナホヤクエナムとして
は時格が一致せぬ。——校本萬葉集に古義のクエナムといふ訓を逸
して居る。

參照 ウツクシ

(六八八)

青山乎 横敏雲之 灼然 吾共啖爲而 人二所知名

あを山を横切る雲のいちじろく吾とゑまして人に知らゆな

(六八九)

海山毛 隔莫國 奈何鴨 自言乎谷裳 幾許寸寸

海山も隔たらなくになにしかも自言をだにもこゝだ乏しき

廣河女王歌二首

戀草呼 力車二 七車 積而戀良苦 吾心柄

こひ草を力車に七車つみて戀ふらく吾が心から

(六九五)

戀者今葉 不有常吾羽 念乎 何處戀其 附見繫有

戀は今あらじと吾は思へるをいづくの戀ぞつかみかかれる

(六九六)

石川朝臣廣成歌一首

家人爾 戀過目八方 川津鳴 泉之里爾 年之歴去者

(六九七)

大伴宿禰像見詩三首

吾聞爾 繫莫言 刈薦之 亂而念 君之直香會

吾が聞にかけてないひそ刈薦のみだれて思ふ君が直かぞ

參照 タダカ

(六九八)

春日野爾 朝居雲之 敷布二 吾者戀益 月二日二異二

春日野に朝居る雲のしくしくに吾は戀ひまさる月に日にけに

(六九九)

一瀬二波 千遍障良比 逝水之 後毛將相 今爾不有十方

一瀬には千度さはらひ行く水の後にも逢はむ今にあらずとも
(七〇〇)

大伴宿禰家持到三娘子之門二作歌一首

如此爲而哉 猶八將退 不近 道之間乎 煩參來而
かくしてや尙やまからむ近からぬ道の間をなづみまゐきて

(七〇一)

河内百枝娘子贈三伴宿禰家持二歌二首

波都波都爾 人乎相見而 何將有 何日二箇 又外二將見
はつはつに人を逢ひ見ていかならむいづれの日にかまたよそに
見む

參照 ハツハツ

(七〇二)

夜干玉之 其夜乃月夜 至于今日 吾者不忘 無間苦思念者
ぬばたまの其夜の月夜今日までに吾は忘れず間なくし思へば

(七〇三)

巫部麻蘇娘子歌二首

吾背子乎 相見之其日 至于今日 吾衣手者 乾時毛奈志

吾がせこを逢ひ見し其日けふまてに吾が衣手はひる時もし

(七〇四)

携繩之 永命乎 欲苦波 不絶而人乎 欲見社

栗田娘子贈三伴宿禰家持二歌二首

思遣 爲便乃不知者 片垵之 底會吾者 戀成爾家類
思やるすべの知らねば片もひの底にぞ吾はこひ成りにける

(七〇八)

復毛將相 因毛有奴可 白細之 我衣手二 齋留目六
又も逢はむよしもあらぬか白たへの我が衣手にいつき留めむ

(七〇九)

豊前國娘子大宅女歌一首

夕闇者 路多豆多頭四 待月而 行吾背子 其間爾母將見
夕闇は路たづたづし月待ちていませ吾が夫子其間にも見む

(七一〇)

安都屏娘子歌一首

三空去 月之光二 直一目 相三師人之 夢西所見
み空行く月の光に唯一目あひ見し人の夢にし見ゆる

(七一一)

丹波大娘子歌三首

鴨鳥之 遊此池爾 木葉落而 浮心 吾不念國

鴨鳥のあそぶ此池に木の葉ちりて浮べる心吾が思はなくに

(七一二)

たく繩の長き命を欲しけくは絶えずて人を見まく欲りこそ

(一) ホレコソと訓むは非。假にホリセバコソをホレコソといひ得るに
しても、其義ならば第三句はホリシタレ又はホリシツレであらねば
ならぬ。ホシケクハは「欲しいのは」といふ意であるから、末句のコ
ソは希求の意とせざるを得ぬ。語法要録クの條下參照。

(七〇五)

大伴宿禰家持贈三童女二歌一首

葉根蕩 今爲妹乎 夢見而 情内二 戀度鳴

はねかづら今する妹を夢に見て心のうちに戀ひわたるかも

參照 ハネカツラ

(七〇六)

童女來報歌一首

葉根蕩 今爲妹者 無四乎 何妹其 幾許戀多類

はねかづら今する妹はなかりしを何の妹をぞこゝだこひたる

(一) 宣長は四を物の誤としナキモノヲと訓した(畧解)。或は然らむ。
(二) といふ助語は省いてもよい場合が多いけれども、こゝでは主格
と誤たれる處があるから、必ず之を用ひた筈である。否、寧ろか
かる場合の爲にヲといふ助語が発生したといふべきである。古
語ならばタレヤシイモヲとあるべきであるが、字によつて假にナニ
のイモヲと訓して置く。ナニとイツラ又はイカとは系統を異にす
る同義語である。語法要録參照。

(七〇七)

味酒呼 三輪之祝我 忌杉 手觸之罪敷 君二遇難寸

うま酒を三輪の祝がいはふ杉手觸りし罪か君に逢ひがたき

(七一二)

垣穂成 人辭聞而 吾背子之 情多由多比 不合頃者

かきほなす人言聞きて吾がせこが心たゆたひ逢はぬこのごろ

(七一二)

大伴宿禰家持贈三娘子二歌七首

情爾者 思渡跡 縁乎無三 外耳爲而 嘆會吾爲

心には思ひ渡れどよしをなみ外のみにして嘆きぞ吾がする

(七二五)

千鳥鳴 佐保乃河門之 清瀬乎 馬打和多思 何時將通

千鳥なく佐保の川門の清きせを馬打ちわたしいつか通はむ

(七二六)

夜晝 云別不知 吾戀 情蓋 夢所見寸八

夜ひるといふわき不知吾が戀ふる心はけだし夢に見えきや

(七二七)

都禮毛無 將有人乎 獨念爾 吾念者 惑毛安流香

つれもなく有らむ人を片思に吾し念へばわびしくもあるか

(一) マドヒを不可なりとして惑を感(考)、惑(古義)の誤字とする説も
あるが、字は其まゝにして契沖訓の如くマドヒクと訓むのがよいや

うである。

(七一八) 不念爾 妹之咲儼乎 夢見而 心中二 療管會呼留
思はぬに妹がまほまほを夢に見て心の中にも多つつぞ居る

(七一九)

大夫跡 念流吾乎 如此許 三禮二見津禮 片思男責
益ら雄と思へる吾やかくばかりみつれにみつれ片思をせめ

(一) 舊訓ソレヲとあるが、ソレヤとした略解の訓を可とする。但し乎の字は必しも也の誤寫とするを要せぬ。

參照 ミツレ

(七二〇)

村肝之 情摧而 如此許 余戀良苦乎 不知香安類良武
むら肝の心碎けてかくばかりわが戀ふらくを知らずかあるらむ

參照 ムラキモ

(七二二)

獻三天皇一歌一首

足引乃 山二四居者 風流無三 吾爲類和射乎 害目賜名
あしびきの山にし居ればみやびなみ吾がするわざをとがめたまふな

(一) 元曆校本には大伴坂上郎女在二佐保宅一作之と註してある。

(三) 舊訓ヨシヲナミとあるが、契沖訓の如くミヤビを可とする。雅澄は靈異記を引いてミサヲと訓したが、ミサヲといふ語の原義からいふと、此場合にあたらず。

參照 ミヤビ、ミサヲ

(七二二)

大伴宿禰家持歌一首

如是許 戀乍不有者 石木二毛 成益物乎 物不思四手
かくばかり戀ひつつあらずは岩木にも成らまほもの思はずして

(七二三)

大伴坂上郎女、從三跡見庄三贈三賜留宅女子大嬢一歌一

首并短歌

常呼二跡 吾行莫國 小金門爾 物悲良爾 念有之 吾兒乃刀
自緒 野干玉之 夜晝跡不言 念二思 吾身者瘦奴 嘆丹師
袖左倍沾奴 如是許 本名四戀者 古郷爾 此月期呂毛 有勝
益士

とこよにと 吾が行かなくに 小金門に 物かなしらに 思へりし 吾が子の刀自を ぬばたまの 夜晝といはず 思ふにし 吾が身はやせぬ 嘆くにし 袖さへ濡れぬ かくばかり もとなし戀ひば 古里に 此月ごろも ありかつましじ

(一) トコヨとある舊訓に従へば呼の字は誤寫であらう。

參照 カナト、トジ、モトナ

(七二四)

反 歌

朝髪之 念亂而 如是許 名姊之戀會 夢爾所見家留
朝髪の念ひみだれてかくばかり汝ねが戀ふれぞ夢に見えける

右歌報三賜大嬢一歌也

(一) 舊訓ナニノコヒソモとあるが意が通ぜぬ。契沖に従うてナネガコフレソと訓すべきである。

(七二五)

獻三天皇一歌一首

二寶鳥乃 潜池水 情有者 君爾吾戀 情示左禰
にほ鳥のかづく池水心あらば君に吾が戀ふ心示さぬ

(一) 元曆校本其他の古寫本には此下に小字で「大伴坂上郎女在春日里作也」の十二字が註記してある。

(七二六)

外居而 戀乍不有者 君之家乃 池爾住云 鴨二有益雄
よそに居て戀ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを

(七二七)

大伴宿禰家持贈三坂上家大嬢一歌二首 雖絶數年 會相聞往來

萬葉集(卷第四)

萱草 吾下紐爾 著有跡 鬼乃志許草 事二思安利家理
わすれ草吾が下紐につけたれど醜のしこぐさ言にしありけり

(七二八)

人毛無 國毛有梗 吾妹兒與 携行而 副而將座

(七二九)

大伴坂上大嬢贈三三伴宿禰家持一歌三首

玉有者 手二母將卷乎 鬱瞻乃 世人有者 手二卷難石
たまならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手にまきかたし

(七三〇)

將相夜者 何時將有乎 何如爲常香 彼夕相而 事之繁裳

(七三一)

吾名者毛 千名之五百名爾 雖立 君之名立者 惜社泣
吾が名はも千名の五百名にたためども君が名立たば惜しみこそ泣け

(一) 舊訓タチメトモとあるが、タタメドモと訓む方がよい。口語でいへば「立たうとも」といふべき場合で「立つにしても」ではない。

(七三二)

又大伴宿禰家持和歌三首

今時者四 名之惜雲 吾者無 妹丹因者 千遍立十方
今しはし名の惜しけくも吾はなし妹によりては千度立つとも

(七三三)

空蟬乃 代也毛二行 何爲跡鹿 妹爾不相而 吾獨將宿
うつせみの世やも二行く何すとか妹に逢はずて吾が獨ねむ

(七三四)

吾念 如此而不有者 玉二毛我 眞毛妹之 手二所纏牟
吾がおもひかてあらずば玉にもがまことも妹が手に巻かれなむ

(七三五)

同坂上大嬢贈家持一歌一首
春日山 霞多奈引 情具久 照月夜爾 獨鴨念
かすが山霞たなびき心ぐく照れる月夜に獨かもねむ

(七三六)

又家持和坂上大嬢一歌一首
月夜爾波 門爾出立 夕占問 足下乎曾爲之 行乎欲焉
月夜には門に出立ち夕占問ひ足下をぞせし行かまくを欲り

(七三七)

又家持和坂上大嬢一歌一首
月夜爾波 門爾出立 夕占問 足下乎曾爲之 行乎欲焉
月夜には門に出立ち夕占問ひ足下をぞせし行かまくを欲り

(一) 舊訓生有の二字をアレとし、契沖がイケレと訓したのはコソのかりに對する結びの約束と稱するものに提はれたのであらうが、右の如き約束の存せぬことは次巻語法要録中ののべる通りで、こゝは既定格を用ひる場合ではないから、イケリと訓まればならぬ。

(七四〇) 事耳乎 後毛相跡 勲 吾乎令憑而 不相可聞
言のみを後も逢はむとねもころに吾をたのめて逢はざらむかも

(一) 舊訓アハザラメカモとあるは語格を誤つて居る。宣長が相の下に「妹」又は「有」の字脱としたのは理由のないことで、アハザラムカモと訓むのであらう。——或はアハナケムカモと吟誦せられたのかも知れぬ。

(七四二) 一重耳 妹之將結 帶乎尙 三重可結 吾身者成
一重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべく吾が身はなりぬ

(一) 雅澄が諸伏を隨似の誤としてマニマニと訓したのは曲解である。モロフシとしてよく了解せられる。

(七四四) 暮去者 屋戸開設而 吾將待 夢爾相見二 將來云比登乎
夕ざれば屋戸あけまけて吾待たむ夢に逢見に來むと言ふ人を

(七四六) 生有代爾 吾者未見 事絶而 如是柯怜 縫流囊者
生ける代に吾はいまだ見ず言絶えてかくおもしろく縫へる囊は

(七四七) 吾妹兒之 形見乃服 下著而 直相左右者 吾將脱八方

き母韻の重疊を厭うたから、アシウラを約してアウラと稱へるやうなことはなかつた。——アシのシがあつて差支のあるものならばアノウラというた筈である。第十四卷には安能於登(足音)と假字音した例(三三七)もあるのである。——足は借字で葦占ではなかつたかと考へて見る必要もある。

(七三七) 同大嬢贈家持一歌二首
云々 人者雖云 若狭道乃 後瀬山之 後毛將念君
かにかくに人はいふとも若狭道の後瀬の山のちも逢はむ君

(七三八)

世間之 苦物爾 有家良久 戀二不勝而 可死念者
世の中の苦しきものにありけらし戀にたへずて死ぬべく思ふは

(七三九)

又家持和坂上大嬢一歌二首
後湍山 後毛將相常 念社 可死物乎 至今日毛生有
のちせ山のちも逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けり

(七四〇)

吾戀者 千引乃石乎 七許 頸二將繫母 神之諸伏
吾が戀は千引の石を七ばかり頸にかけむも神のもろふし

(一) 雅澄が諸伏を隨似の誤としてマニマニと訓したのは曲解である。モロフシとしてよく了解せられる。

(七四四) 暮去者 屋戸開設而 吾將待 夢爾相見二 將來云比登乎
夕ざれば屋戸あけまけて吾待たむ夢に逢見に來むと言ふ人を

(七四六) 生有代爾 吾者未見 事絶而 如是柯怜 縫流囊者
生ける代に吾はいまだ見ず言絶えてかくおもしろく縫へる囊は

(七四七) 吾妹兒之 形見乃服 下著而 直相左右者 吾將脱八方

吾妹子がかたみの衣下に着てただに逢ふまでは吾腕がめやも

(七四八)

戀死六 其毛同會 奈何爲二 人目他言 辭痛吾將爲

戀死なむ其も同じぞ何せむに人目ひと言こちたみ吾がせむ

(七四九)

夢二谷 所見者社有 如此許 不所見有者 戀而死跡香

夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えずてあるは戀ひて死

ねとか

(七五〇)

念絶 和備西物尾 中々爾 奈何辛苦 相見始兼

思ひたえ佗びにしものを中々になにか苦しく逢見そめけむ

(七五一)

相見而者 幾日毛不經乎 幾許久毛 久流比爾久流必 所念鴨

相見ては幾日もへぬをここだくも狂ひにくるひ思ほゆるかも

(七五二)

如是許 面影耳 所念者 何如將爲 人目繁而

かくばかり面影のみに思ほえはいかにかもせむ人目しげくて

(七五三)

相見者 須更戀者 奈木六香登 雖念彌 戀益來

相見てはしましく戀はなむかと思へどいよよ戀ひまさりけり

(七五四)

夜之穗杼呂 吾出而來者 吾妹子之 念有四九四 面影二三湯

夜のほども吾が出で來れば吾妹子が思へりしくし面影に見ゆ

參照 ホドロ、オモヘリシクシ

(七五五)

夜之穗杼呂 出都追來良久 遍多數 成者吾曾 截燒如

夜のほども出でつつ來らくたびまねくなれば吾が胸たち燒くご

とし

(七五六)

外居而 戀者苦 吾妹子乎 次相見六 事計爲與

よそに居て戀ふれば苦し吾妹子をつぎて逢ひ見む事はかりせよ

(七五七)

遠有者 和備而毛有乎 里近 有常聞乍 不見之爲便奈沙

とほからば佗びてもあらむを里近くありと聞きつつ見ぬがすべ

なさ

(七五八)

白雲之 多奈引山之 高々二 吾念妹乎 將見因毛我母

しら雲のたなびく山の高々に吾が思ふ妹を見むよしもがも

(七五九)

(七六二)

紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首 女郎名曰小鹿也

神左夫跡 不欲者不有 八也多八 如是爲而後二 佐夫之家牟

可聞 神さぶと否にはあらずはたやはたかくして後にさぶしけむかも

(一) 八也多八多の誤記とする宣長説(暑解)に従ふべきであらう。ヤヤ

多クヤと訓んでは意をなさぬ。

參照 ハタヤハタ

(七六三)

玉緒乎 沫緒二搓而 結有者 在手後二毛 不相在目八方

玉の緒をあはをによりて結ればありて後にも逢はざらめやも

參照 アハチ

(七六四)

大伴宿禰家持和歌一首

百年爾 老舌出而 與余牟友 吾者不厭 戀者益友

百年に老舌いでてよよむとも吾はいとはじ戀ひはますとも

(一) オイシタ(又はオキシタ)は紡織の用語で、オイ(老)にいひかけた

ものと思はれるが、之を明にし得ぬ。ヨヨムの語釋參照。

(七六五)

在久邇京思下留寧樂宅一坂上大嬢大伴宿禰家持作

歌一首

何 時爾加妹乎 牟具良布能 穢屋戸爾 入將座

いかならむ時にか妹を葎生のけがしき宿にいりてませなむ

右田村大嬢坂上大嬢并是右大辨大伴宿奈麻呂卿之女也、

卿居田村號曰田村大嬢但妹坂上大嬢者母居坂上里

仍曰坂上大嬢于時姉妹諮問以歌贈答

(一) 紀の訓註によりキタナキ、又は十九卷に牟具良波布伊夜之伎屋戸

母とあるによつてイヤシキと訓じたのはいづれも根據のあることで

はあるが、イヤシ(齧)と穢とは意を異にし、キタナキが古語でない

ことは記紀の訓註に詳論した通りであるから、字によつてケガシキ

と訓む可とする。

(二) 舊訓イリマサシメムとある。イリハマスラム、イリマサセナム、イ

リイマセナム等いろいろの訓があるが、イリテマセナムがよいやう

に思ふ。

參照 キタナキ、ケガ

(七六〇)

大伴坂上郎女從竹田庄贈賜女子大嬢歌二首

打渡 竹田之原爾 鳴鶴之 間無時無 吾戀良久波

(七六一)

早河之 湍爾居鳥之 緣乎奈彌 念而有師 吾兒羽裳何怜

早川の瀬に居る鳥のよしをなみ念ひてありし吾子はもあはれ

一隔山 重成物乎 月夜好見 門爾出立 妹可將待
一重山へなれるものを月夜よみ門に出てたち妹かまつらむ
參照 ヘダテ、ヘナリ

(七六六) 藤原郎女聞之即和歌一首

路遠 不來常波知有 物可良爾 然會將待 君之目乎保利
路遠み來じとは知れるものからにしかぞ待つらむ君が目を欲り
(七六七)

大伴宿禰家持更贈大嬢歌二首

都路乎 遠哉妹之 比來者 得餉飯而雖宿 夢爾不所見來
みやこ路を遠みや妹が此ごろはうけびてぬれど夢に見え來ぬ
(七六八)

今所知 久邇乃京爾 妹二不相 久成 行而早見奈

今知らず久邇の京に妹に逢はず久しくなりぬ行きて早見な
(七六九)

大伴宿禰家持報贈紀女郎歌一首

久堅之 雨之落日乎 直獨 山邊爾居者 鬱有來
久かたの雨の降る日を唯一人山邊に居ればいふせかりけり
(七七〇)

大伴宿禰家持從久邇京贈坂上大嬢歌五首

(七七三)

事不問 木尙味狹藍 諸茅等之 練乃村戸二 所許來
言問はぬ木すらあぢさのみもち等がねりのむらへにあざむかえ
けり

(一) 從來ムラトと訓して不可解としてあるが、叢生の意で、ムラヘ(ム
ラフの轉呼)と訓むべきである。語義を明にすれば歌の意は自ら明白
である。

參照 アヂサキ、モロチ、ネリノムラヘ

(七七四)

百千遍 戀跡云友 諸茅等之 練乃言羽志 吾不信
もも千度こふといふとも諸ちらがねりの言葉し吾はたのまじ

(七七五)

大伴宿禰家持贈紀女郎歌一首

鶉鳴 故鄉從 念友 何如裳妹爾 相縁毛無寸
うづらなく古りにし里よ思へども何ぞも妹に逢ふよしもなき
(七七六)

紀女郎報贈家持歌一首

事出之者 誰言爾有鹿 小山田之 苗代水乃 中與杼爾四手
言出しは誰が言なるか小山田のなはしろ水の中淀にして
(七七七)

人眼多見 不相耳會 情左倍 妹乎忘而 吾念莫國

人目おほみ逢はざるのみぞ心さへ妹を忘れて吾が念はなくに
(一) アハナクとするは非。アハナクは「逢はぬこと」といふ意であるが
こゝは單に「逢はぬのみ」といふべき所である。

(七七二)

僞毛 似付而會爲流 打布裳 眞吾妹兒 吾爾戀目八
いつはりも似つきてぞするうつたへもまこと吾妹子われに戀ひ
めや

(一) ウツシクと訓しては意が通ぜぬ。布はタへの假字である。

參照 ウツタヘ

(七七三)

夢爾谷 將所見常吾者 保杼毛友 不相志思 諸不所見武
いめにだに見えむと吾はうけべども逢はずし思へばうべ見えざ
らむ

(一) 舊訓ホドケトモとあるが意をなさぬ。古義の訓ウケドモを可と
する。但し得毛親友の誤寫とするは非。友を行字として保をウケヤ
と訓すべきである。

(二) 舊訓アヒシオモハネバとあるが、シは右の如く用ひることが出来
ぬ。女が「逢はじ」と思つて居るので夢に見え來ぬといふ意であるか
ら、アハズシモヘバであらねばならぬ。このズはシの音便である。
語法要義參照。

大伴宿禰家持更贈紀女郎歌五首

吾妹子之 屋戸乃管乎 見爾往者 蓋從門 將返却可聞
吾妹子が宿のまがきを見に行かば蓋し門よりかへしなむかも
(七七八)

打妙爾 前垣乃醉堅 欲見 將行常云哉 君乎見爾許會

うつたへにまがきのすがた見まく欲り行かむといへや君を見に
こそ

(七七九)

板蓋之 黒木乃屋根者 山近之 明日取而 持將參來
板ぶきの黒木の屋根は山近し明日のひ取りてもちまわり來む
(七八〇)

黒樹取 草毛刈乍 仕目利 勤和氣登 將譽十方不在 一云、仕
黒木取り草もかりつつ仕へめど(仕ふとも)いそしきわけと譽め
むともあらず

參照 ヲケ、イソシ

(七八一)

野干玉能 昨夜者令還 今夜佐倍 吾乎還莫 路之長手呼
ぬばたまのよふべはかへし今夜さへ吾をかへすな道のながてを
(一) 昨夜はヨフベと訓むべし。ヨフベ(ユフベ)はヨヒ(夜)方の義であ
るが、前夜の意に用ひられる。之に對し今日の夜をヨヒといふ。

——此は日本語に限らず周圍民族語に於ても見る表現法である——
キツと訓み改めたものがあるが、此歌に於ては其やうな漠然たる表
現を用ひることは許されぬ（キツは昨日から以前を意味する一般的
稱呼で、去年の義にも用ひられる）。ヨフベが今も尙口語に用ひられ
る故を以て俗なりとするが如きは論するに足らぬ。

【七九二】

紀女郎袷物贈レ友歌一首 女郎名曰小鹿

風高 邊者雖吹 爲妹 袖左倍所沾而 刈流玉藻烏

風たかく邊には吹けども妹が爲袖さへぬれて刈れる玉藻ぞ

【七九三】

大伴宿禰家持贈レ娘子二歌三首

前年之 先年從 至今年 戀跡奈何毛 妹爾相難

をと年のさきつ年より今年まで戀ふれどなぞも妹に逢ひがたき

【七九四】

打乍二波 更毛不得言^(一) 夢谷 妹之手本乎 纏宿常思見者

うつつには更にもいはず夢にだに妹が袂をまきぬとし見ば

(一) 得は契沖説の如く衍字であらう。

【七九五】

吾屋戸之 草上白久 置露乃 壽母不有惜 妹爾不相有者

吾が宿の草の上しろくおく露のいのちも惜しからず妹に逢はず

あれば

【七八六】

大伴宿禰家持報レ贈藤原朝臣久須麻呂二歌三首

春之雨者 彌布落爾 梅花 未咲久 伊等若美可聞

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも

【七八七】

如夢 所念鴨 愛八師 君之使乃 麻禰久通者

夢のごと思ほゆるかも愛しきやし君が使のまねく通へば

【七八八】

浦若見 花咲難寸 梅乎殖而 人之事重三 念會吾爲類

うらわかみ花さきがたき梅を植ゑて人の言しげみおもひぞ吾が

【七八九】

又家持贈レ藤原朝臣久須麻呂二歌二首

情八十一 所念可聞 春霞 輕引時二 事之通者

心ぐくおもほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば

【七九〇】

春風之 聲爾四出名者 有去而 不有今友 君之隨意

春風の音にし出でなばありさりて今ならずとも君がまにまに

【七九一】

藤原朝臣久須麻呂來報歌二首

奥山之 磐影爾生流 菅根乃 勸吾毛 不相念有哉

おく山の岩影に生ふる菅の根のねもころ吾も相念はざれや

【七九二】

春雨乎 待常二師有四 吾屋戸之 若木乃梅毛 未含有

春雨をまつとしあらし吾が宿の若木の梅もいまだふふめり

【卷第五】

雜 歌

【七九三】

大宰帥大伴卿報レ凶問二歌一首

禍故重疊、凶問累集、永懷崩心之悲、獨流斷腸之泣、但依

兩君大助、傾命纒繼耳、筆不盡言古今所歎

余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊與余麻須萬須

加奈之可利家理

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

神龜五年六月二十三日

【七九四】

蓋聞四生起滅方二夢皆空、三界漂流喻二環不^レ息、所以維摩大

士在^レ乎方丈一有^レ懷^レ染^レ疾之患、釋迦能仁坐^レ於雙林一無^レ免^レ

泥洹之苦、故知二聖至極不^レ能^レ拂^レ力負之尋至、三千世界

誰能逃^レ黑闇之搜來、二鼠競走而度^レ目之鳥且飛、四蛇爭侵而

過^レ隙之駒夕走、嗟乎痛哉、紅顏共^レ三從^レ長逝、素質與^レ四德^レ

永滅、何圖偕老違^レ於要期、獨飛生^レ於半路、蘭室屏風徒張、

斷腸之哀彌痛、枕頭明鏡空懸、染筠之淚逾落、泉門一掩無^レ由

二再見^レ、嗚呼哀哉

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無^レ結 從來厭離^レ此穢土^レ 本願

託^レ生彼淨刹^レ

日本挽歌一首

大王能 等保乃朝廷等 斯良農比 筑紫國爾 泣子那須 斯多

比枳摩斯提 伊企陀爾母 伊摩陀夜周米受 年月母 伊摩他阿

良禰婆 許許呂由母 於母波奴阿比陀爾 宇知那比枳 許夜斯

努禮 伊波牟須弊 世武須弊斯良爾 石木乎母 刀比佐氣斯良

受 伊弊那良婆 迦多知波阿良牟乎 宇良賣斯企 伊毛乃美許

等能 阿禮乎婆母 伊可爾世與等可 爾保鳥能 布多利那良毗

爲 加多良比斯 許許呂會牟企豆 伊弊社可利伊摩須
 大君の 遠の御門と しらぬひ 筑紫の國に 泣く子なす し
 たひ來まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあら
 ねば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき こやしぬれ 言はむ
 すべ 爲むすべ不知 岩木をも とひさけし知らず 家ならば
 形はあらむを うらめしき 妹の命の 吾をばも いかによ
 とか 鳩鳥の 二人ならびぬ 語らひし 心そむきて 家さか
 りいます

(一) 反歌によれば山上臣憶良が亡妻を悲しむ歌であるが、願詞を逸し
 たものとおもはれる

(七九五)

反歌

伊弊爾由伎豆 伊可爾可阿我世武 摩久良豆久 都麻夜佐夫斯
 久 於母保由倍斯母
 家に行きていかにか吾がせむ枕つく妻屋さぶしく思ほゆべしも
 (七九六)
 伴之伎與之 加久乃未可良爾 之多比己之 伊毛我已許呂乃
 須別毛須別那左
 はしきよしかくのみからに慕ひ來し妹が心のすべもすべなさ

ハシキヤシ

(七九七)

久夜斯可母 可久斯良摩世婆 阿乎爾與斯 久奴知許等其等
 美世摩斯母乃乎
 くやしかもかく知らませばあを土よし國內ことごと見せましも
 のを

アチニヨシ

(七九八)

伊毛何美斯 阿布知乃波那波 知利奴倍斯 和歌那久那美多
 伊摩陀飛那久爾

(七九九)

大野山 紀利多知和多流 和何那宜久 於伎蘇乃可是爾 紀利
 多知和多流
 大野山霧たち渡るわがなげく息その風に霧たちわたる

(一) オキソは息嘯の義なりとする説があるが(宣長)、オキ(息)に沖磯
 をいひかけたものであらう。

神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上

(八〇〇)

令反感情歌一首并序

或有人知反感情父母忘於侍養、不願妻子輕於脫履、自

稱長俗先生、意氣雖揚青雲之上、身體猶在塵俗之中、
 未驗修行得道之聖、蓋是亡命山澤之民、所以指三示三綱、
 更開五教、遺之以歌、令反其惑、歌曰

父母乎 美禮婆多布斗斯 妻子美禮婆 米具斯宇都久志 余能
 奈迦波 加久叙許等和理 母智騰利乃 可良波志母與 由久
 弊斯良禰婆 宇既具都遠 奴伎都流其等久 布美奴伎提 由久
 智布比等波 伊波紀欲利 奈利提志比等迦 奈何名能良佐禰
 阿米弊由迦婆 奈何麻爾麻爾 都智奈良婆 大王伊麻周 許能
 提羅周 日月能斯多波 阿麻久毛能 牟迦夫周伎婆美 多爾具
 久能 佐和多流伎波美 企許斯遠周 久爾能麻保良叙 可爾迦
 久爾 保志伎麻爾麻爾 斯可爾波阿羅慈迦
 父母を 見れば尊し 妻子見れば 目ぐしうつくし 世の中は
 かくぞことわり 鶉鳥の かからはしもよ 行方知らねば
 うけ履を 脱棄る如く 踏みぬぎて 行くちふ人は 岩木より
 成りてし人か 汝が名のらさね
 天へ行かば 汝がまにまに 土ならば 大君います 此の照ら
 す 日月の下は 天雲の むかふすきはみ 谷ぐくの さわた
 る極み 聞こし食す 國のまほらぞ かにかくに 欲しきまに
 まに しかにはあらじか

萬葉集(卷第五)

三一七

(一) 代匠記には此句の下に「遁路得奴兄弟親族遁路得奴老見幼見朋友
 乃言問交之」の六句あるを可としたが、校本萬葉集にあげた諸本中一
 も此句を挿入したものが無い所を見ると、後人の案出したものと思
 はれる。

(二) 契沖は此上に五言の一句脱とし、雅澄はハヤカハノといふ一句を
 補うたが、此長歌は新考説の如く、長短不同の三節から成立するも
 ので、此句を以て第一節の終とする。

(三) 舊訓の如くウキクツと訓むも妨はない。

(四) 第二節の終である。

參照 コトアリ、モチドリ、タニグク、クニノホ、マホロバ

(八〇一)

反歌

比佐迦多能 阿麻遲者等保斯 奈保奈保爾 伊弊爾可弊利提
 奈利乎斯麻佐爾
 久かたの天路は遠し尙々に家にかへりて業をしまさね

(一) 爾はネの音便と解することも出来るが、尙禰の誤寫としてネと訓
 む方がよい。

參照 ナリ

(八〇二)

思子等二歌一首并序

釋迦如來金口正説、等思衆生如羅睺羅、又説愛無過
 子、至極大聖尙有愛子之心、況乎世間蒼生誰不愛子乎

宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提斯農波由
伊豆久欲利 积多利斯物會 麻奈迦比爾 母等奈可利提 夜
周伊斯奈佐農

瓜喰めば 子どもおもほゆ 栗はめば まして偲ばゆ 何處よ
り 來りしものぞ 目なにかひに もとなかかりて 安いし寐さぬ
(八〇三)

反歌

銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻佐禮留多可良 古爾斯迦米夜母
白金も黄金も珠も何せむにまされる寶子にしかめやも

(八〇四)

哀世間難住歌一首并序

易集難排八大辛苦、難遂易盡百年賞樂、古人所歎今亦
及之、所以因作一章之歌、以撥三毛之歎、其歌曰

世間能 周弊奈伎物能波 年月波 奈何流流其等斯 等利都都
伎 意比久留母能波 毛毛久佐爾 勢米余利伎多流 遠等咩良
何 遠等咩佐備周等 可羅多麻乎 多母等爾麻可志 或有此句
倍乃、袖布利可伴之、久禮 奈爲乃、阿可毛須蘇毘伎 云之路多
家武 等伎能佐迦利乎 等等尾迦爾 周具斯野利都禮 美奈乃
和多 迦具漏伎可美爾 伊都乃麻可 斯毛乃布利家武 久禮奈

赤駒に 倭文鞍うち置き はひ乗りて 遊びあるきし 世の中
や 常にありける 少女等が さ鳴す板戸を おしひらき い
迎りよりて 眞玉手の 玉手さしかへ さ寢し夜の いくだも
あらねば 手つか杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ
かく行けば 人に憎まえ およしをは かくのみならし 玉き
はる 命惜しけど せむすべもなし

(一) オヨシヲハオホシヨハの誤記なりとする新考説には従はれぬ。
オヨシは現代語のオヨソ(凡)、ナはヨ(世)の音便で、「凡そ世は」と
いふ意と思はれる。

参照 モモクサ、ナトメサビ、ヨチコ、ミナノワタ、ニノホナス、ナ
トコサビ、シヅクラ、タガネ

(八〇五)

反歌

等伎波奈周 迦久斯母何母等 意母閉騰母 余能許等奈禮婆
等登尾可彌都母
ときはなすかくしもかと思へども世のことなればとどみかね
つも

神龜五年七月二十一日於嘉摩郡撰定、筑前國守山
上憶良

(八〇六)

伏辱來書、具承芳旨、忽成隔漢之戀、復傷抱梁之

爲能 一云余能 意母提乃宇倍爾 伊豆久由可 斯和何伎多利斯
保奈酒 一云、都爾奈利之、惠麻比麻欲毘伎、散久伴奈能 麻周羅遠乃 遠乃古
宇都呂比尔家里、余乃奈可伴、可久乃未奈良之
佐備周等 都流岐多智 許志爾刀利波枳 佐都由美乎 多爾伎
利物知提 阿迦胡麻爾 志都久良宇知意伎 波比能利提 阿蘇
比阿留伎斯 余乃奈迦野 都爾爾阿利家留 遠等咩良何 佐那
周伊多斗乎 意斯比良伎 伊多度利與利提 摩多麻提乃 多麻
提佐斯迦閉 佐爾斯欲能 伊久陁母阿羅彌婆 多都可豆惠 許
志爾多何彌提 可由既婆 比等爾伊等波延 可久由既婆 比等
爾邇久麻延 意余斯遠波 迦久能尾奈良志 多摩枳波流 伊能
知遠志家騰 世武周弊母奈斯

世の中の すべなきものは 年月は 流るる如し 取りつづき
追ひ來るものは ももくさに 攻めより來たる 小女らがを
とめさびすと 唐珠を 袂にまかし(白たへの、袖ふりかはし、
紅の、赤裳裾ひき) よちこらと 手携はりて 遊びけむ 時の
盛を とどみかね 過ぐしやりつれ みなわた か黒き髪に
いつのまか 霜の降りけむ くれなゐの(にのほなす) 面の上
に 何處ゆか 皺かき垂りし(常なりし、ままひ眉引、咲く花の
うつろひにけり、世の中は、かくのみならし) 益ら雄の をとこ
さびすと 劍太刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握りもちて

意、唯美去留無恙、遂待披雲一耳

歌詞兩首 太宰帥大伴卿

多都能馬母 伊麻勿愛旦之可 阿遠爾與志 奈良乃美夜古爾
由吉帝已牟丹米

(八〇七)

宇豆都仁波 安布余志勿奈子 奴波多麻能 用流能伊味仁越
都伎提美延許會

現には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にをつぎて見えこそ
(八〇八)

答歌二首

多都乃麻乎 阿禮波毛等米牟 阿遠爾與志 奈良乃美夜古邇
許牟比等乃多仁

龍の馬を吾は求めむ青によし奈良の都に來む人のたに

(八〇九)

多陀爾阿波須 阿良久毛於保久 志岐多閉乃 麻久良佐良受提
伊米爾之美延牟

(八一〇)

直に逢はず有らくも多くしきたへの枕さらすて夢にし見えむ

大伴淡等謹狀

梧桐日本琴一面 對島結石山孫枝

此琴夢化ニ娘子一曰、余託ニ根遙島之崇巒、睇ニ跨九陽之休光、
長帶ニ煙霞ニ道ニ遙山川之阿、遠望ニ風波ニ出入鴈木之間、唯
恐百年之後、空朽ニ溝壑、偶遭ニ良匠、散爲ニ小琴、不願ニ質
鹿音少、恒希ニ君子左琴、即歌曰

伊可爾安良武 日能等伎爾可母 許惠之良武 比等能比射乃倍
和我摩久良可武

僕報詩詠曰

許等等波奴 樹爾波安里等母 宇流波之吉 伎美我手奈禮能
許等爾之安流倍志

言問はぬ木にもありとも麗はしき君が手なれの琴にしあるべし
琴娘子答曰敬奉ニ德音、幸甚幸甚、片時覺、即感ニ於夢言、慨
然不レ得ニ默止、故附ニ公使ニ聊以進御耳 謹狀不具

天平元年十月七日附レ使進上

謹通 中衛高明閣下謹空

(八一四)

會許 意積都布可延乃 宇奈可美乃 故布乃波良爾 美豆豆可
良 意可志多麻比豆 可武奈何良 可武佐備伊麻須 久志美多
麻 伊麻能遠都豆爾 多布刀伎呂可儼

かけまくは あやに惶し たらし姫 神の命 韓國を むけ平
げて 御心を 鎮めたまふと い取らして 齋ひたまひし 眞
玉なす 二つの石を 世の人に 示したまひて 萬代に 言ひ
つくがねと わだの底 沖つ深江の 海上の 子負の原に 御
手づから 置かしたまひて 神ながら 神さびいます 奇靈
今のをつつに 貴きろかも

(八一四)

阿米都知能 等母爾比佐斯久 伊比都夏等 許能久斯美多麻
志可志家良斯母
天地の共に久しく言ひつげと此くしみたましかしけらしも
右事傳言那珂郡伊知郷養島人建部牛麻呂是也

(八一五)

梅花歌三十二首并序

天平二年正月十三日萃于帥老之宅申宴會也、于時初春
令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香、加以曙嶺
移雲、松掛蘿而傾蓋、夕岫結霧、鳥封穀而迷林、庭舞新

萬葉集(卷第五)

念常心百倍、謹和ニ白雲之什、以奏ニ野鄙之歌、房前謹狀
許等騰波奴 紀爾茂安理等母 和何世古我 多那禮乃美巨騰
都地爾意加米移母

言問はぬ木にもありとも我せこが手なれの御琴士におかめやも
十一月八日附ニ還使大監

謹通 尊門記室

(八一三)

筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石、大者長一尺
二寸六分、圍一尺八寸六分、重十八斤五兩、小者長一尺一寸、
圍一尺八寸、重十六斤十兩、並皆橢圓、狀如鷄子、其美好者
不可勝論、所謂徑尺璧是也 或云、此二石者、肥前國彼
許郡平敷石、當占而取之、去深江
驛家二十許里、近在路頭、公私往來莫不下馬跪拜、古
老相傳曰、往者息長足日女命征討新羅國之時、用茲兩石、
挿著御袖之中、以爲鎮懷 實是御 所以行人敬拜此石、乃
作歌曰

可既麻久波 阿夜爾可斯故斯 多良志比咩 可尾能彌許等 可
良久爾遠 武氣多比良宜豆 彌許々呂遠 斯豆米多摩布等 伊
刀良斯豆 伊波比多麻比斯 麻多麻奈須 布多都能伊斯乎 世
人爾 斯咩斯多麻比豆 余呂豆余爾 伊比都具可爾等 和多能

蝶、空歸故鴈、於是蓋天坐地促、膝飛、臆忘、言一室之裏、
開、衿煙霞之外、淡然自放、快然自足、若非翰苑、何以據
情、詩紀、落梅之篇、古今夫何異矣、宜賦園梅、聊成短詠、
武都紀多知 波流能吉多良婆 可久斯許會 烏梅乎乎利都都
多努之岐乎倍米 大貳紀卿

(八一六)

烏梅能波奈 伊麻佐家留期等 知利須義受 和我霸能會能爾
阿利已世奴加毛 少貳小野大夫
梅の花今咲けること散り過ぎず我家の園にありこせぬかも

(八一七)

烏梅能波奈 佐吉多流僧能能 阿遠也疑波 可豆良爾須倍久
奈利爾家良受夜 少貳粟田大夫
梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべく成りにけらずや

(八一八)

波流佐禮婆 麻豆佐久耶登能 烏梅能波奈 比等利美都都夜
波流比久良佐武 筑前守山上大夫
春されば先づさく宿の梅の花ひとり見つつや春日くらさむ

(八一九)

余能奈可波 古飛斯宜志惠夜^(一) 加久之阿良婆 烏梅能波奈爾母
奈良麻之勿能怒 豐後守大伴大夫

世の中は戀しけしゑやかくしあらば梅の花にもならましものを
(一) 第二句をコレシケシ・エヤと切つて訓するものもあるが、エヤといふ感動詞は原義上この場合には不適當である。コレシケ(戀しい)、シエヤ(此場合にはサテモといふ程の意)と訓めば意がよく通ずる。誤字を云々するのは論外である。

參照 エヤ、シエヤ

(八二〇) 烏梅能波奈 伊麻佐可利奈理 意母布度知 加射之爾斯^{カサシ}豆奈
伊麻佐可利奈理 筑後守葛井大夫

梅の花今さかりなり思ふどち挿頭^{カサシ}にしてないま盛りなり

(八二二)

阿乎夜奈義 烏梅等能波奈乎 遠理可射之 能彌^{カサシ}豆能能知波
知利奴得母與斯 笠沙彌

青やなぎ梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし
(八二三)

和何則能爾 宇米能波奈知流 比佐可多能 阿米欲里由吉能

那何列久流加母 主人

わが園に梅の花散る久かたの天より雪の流れ来るかも
(八二四)

比等期等爾 乎理加射之都都 阿蘇倍等母 伊夜米豆良之岐
烏梅能波奈加母 大判事舟氏麻呂

人毎に折りかざしつ遊べともいやめづらしき梅の花かも
(八二九)

烏梅能波奈 佐企豆知理奈婆 佐久良婆那 都伎豆佐久倍久

奈利爾豆阿良受也 藥師張氏福子

梅の花咲きて散りなば櫻ばなつぎて咲くべく成りにてあらずや
(八三〇)

萬世爾 得之波岐布得母 烏梅能婆奈 多由流己等奈久 佐吉
和多流倍子 筑前介佐氏子首

萬代に年は來經^フとも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし
(八三一)

波流奈例婆 宇倍母佐積多流 烏梅能波奈 岐美乎於母布得
用伊母爾奈久爾 壹岐守板氏安麻呂

春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜いも寝なくに
(八三二)

烏梅能波奈 乎理豆加射世留 母呂比得波 家布能阿比太波
多努斯久阿流倍斯 神司荒氏稻布

梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし
(八三三)

梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし
(八三三)

烏梅能波奈 知良久波伊豆久 志可須我爾 許能紀能夜麻爾
由企波布理都都 大監大伴氏百代

梅の花散らくは何處^{イック}しかすがに此基肆^{キシ}の山に雪は降りつつ
(八三四)

(八三四)

烏梅乃波奈 知良麻久怨之美 和家會乃乃 多氣乃波也之爾
于具比須奈久母 少監阿氏奥島

梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯なくも
(八三五)

(八三五)

烏梅能波奈 佐岐多流會能能 阿乎夜疑遠 加豆良爾志都都
阿素毗久良佐奈 少監土氏百村

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ遊びくらさな
(八三六)

(八三六)

有知奈毗久 波流能也奈宜等 和家夜度能 烏梅能波奈等遠
伊可爾可和可武 大典史氏大原

うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とをいかにか別かむ
(八三七)

(八三七)

波流佐禮婆 許奴禮我久利豆 宇具比須會 奈岐豆伊奴奈流
烏梅我志豆延爾 小典山氏若麻呂

春されば木ぬれがくりて鶯ぞ鳴きていぬなる梅が下枝^{シヅメ}に
(八三八)

(八三八)

得志能波爾 波流能伎多良婆 可久斯己會 烏梅乎加射之豆
多努志久能麻米 大令史野氏宿奈麻呂

年の端に春の來たらばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ
(八三四)

(八三四)

烏梅能波奈 伊麻佐加利奈利 毛毛等利能 己惠能古保志積

波流岐多流良斯 少令史田氏肥人

梅の花今さかりなり百鳥の聲の戀^{コホ}しき春來たるらし
(八三五)

(八三五)

波流佐良婆 阿波武等母比之 烏梅能波奈 家布能阿素毗爾

阿比美都流可母 藥師高氏義通

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つるかも
(八三六)

(八三六)

烏梅能波奈 多乎利加射志豆 阿蘇倍等母 阿岐太良奴比波

家布爾志阿利家利 陰陽師儀氏法麻呂

うめの花手折りかざして遊べども飽きたらぬ日は今日にしあり
けり
(八三七)

(八三七)

波流能努爾 奈久夜汗隅比須 奈都氣牟得 和何弊能會能爾

汗米何波奈佐久 竿師志氏大遭

春の野になくや鶯なつけむと我家^{ワガ}の園に梅の花さく
(八三三)

(八三三)

(八三八) 烏梅能波奈 知利麻我比多流 乎加肥爾波 宇具比須奈久母
波流加多麻氣豆 大隅日履氏鉢麻呂
梅の花散りまがひたる岡邊にはうぐひす鳴くも春かたまけて

參照 カタマケ

(八三九)

波流能能爾 紀利多知和多利 布流由岐得 比得能美流麻提
烏梅能波奈知流 筑前目田氏真人
春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花ちる

(八四〇)

波流揚奈宜 可豆良爾乎利志 烏梅能波奈 多禮可有可倍志
佐加豆岐能倍爾 壹岐目村氏彼方
春柳かづらに折りし梅の花誰か浮べし酒づきの上に

(八四一)

于遇比須能 於登企久奈倍爾 烏梅能波奈 和企弊能會能爾
佐伎豆知留美由 對馬目高氏老
うぐひすの音聞くなべに梅の花我家の園に咲きて散る見ゆ

(八四二)

和家夜度能 烏梅能之豆延爾 阿蘇毗都都 宇具比須奈久毛
知良麻久乎之妻 薩摩目高氏海人

麻多遠知米也母

わが盛りいたく貶ちぬ雲に飛ぶ藥はむともまたをちめやも

參照 ナチ

(八四八)

久毛爾得夫 久須利波牟用波 美也古彌婆 伊夜之吉阿何微
麻多越知奴倍之
雲に飛ぶ藥喰むよは都見ばいやしき吾が身またをちぬべし

參照 イヤシ

(八四九)

後追和梅歌四首

能許利多流 由棄仁末自列留 烏梅能半奈 半也久奈知利會
由吉波氣奴等勿
残りたる雪にまじれる梅の花はやくな散りそ雪は消ぬとも

(八五〇)

由吉能伊呂遠 有婆比豆佐家流 有米能波奈 伊麻左加利奈利
彌牟必登母我聞
雪の色を奪ひて咲ける梅の花今さかりなり見む人もがも

(八五一)

和我夜度爾 左加里爾散家留 牟梅能波奈 知流倍久奈里奴
美牟必登聞我母

わがやどの梅の下枝に遊びつつ驚なくも散らまく惜しみ

(八四三)

宇梅能波奈 乎理加射之都都 毛呂比登能 阿蘇夫遠美禮婆
彌夜古之叙毛布 土師氏御通
うめの花折りかさしつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ

(八四四)

伊母我陸邇 由岐可母不流登 彌流麻提爾 許許陀母麻我不
烏梅能波奈可毛 小野氏國堅
妹が家に雪かもふると見るまてにここだもまがふ梅の花かも

(八四五)

宇具比須能 麻知迦豆爾勢斯 宇米我波奈 知良須阿利許會
意母布故我多米 筑前椽門氏石足
うぐひすの待ちがてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため

(八四六)

可須美多都 那我岐波流卑乎 可謝勢例杼 伊野那都可子岐
烏梅能波那可毛 小野氏淡里
霞たつ長き春日をかさせれどいやなつかしき梅の花かも

(八四七)

員外思故郷歌兩首
和我佐可理 伊多久久多知奴 久毛爾得夫 久須利波武等母

わが宿に盛りいたく咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

(八五二)

烏梅能波奈 伊米爾加多良久 美也備多流 波奈等阿例母布
左氣爾于可倍許會
一云、伊多豆良爾、阿例乎知良須奈、左氣爾于可倍己會

梅の花夢に語らくみやびたる花と吾思ふ酒に浮べこそ(いたづらに我を散らすな酒にうかべこそ)

(八五三)

遊於松浦河序

余以暫往松浦之縣逍遙、聊臨玉島之潭遊覽、忽值釣魚
女子等也、花容無雙、光儀無匹、開柳葉於眉中、發桃花
於頰上、意氣凌雲、風流絕世、僕問曰、誰鄉誰家兒等、若疑
神仙者乎、娘等皆咲答曰、兒等者漁夫之舍兒、草菴之微者、無
郷無家、何足稱云、唯性便水、復心樂山、或臨洛浦而
徒羨王魚、乍臥巫峽、以空望烟霞、今以邂逅相遇貴客、
不勝感應、輒陳欸曲、而今而後豈可非偕老哉、下官
對曰、唯唯敬奉芳命、于時日落西山、驪馬將去、遂申
懷抱、因贈詠歌曰

阿佐里須流 阿末能古等母等 比得波伊倍騰 美流爾之良延奴
有麻必等能古等

漁りする海人の子共と人は言へど見るに知らえぬうまの子と
(八五四)

答詩曰

多麻之末能 許能可波加美爾 伊返波阿禮騰 吉美乎夜佐之美
阿良波佐受阿利吉

玉島の此川上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき

參照 ヤサシ

蓬客等更贈歌三首

麻都良河波 可波能世比可利 阿由都流等 多多勢流伊毛河
毛能須蘇奴例奴

松浦川河の瀬光り年魚釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ

(八五六)

麻都良奈流 多麻之麻河波爾 阿由都流等 多多世流古良何

伊弊遲斯良受毛

松浦なる玉島川に年魚釣ると立たせる子等が家路知らずも

(八五七)

等富都比等 末都良能加波爾 和可由都流 伊毛我多毛等乎

和禮許曾末加米

遠つ人まつらの河に若年魚釣る妹が袂を我こそまかめ

(八五八)

娘等更報歌三首

和可由都流 麻都良能可波能 可波奈美能 奈美邇之母波婆
和禮故飛米夜母

若年魚釣る松浦の川の川波のなみにし思はば我こひめやも

(八五九)

波流佐禮婆 和伎霸能佐刀能 加波度爾波 阿由故佐婆斯留

吉美麻知我豆爾

春されば我家の里の川門には年魚子さ走る君まちがてに

(八六〇)

麻都良我波 奈奈勢能與騰波 與等武等毛 和禮波與騰麻受

吉美遠志麻多武

松浦川七瀬の淀はよどむとも我はよどます君をし待たむ

(八六一)

後人追和之詩三首 都帥老

麻都良河波 河波能世波夜美 久禮奈爲能 母能須蘇奴例豆

阿由可都流良武

まつら川河の瀬はやみ紅の裳の裾濡れて年魚か釣るらむ

(八六二)

比等未奈能 美良武麻都良能 多麻志末乎 美受豆夜和禮波
故飛都都遠良武

人皆の見たらむ松浦の玉島を見ずてや我は戀ひつつ居らむ

(八六三)

麻都良河波 多麻斯麻能有良爾 和可由都流 伊毛良遠美良牟

比等能等母斯佐

松浦川玉島の浦に若年魚釣る妹らを見らむ人の美しさ

(八六四)

宜啓、伏奉、四月六日賜書、跪開封函、拜讀芳藻、心神開

朗、似懷泰初之月、鄙懷除祛若披樂廣之天、至若羈旅

邊城、懷古舊而傷志、年矢不、停憶平生而落淚、但達人

安、排、君子無悶、伏冀朝宣懷、翟之化、暮存、放龜之術、

架、張趙於百代、追、松喬於十齡、耳、兼奉、垂示梅花芳席群

英、擒藻、松浦玉潭仙媛贈答、類、杏壇各言之作、疑、衡阜稅

駕之篇、就讀吟諷、感謝歡怡、宜戀、主之誠、誠、逾、犬馬、仰

德之心、心同、葵藿、而碧海分、地、白雲隔、天、徒積、傾延、何

慰、勞緒、孟秋膺、節、伏願萬祐日新、今因、相撲部領使、謹付

片紙、宜謹啓不次

奉和諸人梅花歌一首

於久禮爲天 那我古飛世殊波 彌會能不乃 于梅能波奈爾母

奈良麻之母能乎

おくれゐて長戀ひせずは御園生の梅の花にもならましもを

(一) 和歌眞字序によれば此書は吉田連宜から送つたものである。雅澄
の説の如く題詞一行を脱したのであるかも知れぬ。

(八六五)

和松浦仙媛歌一首

伎彌乎麻都 麻都良乃于良能 越等賣良波 等已與能久爾能

阿麻越等賣可忘

君をまつ松浦の浦のをとめ等は常世の國のあま少女かも

(八六六)

思君未盡重題二首

波漏婆漏爾 於忘方由流可母 志良久毛能 智弊仁邊多天留

都久紫能君仁波

はろばろに思はゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の國は

(一) 類聚集に敝太津と改めたのは誤である。ヘダテ在ルの約で、アル
は助動詞でないから、ヘダツルとはならぬのである。

(八六七)

積美可由伎 氣那我久奈理努 奈良遲那留 志滿乃己太知母

可牟佐飛仁家理

君が行きけ長くなりぬ奈良路なる島の木立も神さびにけり

(八六八)

天平二年七月十日

憶良誠惶頓首謹啓

憶良聞、方岳諸候都督判史並依典法、巡行部下、察其風俗、意内多端、口外難出、謹以三首之鄙歌、欲寫五藏之鬱結、其歌曰

麻都良我多 佐欲比賣能故何 比列布利斯 夜麻能名乃美夜 伎伎都都遠良武

松浦がたさよ姫の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居らむ (八六九)

多良志比賣 可尾能美許等能 奈都良須等 美多多志世利斯 伊志遠多禮美吉 一云、阿由都流等 帶比賣神の命の魚つらすと(年魚つると)御立たしせりし石を誰見き

(八七〇) 毛毛可斯母 由加奴麻都良遲 家布由伎豆 阿須波吉奈武遠 奈爾可佐夜禮留

百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は來なむを何かさやれる (八七一) 天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國、巖棹言歸、稍赴蒼波、妾也松浦、佐用廣面、嗟此別易、歎彼會難、即登高

麻都良佐欲比賣 海原の沖行く船をかへれとか領巾振らしけむ松浦佐用姫 (八七五)

由久布禰遠 布利等騰尾加禰 伊加婆加利 故保斯苦阿利家武 麻都良佐欲比賣 行く船を振りとどみかねいかばかり戀しくありけむ松浦佐用姫 (八七六)

書殿 餞酒日倭歌四首

阿摩等夫夜 等利爾母賀母夜 美夜故摩提 意久利摩遠志豆 等比可弊流母能

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛びかへるもの (八七七)

比等母禰能 宇良夫禮遠留爾 多都多夜麻 美麻知可豆加婆 和周良志奈牟迦

人もねのうらぶれ居るに龍田山御馬近づかば忘らしなむか (一) 人皆の意であるが、宣長が母禰は彌那の誤としてミナと改訓した [畧解]のは速断である。モネはミナの原語で、九州地方に残つて居たのかも知れぬ。

参照 ミナ

(八七八)

山之嶺、遙望離去之船、悵然斷肝、黯然銷魂、遂脫領巾、磨之、傍者莫不流涕、因號此山曰領巾磨之嶺也、乃作歌曰

得保都必等 麻通良佐用比米 都麻胡非爾 比例布利之用利 於返流夜麻能奈 遠つ人松浦佐用姫つま戀ひに領巾ふりしより負へる山の名 (八七二)

後人追加 夜麻能奈等 伊賓都夏等可母 佐用比賣何 許能野麻能閉仁 必例遠布利家無 山の名と言ひつげとかも佐用姫が此山の上に領巾を振りけむ (八七三)

最後人追加 余呂豆余爾 可多利都夏等之 許能多氣仁 比例布利家良之 麻通羅佐用媛面 萬代に語り告げとし此嵩に領巾振りけらし松浦佐用姫 (八七四)

最最後追和二首 宇奈波良能 意吉由久布禰遠 可弊禮等加 比禮布良斯家武

伊比都都母 能知許曾斯良米 等乃斯久母 佐夫志計米夜母 吉美伊麻佐受斯豆 言ひつゝも後こそ知らめとのしくもさぶしけめやも君いまさずして

(一) 等乃を志万の誤とする或人の説(宣長紹介)は従はれぬ。トノシクはタノシク(樂)の音便で、「寂しいことはあるまい」など今は樂しく語らうて居るが、「別れた後には寂しさがわかるだらう」といふ意である。四、三、一、二句の順をかへて味はふべきである。酒宴の席の即興なるが故に、目前に寂しさを感ぜぬので、此やうな吟詠が出たのであらう。

(二) 斯の字を衍としてイマサズテと訓するは非。こゝは「イマサズナリテ後こそ知らめ」といふ意で、餘り用例はないが、イマサズテとは表現を異にするから、此やうな言ひ方をしたのであらう。後世のズシテ(即ち古語のズテ)とは別義である。――語法要録参照。

(八七九) 余呂豆余爾 伊麻志多麻比提 阿米能志多 麻乎志多麻波禰 美加度佐良受豆

萬代にいまし給ひて天の下申したまはね御門去らずて (八八〇) 聊布私懷二歌三首

阿麻社迦留 比奈爾伊都等世 周麻比都都 美夜故能提夫利 和周良延爾家利

天さかる鄙に五年住まひつつ都の手ぶり忘れえにけり

(八八一)

加久能未夜 伊吉豆伎遠良牟 阿良多麻能 吉倍由久等志乃
可伎利斯良受提

かくのみや息づき居らむあらたまの來經行く年の限り知らずて

(八八二)

阿我農斯能 美多麻多麻比豆 波流佐良婆 奈良能美夜故爾
咩佐宜多麻波禰

吾が主の御靈たまひて春さらば奈良の都に召上げたまはね

天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上

(八八三)

三島王後追和松浦佐用嬪面歌一首

於登爾吉岐 目爾波伊麻太見受 佐容比賣我 必禮布理伎等敷
吉民萬通良楊滿

音に聞き目には未だ見ず佐用嬪が領布振りきとふ君まつら山

(八八四)

大伴君熊凝歌二首 大典麻田陽春作

國遠伎 路乃長手遠 意保保斯久 計布夜須疑南 己等騰比母
奈久

國遠き路の長手をおほほしく今日や過ぎなむ言問ひもなく

(一) 刊本計を許に作り、コフと訓して居るが、契沖説の如くケフを可

とする。

(八八五)

朝露乃 既夜須伎我身 比等國爾 須疑加豆奴可母 意夜能目
遠保利

朝露の消やすき我が身人國に過ぎかてぬかも親の目を欲り

(八八六)

筑前國司山上憶良敬和、爲熊凝述其志歌六首
并序

大伴君熊凝者肥前國益城郡人也、年十八歲、以天平三年六
月十七日、爲相撲使某國司官位姓名從人、參向京都、爲

天不幸在路獲疾、即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也、

臨終之時、長歎息曰、傳聞假合之身易滅、泡沫之命難駐、

所以千聖已去、百賢不留、況乎凡愚微者何能逃避、但我老親

並在菴室、待我過日、自有傷心之恨、望我違時必致

喪明之泣、哀哉我父、痛哉我母、不患一身向死之途、唯

悲一親在生之苦、今日長別何世得覩、乃作歌六首而死、

其歌曰

字知比佐受 宮弊能保留等 多羅知斯夜 波波何手波奈例 常
斯良奴 國乃意久迦袁 百重山 越而須疑由伎 伊都斯可母

京師乎美武等 意母比都々 迦多良比袁禮騰 意乃何身志 伊

多波斯計禮婆 玉梓乃 道乃久麻尾爾 久佐太袁利 志婆刀利

志伎提 等計自母能 宇知許伊布志提 意母比都都 奈宜伎布

勢良久 國爾阿良波 父刀利美麻之 家爾阿良婆 母刀利美麻

之 世間波 迦久乃尾奈良志 伊奴時母能 道爾布斯豆夜 伊

能知周疑南 一云、和何余須疑奈牟

うちびさす 宮へのぼると たらちしや 母が手はなれ 常知

らぬ 國の奥所を 百重山 越えて過ぎ行き いつしかも 都

を見むと 思ひつつ 語らひ居れど 己が身し 痛はしければ

玉梓の 道のくまみに 草手折り 柴とりしきて 鹿兒じもの

うちこい伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 國にあらば 父と

り見まし 家にあらば 母とり見まし 世の中は かくのみな

らし 犬じもの 道に伏してや 生命すぎなむ(我世過ぎなむ)

(一) 斯夜を禰能(眞淵)、斯能(雅澄)の誤とするは理由のないことであ

る。ヤは嘆聲として副へられたのでタラチシといふと同義である。

(二) 刊本には久の字がないが、類聚古集によつて補ふ。

(三) 契沖は計を許の誤とした。さりながらトコシモノといふ語の不適

當であることは新考説の通りであるから、等も亦箇の誤寫としてカ

コシモノと訓むのであらう。略解にも此説があげてある。

參照 タラチシ、カコシモノ、イヌシモノ

(八八七)

多良知遲能 波波何目美受提 意保々斯久 伊豆知武伎提可

阿我和可留良武

たらちちの母が目見ずておほほしくいづち向きてかあが別かる

らむ

(一) 舊訓タラチシとあるによれば遅は誤字とせねばならぬ。類聚抄其

他の古寫本に「子」としたのもあるが、恐らくは九州方言でシをチ

と發音したのをわざと其儘用ひたのであらう。熊凝に代つて作つた

歌であるからである。

(八八八)

都爾斯良農 道乃長手袁 久禮久禮等 伊可爾可由迦牟 可利

豆波奈斯爾 一云、可例比波奈之爾

常知らぬ道の長手をくれくれといかにか行かむかりてはなしに

(かれひは無しに)

參照 クレクレト、カリテ

(八八九)

家爾阿利豆 波波何刀利美婆 奈具佐牟流 許許呂波阿良麻志

斯奈婆斯農等母 一云、能知波志奴等母

家において母がとり見ばなくさむる心はあらまし死なば死ぬと

も(後は死ぬとも)

(八九〇)

出豆由伎斯 日乎可俗閉都都 家布家布等 阿袁麻多周良武

知知波波良波母 一云、波波我迦奈斯佐
出でて行きし日をかぞへつつ今日今日と吾を待たすらし父母ら
はも(母が悲しさ)

(八九一)

一世爾波 二遍美延農 知知波波袁 意伎弓夜奈何久 阿我和
加禮南 一云相別南
一世には二たび見えぬ父母をおきてや長く吾が別かれなむ(相
わかれなむ)

(八九二)

貧窮問答歌一首并短歌

風離 雨布流欲乃 雨離 雪布流欲波 爲部母奈久 寒之安禮
婆 堅鹽乎 取都豆之呂比 糟湯酒 宇知須須呂比豆 之可夫
可比 鼻毗之毗之爾 志可登阿良農 比宜可伎撫而 安禮乎於
伎豆 人者安良自等 富己呂倍騰 寒之安禮波 麻被 引可賀
布利 布可多衣 安里能許等其等 伎會倍騰毛 寒夜須良乎
和禮欲利母 貧人乃 父母波 飢寒良牟 妻子等波 乞乞泣良
牟 此時者 伊可爾之都都可 汝代者和多流(天地者 比呂之
等伊倍杼 安我多米波 狹也奈理奴流 日月者 安可之等伊倍
騰 安我多米波 照哉多麻波奴 人皆可 吾耳也之可流 和久
良婆爾 比等等波安流乎 比等奈美爾 安禮母作乎 綿毛奈伎

布可多衣乃 美留乃其等 和氣佐我禮流 可布能尾 肩爾
打懸 布勢伊保能 麻宜伊保乃内爾 直土爾 藁解敷而 父母
波 枕乃可多爾 妻子等母波 足乃方爾 圍居而 憂吟 可麻
度柔播 火氣布伎多豆受 許之伎爾波 久毛能須可伎豆 飯炊
事毛和須禮提 奴延鳥乃 能杼與比居爾 伊等乃伎提 短物乎
端伎流等 云之如 楚取 五十戸良我許惠波 寢屋度麻何 來
立呼比奴 可久婆可里 須部奈伎物能可 世間乃道
風まじり 雨ふる夜の 雨まじり 雪ふる夜は すべもなく
寒くしあれば 堅鹽を 取りつづしろひ 糟湯酒 うちすずろ
ひて しはぶかひ 鼻ひしひしに しかとあらぬ ひげかき撫
でて あれを置きて 人はあらじと ほころへど 寒くしあれ
ば 麻衾 引きかがふり 布肩衣 有のことごと 着そへども
寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢寒からむ
妻子等は 乞ひて泣くらむ 此時は いかにしつつか 汝が世
はわたる
天地は 廣しといへど 吾がためは 狭くやなりぬる 日月は
あかしといへど 吾が爲は 照りやたまはぬ 人皆か 吾のみ
やしかる わくらばに 人とはあるを 人なみに 吾もなれる
を 綿もなき 布肩衣の みるのごと わわけ下れる かかふ
のみ 肩に打ちかけ 伏慮の 曲慮のうちに 直土に 藁解き

(八九四)

好去好來歌一首 反歌二首

神代欲理 云傳介良久 虛見通 倭國者 皇神能 伊都久志吉
國 言靈能 佐吉播布國等 加多利繼 伊比都賀比計理 今世
能 人母許等期等 目前爾 見在知在 人佐播爾 滿弓播阿禮
等母 高光 日御朝庭 神奈我良 愛能盛爾 天下 奏多麻比
志 家子等 撰多麻比天 勅旨 大命 載持豆 唐能 遠境爾
都加播佐禮 麻加利伊麻勢 宇奈原能 邊爾母與爾母 神豆麻
利 宇志播吉伊麻須 諸能 大御神等 船舳爾 反云布奈 道引
麻志遠 天地能 大御神等 倭 大國靈 久堅能 阿麻能見虛
喻 阿麻賀氣利 渡多麻比 事了 還日者 又更 大御神等
船舳爾 御手打掛豆 墨繩袁 播倍多留期等久 阿庭可遠志
智可能呷欲利 大伴 御津濱備爾 多太泊爾 美船播將泊 都
都美無久 佐伎久伊麻志豆 速歸坐勢
神代より 言ひつてけらく 空みつ 大和の國は すめ神の
いつくしき國 言靈の さきはふ國と 語りつき いひ繼がひ
けり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり
人さばに 満ちてはあれども 高光る 日の御門 神ながら
めでの盛りに 天の下 まをしたまひし 家の子と 選び賜ひ
て 大みこと いただきもちて もろこしの 遠き境に 遣は

敷きて 父母は 枕のかたに 妻子どもは あとの方に かく
み居て 憂ひさまよひ 竈には けぶり吹きたてず 甑には
蜘蛛の巢かきて 飯かしぐ ことも忘れて ぬえ鳥の のどよ
び居るに いとよきて 短きものを 端切ると いへるが如く
答取る 五十戸長が聲は 閨處まで 來たち呼ばひぬ かくば
かり すべなきものか 世の中の道

(一) 可を波の誤とした眞淵訓を可とする。

(二) 舊訓コヒテとある。契沖は下の乞を豆の誤とした。

(三) 此歌は二節から成るもので、此句を以て前節の終とする。

(四) 童蒙抄に良を長の誤とし、戸令に以三五十戸爲里とあるにより、
五十戸を里の借字としてサトナサと訓したのは當を得て居る。但し
五十戸良を其ままでサトナサと訓み得る。

五十戸良を其ままでサトナサと訓み得る。

参照 ツツシロヒ、シハアカヒ、ハナロシロシ、ホコロビ、カガフリ、
ワクラバ、ワツケ、カカフ、ヌエドリ、ノドヨビ、イトノキテ

(八九三)

世間乎 宇之等夜佐之等 於母倍杼母 飛立可禰都 鳥爾之安
良禰婆
世のなかを憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあら
ねば

山上憶良頓首謹上

参照 ヤサシ

され まかりいませ 海原の 邊にも沖にも 神づまり うし
はきいます もろもろの 大御神たち 船のへに 道びきまし
天地の 大御神たち 大和の 大國魂 ひさかたの あまのみ
空ゆ 天がけり 渡したまひ 事終り 還らむ日には 又更に
大御神たち 船のへに 御手うちかけて すみなはを はへた
る如く あまかをし 値賀の崎より 大ともの み津の濱邊に
ただ泊に 御船は泊てむ つつみなく 幸くいまして 早かへ
りませ

(一) 舊訓ミマチマ(ミマシシリマシの畧か)とあるが、宣長に従うてミ
タリシリタリと訓むべきである。

(二) 載の字載の誤としてイタダキモチテと訓した契沖説可。

(三) 舊訓ミチビカマシナとあるを、眞淵は一本に従うて志遠を遠志の
倒置とし、ミチビキマナシと訓したが、新考説の如く、遠を衍字と
して、ミチビキマシと六音に訓むべきもの、やうである。

(四) 此句原字の儘でも、神田本、細井本等によつて庭を運としても不可
解である。従来色々の説があるが假に庭を麻の誤としてアマカナシ
と訓して置く。値賀はアマカ族の根據地であるから、アマカ(海人處)
といひ得る。ナシは「愛し」の義であらう。或はヨシの音便で、麻裳
ヨシのヨシの如く、感動詞として用ひたのかも知れぬ。

反歌
(八九五)
アマカナシ、ツツミ

大伴 御津松原 可吉掃豆 和禮立待 速歸坐勢
おほともの御津の松原かき掃きて我立ちまたむ早かへりませ
(八九六)
難波津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣豆 多知婆志利
勢武

なには津に御船泊てむと聞こえ來ば紐ときさけて立走りせむ
天平五年三月一日 冥宅對面 山上憶良 謹上

大唐大使卿記室

(八九七)

沈痾自哀文 山上憶良作

竊以朝夕餓食山野者、猶無災害而得度世、
所值禽獸不論大小、孕及不晝夜釣漁河海者、尙有慶福而
孕、並皆致食、以此爲業者也。晝夜釣漁河海者、尙有慶福而
全經、俗謂魚夫潛女各有所勤、男者手把竹竿、能釣波、
浪之上、女者腰帶繫籠、潛探深潭之底者也。況乎我
從胎生迄于今日、自有修善之志、曾無作惡之心、
諸善奉行、所以禮拜三寶、無日不勤、
神、鮮夜有闕、
疾、謂未、知、
疾、犯之過、
十、是時年七十有四、
斯病、診日痛、

皆疹、身體太重、猶負鈞石、二十四銖爲一兩、十六兩爲一斤、
百二十懸、布欲立如折翼之鳥、倚杖且步比跛足之驢、
吾以身已穿俗、心亦累塵、欲知禍之所伏、祟之所隱、龜卜
之門、巫祝之室、無不往問、若實、若妄、隨其所教、奉幣
帛、無不祈禱、然而彌有增苦、曾無減差、吾聞前代多
有良醫、救療蒼生病患、至若楡枿、扁鵲、華佗、秦和、緩
葛稚川、陶隱居、張仲景等、皆是在世良醫、無不除愈也、扁
鵲、姓秦、字越人、勃海郡人也、創冒探心、
鵲、而置之、投以神藥、即寤如平也、
在內者割、
復摩膏四五日差之、
追望件醫、非敢所及、若逢聖醫神
藥、者仰願割剝五藏、抄探百病、尋達膏肓之隙處、
心下爲膏攻之不可、欲顯一二堅之逃匿、
達之不及、藥不至焉、
命根既盡、終其天年、尙爲哀聖人、
錄未半爲鬼枉殺、顏色壯年爲病橫困者乎、在世大患孰甚
于此

志恠記云、廣平前大守北海徐玄方之女年十八歲而死、其靈
謂馮馬子曰、案我生錄、當壽八十餘歲、今爲妖鬼一所、
枉殺、已經三四年、此遇馮馬子、乃得更活、是也、內教云
瞻浮洲人壽百二十歲、謹案此數非必不可得過此、故壽延

萬葉集(卷第五)

經云、有比丘名曰難達、臨命終時、
十八年、但善爲者天地相畢、其壽、天者業報所招、隨
其修短、而爲半也、未盈斯等、而過死去、故曰未半也、
任徵君曰、病從口入、故君子節其飲食、由斯言之、人遇
行難之鉅情、三者盈目滿耳、由來久矣、抱朴子曰、人但不
知、其當死之日、故不憂耳、若誠知、羽翮可得、延期者必
將爲之、以此而觀、乃知、我病蓋斯飲食所招、而不能自
治者乎

帛公畧說曰、伏思自厲以斯長生、生可食也、死可畏也、天
地之大德曰生、故死人不及生鼠、雖爲王侯、一日絕氣、
積金如山、誰爲富哉、威勢如海、誰爲貴哉、遊仙窟曰、九泉
下一錢不直、孔子曰、受之於天、不可變易者形也、受之
於命、不可請益者壽也、
賢愚、世無古今、咸悉嗟歎、歲月競流、晝夜不息、
年也、宣尼臨川、老疾相催、朝夕侵動、一代歡樂未盡、
之嘆亦是矣也、
賢詩曰、未盡、
夜、劇作、
群生品類、莫不皆以有盡之身、並求無窮之命、所以道

三三五

人方士自負^二丹經^一入^二於名山^一而合^二藥之者^一養^レ性怡^レ神以
求^二長生^一抱朴子曰神農云百病不^レ愈安得^二長生^一帛公又
曰生好物也死惡物也若不幸而不^レ得^二長生^一者猶以下生涯
無^二病患^一者上爲^二福大^一哉今吾爲^レ病見^レ惱不^レ得^二臥坐^一向^レ東
向^レ西莫^レ知^レ所^レ爲無福至甚惣集^二于我^一人願天從如有^レ實
者仰願頓除^二此病^一賴得^レ如^レ平以^レ鼠爲^レ喻豈不^レ愧乎^上也

悲^二歎俗道假合^一即離易^レ去難^レ留詩一首并序

竊以釋慈之示教^{謂釋氏}先開^三歸^{謂歸依}五戒^{而化}法界^{謂一不殺生二不偷盜三不淫四不飲酒也}周孔之垂訓前張^三綱^{謂君臣父}五教^{子夫婦}以齊濟^二邦國^一謂父義母慈兄友弟順子孝故知引導雖^二一^一得悟惟一也但以世无^二恒質^一所以陵谷更變人无^二定期^一所以壽夭不同擊目之間百齡已盡申臂之頃千代亦空且作^二席上之主^一夕爲^二泉下之客^一白馬走來黃泉何及隴上青松空懸^二信劍^一野中白楊但吹^二悲風^一是知世俗本無^二隱遁之室^一原野唯有^二長夜之臺^一先聖已去後賢不^レ留如有^二贖而可^レ免者^一古人誰無^二價金^一乎未^レ聞^二獨存^一遂見^二世終^一者上所以維摩大士疾^二玉體于方丈^一釋迦能仁掩^二金容乎雙樹^一內教曰不^レ欲^二黑闇之後來^一莫入^二德天之先至^一德天者生也黑闇者死也故知生必有^レ死死若不^レ欲不^レ如^レ不生況乎縱覺^二五劫終之恒數^一何慮^二存亡之大期^一者也

俗道變化猶擊目 人事經紀如^二申臂^一空與^二浮雲^一行^二大虛^一心力共盡無^レ所^レ寄

老身重病經^レ年辛苦及思^二兒等^一歌七首 長一首 短六首

靈剎 內限者^{謂瞻浮州人壽}平氣久 安久母阿良牟遠 事母無
裳無母阿良牟遠 世間能 宇計久都良計久 伊等能伎提 痛伎
瘡爾波 鹹鹽遠 灌知布何其等久 益益母 重馬荷爾 表荷打
等 伊布許等能其等 老爾豆阿留 我身上爾 病遠等 加豆阿
禮婆 晝波母 歎加比久良志 夜波母 息豆伎阿可志 年長久
夜美志渡禮婆 月累 憂吟比 許等許等波 斯奈奈等思騰 五
月蠅奈周 佐和久兒等遠 宇都豆波 死波不知 見^二阿禮婆
心波母延農 可爾可久爾 思和豆良比 禰能尾志奈可由
靈きはる 内の限は 平けく 安くもあらむを 事もなくも
なくもあらむを 世の中の うけくつらけく いとのきて 痛
き瘡には から鹽を 灌ぐちふが如く 益々も 重き馬荷に
上荷うつと 言ふことの如 老いにてある 我身の上に 病を
ら 加へてあれば 晝はも 嘆かひ暮し 夜はも 息づき明し
年長く 病みし渡れば 月かさね 憂ひさまよひ ことごとくは
死ななと思へど さばへなす さわぐ子どもを 棄てては 死
には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ かにかくに 思ひわ

づらひ 音のみし泣かゆ

タマキハル枕、ウチノカギリ、モナク

(八九八)

反歌

奈具佐牟留 心波奈之爾 雲隱 鳴往鳥乃 禰能尾志奈可由
なぐさむる心はなしに雲がくり鳴きゆく鳥の音のみし泣かゆ

(八九九)

周弊母奈久 苦志久阿禮婆 出波之利 伊奈奈等思騰 許良爾
佐夜利奴 ずべもなく苦しくあれば出で走りいななと思へど子等に塞りぬ

(九〇〇)

富人能 家能子等能 伎留身奈美 久多志須都良牟 純綿良波母
富人の子どもの着る身なみ腐し棄つらむきぬ綿らはも
(一) 眞淵は之と次の歌とを貧窮問答の歌の反歌とした。或は然らむ。

(九〇一)

鹿妙能 布衣遠陀爾 伎世難爾 可久夜歎敢 世牟周弊遠奈美
あらたへの布衣をだに着せがてにかくや嘆かむ爲むすべをなみ

(九〇二)

水沫奈須 微命母 拷綱能 千尋爾母何等 慕久良志都
水沫なすもろき命も拷綱の千尋にもがと慕ひ暮しつ

萬葉集(卷第五)

(九〇三)

倭文手纏 數母不在 身爾波在等 千年爾母何等 意母保由留
加母 去^{神龜二年作之}但^{以類故更載於茲}

しづ手巻數にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも

參照 シヅタマキ

天平五年六月丙申朔三日戊戌作

(九〇四)

戀^二男子名古日^一歌三首 長一首 短二首

世人之 貴慕 七種之 寶毛我波 何爲 和我中能 産禮出有
白玉之 吾子古日者 明星之 開朝者 敷多倍乃 登許能邊佐
良受 立禮杼毛 居禮杼毛 登母爾戲禮 夕星乃 由布弊爾奈
禮婆 伊射爾余登 手乎多豆佐波里 父母毛 表者奈佐我利
三枝之 中爾乎爾牟登 愛久 志我可多良倍婆 何時可毛 比
等等奈理伊豆天 安志家口毛 與家久母見牟登 大船乃 於毛
比多能無爾 於毛波奴爾 橫風乃 爾母布敷可爾 覆來禮婆
世武須便乃 多杼伎乎之良爾 志路多倍乃 多須吉乎可氣 麻
蘇鏡 豆爾登利毛知豆 天神 阿布藝許比乃美 地祇 布之豆
額拜 可加良受毛 可賀利毛神乃 末爾麻仁等 立阿射里我例
乞能米登 須曳毛 餘家久波奈之爾 漸々 可多知都久保里

朝朝 伊布許登夜美 靈剌 伊乃知多延奴禮 立乎抒利 足須
里佐家婢 伏仰 武禰宇知奈氣吉 手爾持流 安我古登婆之都
世間之道

世の人の 貴みねがふ 七種の 寶も我は 何かせむ……我中
の 産れ出たる 白玉の 吾子古日は 明星の あくる朝は
敷たへの 床の邊さらす 立てれとも 居れども……共に戯れ
タづつの タになれば いざ寝よと 手をたづさはり 父母も
上はな離り 三枝の 中にを寝むと うるはしく 其が語らへ
ば いつしかも 人となり出でて 悪しけくも 善けくも見む
と 大船の 思ひたのむに 思はぬに 横しま風の 俄しきに
覆ひ來たれば 爲むすべの たどきを不知 白たへの 纏をか
け まそ鏡 手にとりもちて 天つ神 仰ぎこひ祈み 國つ神
伏してぬかづき かからずも かかりも神の まにまにと 立
ちあざり我 こひ祈めど……しましくも よけくはなしに や
うやうに 形つくほり 朝な朝な 言ふことやみ 靈きはる
生命絶えぬれ 立ち踊り 足ずり叫び 伏し仰き 胸うち嘆き
手にもたる 吾が子飛ばしつ 世の中の道

(一) 此歌には脱簡が多い。こゝも一句脱ちたものと思はれる。但し其句はなくとも意は通ずる。
(二) こゝにも脱句がある。或は登母爾の次に五音一句と三音とが存し

たのかも知れぬ。

(三) オモハナサカリ又は遠クハナサカリ(表の遠の誤として)等の訓があるが、尙舊訓を尊重すべきである。ウヘは(へ)邊に通ずる。

(四) 舊訓オモワシクとあり、神田本細井本にはウツクシクとあるが、語義上古義の如くウルハシクと訓むべきである。

(五) 刊本布敷可爾の四字が重複して居るが、古本にはないと西本願寺本に註記してある。上句「横風乃」は契沖説の如くヨコシマカセノと訓まればならぬから、爾母布敷可爾は五音又は六音一句に讀むのであらうが、ニモフフカ(又はニモフカ)はどう考へても語をなさぬから、西本願寺本に爾布敷可爾とあるに據り、可を衍字として姑クニハシキニ(布はハの音便とする)と訓して置く。ニハシキは「俄」の形容動詞形で、二十卷にニハシクモと用ひた例がある(四九七)。

(六) 例を衍字とする説もあるが、シラニを不知爾とかくと同様に、ラと訓ませる爲に送り假字として例を添へたものとも解し得られるから、舊訓を尊重する。

(七) こゝにも脱字がある。或はカカリモの次に脱語及脱句があるとす

る説もある。
(八) 契沖は都久を久都の誤としたが、諸本皆都久としてあるから、尙原のまゝで解き試むべきものである。

參照 ウルハシ、ウツクシ、ニハシ、タチアザリ、ツクホリ

(九〇五)

反歌

和可家禮婆 道行之良士 末比波世武 之多敵乃使 於比呂登
保良世

若ければ道行き知らじ幣はせむしたへの使おひて通らせ

參照 マヒ、シタへの使

(九〇六)

布施於吉豆 吾波許比能武 阿射無加受 多太爾率去豆 阿麻
治思良之米

布施おきて吾はこひ祈むあざむかず直に率行きて天路知らしめ
右一首作者未詳、但以裁歌之體似於山上之操、載此
次焉

【卷第六】

雜歌

(九〇七)

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時、笠朝臣金村
作歌一首并短歌

瀧上之 御舟乃山爾 水枝指 四時爾生有 刀我乃樹能 彌繼
嗣爾 萬代 如是二二知三 三芳野之 蜻蛉乃宮者 神柄香
貴將有 國柄鹿 見欲將有 山川乎 清清 諾之神代從 定家
良思母

萬葉集(卷第五)(卷第六)

(九〇八)

反歌

毎年 如是愛見牡鹿 三吉野乃 清河内之 多藝津白波
年のはにかくも見てしか三吉野の清きかふちのたぎつ白波

參照 カフチ

(九〇九)

山高三 白木綿花 落多藝追 瀧之河内者 雖見不飽香聞
山高み白ゆふ花の落ちたぎつ瀧のかふちは見れど飽かぬかも

(九一〇)

或本反歌曰

神柄加 見欲賀藍 三吉野乃 瀧河内者 雖見不飽鴨
神からか見がほしからむ三吉野のたぎつかふちは見れどあかぬ
かも

(九一一)

三吉野之 秋津乃川之 萬世爾 斷事無 又還將見
三吉野の秋津の川の萬世にたゆることなく又かへり見む

(九一二)

泊瀬女 造木綿花 三吉野 瀧乃水沫 開來受屋
はつせ女をつくるゆふ花三吉野の瀧の水沫に咲きにけらすや

參照 ユフハナ

(九一三)

車持朝臣千年作歌一首并短歌

味凍 綾丹乏敷 鳴神乃 音耳聞師 三芳野之 眞木立山湯
見降者 川之瀬毎 開來者 朝霧立 夕去者 川津鳴奈辨 紐
不解 客爾之有者 吾耳爲而 清川原乎 見良久之惜蒙
うましこり 綾にともしき 鳴神の 音のみ聞きし 三芳野の
眞木立山ゆ 見降せば 川の瀬毎に あけ來れば 朝霧立ち
夕されば 蛙鳴くなべ 紐とかぬ 旅にしあれば 吾のみして
清き川原を 見らくし惜しも

(一) ウマシヨリと訓むべきよしは「空」の歌について述べた通りで

ある。

參照 ウマシヨリ、ナベ、カハツ

(九一四)

反歌一首

瀧上乃 三船之山者 雖畏 思忘 時毛日毛無
瀧の上の三船の山はかしこけど思ひ忘るる時も日もなし

(九一五)

或本反歌曰

千鳥鳴 三吉野川之 川音成 止時梨一 所思公
千鳥鳴く三吉野川の川音なす止む時なしに思ほゆる君

(九一六)

茜刺 日不並二 吾戀 吉野之河乃 霧丹立乍

茜さす日ならべなくに吾が戀は吉野の川の霧に立ちつつ
右年月不審、但以三歌類載於此次焉、或本云、養老七年

五月幸于芳野離宮之時作

(九一七)

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時、山部宿禰

赤人作歌一首并短歌

安見知之 和期大王之 常官等 仕奉流 左日鹿野由 背上爾

(九一九)

若浦爾 鹽滿來者 滴乎無美 葦邊乎指天 多頭鳴渡

わかの浦に潮みち來れば滴をなみ葦邊をさして鶴鳴き渡る

右年月不記、但傳從三鶴玉津島也、因今檢注行幸年月
以載之焉

(九二〇)

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時、笠朝臣金村

作歌一首并短歌

足引之 御山毛清 落多藝都 芳野河之 河瀬乃 淨乎見者
上邊者 千鳥數鳴 下邊者 河津都麻喚 百磯城乃 大宮人毛
越乞爾 思自仁思有者 每見 文丹乏 玉葛 絕事無 萬代爾
如是霜願跡 天地之 神乎會禱 恐有等毛

あしびきの 御山もさやに 落ちたぎつ 吉野の川の 河の瀬
の 清きを見れば 上つへは 千鳥しば鳴き 下つへは 蛙妻
よぶ 百しきの 大宮人も 遠近に しじに思へば 見る毎
に あやに羨しみ 玉葛 絶ゆることなく 萬代に かくしも
がもと 天地の 神をぞ祈る かしこけれども

(一) 萬葉考の書入にシジニモヘレバとあるを可とする。舊訓の如くシ
シニシアレバというては上下の句につづかぬ。大宮人のうちには作
者自身も含まれて居るのである。

(九一八)

反 歌

奥島 荒磯之玉藻 潮干満 伊隱去者 所念武香聞
沖つ島荒磯の玉藻潮干みちいかくりいなば思ほえむかも

(一) 舊訓シホミチテとあるが、契沖に従うてシホヒミチト訓すべきで
ある。

(二) 舊訓イカクレユカバとあるが、イカクレイナバと訓む方が口調が
よい。玉藻は譬喩に用ひられたに過ぎず、「所念」ものは人であられ
ばならぬから、イカク、ヒナバと訓むのはよくない。——新訓に潮
干満チテ隱ロヒユカバとあるのは誤植であらう。

參照 シホヒミチ

(三)眞淵がカシコカレドモと改訓したのはカシコクアレドモのクアの約カであらねばならぬと考へたのであらうが、國語の約音法は支那の反切と軌を一にするものではない。咲有はサケリでサカリと約せられることはないのである。アヤニカシコシ(キ)をカシコカリ(ル)というた例のない所を見ると、舊訓の如くカシコケレドモであらねばならぬ。

(九二二)

反歌二首

萬代 見友將飽八 三吉野乃 多藝都河内之 大宮所
よろづに見とも飽かめや三吉野のたぎつかふちの大宮所

(九二一)

人皆乃 壽毛吾母 三吉野乃 多吉能床磬乃 常有沼鴨
ひと皆のいのちも吾がも三吉野の瀧の床磬の常ならぬかも

(一)アレモ(アレモ)と訓するは誤、「我命も」の略であるから、吾ガモといはねばならぬ。

(九二〇)

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

八隅知之 和期大王乃 高知爲 芳野宮者 立名附 青墻隱
河次乃 清河内會 春部者 花咲乎遠里 秋去者 霧立渡 其山之 彌益々爾 此河之 絶事無 百石木能 大宮人者 常將通やすみしし わご大君の 高知らず 芳野の宮は たたなづく

(九一七)

反歌一首

足引之 山毛野毛 御蔭人 得物矢手挾 散動而有所見
あしびきの山にも野にも御蔭人さつ矢た挾みさわぎてある見ゆ

右不審先後但以二便故載於此次

(一)舊訓ミダレとあるが、岸本由豆流の説の如くサツギと讀むべきである。散の字を用ひたのは動をドヨミと訓むことなからしめんが爲で、送り假字の一種である。但しサツギタルミユではなく、必ずサツギタル見ユといはねばならぬ。而有とかいたのも其爲で、此有は助動詞ではなく、存在を意味する動詞在である。——語法要録参照。

參照 サツヤ

(九一八)

冬十月幸于難波宮時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

忍照 難波乃國者 葦垣乃 古郷跡 人皆之 念息而 都禮母
無 有之間爾 續麻成 長柄之宮爾 眞木柱 太高敷而 食國乎 收賜者 奥島 味經乃原爾 物部乃 八十伴雄者 廬爲而 都成有 旅者安禮十方
おしてる 難波の國は あし垣の 古にし里と 人皆の 思ひやすみて つれもなく 在りし間に 續麻なす 長柄の宮に 眞木柱 太高しきて 食國を 治め給へば 沖つ鳥 味經の原

青垣こもり 河波の 清きかふちぞ 春邊は 花咲きををり
秋されば 霧立ち渡る 其山の いや益々に 此河の 絶ゆることなく 百しきの 大宮人は 常に通はむ

(九二四)

反歌二首

三吉野乃 象山際乃 木末爾波 幾許毛散和口 鳥之聲可聞
みよし野のきさ山のはの木ぬれにはこゝだもさわく鳥の聲かも

(九二五)

鳥玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾 知鳥數鳴
ぬばたまの夜の深けぬればひさき生ふるきよき河原に千鳥しば鳴く

參照 ヒサキ

(九二六)

安見知之 和期大王波 見芳野乃 飽津之小野筵 野上者 跡見居置而 御山者 射日立渡 朝獵爾 十六履起之 夕狩爾 十里踰立 馬並而 御蔭會立爲 春之茂野爾 やすみしし わご大君は 三芳野の 秋津の小野の 野上には 鳥見据を置きて 御山には いめ立て渡し 朝獵に 獸踏みおこし 夕狩に 鳥ふみ立て 馬なべて 御獵ぞ立たす 春の茂野に

にものふの 八十伴の緒は 廬りして 都をなせり 旅にはあれども

(九一九)

反歌二首

荒野等丹 里者雖有 大王之 敷座時者 京師跡成宿
あらの野らに里はあれども大君のしきます時は京となりぬ

(九三〇)

海未通女 棚無小舟 擲出良之 客乃屋取爾 梶音所聞
海人少女棚なし小舟漕き出らし旅の宿りにかぢの音聞こゆ

參照 タナナシチヲネ

(九三一)

車持朝臣千年作歌一首并短歌

鯨魚取 濱邊乎清三 打靡 生玉藻爾 朝名寸二 千重浪縁
夕菜寸二 五百重波因 邊津浪之 益敷布爾 月二異二 日日雖見 今耳二 秋足目八方 四良名美乃 五十開回有 住吉能濱
いさなとり 濱邊を清み 打靡き 生ふる玉藻に 朝なぎに 千重波より 夕風に 五百重波よる 邊津波の いやしくしくに 月にけに 日々に見れども 今のみに 飽きたらめやも 白波の い咲きめぐる 墨の江の濱

(九三二)

反歌一首

白波之 千重來縁流 住吉能 岸乃黄土粉^(一) 二寶比天由香名
しらなみの千重に來よする住の江の岸のまなこに匂ひて行かな

(一) 舊訓ハニフニとあり、黄土はハニともよみ、粉はフニの假字と見ることが出来るのみならず、一卷にも「草枕旅行く君と知らませば岸の埴生に匂はざらましを」(六)とあるので、從來此訓に就て疑を抱いたものがないが、一卷の歌は少女の戀心の穂に出ることを色土の匂ひに譬へたので、此は言葉の裏に住吉の「少女に戀をして行かう」といふ意を含ませたものであるから、一列に見ることは出来ぬ。ことに文飾とはいへ、白波の來寄する濱邊に埴生があらうとも思はれぬから、此黄土粉はマナコ(織沙)の義譯で、マナコ(愛子)にいひかけ、可愛い女の子に馴染んで行かうといふことを「織沙に匂はむ」といひなしたのであらう。——「100」の歌も同例である。——古葉類聚鈔に「粉」の下が二と書かれて居るのも粉がゴの假字であることの一證で、九卷には磯の浦まの眞名(子の字脱)二文にはひて行かな「七九」と假名書した例がある。

參照 マナコ、ハニ、ハニフ

(九三三)

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

天地之 遠我如 日月之 長我如 臨照 難波乃宮爾 和期大王 國所知良之 御食都國 日之御調等 淡路乃 野島之海子乃 海底 奥津伊久利二 鰈珠 左盤爾潛出 船並而 仕奉之

餘四能無者 大夫之 情者梨荷 手弱女乃 念多和美手 徘徊吾者衣戀流 船梶雄名三

なきすみの 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝風に 玉藻刈つつ 夕なぎに 藻鹽焼つつ 海人少女 ありとは聞けど 見に行かむ 由のなければ 丈夫の 心はなしに たわや女の 思ひたわみて たもとほり 吾はぞ戀ふる 船梶をなみ

參照 ナキスミ、フナセ

(九三六)

反歌二首

玉藻刈 海未通女等 見爾將去 船梶毛欲得 浪高友
玉藻かる海人少女ども見に行かむ船梶もかも波高くとも

(九三七)

往回 雖見將飽八 名寸隅乃 船瀬之濱爾 四寸流思良名美
たもとほり見とも飽かめやなきすみの船せの濱にしきる白波

(一) 舊訓ユキカヘリ、攻證にユキメグリとあるが、タモトホリと訓すべきであらう。徘徊の意である。

(九三八)

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

八隅知之 吾大王乃 神隨 高所知流 稻見野能 大海乃原笑
荒妙 藤井乃浦爾 鮪釣等 海人船散動 鹽燒等 人曾佐波爾

貴見禮者

天地の 遠きが如 日月の 長きがごと おしてる 難波の宮に わご大君 國知らすらし 御饌つ國 日の御調と 淡路の野島の海人の わたの底 沖ついくりに 鮑珠 さはに潜ぎ出船なめて 仕奉るが 貴し見れば

(一) 「ミケツ國淡路の野島の海人の日の御調」と仕へ奉るといふことで調の上から句を顛倒したのである。
(二) 「仕奉之見禮者貴」の意、ツカヘマツルシタフトキミレバと訓してもよいが、ツカヘマツルシタフトシ「契沖」と訓むのは正しい語法ではない。こゝは「仕奉ルガ貴サ」といふと同一語であるから、舊訓の如く「之」はガの假字とすべきであらう。

參照 ミケツクニ、イクリ

(九三四)

反歌一首

朝名寸二 梶音所聞 三食津國 野島乃海子乃 船二四有良信
あさ風に梶の音聞こゆ御饌つ國野島の海人の船にしあるらし

(九三五)

三年丙寅秋九月十五日幸三於播磨國印南野一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

有 浦乎吉美 宇倍毛釣者爲 濱乎吉美 諸毛鹽燒 蟻往來
御覽毛知師 清白濱
やすみしし 吾大君の 神ながら 高知らせる 印南野の 大海の原の あらたへの 藤井の浦に 鮪釣ると 海人船さわぐ 鹽焼くと 人ぞさはなる 浦をよみ うべも釣はす 濱をよみ うべも鹽やく ありがよひ 見らむもしるし 清き白濱

(一) 舊訓はミダレとあるが、次の反歌にもドヨメルと詠まれて居るから、古義の説の如くサツグと訓すべきである。「散」の字は上記の如く一種の送り假字で、此集に屢々見る例である。

(二) 舊訓による。ミマス(眞淵)、メサク(雅澄)等の訓もあるが、天皇の御事ならばアリカヨヒもアリカヨハシといはればならず、次の三首の反歌にも其趣があらはれて居らねばならぬ筈であるから、御覽はミラムの借字と見て(人の)見らむも著し」の意と解すべきである。

(九三九)

反歌三首

奥浪 邊波安美 射去爲登 藤江乃浦爾 船會動流
沖つ波邊つ波安みいざりすと藤江の浦に船ぞどよめる

(九四〇)

不欲見野乃 淺茅押靡 左宿夜之 氣長在者 家之小篠生
いな見野のあさぢ押靡さぬる夜のけ長くあれば家し思ばゆ

(九四一)

明方 潮干乃道乎 従明日者 下咲異六 家近附者
明石がた潮干の道を明日よりは下咲エましけむ家近づけば

(九四二)

過三幸荷島時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌

味澤相 妹目不數見而 敷細乃 枕毛不卷 櫻皮纏 作流舟二
眞梶貫 吾榜來者 淡路乃 野島毛過 伊奈美孀 幸荷乃島之
島際從 吾宅乎見者 青山乃 會許十方不見 白雲毛 千重爾
成來沼 許伎多武流 浦乃盡 往隱 島乃埼埼 隈毛不置 憶
會吾來 客乃氣長彌

あぢさはふ 妹が目かれて 敷たへの 枕もまかず かには卷
き 作れる舟に 眞梶ぬき 吾が榜フぎ来れば 淡路の 野島も
過ぎ いなみづま 幸荷の島の 島の際ゆ 吾家を見れば 青
山の そことも見えす 白雲の 千重になり来ぬ 漕ソぎたむる
浦のことごと 行きかくる 島の先先 くまもおかず 思ひぞ
吾が来る 旅のけ長み

(一) 宣長に従うてイモガメカレテと訓むがよい。

參照 カニハ、アチサハフ〔枕〕

(九四三)

反歌三首

王藻刈 幸荷乃島爾 島回爲流 水鳥二四毛有哉 家不念有六

御饌向ふ 淡路の島に 直向ふ 敏馬の浦の 沖へには 深海
松探み 浦みには なのりそ刈り 深みるの 見まく欲しけど
なのりその 己が名惜しみ ませも やらずて吾は 生けりと
もなし

參照 マツカヒ

(九四七)

反歌一首

爲間乃海人之 鹽燒衣乃 奈禮名者香 一日母君乎 忘而將念
須磨の海人の鹽燒衣ヤキヌのなればか一日も君を忘れて思はむ

右作歌年月未詳也、但以類故載於此次

(九四八)

四年丁卯春正月、勅諸王諸臣子等、散禁於授刀寮
時作歌一首并短歌

眞葛延 春日之山者 打靡 春去往跡 山上丹 霞田名引 高
圓爾 鸞鳴沼 物部乃 八十友能壯者 折木四哭之 來繼習石
此續 常丹有脊者 友名目而 遊物尾 馬名目而 往益里乎
待難丹 吾爲春乎 決卷毛 綾爾恐 言卷毛 湯湯敷有跡 豫
兼而知者 千鳥鳴 其佐保川丹 石二生 菅根取而 之努布草
解除而益乎 往水丹 潔而益乎 天皇之 御命恐 百磯城之
大宮人之 玉梓之 道毛不出 戀比日

萬葉集(卷第六)

玉藻かる幸荷の島にあざりする鵜にしもあれや家念はずあらむ
(一) 島回をアザリと訓むことは無理のやうに思はれるので、雅澄がシ
マミと改訓したのは一應尤ではあるが、水鳥をウと訓むべきものと
すれば、シマミでは釣合はぬのみならず、「鳥ニ鳥ミスル」といふ語
づかひも拙であるから、姑く舊訓に従ふ。シマミはクニミ(國見)に
對する語であるから島回ともかくが、求食といふ意は少しもない。

(九四四)

島隠 吾榜來者 乏羸 倭邊上 眞熊野之船
島がくり吾がこぎ来ればともしかも大和へ上る眞熊野の船

(九四五)

風吹者 浪可將立跡 伺候爾 都多乃細江爾 浦隱居
風吹けば波か立たむともまらひにつたの細江に浦がくり居り

(一) 舊訓マツホドニとあり、サモロフと訓するものもあるが、(三三六)
の歌に「去益物平間守爾」とあると同じ趣きであるから、マモラヒニ
と訓むのであらう。マモラヒニ(マモラフニではない)はイザヨヒ
に、タメラヒになどと同義である。

(九四六)

過三敏馬浦時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌

御食向 淡路乃島二 直向 三犬女乃浦能 奥部庭 深海松探
浦回庭 名告藻刈 深見流乃 見卷欲跡 莫告藻之 己名惜三
間使裳 不遣而吾者 生友奈重一

眞葛延ふ 春日の山は うちなびく 春さりゆくと 山の上に
霞たなびき 高まるとに 鶯鳴きぬ ものふの 八十伴のをは
かりがねの いきづきくらし かくつぎて 常にありせば 友
なめて 遊ばむものを 馬なめて 行かまし里を 待ちがてに
吾がする春を かけまくも あやに惶く 言はまくも ゆゆし
からむと あらかじめ かねて知りせば 千鳥鳴く 其佐保川
の 石に生ふる 菅の根取りて しぬぶ草 はらひてましを
行く水に みそぎてましを 大君の 勅かしこみ ももしきの
大宮人の 玉梓の 道にも出でず 戀ふるこのごろ

(一) 契沖始てカリガネノと解讀した。折木四は四木を以てする樗蒲チヨボの
采で、和名抄雜藝具に掲げ音軒、加利とあるものである。

(二) 此句は未だ讀み得たものがない。案ずるに習は暮の誤で、句頭に
發聲のイを添へてイキヅキクラシと訓むのであらう。即ち「鷹のや
うに來續く」に「息づき」をいひかけたのである。「鷹ガネノ來續」
を實景とすることの時節がひなるはいふまでもない。

(三) 上句の來續の縁によりカクツギテといふたのであらう。友ナメテ
と重複する嫌があるが、意はよく通ずる。

(四) 舊訓カケマクモとある。決は缺の誤寫か、若くは之に通ずるので
あらう。

參照 ウチナビク〔枕〕、カリガネ、ユユシ、シヌブクサ
(九四九)

反歌一首

梅柳 過良久惜 佐保乃内爾 遊事乎 宮動々爾
梅柳過ぐらく惜み佐保のうちに遊びしことを宮もとどろに

右神龜四年正月、數王子及諸臣子等集於春日野而作打
毬之樂、其日忽天陰雷雨電、此時宮中無待從及待衛、勅
行刑罰、皆散禁於授刀寮而、妄不得出道路、于時
悵憤即作斯歌 作者未詳

(九五〇)

五年戊辰幸于難波宮時作歌四首

大王之 界賜跡 山守居 守云山爾 不入者不止

大君の界ひたまふと山守す多守るとふ山に入らずは止まじ

(九五二)

見渡者 近物可良 石隱 加我欲布珠乎 不取不已

見渡せは近き物から石がくりかがよふ珠を取らずは止まじ

(九五三)

韓衣 服櫓乃里之 島待爾 玉乎師付牟 好人欲得

韓カウ衣カウ 服カウ櫓カウ乃里之カウ 島待爾カウ 玉乎師付牟カウ 好人欲得カウ

(一) 島を君の誤字とする宣長説「暑解」は妄断である。其はシママチといふ語を解し得ず、且きならの里を奈良の里と誤信した爲である。

此頃は帝都であつたから、ミサトと稱へ、奈良の里とはいはなかつた筈である。

參照 カラコロモ「枕」、シママチ、キナラの里
(九五三)
竿牡鹿之 鳴奈流山乎 越將去 日谷八君當 不相將有
さを鹿の鳴なる山を越えゆかむ日だにや君と逢はずあるらむ

右笠朝臣金村之歌中出也、或云車持朝臣千年作之也

(一) 舊訓當を次句につけハタアハザラム(契沖アタリミザラム)と訓したが、「當」をハタと訓むべき理由がないのみならず、元曆校本、神田本には此字がない。恐らくは上の句につきたの假字に用ひられたのであらう(或は常の誤寫かも知れぬ)。

(九四五)

膳王歌一首

朝波 海邊爾安左里 暮去者 倭部越 鴈四乏母

朝アサには海邊にあさり夕されば大和へ越ゆる鴈トモし美しも

右作歌之年不審也、但以歌類便載此次

(九五五)

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

刺竹之 大宮人乃 家跡住 佐保能山乎者 思哉毛君

さす竹の大宮人の家とすむ佐保の山をば思ふやも君

(九五六)

帥大伴卿和歌一首

八隅知之 吾大王乃 御食國者 日本毛此間毛 同登會念

やすみしし君が大吾の御食國は大和もこゝも同じとぞ思ふ

(一) 「御」が衍字にあらずとすればミケクニと訓まればならぬ。ミケツクニと同じく、御領土の意である。

(九五七)

冬十一月太宰官人等奉拜香椎唐訖退歸之時、馬

駐于香椎浦各述懷作歌

帥大伴卿歌一首

去來兒等 香椎乃瀧爾 白妙之 袖左倍所沾而 朝菜採手六

いざ子ども香椎の瀧に白たへの袖さへぬれて朝菜つみてむ

(九五八)

大貳小野老朝臣歌一首

時風 應吹成奴 香椎瀧 潮干泊爾 玉藻刈而名

時トキ風カゼ 應オウ吹フ成ル奴ニ 香椎瀧カサ 潮干泊爾カサ 玉藻刈而名カサ

(九五九)

豐前守宇努首男人歌一首

往還 常爾我見之 香椎瀧 從明日後爾波 見緣母奈思

往ユキきカかへり常に我が見し香椎がた明日ゆ後には見むよしもなし

(九六〇)

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

隼人乃 湍門乃磐母 年魚走 芳野之瀧爾 尙不及家里

隼人のせとの岩ほも年魚走る芳野の瀧に尙しかずけり

(九六一)

帥大伴卿宿次田溫泉聞鶴喧作歌一首

湯原爾 鳴蘆多頭者 如吾 妹爾戀哉 時不定鳴

湯ユの原ノに鳴く蘆たづは吾が如く妹に戀ふれや時わかずなく

(九六二)

天平二年庚午、勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌

一首

奥山之 磐爾蘿生 恐毛 問賜鳴 念不堪國

おく山の磐に苔むしかしこくも問ひたまふかも思ひ堪へなくに

右勅使大伴道足宿禰饗于帥家、此日會集衆諸相誘驛使

葛井連廣成言、須作歌詞、登時廣成應聲即吟此歌

(九六三)

冬十一月大伴坂上郎女發帥家上道、超筑前國宗

形部名兒山之時、作歌一首

大汝 小彦名能 神社者 名著始鷄目 名耳乎 名兒山跡負而

吾戀之 千重之一重裳 奈具佐末七國

大なむち すくな彦なの 神こそは 名付そめけめ 名のみを

名兒山とおひて 吾が戀の 千重の一重も ながさめなくに

(一) 元曆校本には郡とあるが、部はムラ(邑)に通じ、郡の原語コウル(古)も亦大邑の義であるから、コホリと訓ませるつもりで部と書いたのかも知れぬ。必しも誤記ではあるまい。

(二) 元曆校本に米とあるを可とする。

參照 コホリ、ナゲサミ

(九六四)

同坂上郎女海路見濱貝作歌一首

吾背子爾 戀者苦 暇有者 拾而將去 戀忘貝

吾がせこに戀ふるは苦しいとまあらば拾ひて行かむ戀ひ忘れ貝

(九六五)

冬十二月太宰帥大伴卿上京時、娘子作歌二首

凡有者 左毛右毛將爲乎 恐跡 振痛袖乎 忍而有香聞

おほならばかかもせむを惶みとふりたき袖を忍びてあるかも

(九六六)

倭道者 雲隱有 雖然 余振袖乎 無禮登母布奈

大和路は雲がくりたり然れどもわが振る袖をなかれと思ふな

右太宰帥大伴卿兼任大納言一向京上道、此日馬駐水

城願望府家、于時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰

兒島也、於是娘子傷此易別嘆彼難會、拭涕自吟

振袖之歌

(一) 契沖はナメシと訓したが、フル(降)、ナガレ(流)は共に雨の縁語で

第二句雲ガクリタリに照應するものである。

(九六七)

大納言大伴卿和歌二首

日本道乃 吉備乃兒島乎 過而行者 筑紫乃子島 所念香裳

大和道の吉備の兒島を過ぎて行かば筑紫の兒島おもほえむかも

(九六八)

大夫跡 念在吾哉 水葦之 水城之上爾 泣將拭

ますらをと念へる吾や水ぐきの水城の上に涙のごはむ

參照 ミツクキ、ミツキ

(九六九)

三年辛未大納言大伴卿在寧樂家思故郷二歌二首

須臾 去而見牡鹿 神名火乃 淵者淺而 瀨二香成良武

しましくも行きて見てしか神なびの淵は淺びて瀨にかなるらむ

(一) 雅澄はアセニテと改訓したが、アセニテは完了複時格で、次句のナルラムと呼應せぬから、舊訓を可とする。アサビ(アセビ)は淺くなることを意味する古語である。

(九七〇)

指進乃 栗栖乃小野之 芽花 將落時爾之 行而手向六

さしすきの栗栖の小野の萩の花散らむ時にし行きてたむけむ

(一) 舊訓の如くサシスキと讀むべきものとせば進は誤字であるかも知

れぬ。元曆校本には草字で書いてある爲め讀み得ぬ。サシスキの語義は不明であるが、地點名又は栗林に關係のある語であらう。古義にムラタマではないかとあるは理由のないことである。

(九七一)

四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時、高橋連

蟲鷹作歌一首并短歌

白雲乃 龍田山乃 露霜爾 色附時丹 打超而 客行公者 五

百隔山 伊去割見 賊守 筑紫爾至 山乃會伎 野之衣寸見世

常 伴部乎 班遣之 山彦乃 將應極 谷潛乃 狹渡極 國方

乎 見之賜而 冬木成 春去行者 飛鳥乃 早御來 龍田道之

岳邊乃路爾 丹管士乃 將薰時能 櫻花 將開時爾 山多頭能

迎參出六 公之來益者

白雲の 立田の山の 露霜に 色づく時に 打越えて 旅行く

君は 五百重山 い行きさぐみて 賊守る 筑紫に至り 山の

そぎ 野のそぎ見よと 伴の部を あがち遣はし 山彦の 答

へむ極み 谷ぐくの さ渡る極み 國方を 見し賜ひて 冬ご

もり 春さり行けば 飛ぶ鳥の 早かへりませ 立田道の 岡

邊の路に 丹つつじの 匂はむ時の 櫻花 咲きなむ時に 山

たづの 迎ひまゐ出む 君が來まさらば

(一) 春去行者は春去來者と同義で、行は助動詞的に用ひられたのであ

るから、舊訓の如く春サリユケバと訓むがよい。之を假定條件としてユカバと訓するのは誤である。

(二) 歸がユクとも訓せられるやうに、來はカヘルとも訓み得る。御は敬語の表示である。

參照 ソギ、タニグク、ヤマタヅ

(九七二)

反歌一首

千萬乃 軍奈利友 言舉不爲 取而可來 男常會念

千萬の軍なりとも言舉せず取りて來ぬべき男の子とぞおもふ

右檢補任文、八月十七日任東山、山陰、西海道節度使

(一) コトアゲは古の發音法からいへばコトゲと約せられた筈で、この

歌の如きもコトアゲセズと讀むのは甚耳だちて聞えるから、或はコトゲセズと訓するのと思ふが、確證がないから姑く舊訓による。

(九七三)

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌

食國 遠乃御朝廷爾 汝等之 如是退夫者 平久 吾者將遊

手抱而 我者將御在 天皇朕 宇頭乃御手以 搔撫會 禰宜賜

打撫會 禰宜賜 將還來日 相飲酒會 此豐御酒者

をす國の 遠の御門に 汝等が かくまかりなば 平らけく

吾は遊ばむ 手うだきて 我はいまさむ すめら朕 うづの御

手もち かきなでぞ ねぎ賜はむ 打なでぞ ねぎ賜はむ か

へり來む日 相飲まむ酒ぞ 此豊御酒は

(一) 從來ネギタマフと訓して居るが、上の句にマカリナバとあり、アソバム、イマサムとあるを見れば、これも未來格とせればならぬ。
參照 ネギ、スメラアガ

(九七四)

反歌一首

大夫之 去跡云道會 凡可爾 念而行勿 大夫之伴

益らの行くとふ道ぞおほるかに思ひて行くなますら男の伴

右御歌者或云太上天皇御製也

(九七五)

中納言安倍廣庭卿歌一首

如是爲管 在久乎好叙 靈刻 短命乎 長欲爲流

かくしつづ在らくを好みぞ靈きはる短きいのちを長く欲りする

(一) 命の字は或はウチと訓むのかも知れぬ——〔八九七〕參照。

(九七六)

五年癸酉超三草香山一時、神社忌寸老鷹作歌二首

難波方 潮干乃奈凝 委曲見 在家妹之 待將問多米

なには湯潮干のなごりなごく見む家なる妹が待ち問はむため

(一) 舊訓マクハシミ、雅澄訓ヨクミテムとあるが、細井本の訓に従ふ。ナゴリ、ナゴクと韻を重ねたのである。他に用例はないが、ナガク(長)の轉呼で、ナガメ(長目)が眺の意に用ひられるやうに、委曲に

見ることなゴク見ルといふたことはあり得る。

(九七七)

直超乃 此徑爾師互 押照哉 難波乃海跡 名附家良思裳

ただこえの此道にしておしてや難波の海と名づけけらしも

(九七八)

山上臣憶良沈痾之時歌一首

士也母 空應有 萬代爾 語續可 名者不立之而

男の子やも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして

右一首山上憶良臣沈痾之時、藤原朝臣八束使三河邊朝臣東

人令問三所疾之狀、於是憶良臣報語已畢、有須拭涕

悲嘆口三吟此歌一

(九七九)

大伴坂上郎女與下姪家持從三佐保還歸西宅上歌一首

吾背子我 著衣薄 佐保風者 疾莫吹 及家左右

吾がせこが著る衣うすし佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで

(九八〇)

安倍朝臣蟲鷹月歌一首

雨隱 三笠乃山乎 高御香裳 月乃不出來 夜者更降管

雨こもり三笠の山を高みかも月の出で來ぬ夜はふけにつつ

(一) クダチツツといふ訓もあるが、假にツツといふ語尾を除いて見る

と、クダツといふよりもフケヌといふ完了格を用ひる方が當つて居る。——三卷〔二八二〕にもフケニツツといふ例はある。之に反して十

九卷、五卷のクダチテ、クダチニ、クダチヌ等は此場合とは趣を異にする。

(九八一)

大伴坂上郎女月歌三首

蕩高乃 高圓山乎 高彌鴨 出來月乃 遲將光

かりたかの高圓山を高みかも出で來る月のおそく光るらむ

(九八二)

烏玉乃 夜霧立而 不消 照有月夜乃 見者悲沙

ぬばたまの夜の霧たちておほるかに照れる月夜の見れば悲しさ

(一) 舊訓スマザルニとあり、其外オホロニモ、オホシクなどいふ訓があるが、オホロカニが語義上最も適して居るやうである。

參照 オホロ、オホロカ

(九八三)

山葉 左佐良稷壯子 天原 門渡光 見良久之好藻

山の端のささらえをとこ天の原とわたる光見らくしよしも

右一首歌或云、月別名曰三佐散良衣壯士也、緣此辭作此歌一

參照 ササラエチノコ

(九八四)

萬葉集(卷第六)

豊前國娘子女歌一首 娘子女日大宅、姓氏未詳也

雲隱 去方乎無跡 吾戀 月哉君之 欲見爲流

雲がくり行方をなみと吾が戀ふる月をや君が見まく欲りする

(九八五)

湯原王月歌二首

天爾座 月讀壯子 幣者將爲 今夜乃長者 五百夜繼許增

天にます月よみをとこ幣はせむ今夜の長さ五百夜つぎこそ

(九八六)

愛也思 不遠里乃 君來跡 大能備爾鴨 月之照有

はしきやし間近き里の君來むと大のびにかも月の照せる

(一) 諸説此句を誤字とし、思ひ思ひの訓を與へて居るが、ノビは野邊に延をいひかけたので、「間近き里の君が來るとして大延に月が照る」と戯れたのである。——洒落のわからぬ人には萬葉集を説く資格はない。

(九八七)

藤原八束朝臣月歌一首

待難爾 余爲月者 妹之著 三笠山爾 隱而有來

待ちがてに我がする月は妹が著る三笠の山にかくれて在りき

(一) カクレ(又はコモリ)タリケリと讀んでは「かくれた」といふことになり、三笠山に月が没したかのやうに解せられる。アリといふ動詞と同じ助動詞との使ひわけを注意せねばならぬ。

(九八八)

市原王宴禱ニ父安貴王ニ歌一首

春草者 後波落易 巖成 常磐爾座 貴吾君

春草は後はかれ易し岩ほなすときはにいませ貴き吾君

(一) 契沖は草は花の誤ではないかというた。若し然りとせば第二句の落はチリと訓まればならぬ。——舊訓カレヤスシとある。

(九八九)

湯原王打酒歌一首

燒刀之 加度打放 大夫之 禱豐御酒爾 吾醉爾家里

やき大刀のかど打ちはふり益らをがのむ豊みきに吾をひにけり

(一) 打の字祈又は折の誤とする説もあり、契沖はサケニウタルと訓したが、打酒はウツケに通ずる借字であらう。

(二) 從來ウチハナチと訓して不可解として居るか、カドウチハフリと訓めばよく意が通ずる。

(三) 禱は「飲」にいひかけたものであるから、古葉類聚鈔の訓の如く、ノムとよまればならぬ。

參照 ヤキタチ、カドウチハフリ

(九九〇)

紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌一首

茂岡爾 神佐備立而 榮有 千代松樹乃 歳之不知久

しげ岡に神さび立ちて榮えたる千代松の木の年の知らなく

(九九一)

同鹿人至泊瀬河邊ニ作歌一首

石走 多藝千流留 泊瀬河 絶事無 亦毛來而將見

岩走りたぎち流るる初瀬川絶ゆることなく又も來て見む

(九九二)

大伴坂上郎女詠ニ元興寺之里ニ歌一首

古郷之 飛鳥者雖有 青丹吉 平城之明日香乎 見樂思好裳

古里の明日香はあれど青土よし奈良の明日香を見らくよし

(九九三)

同坂上郎女初月歌一首

月立而 直三日月之 眉根搔 氣長戀之 君爾相有鴨

月立ちてただ三日月の眉根かきけながく戀ひし君に逢へるかも

(九九四)

大伴宿禰家持初月歌一首

振仰而 若月見者 一目見之 人之眉引 所念可聞

ふりさけて三日月見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも

(九九五)

大伴坂上郎女宴ニ親族ニ歌一首

如是爲乍 遊飲與 草木尙 春者生管 秋者落去

かくしつづ遊びのみこそ草木すら春はもえつつ秋はちりゆく

(九九六)

六年甲戌海犬養宿禰岡磨應レ詔歌一首

御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相樂念者

御民吾生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば

(九九七)

春三月幸ニ千難波宮ニ時歌六首

住吉乃 粉濱之四時美 開藻不見 隱耳哉 戀度南

すみの江のこ濱のしじみあけも見ずこもりてのみや戀ひわたり

なむ

右二首作者未詳

(一) 美の字元曆校本に華とあるが、住吉の濱に四時さく華があつたと思はれぬから、舊の如くシジミ(蜆)のことを解すべきであらう。アケもコモリも貝の縁語である。

(二) 契沖訓に従ふ。

(九九八)

如眉 雲居爾所見 阿波乃山 懸而撈舟 泊不知毛

眉のごと雲むに見ゆる阿波の山かけて漕ぐ舟泊り知らずも

右一首船王作

(九九九)

萬葉集(卷第六)

(一〇〇〇)

從千沼回 雨會零來 四八津之泉郎 網手綱乾有 沾將堪香聞

血沼まより雨ぞ降り來るしはつの海人つなで乾したり濡れあへ

むかも

(一〇〇一)

兒等之有者 二人將聞乎 奥渚爾 鳴成鶴乃 曉之聲

子等しあらば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の曉の聲

右一首守部王作

(一〇〇二)

大夫者 御蕨爾立之 未通女等者 赤裳須索引 清濱備乎

益らをは御狩に立たし少女等は赤裳すそびく清き濱びを

右一首山部宿禰赤人作

(一〇〇三)

馬之步 押止駐余 住吉之 岸乃黃土 爾保比而將去

馬の歩みおさへ止めよ住の江の岸のまなこにほひて行かむ

右一首安倍朝臣豐繼作

(一) 下二句は「九三」の歌に類する。恐らくは黃土の下に粉の字を脱し

たのであらう。黄土だけでは舊訓の如くハニフニと訓むことも無理である。

(10011)

筑後守外從五倍下葛井連大成遙見海人釣船一作歌一首

海嬖婦 玉求良之 奥浪 恐海爾 船出爲利所見
海人少女玉求むらし沖つ波かしこき海に船出せり見ゆ

(10014)

按作村主益人歌一首

不所念 來座君乎 佐保川乃 河蝦不令聞 還都流香聞
おもほえず來ませる君を佐保川の蛙聞かせずかへしつるかも

右内匠寮大屬按作村主益人聊設飲饌以饗長官佐爲王
未及三日斜王既還歸於時益人怜惜不厭之歸仍作此歌

(10015)

八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山部宿禰赤人
應詔作歌一首并短歌

八隅知之 我大王之 見給 芳野宮者 山高 雲會輕引 河速
彌 湍之聲會清寸 神佐備而 見者貴久 宜名倍 見者清之
此山乃 盡者耳社 此河乃 絶者耳社 百師紀能 大宮所 止

橋は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいやときはの木

右冬十一月九日從三位葛城王、從四位上佐爲王等辭皇族
之高名、賜外家之橋姓已訖、於時太上天皇、皇后共在
于皇后宮、以爲肆宴而即御製賀橋之歌、并賜御酒
宿禰等也、或云、此歌一首太上天皇御歌、但天皇々后御歌
各有二首者、其歌遺落未得探求焉、今檢案內、八年
十一月九日、葛城王等願橋宿禰之姓上表、以三十七日
依表乞賜橋宿禰

(1010)

橋宿禰奈良麿應詔歌一首

奥山之 眞木葉凌 零雪乃 零者雖益 地爾落日八方
奥山の眞木の葉しぬぎ降る雪のふりは益すとも土に落ちめやも

(1011)

冬十二月十二日歌儺所之諸王臣子等集葛井連廣成
家宴歌二首

比來古儺盛興、古歲漸晚、理宜共盡古情、同唱古歌、故擬
此趣、輒獻古曲二節、風流意氣之士、儻有此集之中、爭發
念心々和古體

我屋戸之 梅咲有跡 告遣者 來云似有 散去十方吉

萬葉集(卷第六)

時裳有目

やすみしし 我大君の めしたまふ 芳野の宮は 山高み 雲
ぞたなびく 河速み 瀬の音ぞ清き 神さびて 見れば貴く
よろしなべ 見ればさやけし 此山の つきばのみこそ 此川
の 絶えばのみこそ 百しきの 大宮處 やむ時あらめ

(1006)

反歌一首

自神代 芳野宮爾 蟻通 高所知者 山河乎吉三
神代より芳野の宮にありがよひ高知らせるは山川をよみ

(1007)

市原王悲獨子歌一首

不言問 木尙妹與兄 有云乎 直獨子爾 有之苦者
言とはぬ木すら妹と兄ありとふを唯獨子にあるが苦し

(1008)

忌部首黑麿恨友賒來歌一首

山之葉爾 不知世經月乃 將出香常 我待君之 夜者更降管
山の端にいざよふ月の出むかと我が待つ君が夜は更けにつつ

(1009)

冬十一月左大辨葛城王等賜姓橋氏之時御製歌一首
橋花者 實左倍花左倍 其葉左倍 枝爾霜雖降 益常葉之樹

我が宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たり散ぬともよし

(1012)

春去者 乎呼理爾乎呼里 鷺之 鳴吾島會 不息通爲
春さればををりにををり鶯の鳴く吾が島ぞやまず通はせ

(1013)

九年丁丑春正月橋少卿并諸大夫等集彈正尹門部王
家宴歌二首

豫 公來座武跡 知麻世婆 門爾屋戸爾毛 珠數益乎
かねてより君來まさむと知らませば門に宿にも珠しかましを

右一首主人門部王 後賜姓大原真人氏也

(1014)

前日毛 昨日毛今日毛 雖見 明日左倍見卷 欲寸君香聞
をとつ日もきのふも今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君
かも

右一首橋宿禰文成 卽少卿之子也

(1015)

榎井王後追和歌一首
玉敷而 待益欲利者 多鷄蘇香仁 來有今夜四 樂所念
玉しきて待ちますよりはたまそかに來たる今夜し樂しく思ほゆ

(一) 舊訓マタマシとあり、雅澄はマタエシと改訓したが、いづれも誤である。主人の王が「珠しかましを」というたに對する酬和であるから、マチマスであらねばならぬ。

(二) 從來字についてタケソカニと訓して居るが、タケソカといふ語は考へ得ぬ。恐らくは鶏は誤字で、タマソカと訓むのであらう。タマソカはタマサカ(邂逅)の音便である。

(1016)

春二月諸大夫等集左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌一首

海原之 遠渡乎 遊士之 遊乎將見登 莫津左比曾來之
うな原の遠き渡をみやびをの遊ぶを見むとなづさひぞ來し

右一首書白紙懸著屋壁也、題云蓬萊仙媛所襲護、爲風流秀才之士矣、斯凡客不所望見哉

(一) 古葉略類聚鈔には「所」の下に「作」の字があるが、其にしても意が通ぜぬ。誤脱があるのであらう。

(1017)

夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時、便超相坂山、望見近江海、而晚頭還來作歌一首

木綿疊 手向乃山乎 今日越而 何野邊爾 廬將爲子等
ゆふ疊むたむけの山を今日こえていづれの野邊に廬りせむ子ら

(一) 大和の坂上里から山城の賀茂の社に参拜する途中逢坂山を超えた

(1018)

ついたものと思はれる。次の長歌に「恐の坂の神に幣を奉つる」とあるのも立田の懼坂のことではあるまい。

王 命恐見 刺並之 國爾 出座耶 吾背乃公矣 繫卷裳 湯
湯石恐石 住吉乃 荒人神 船舳爾 牛吐賜 付賜將 島之崎
前 依賜將 磯乃崎前 荒浪 風爾不令遇 草菅見 身疾不有
急 令變賜根 本國部爾

大君の 命かしこみ さしなみの 土左の國に 出でますや
吾がせの君を かけまくも ゆゝし惶し 住の江の 現人神
船のへに うしはき賜ひ 着きたまはむ 島のさきさき 寄り
賜はむ 磯のさきさき 荒き波 風にあはせず くさつつみ
病あらせず すむやけく かへし賜はね 本つ國方に

(一) 「國の上」に土左の二字脱とする吉田正準説(古義)可。サシサミはト(戸)の枕詞である。

(二) 刊本に此句までを別の一首としたことの誤なるはいふ迄もない。元暦校本其他の古寫本には次の句をつづけてかいてある。

(三) 草を莫の誤としてツツミナクとする説(宣長)は従はれぬ。クサツツミは瘡を意味する古語である。

(四) 舊訓アラセズとある所を見ると「有」の上に「令」の字が脱したのであるまいか。——ミヤマヒアラズとする訓は非。

參照 サシナミノ(枕)、クサツツミ

とあるは地理があらぬ。何か誤傳があるものと思はれる。
參照 ユフタタム(枕)

(1018)

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

白珠者 人爾不知所 不知友縱 雖不知 吾之知有者 不知友
任意

しら珠は人に知らえず知らずともよし、知らずとも吾し知れらば知らずともよし

右一首或云、元興寺僧獨覺多智、未_レ有_レ顯聞、諸狎侮、因_レ此僧作_レ此歌、自嘆_レ身才_二也

(1019)

石上乙鷹卿配土在國之時歌三首并短歌

石上 振乃尊者 弱女乃 惑爾緣而 馬自物 繩取附 肉自物
弓突圍而 王 命恐 天離 夷部爾退 古衣 又打山從 還來
奴香聞

石の上 振の命は たわや女の 惑によりて 馬じもの 繩とりつけ 獸じもの 弓矢かくみて 大君の 勅かしこみ あまさかる 夷べにまかる 古衣 まつちの山ゆ かへり來ぬかも
(一) こゝに眞土山とある外に次の反歌に、大崎(紀伊國海草郡)から船出したとあるから、古は土佐に行くには紀伊國に出て其から海路に

(1020)

父公爾 吾者眞名子叙 妣刀自爾 吾者愛兒叙 參昇 八十氏
人乃 手向爲等 恐乃坂爾 幣奉 吾者叙追 遠杵土左道矣
父君に 吾はまなこぞ 母とじに吾は愛兒ぞ まゐ昇る 八十
氏人の 手向する かしこの坂に 幣まつり 吾はぞまかる
遠き土左道を

(一) 等の字元暦校本、細井本等に之なきを可とする。
(二) 追を退の誤字としてマカルと訓した眞淵説可。

(1021)

反歌一首

大崎乃 神之小濱者 雖小 百船純毛 過迹云莫國
大崎の神の小濱はせまけども百船人も過ぐといはなくに

(1022)

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首

長門有 奥津借島 奥眞經而 吾念君者 千歲爾母我毛
長門なる沖つかり島おきまへて吾が思ふ君は千歲にもがも
右一首長門守巨曾倍對馬朝臣

參照 オキマヘテ

(1023)

奥眞經而 吾乎念流 吾背子者 千年五百歲 有巨勢奴香聞

おきまへて吾をおもへる吾が背子は千年五百歳ありこせぬかも
右一首右大臣和歌

(10116) 百磯城乃 大宮人者 今日毛鴨 暇無跡 里爾不去將有
百しきの大宮人は今日もかも暇をなみと里に行かずあらむ
右一首右大臣傳云故豊島采女歌

(10117) 橋 本爾道履 八衢爾 物乎會念 人爾不知所知
たちばなの本に道ふみやちまたに物をぞ思ふ人に知らえず

右一首右大辨高橋安磨卿語云、故豊島采女之作也、但或本
云、三方沙彌戀妻苑臣作歌也、然則豊島采女當時、當所
口吟此歌歟

(10118) 十一年己卯、天皇遊菟高圓野之時、小獸泄走塔里
之中、於是適值勇士、生而見獲、即以三此獸獻
上御在所副歌一首 獸名俗曰三牟射佐妣

大夫之 高圓山爾 迫有者 里爾下來流 牟射佐妣會此
ますらをの高圓山にせめたれば里におりけるむささびぞこれ
右一首大伴坂上郎女作之也、但未達奏而小獸死斃、因
此歌停之

大夫從三河口行宮還京、勿令從駕焉、何有下詠三思泥
崎作歌上哉

(10119) 將の字元曆校本以下多くの本に好とある。其從へば好住の二字
をサキクと訓むのかも知れぬが、尙童蒙抄の説の如く往を往の誤と
してユカムと訓すべきであらう。

(101111) 狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首

天皇之 行幸之隨 吾妹子之 手枕不卷 月會歷去家留
大君の行幸のままに吾妹子が手枕まかず月ぞ經にける

(101112) 古義には狹を獨の誤としてあるが、續紀によれば還幸の御路次志
賀郡采津頓宮に二泊せられたとあるから、狹殘はサザナミの假字で
滋賀の行宮をいふのであらう。

(101113)

御食國 志麻乃海部有之 眞熊野之 小船爾乘而 奥部撈所見
御饌つ國志摩の海人ならしま熊野の小船のりて沖方こぐ見ゆ

參照 マクマヌ

(101114)

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首
從古 人之言來流 老人之 變若云水會 名爾負瀧之瀨
古ゆ人のいひ來る老人のをつとふ水ぞ名におふ瀧の瀨

(10119) 十二年庚辰冬十月、依三太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反、
發三軍幸三于伊勢國之時、河口行宮、內舍人大伴宿禰
家持作歌一首

河口之 野邊爾廬而 夜乃歷者 妹之手本師 所念鴨
川口の野邊に廬りて夜のふれば妹が袂しおもほゆるかも
(10110) 天皇御製歌一首

妹爾戀 吾乃松原 見渡者 潮干乃瀉爾 多頭鳴渡
妹にこひあがの松原見わたせば潮干の瀉に鶴鳴きわたる

右一首今案吾松原在三重郡一、相三去河口行宮遠矣、若疑
御三在朝明行宮之時所製御歌、傳者誤之歟

(10111) 宣長は乃を自の誤としてアガマツバラユと改訓したが、原文舊訓
のままでもよく聞える御歌であるから、猥に改竄することは謹まれ
ばならぬ。

(10111) 丹比屋主真人歌一首

後爾之 人乎思久 四泥能崎 木綿取之泥而 將住跡其念
後れにし人を思ばくしでの崎木綿取しでて往かむとぞ思ふ
右案三此歌者、不有三此行宮之作乎、所三以然言三之、勅三

參照 ナチ

(10115)

大伴宿禰家持作歌一首
田跡河之 瀧乎清美香 從古 宮仕兼 多藝乃野上爾
たど川の瀧を清みか古ゆ宮つかへけむたぎの野の上に

(10116)

不破行宮大伴宿禰家持作歌一首
關無者 還爾谷藻 打行而 妹之手枕 卷手宿益乎
關なくばかへりにだにもうち行きて妹が手枕まきてねましを

(10117)

十五年癸未秋八月十六日、內舍人大伴宿禰家持讚三久
邇京作歌一首

今造 久邇乃王都者 山河之 清見者 宇倍所知良之
今つくる久邇の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし
(10118)

高丘河内連歌二首

故郷者 遠毛不有 一重山 越我可良爾 念會吾世思
古里は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひぞ吾がせし
(10119) 吾背子與 二人之居者 山高 里爾者月波 不曜十方余思

吾がせこと二人し居れば山高み里にも月は照らすともよし

(1040)

安積親王宴三左少辨藤原八束朝臣家之日、内舍人大伴宿禰家持作歌一首

久堅乃 雨者零敷 念子之 屋戸爾今夜者 明而將去

久かたの雨はふりしけ思ふ子が宿に今夜はあかして行かむ

(1041)

十六年甲申春正月五日、諸卿大夫集安倍蟲齋朝臣家宴歌一首 作者不審

吾屋戸乃 君松樹爾 零雪乃 行者不去 待西將待

吾が宿の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ

(1042)

同月十一日登活道岡、集一株松下飲歌二首

一松 幾代可歴流 吹風乃 聲之清者 年深香聞

一つ松幾代か歴つる吹く風の聲の清きは年深みかも

(1044)

靈別 壽者不知 松之枝 結情者 長等會念 靈きはる生命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ

右一首大伴宿禰家持作

(1045)

傷三惜寧樂京荒墟作歌三首 作者不審

紅爾 深染西 情可母 寧樂乃京師爾 年之歴去倍吉 紅に深く染みにし心かも奈良の都に年のへぬべき

(1046)

世間乎 常無物跡 今會知 平城京師之 移徒見者 世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつらふ見れば

(1047)

石綱乃 又變若反 青丹吉 奈良乃都乎 又將見鴨 岩つなの又をちかへり青によし奈良の都を又も見むかも

(1048)

悲三寧樂故京郷作歌一首并短歌

八隅知之 吾大王乃 高敷爲 日本國者 皇祖乃 神之御代自敷座流 國爾之有者 阿禮將座 御子之嗣繼 天下 所知座跡 八百萬 千年矣兼而 定家牟 平城京師者 炎乃 春爾之成者 春日山 御笠之野邊爾 櫻花 木晚卒 貌鳥者 間無數鳴 露霜乃 秋去來者 射駒山 飛火賀嶋丹 芽乃枝乎 石辛見散之 狹男壯鹿者 妻呼令動 山見者 山裳見貌石 里見者 里裳住吉 物負之 八十伴緒乃 打經而 思並敷者 天地乃 依會限

萬世丹

榮將往迹 思前石 大宮尙矣 恃有之 名良乃京矣 新世乃 事爾之有者 皇之 引乃眞爾眞荷 春花乃 遷日易

村鳥乃 且立往者 刺竹之 大宮人能 踏平之 通之道者 馬

裳不行

人裳往莫者 荒爾異類香聞

やすみしし 吾大君の 高しかす 大和の國は 皇祖の 神の

御代より しきませる 國にしあれば 生れまさむ 御子のつ

ぎつぎ 天の下 知しまさむと 八百よろづ 千年をかねて

定めけむ 奈良の都は かぎろひの 春にしなれば 春日山

三笠の野邊に 櫻花 木のくれがくり かほ鳥は 間なくしは

鳴く 露じもの 秋さり來れば 生駒山 飛火が高に 萩の枝

を しがらみ散らし さを鹿は 妻よびどよもす 山見れば

山も見がほし 里見れば 里も住みよし もののふの 八十伴

ののを 打はへて 思へりしくは 天地の よりあひの極み

萬代に 榮え行かむと 思ひにし 大宮すらを たのめりし

奈良の都を 新た世の 事にしあれば 大君の 引のまにまに

春花の うつろひ易り 村鳥の 朝立ち行けば さす竹の 大

宮人の 踏みならし 通ひし道は 馬も行かず 人も行かねば

荒れにけるかも

(一) 從來スメロギと訓して居るが、語義上、はスメミカヤであられ

ばならぬ。

(一) 刊本射駒とあるが、元曆校本、類聚集を始め多くの寫本に駒とある

を正しとすべきである。

(二) 舊訓ドヨメとあるが、こゝは句の切れ目であらねばならぬから、

ツマヨビドヨモスと八音に訓すべきである。——ドヨムと訓するは

不可。

(三) 並は在の誤字か。契沖訓に従ひオモヘリシクハとすべきである。

四句を隔て、思ヒニシとあるに照應するもので、上代の正しい語法

である。——語法要録を見よ。

(1048)

反歌二首

立易 古京跡 成者 道之志婆草 長生爾異梨

立ちかはり古き京となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

(1049)

名付西 奈良乃京乃 荒行者 出立毎爾 嘆思益

なづきにし奈良の都の荒れ行けば出立つごとに嘆しまさる

(1050)

讚三久邇新京二首并短歌

明津神 吾皇之 天下 八島之中爾 國者霜 多雖有 里者霜 澤爾雖有 山並之 宜國跡 川次之 立合郷跡 山代乃 鹿脊 山際爾 宮柱 太敷奉 高知爲 布當乃宮者 河近見 湍音叙

清 山近見 鳥賀鳴慟(一) 秋去者 山裳動響爾 左男鹿者 妻呼
令響 春去者 岡邊裳繁爾 巖者 花開乎呼理 痛何怜(二) 布當
乃原 甚貴 大宮處 諾己曾 吾大王者 君之隨(三) 所聞賜而
刺竹乃 大宮此跡 定異等霜

明つ神 吾大君の 天の下 八島の中に 國はしも 多くあれ
ども 里はしも さはにあれども 山なみの よろしき國と
川なみの 立合ふ里と 山代の 鹿脊山のまに 宮柱 太しき
たてて 高知らす 布當の宮は 河近み 瀬の音ぞ清き 山近
み 鳥が音さわぐ 秋されば 山もとどろに さを鹿は 妻よ
びどよめ 春されば 岡邊もしじに 岩ほには 花さきををり
あなおもしろ 布當の原 いと貴 大宮處 うべしこそ 吾大
君は 君ながら 聞したまひて さす竹の 大宮こと 定め
けらしも

(一) 舊訓イタムとあるが、此語も慟の字もこゝには不適當であるから、
畧解の説の如く慟は動の誤字と見るべきであらう。但し之をドヨム
と訓むことは次のトドロ、ドヨメ(ドヨマセと同語)と重複する嫌が
あるから、サツグと訓むを可とする。
(二) 舊訓イトアハレとあるが、古義のアナオモシロの方がよいやうで
ある。
(三) 從來キミノマニと訓してあるが、第二卷高市皇子追悼の人麻呂の
歌に皇子ナガラとある例によれば、キミナガラと訓まればならぬ。

「大君なる因」といふ意である。語法要録參照。

(一〇五二) 反歌二首

三日原 布當乃野邊 清見社 大宮處 定異等霜
瓶の原布當の野邊を清みこそ大宮處定めけらしも
(一〇五二)
弓高來 川乃湍清石 百世左右 神之味將往 大宮所
山たかく川の瀬清し百代まで神しみ行かむ大宮處
(一) 舊訓ヤマタカクとあるによれば弓は誤字であらう。

(一〇五三)

吾皇 神乃命乃 高所知 布當乃宮者 百樹成 山者木高之
落多藝都 湍音毛清之 巖乃 來鳴春部者 巖者 山下耀 錦
成 花咲乎呼里 左壯鹿乃 妻呼秋者 天霧合 之具禮乎疾
狹丹頰歷 黃葉散乍 八千年爾 安禮衝之乍 天下 所知食跡
百代爾母 不可易 大宮處
吾が大君 神の命の 高知らす 布當の宮は 百樹なす 山は
木高し 落ちたぎつ 瀬の音も清し うぐひすの 來鳴く春べ
は 巖には 山下ひかり 錦なす 花咲きををり さを鹿の
妻よぶ秋は 天きらふ 時雨をいたみ さにづらふ 黃葉散り
つつ 八千年に あれつかしつ 天の下 知るしめさむと

百代にも 變はるべからぬ 大宮處

(一) 舊訓モモキナスを非としてモモキナル(眞淵)、モモキモル(宣長)
と改訓したものがあつたが、其はナスの原義を明にせず、全然「如」と
同義語と見るからで、こゝは次の「錦成」と同じく、ナスと訓して然
るべきである。

(一〇五四)

反歌五首

泉川 往瀬乃水之 絶者許會 大宮地 遷往目
いづみ川ゆく瀬の水の絶えばこそ大宮處うつろひ行かめ

(一〇五五)

布當山 山並見者 百代爾毛 不可易 大宮處
ふたぎ山山なみ見れば百代にも變はるべからぬ大宮處

(一〇五六)

憾孀等之 續麻繫云 鹿背之山 時之往者 京師跡成宿
少女等がうみをかくとふ鹿背の山時しい行けば都となりぬ

(一) 從來ユケレバと訓して居るが、末句にナリヌとあるから、來ヌレ
バの意であらねばならぬ。従つて行キヌレバ又は行ケバといふべき
で、ユケレバというては時格が一致せぬ。接頭語イを冠してイユケ
バと訓むべきである。

(一〇五七)

鹿脊之山 樹立矣繁三 朝不去 寸鳴響爲 露之音
かせの山木立をしげみ朝さらす來鳴きどもす鶯の聲

(一〇五八)

狛山爾 鳴霍公鳥 泉河 渡乎遠見 此間爾不通(一) 渡遠
こま山になくほとどきす泉河わたりを遠みこゝに通はぬ(渡遠
みや通はずあるらむ)
(一) カヨハズと訓するは非。カヨハヌというて餘語を残さねばならぬ所
である。

(一〇五九)

春日悲傷三香原荒墟二作歌一首并短歌

三香原 久邇乃京師者 山高 河之瀬清 在吉迹 人者雖云
在吉跡 吾者雖念 故去之 里爾四有者 國見跡 人毛不通
里見者 家裳荒有 波之異耶之 如此在家留可 三諸著 鹿背
山際爾 開花之 色目列敷 百鳥之 音名束敷 在泉石 住吉
里乃 荒樂苦惜哭
三香の原 久邇の都は 山高み 川の瀬清み すみよしと 人
はいへども 在よしと 吾は思へども 古にし 里にしあれば
國見れど 人も通はず 里見れば 家もあれたり はしけやし
かくありけるか 三諸つく 鹿脊山のまに 咲く花の 色めづ
らしく 百鳥の 聲なつかしく ありがほし 住みよき里の

荒るらく惜しも

(一) 在の字類聚古集に住とあるに従ふ。

參照 ミモロツク

(1060)

反歌三首

三香原 久邇乃京者 荒去家里 大宮人乃 遷去禮者

三香の原久邇の都は荒れにけり大宮人のうつろひぬれば

(1061)

咲花乃 色者不易 百石城乃 大宮人叙 立易去流

咲く花の色はかはらず百しきの大宮人ぞ立ちかはりぬる

(1062)

難波宮作歌一首并短歌

安見知之 吾大王乃 在通 名庭乃宮者 不知魚取 海片就而

玉拾 濱邊乎近見 朝羽振 浪之聲蹙 夕薙丹 權合之聲所聆

曉之 寢覺爾聞者 海石之 鹽干乃共 納渚爾波 千鳥妻呼

葭部爾波 鶴鳴動 視人乃 語丹爲波 聞人之 視卷欲爲 御

食向 味原宮者 雖見不飽香聞

やすみしし 吾大君の あり通ふ 難波の宮は いさなとり

海片つきて 玉拾ふ 海邊を近み 朝はふる 波の音さわぎ

夕なぎに かひの音聞こゆ 曉の 寐さめに聞けば いくりの

潮干のむた うらすには 千鳥妻よび 葦邊には 鶴なきどよ

む 見る人の 語にすれば 聞く人の 見まく欲りする 御饌

むかふ 味原の宮は 見れどあかぬかも

(一) 舊訓ウミイシの不可なることは勿論であるが、ウナバラ(眞淵)、ラ

タツミ(千蔭)、ウミチカミ(宣長)等の訓も皆従はれぬ。海石之とい

ふ文字によつてイクリノと四音に訓むべきものである。イクリは岩

礁の意である。次句六音なるは四六調によるものである。

(二) 納は納の誤とし、ウラスと訓した千蔭説可。

(1063)

反歌二首

有通 難波乃宮者 海近見 漁童女等之 乗船所見

ありがよふ難波の宮は海近み海人少女等がのれる見ゆ

(1064)

鹽干者 葦邊爾蹙 白鶴乃 妻呼音者 宮毛動響二

潮干には葦邊にさわぐ白たづの妻よぶ聲は宮もどろに

(一) 從來シホレバと訓して居るが、シは既定的前提ではなく、一

般的叙述とおもはれるから、シホレニハと訓む方がよい。

(1065)

過三敏馬浦一時作歌一首并短歌

八千棹之 神之御世自 百船之 泊停跡 八島國 百船純乃

雜 詠

(1066)

詠天

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 擲隱所見

天の海に雲の波たち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

(1069)

詠月

常者會 不念物乎 此月之 過匿卷 惜夕香裳

常はかつて思はぬものを此月の過ぎかくれまく惜しきよひかも

(1070)

大夫之 弓上振起 借高之 野邊副清 照月夜可開

益らをの弓末振りおこしかりたかの野邊さへ清く照る月夜かも

(1071)

山末爾 不知與歷月乎 將出香登 待乍居爾 與會降家類

やまの端にいざよふ月を出てむかと待ちつつ居るに夜ぞくだち

ける

(1072)

明日之夕 將照月夜者 片因爾 今夜爾因而 夜長有

【卷第七】

定而師 三犬女乃浦者 朝風爾 浦浪左和寸 夕浪爾 玉藻者
來依 白沙 清濱部者 去還 雖見不飽 諸石社 見人每爾
語嗣 偲家長思吉 百世歷而 所偲將往 清白濱
八千矛の 神の御代より 百船のはつる 泊りと 八島國 百
船人の 定めてし 敏馬の浦は 朝風に 浦波さわぎ 夕波に
玉藻はきよる 白まなご 清き濱邊は 行きかへり 見れども
飽かず うべしこそ 見る人毎に 語りつき 偲びけらしき
百代へて 偲ばえ行かむ 清き白濱

(1066)

反歌二首

眞十鏡 見宿女乃浦者 百船 過而可往 濱有七國

まを鏡みぬめの浦は百船の過ぎて行へき濱ならなくに

(1067)

濱清 浦愛見 神世自 千船湊 大和太乃濱

濱清み浦うるはしみ神代より千船のとまる大和太の濱

右二十一首田邊福麿之歌集中出也

明日のよひ照らむ月夜は片よりに今宵によりて夜長からなむ

(10711)

玉垂之 小簾之間通 獨居而 見驗無 暮月夜鴨

玉垂の小簾の間通し獨居て見るしるしなき夕月夜かも

(10714)

春日山 押而照有 此月者 妹之庭母 清有家里

春日山おして照らせる此月は妹が庭にも清けかりけり

(1) 古義に中山殿水説として家里は良思の誤かとある。或は然らむ。

(10715)

海原之 道遠鴨 月讀 明少 夜者更下午

海原の道遠みかも月讀のひかり少く夜は更けにつつ

(1) ヒカリスクナキ(又はアカリスクナキ)と訓み、夜の修飾語とするから不可解になるので、「月光少ク夜深けぬ」といふ意である。

(10716)

百師木之 大宮人之 退出而 遊今夜之 月清左

百しきの大宮人のまかり出て遊ぶ今夜の月のさやけさ

(10717)

夜干玉之 夜渡月乎 將留爾 西山邊爾 塞毛有糠毛

ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山邊に關もあらぬかも

(10718)

(10815)

妹之當 吾袖將振 木間從 出來月爾 雲莫棚引

妹があたり吾が袖ふらむ木の間よりいで来る月に雲なたなびき

(10816)

靱懸流 伴雄廣伎 大伴爾 國將榮常 月者照良思

(10817)

詠レ雲

痛足河 河浪立奴 卷目之 由槻我高仁 雲居立有良志

あなし川河波たちぬまきもくのゆつきが嵩に雲の立つらし

(10818)

足引之 山河之瀬之 響苗爾 弓月高 雲立渡

あしびきの山川の瀬のなるなべに弓月が嵩に雲たち渡る

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

(10819)

大海爾 島毛不在爾 海原 絶塔浪爾 立有白雲

わたつみに島もあらなくに海原のたゆたふ波に立てる白雲

右一首伊勢從駕作

(1) 從來オホウミと訓して居るが、上代の發音法ではオホミ(又はオフミ)となつて甚口調が悪いから、ワゲツミと詠じたものと思はれる。

此月之 此間來者 且今跡香毛 妹之出立 待乍將有

此月のこゝに來たれば今とかも妹が出て立ち待ちつつあらむ

(10719)

眞十鏡 可照月乎 白妙乃 雲香隱流 天津霧鴨

まそ鏡照るべき月を白たへの雲か隠せる天つ霧かも

(10810)

久方乃 天照月者 神代爾加 出反等六 年者經去乍

久かたの天照る月は神代にか出でかへるらむ年は經につつ

(10811)

烏玉之 夜渡月乎 何怜 吾居袖爾 露曾置爾鷄類

ぬばたまの夜渡る月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞおきにける

(10812)

水底之 玉障清 可見裳 照月夜鴨 夜之深去者

水底の玉さへさやに見つべくも照る月夜かも夜の深け行けば

(10813)

霜雲入 爲登爾可將有 久堅之 夜度月乃 不見念者

霜ぐもりすとかあらむ久かたの夜渡る月の見えぬ念へば

(10814)

山末爾 不知夜經月乎 何時母 吾待將座 夜者深去乍

山のはにいざよふ月をいつとかも吾待ち居らむ夜は深けにつつ

(10910)

詠レ雨

吾妹子之 赤裳裾之 將染渥 今日之霖霖爾 吾共所沾者

吾妹子が赤裳の裾のひづちなむ今日のこさめに吾と沾れなば

(1) 元曆校本に所沾名とあるによつてヌレサヘヌレナと訓したものがあるが、女性が故なくして雨中を徘徊するとは考へられぬことであるから、後朝の別を惜んで雨をも厭はずつて來ようとする女を、赤裳の裾が濡るからというて抑へ止める趣と解すべきで、舊訓の如く吾トヌレナバと讀むべきである。古義に第三句をヒヅツラムと訓み、末句をヌレテバ又はヌレテナとしたのは時格の相違をも解せざるものと言はればならぬ。

(10911)

可融 雨者莫零 吾妹子之 形見之服 吾下爾著有

とほるべき雨はな降りそ我妹子がかたみのころも吾下に着り

(1) ケリは着アリの意。キタリと訓むのは非。キタリは口語でいへば「着た」で、「着てある」ではない。語法要録參照。

(10912)

詠レ山

動神之 音耳聞 卷目之 檜原山乎 今日見鶴鴨

動神之 音耳聞 卷目之 檜原山乎 今日見鶴鴨

動神之 音耳聞 卷目之 檜原山乎 今日見鶴鴨

(10912)

動神之 音耳聞 卷目之 檜原山乎 今日見鶴鴨

(10912)

なる神の音のみ聞きまきもくの檜原の山を今日見つるかも

(一〇九三)

三毛侶之 其山奈美爾 兒等手乎 卷向山者 繼之宜霜

三諸の其山並に子等が手を卷向山はつきのよろしも

(一) 舊訓ツギテシヨシモとあるが、ツギは繼、就にいひかけたもので、今の語にいふツギガヨイと同意であるから、名詞形として用ひればならぬ。ツクノヨロシモと訓むは非。

(一〇九四)

我衣 色服染 味酒 三室山 黄葉爲在

我が衣いろづきそめぬうまさけ三室の山もみぢしにたり

右三首柿本朝臣人麿之歌集出

(一) 色服をイロツキと訓した真淵説可。但しソメツというては時格がちがふ。

(二) 三、四兩句は四六調である。ウマサケノミムロノヤマハとカ、七調にすることは作者の本意ではあるまい。少くともノとハとは蛇足である。

(三) 宣長がモミヂシニケリと訓したのは卓見であるが、第二句との時格照應上シニタリと讀む方がよい。

(一〇九五)

三諸就 三輪山見者 隱口乃 始瀨之檜原 所念鴨

御もろ築く三輪山見ればこもりくの初瀨の檜原おもほゆるかも

片崗之 此向峯 稚蔭者 今年夏之 陰爾將比疑

かた岡のこの向つ峯に稚まかば今年の夏の蔭になみむか

(一) 比は成「暑解」又は化「古義」の誤とする説もある。稚はさう急速に生長するものでないから、寧ろ生の誤としてオホムカではないかと考へられるが、確證のないことであるから、姑く舊訓に従ふ。但しナミムカモとあるモは不用である。

(1100)

卷向之 病足之川由 往水之 絶事無 又反將見

卷向のあなしの川ゆ行く水の絶ゆる事なく又かくり見む

(1101)

黒玉之 夜去來者 卷向之 川音高之母 荒足鴨疾

ぬばたまの夕さり來れば卷向の川音高しも嵐かも疾き

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

(一) 從來ヨルサリクレバと訓して居るが、ヨルサといふ語はないから、ユフサリクレバと改訓すべきである。ユフはヨヒと同語で夜の字は今夜の如く、ヨヒとも訓むのである。

(1102)

大王之 御笠山之 帶爾爲流 細谷川之 音乃清也

大君の御笠の山に帯にする細谷川の音のさやけさ

(1103)

昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山

いにしへの事は知らずを我見ても久しくなりぬ天のかぐ山

(一) 細井本の訓シラズナとあるに従ふべきである。ナはヨに通ずる感動詞である。

(1097)

吾勢子乎 乞許世山登 人者雖云 君毛不來益 山之名爾有之

吾背子をこち巨勢山と人はいへど君も來まさず山の名にあらし

(1098)

木道爾社 妹山在云 櫛上 二上山母 妹許會有來

紀道にこそ妹山ありといへ玉くしげ二上山も妹こそありけれ

(一) 舊訓カツラギノとある。二上山は葛城にあるけれども、櫛上をカツラギ(鬘被)と訓ませることはいかにも苦しい。古寫本に櫛の上に「三」又は「三」の字がある所を見ると、三は玉の誤で玉櫛上即ちタマクシゲと訓むのであらう「真淵」。ミクシゲノと訓めといふ説もある——文字を離れて考へてもカツラギよりもタマクシゲの方が聯想が遙に優美である。——クシゲノの四音に訓むことも可能ではあるが、次の七音の句とのつきがわるい。

(1099)

今敷者 見目屋跡念之 三芳野之 大川余杼乎 今日見鶴鴨

今しくは見めやと思ひし三芳野の大川淀を今日見つるかも

(一) 舊訓可。イマシキハ(契沖)、イマシカバ(信名)としたのは語義を解し得なかつた爲である。

(1104)

馬並而 三芳野河乎 欲見 打越來而會 瀧爾遊鶴

馬なめて三芳野川を見まく欲り打越え來てぞ瀧に遊びつる

(1105)

音聞 目者未見 吉野河 六田之與杼乎 今日見鶴鴨

音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも

(1106)

河豆鳴 清川原乎 今日見而者 何時可越來而 見乍偲食

蛙なく清き川原を今日見てはいつか越え來て見つつ偲ばむ